財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第10集

中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

江ノ吉良遺跡
ハナノシロ遺跡

第2分冊

1993・3

高知県教育委員会
財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

江　ノ　古　城　跡
ハ　ナ　ノ　シ　ロ　城　跡

1993・3

高　知　県　教　育　委　員　会
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター

江ノ古・ハナノシロ城跡と中筋平野（南西より）

江ノ古・ハナノシロ城跡遠景（北より）

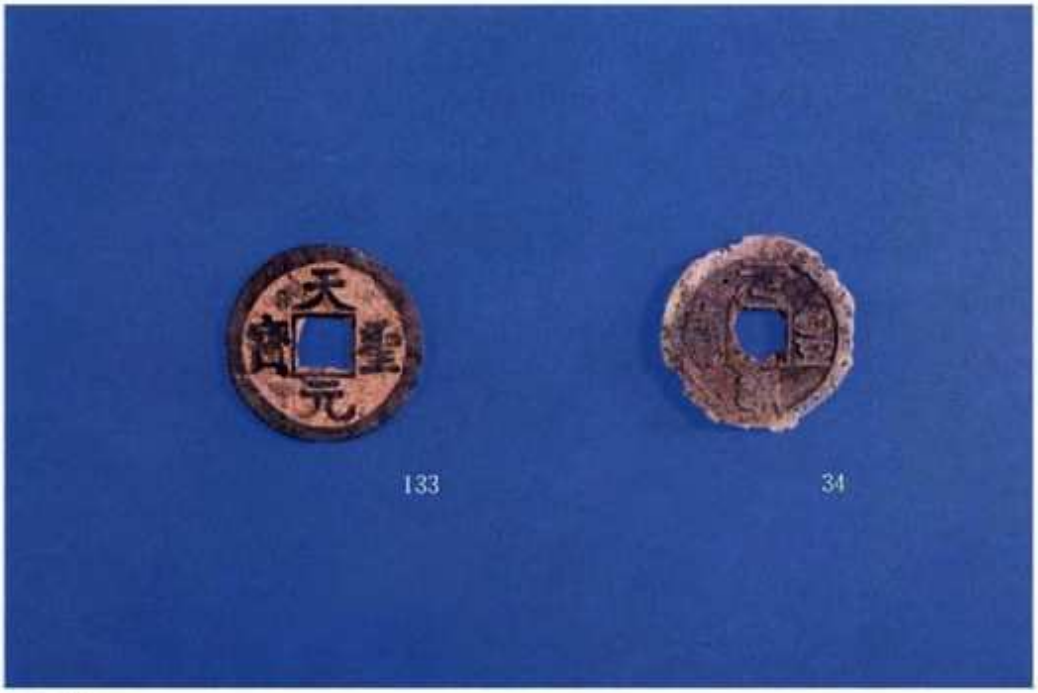
江ノ古城跡調査区全景（西より）

同上（南西より）

ハナノシロ城跡航空写真（北より）

同上（北東より）

ハナノシロ城跡出土青磁碗・皿



同上古銭

昭和39年撮影　江の村空中写真

例　　言

1．本書は，高規格中村宿毛道路建設に伴う江ノ古城跡・ハナノシロ城跡の発掘調査報告書である。

2．江ノ古城跡は，中村市江の村字エノジョウ，ハナノシロ城跡は同江の村ハナノシロに所在する。

3．調査は，建設省四国地方建設局の委託を受け，高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。江ノ古城跡・ハナノシロ城跡の試掘調査は，平成３年10月18日から12月20日まで実施し，本調査は平成４年５月21日から11月13日まで実施した。試掘調査の面積は，江ノ古城跡が152㎡，ハナノシロ城跡が250㎡で，本調査面積は，江ノ古城跡が1,400㎡，ハナノシロ城跡が3,500㎡である。

4．発掘調査は，高知県文化財団埋蔵文化財センターが主に実施した。両城跡の試掘調査及び江ノ古城跡を曽我貴行（高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員）が，ハナノシロ城跡は松田直則（同センター主任調査員），竹村三栄（同センター調査補助員）が担当した。庶務は三浦康寛（同センター主幹）が行った。城跡の航空写真・測量はアジア航測株式会社に委託した。

5．江ノ古城跡・ハナノシロ城跡の縄張り図の作成は，池田誠氏にお願いした。記して感謝する次第である。

6．本書は，第Ⅰ章，第Ⅲ章の１，４，付章を松田，第Ⅱ章を曽我，第Ⅲ章の２，３を竹村が執筆した。

7．遺構については，掘立柱建物跡をSB，土坑SK，柵列SA，集石SX，柱穴Pで標示している。出土遺物の実測番号は，写真図版中の番号と一致している。

8．調査にあたっては，建設省四国地方建設局中村工事事務所，及び中村市教育委員会の御協力をいただいた。また現場作業員並びに整理作業員の皆様の献身的な御援助に対し，深く感謝の意を表したい。

9．出土遺物，その他図面類の関係資料は高知県文化財団埋蔵文化財センターに保管している。

報告書要約

1．遺跡名　江ノ古城跡・ハナノシロ城跡

2．所在地　高知県中村市江の村

3．立　地　丘陵　標高江ノ古城跡24m　ハナノシロ城跡35m

4．種　類　戦国時代　山城跡

5．調査主体　高知県文化財団埋蔵文化財センター

6．調査契機　高規格中村宿毛道路建設

7．調査期間　平成4年5月21日から11月13日

8．調査面積　江ノ古城跡1,400㎡，ハナノシロ城跡3,500㎡

9．検出遺構

江ノ古城跡……掘立柱建物跡，土坑，Pit群

ハナノシロ城跡…掘立柱建物跡，土坑，柵列，集石，土塁状遺構，竪堀状遺構，堀切状遺構，雛壇状遺構，虎口状遺構

10．出土遺物

江ノ古城跡……土師質土器，輸入陶磁器（青磁），近世陶磁器（肥前系，備前），土製品，石製品，銭貨，煙管，金属製品，弥生土器

ハナノシロ城跡…土師質土器，国産陶器（備前焼，瀬戸・美濃系），輸入陶磁器（青磁，白磁），石製品，金属製品，弥生土器

11．内容要約　江ノ古城跡は，城跡先端部の一部分のみの調査で全貌は解明できていないが，全体の縄張り図をみると詰を中心に強固な防御遺構が認められる。長宗我部地検帳ではすでに古城となっており，出土遺物からもこの時期には廃城になっていることがわかる。城跡東側に位置する江ノ村本集落との関係が考えられ，村の城として位置付けることができる。ハナノシロ城跡は，小規模城郭の範疇で捉えることができる。出土遺物からみると江ノ古城跡と同時期に機能していたことがわかり，立地的にも江ノ古城跡の支城と考えられる。今回斜面部の調査も実施でき，斜面部を利用した雛壇状遺構を検出した。県下的にみても小規模な城郭であるが防御的に優れた遺構の配置がなされている。中村市街地から離れた江の村に構築された小規模な城郭ではあるが，中世の村の城を考えていく上で貴重な資料を提供している。

本文目次

第Ⅰ章　歴史的環境（中世）―― 1

第Ⅱ章　江ノ古城跡―― 5
1．調査の概要―― 5
（1）　城跡の概要 …… 5
（2）　調査の方法 …… 5
2．調査の成果―― 7
（1）　第1郭 …… 7
(1)　層序 …… 7
（2）　第1郭南西斜面 …… 11
(1)　層序 …… 11
(2)　出土遺物 …… 14
（3）　第2郭 …… 17
(1)　層序 …… 17
(2)　出土遺物 …… 17
(3)　検出遺構 …… 19
（4）　第3郭 …… 23
(1)　層序 …… 24
(2)　第Ⅰ層～第Ⅴ層出土の遺物 …… 24
(3)　検出遺構とその出土遺物 …… 29
（5）　第4郭 …… 33
(1)　層序 …… 38
(2)　出土遺物 …… 38
(3)　検出遺構 …… 43
3．小結―― 44
（1）　弥生時代の遺物について …… 44
（2）　中世（戦国時代）の遺構・遺物について …… 44
（3）　近世の遺構・遺物について …… 46

第Ⅲ章　ハナノシロ城跡 55
1．調査の概要 55
（1） 城跡の概要 55
（2） 調査の方法 56
（3） 層序 56
2．検出遺構 65
（1） 検出遺構の配置 65
（2） 曲輪1 65
（3） 曲輪2 68
（4） 曲輪3 72
（5） 曲輪4 77
（6） その他の遺構 79
3．出土遺物 84
（1） 土師質土器 84
（2） 青磁 84
（3） 白磁 86
（4） 備前焼 88
（5） 土製品 88
（6） 石製品 88
（7） 金属製品 88
（8） 古銭 88
（9） 弥生土器 88
4．小結 92

付章
中世江ノ村の復元 松田直則 97
1．はじめに 97
2．歴史地理学的アプローチ 97
3．長宗我部地検帳と地籍図の検討 101
4．中世地名の復元 102
5．中世江ノ村の景観 114
6．おわりに 119

挿図目次

Fig. 1　遺跡発掘区位置図 …… 3
Fig. 2　周辺遺跡分布図 …… 4
Fig. 3　第1郭堆積土層断面図（A－A′，B－B′） …… 7
Fig. 4　第1郭・同南西斜面堆積土層断面図（C－C′） …… 8
Fig. 5　第1郭南西斜面堆積土層断面図（D－D′－D″） …… 9～10
Fig. 6　第1郭南西斜面出土遺物実測図 …… 12
Fig. 7　第1郭南西斜面B区出土遺物分布図 …… 13
Fig. 8　第1郭南西斜面出土遺物実測図・拓影 …… 14
Fig. 9　第2郭全体図 …… 15～16
Fig. 10　第2郭堆積土層断面図 …… 18
Fig. 11　第2郭出土遺物実測図 …… 19
Fig. 12　第2郭SB1 …… 20
Fig. 13　第2郭SB2 …… 21
Fig. 14　第2郭SB3 …… 22
Fig. 15　第2郭SB4 …… 23
Fig. 16　第2郭SK1 …… 23
Fig. 17　第3郭全体図 …… 25～26
Fig. 18　第3郭堆積土層断面図1 …… 27
Fig. 19　第3郭堆積土層断面図2 …… 28
Fig. 20　第3郭出土遺物実測図1 …… 29
Fig. 21　第3郭出土遺物実測図・拓影2 …… 30
Fig. 22　第3郭SK1・同出土遺物実測図 …… 31
Fig. 23　第3郭SK2・同出土遺物拓影 …… 32
Fig. 24　第3郭P1－P3 …… 33
Fig. 25　第4郭全体図 …… 35～36
Fig. 26　第4郭堆積土層断面図（A－A′，B－B′） …… 34
Fig. 27　第4郭堆積土層断面図（C－C′，D－D′） …… 37
Fig. 28　第4郭出土遺物実測図1 …… 39
Fig. 29　第4郭出土遺物実測図2 …… 40
Fig. 30　第4郭出土遺物実測図・拓影3 …… 41
Fig. 31　第4郭SK1 …… 42
Fig. 32　第2－4郭グリッド別出土遺物分布図（S=1/400） …… 45
Fig. 33　江ノ古城跡縄張り図 …… 47

Fig. 34　ハナノシロ城跡縄張り図 …… 58
Fig. 35　ハナノシロ城跡全体図 …… 59～60
Fig. 36　ハナノシロ城跡セクション図1 …… 61～62
Fig. 37　ハナノシロ城跡セクション図2 …… 63～64
Fig. 38　SA1実測図 …… 65
Fig. 39　曲輪1遺構全体図 …… 66
Fig. 40　SB1実測図 …… 67
Fig. 41　SK1実測図 …… 68
Fig. 42　曲輪2・4遺構全体図 …… 69
Fig. 43　SB2実測図 …… 70
Fig. 44　曲輪3遺構全体図 …… 71
Fig. 45　SA4実測図 …… 72
Fig. 46　SB3実測図 …… 73
Fig. 47　竪堀1・2実測図 …… 74
Fig. 48　竪堀3実測図 …… 75
Fig. 49　土塁状遺構 …… 76
Fig. 50　SX1実測図 …… 77
Fig. 51　SA2・3実測図 …… 78
Fig. 52　櫓壇状遺構 …… 80
Fig. 53　虎口状遺構 …… 81
Fig. 54　堀切状遺構 …… 82
Fig. 55　堀切セクション図 …… 83
Fig. 56　出土遺物実測図1 …… 85
Fig. 57　出土遺物実測図2 …… 87
Fig. 58　出土遺物実測図3 …… 89
Fig. 59　江ノ村所在遺跡群 …… 98
Fig. 60　江ノ村地籍図 …… 99～100
Fig. 61　江ノ村小字境界図 …… 103～104
Fig. 62　江ノ村小字境界復元地図 …… 105～106
Fig. 63　検地実施日復元地図 …… 108
Fig. 64　長宗我部地検帳地目内訳図 …… 112
Fig. 65　江ノ村地目別割合グラフ …… 113
Fig. 66　中世江ノ村復元図 …… 117
Fig. 67　中世江ノ村鳥瞰図 …… 119

付図1　江ノ古城跡調査区全体図
付図2　江ノ古城跡第1郭・同南西斜面全体図

表　目　次

表1　土器・陶磁器観察表1 …… 49
表2　土器・陶磁器観察表2 …… 50
表3　土器・陶磁器観察表3 …… 51
表4　土錘計測表 …… 51
表5　石器・石製品計測表 …… 52
表6　銭貨計測表 …… 53
表7　金属製品計測表 …… 53
表8　SA1計測表 …… 65
表9　SB1計測表 …… 67
表10　SB2計測表 …… 70
表11　SA4計測表 …… 72
表12　SB3計測表 …… 73
表13　SA2計測表 …… 78
表14　SA3計測表 …… 78
表15　出土土器法量表1 …… 90
表16　出土土器法量表2 …… 91
表17　ホノギ・小字一覧表1 …… 123
表18　ホノギ・小字一覧表2 …… 124
表19　ホノギ・小字一覧表3 …… 125
表20　ホノギ・小字一覧表4 …… 126
表21　ホノギ・小字一覧表5 …… 127
表22　ホノギ・小字一覧表6 …… 128
表23　ホノギ・小字一覧表7 …… 129
表24　ホノギ・小字一覧表8 …… 130
表25　ホノギ・小字一覧表9 …… 131
表26　ホノギ・小字一覧表10 …… 132
表27　ホノギ・小字一覧表11 …… 133
表28　ホノギ・小字一覧表12 …… 134
表29　ホノギ・小字一覧表13 …… 135
表30　ホノギ・小字一覧表14 …… 136

図 版 目 次

巻頭図版１　江ノ古・ハナノシロ城跡と中筋平野(南西より)，江ノ古・ハナノシロ城跡遠景(北より)

巻頭図版２　江ノ古城跡調査区全景（西より），同上（南西より）

巻頭図版３　ハナノシロ城跡航空写真（北より），同上（北東より）

巻頭図版４　ハナノシロ城跡出土青磁碗・皿，同古銭

巻頭図版５　昭和39年撮影　江の村空中写真

江ノ古城跡

PL１　第２～４郭調査前状況（東より），同完掘状況（東より）

PL２　第１郭調査状況（西より），同完掘状況（西より）

PL３　第１郭Ａ－Ａ'ライン堆積土層断面（西より），第１郭調査状況（南東より）

PL４　第１郭南西斜面伐採状況（西より），同調査状況（西より）

PL５　第１郭南西斜面調査状況（西より），同完掘状況（西より）

PL６　第１郭南西斜面Ｄ'－Ｄ"ライン堆積土層断面（南より），同Ｄ－Ｄ'ライン堆積土層断面（南東より）

PL７　第１郭南西斜面Ｂ区遺物出土状況（北東より），同寛永通宝(16)出土状況

PL８　第１郭南西斜面Ｂ区下半部弥生土器出土地点（北西より），同弥生土器出土状況

PL９　第２郭調査前状況（東より），同遺構検出状況（東より）

PL10　第２・３郭完掘状況（東より），第２郭Ｃ－Ｃ'ライン堆積土層断面（北西より）

PL11　第２郭ＳＫ１完掘状況（西より），同Ｐ１完掘状況（北より）

PL12　第３郭調査状況（南東より），同遺構検出状況（南より）

PL13　第３郭Ｅ－Ｅ'ライン堆積土層断面（西より），同北東端部堆積土層断面（北西より）

PL14　第３郭ＳＫ１検出状況（北東より），同遺物出土状況（南東より）

PL15　第３郭ＳＫ１堆積土層断面（南東より），同完掘状況（北東より）

PL16　第３郭調査状況（東より），同ＳＫ２堆積土層断面（北東より）

PL17　第３郭ＳＫ２完掘状況（南東より），同床面近景（南東より）

PL18　第３郭Ｐ１完掘状況（北東より），同Ｐ３完掘状況（南東より）

PL19　第３郭Ｐ２堆積土層断面（南東より），同完掘状況（南東より）

PL20　第３郭北東部分調査前状況（南東より），同上（南より）

PL21　第３郭北東部分調査状況（西より），同堆積土層断面（北西より）

PL22　第４郭調査状況（南東より），同上（東より）

PL23　第４郭遺構検出状況（東より），同完掘状況（東より）

PL24　第4郭A－A'ライン堆積土層断面（南より），同C－C'ライン堆積土層断面（西より）
PL25　第4郭SK1検出状況（北より），同完掘状況（北より）
PL26　第4郭SK1堆積土層断面（西より），第4郭擂鉢(43)出土状況
PL27　出土遺物1
PL28　出土遺物2（弥生土器）
PL29　出土遺物3（土師質土器）
PL30　出土遺物4（陶器）
PL31　出土遺物5（陶器）
PL32　出土遺物6
PL33　出土遺物7
PL34　出土遺物8

ハナノシロ城跡

PL35　調査前近景，調査後近景
PL36　曲輪1調査前近景，曲輪1調査状況
PL37　曲輪1 SK1セクション，曲輪1 SK1
PL38　曲輪1完掘状況，曲輪1 SB1
PL39　曲輪2調査前近景，曲輪2調査後近景
PL40　曲輪2セクション，曲輪2柱穴群
PL41　曲輪2 SB2，曲輪2虎口状遺構
PL42　曲輪2・3・4調査前近景，曲輪2・3調査状況
PL43　曲輪3完掘状況，曲輪3土塁状遺構
PL44　曲輪3 SX1セクション，曲輪3 SX1
PL45　堅堀1セクション，堅堀1完掘状況
PL46　堅堀2完掘状況，堅堀1・2完掘状況
PL47　曲輪4調査前近景，曲輪4完掘状況
PL48　曲輪2・3東側斜面調査前近景，曲輪3東側斜面完掘状況
PL49　東側斜面調査前近景，東側斜面完掘状況
PL50　堀切部調査前近景，堀切状遺構完掘状況
PL51　土師質土器・瓦質土器，同上（内面）
PL52　青磁皿，同上（内面）
PL53　青磁碗・皿，同上（内面）
PL54　青磁碗・皿，同上（内面）
PL55　白磁皿，同上（内面）
PL56　備前焼，土・石・金属製品
PL57　弥生土器，同上（内面）

第Ⅰ章　歴史的環境（中世）

昭和61年度に実施された高知県分布調査によると，中村市内の中世城郭だけでも若干の消滅分も含め71城跡が残存する。中世から近世にかけて，屋敷跡・社寺や遺物散布地などの集落遺跡も含めると146近い遺跡が散見できる。中村市内の中世遺跡だけでも150近く認められる中，大規模開発に伴う調査が行政によって実施されたのは昭和58年の栗本城跡や中村城跡である。昭和61年から四万十川流域の護岸工事に伴い，中筋川を中心として県教育委員会の調査が実施されている。これら考古学の調査で，中村での中世が徐々にではあるが解明され始めてきた。

古代から中世にかけての様相は，中筋川流域の遺跡群で捉えることができる。具同中山遺跡群では，古代から中世にかけての集落跡を検出している。鎌倉時代を中心に集落が発展し，南北朝期になると集落が縮小・拡散され始める。集落の中心は，墓地化され，石組を配した中世墓が８基検出されている。対岸に位置するアゾノ遺跡では，鎌倉から室町時代まで続いた集落が1498年の南海地震で壊滅し集落自体が移動している。具同中山遺跡を中心とした中世集落は，平安時代末から発生し鎌倉時代を中心として発展しているが，南北朝期あたりから衰退している。これら集落遺跡からは，輸入陶磁器や瓦器，東播系須恵器等の搬入製品が多量に出土している。外洋から四万十川に入り，川舟に乗り換え四万十川流域の各集落に持ち込まれたものと考えられる。幡多荘には，13世紀半ば「舟所職」の役職が吉津賀本ノ津に置かれていることが，「金剛福寺文書」でみることができる。一条氏専用の河津が存在していたことになるが，船戸遺跡でも，立地・地名や検出された遺構・遺物から，中筋川を遡上る川舟の河津として利用された遺跡であることが推定されている。これらのことから，中筋川流域では頻繁に川舟を利用して物資が運搬されていたことが窺い知れる。幡多荘が荘園として成立した時期は不明であるが，1206年には九条家の領国となっておりその後1250年頃には一条氏に譲られている。この頃に具同中山遺跡周辺の遺跡では，輸入陶磁器を始め畿内産の瓦器，東播系須恵器等搬入品が多く出土している。さらにこの時期重要な遺跡として中筋川流域南山麓に位置する中世寺院跡の香山寺との係わりを考えていかなければならない。香山寺は，草創時期は不明であるが「金剛福寺文書」では1237年に香山寺の名前がみられることから，九条家から一条家の帰依を受けていたことがわかる。当寺は，足摺岬に所在する真言宗豊山派金剛福寺の支配下にあったものと考えられる。香山寺山麓の南仏堂跡には，鎌倉時代末から室町時代始め頃の南仏上人像が保管されていたが，現在幡多郷土資料館に県指定文化財として展示されている。さらに香山寺北側登山口の丘陵端部に川平山中世墓地群が形成されており，発掘調査で五輪塔群や骨壺に利用された備前焼などが出土している。備前焼もⅢ期に編年されるもので，香山寺が勢力をもった時期に符合する。

戦国時代から織豊期にかけての様相は，城郭を中心に調査されている。中村では，栗本・中村城跡の調査が始まりでその後塩塚城跡，チシ古城跡，扇城跡，江ノ古城跡，ハナノシロ城跡等の調査が実施されている。その他縄張調査が中筋川流域の城跡でされ始め中世城郭研究が進められている。栗本城跡と中村城跡は，一条氏と長宗我部氏が四万十川（渡川）合戦のおり居城として利用した城とされている。中村城跡は，もともと一条氏の家老である為松氏の居城であるが，長宗我部氏が土佐を統一した後も幡多の中心的城郭として利用されている。長宗我部期の中村城は，石垣・瓦・礎石建物で構成され，幡多地方唯一の石造り城郭である。16世紀後半段階に一時的に栗本・扇城跡は利用されていることが出土遺物から判断できるが，その他の城跡はその大部分が15世紀後半－16世紀前半ごろ機能していたと考えられる。現在まで調査された城郭の出土遺物を概観すると，土師質土器が大半を占めるが，必ず輸入陶磁器類が出土する。中村城跡では，染付が多く出土しているがその他の城跡では青磁類が占めている。高知県教育委員会が実施した分布調査での15～16世紀の中世遺跡は，その大半が青磁類の発見で遺跡と認められている。この時期は，一条氏が公家大名として下向し荘園内の土豪を支配下に組み入れ，荘園領主から武力を背景に戦国大名へと勢力を伸ばしている。城郭も一条氏との関係を追究しなければならないが，16世紀半ばから後半には徐々に廃城になるものが多くなり，主要城跡にまとめられたと考えることができる。

［参考文献］

（1） 高知県教育委員会　1988年　『高知県遺跡地図－幡多ブロック－』

（2） 木村剛朗　1985年　『栗本城跡』中村市教育委員会

（3） 松田直則他1985年　『中村城跡』中村市教育委員会

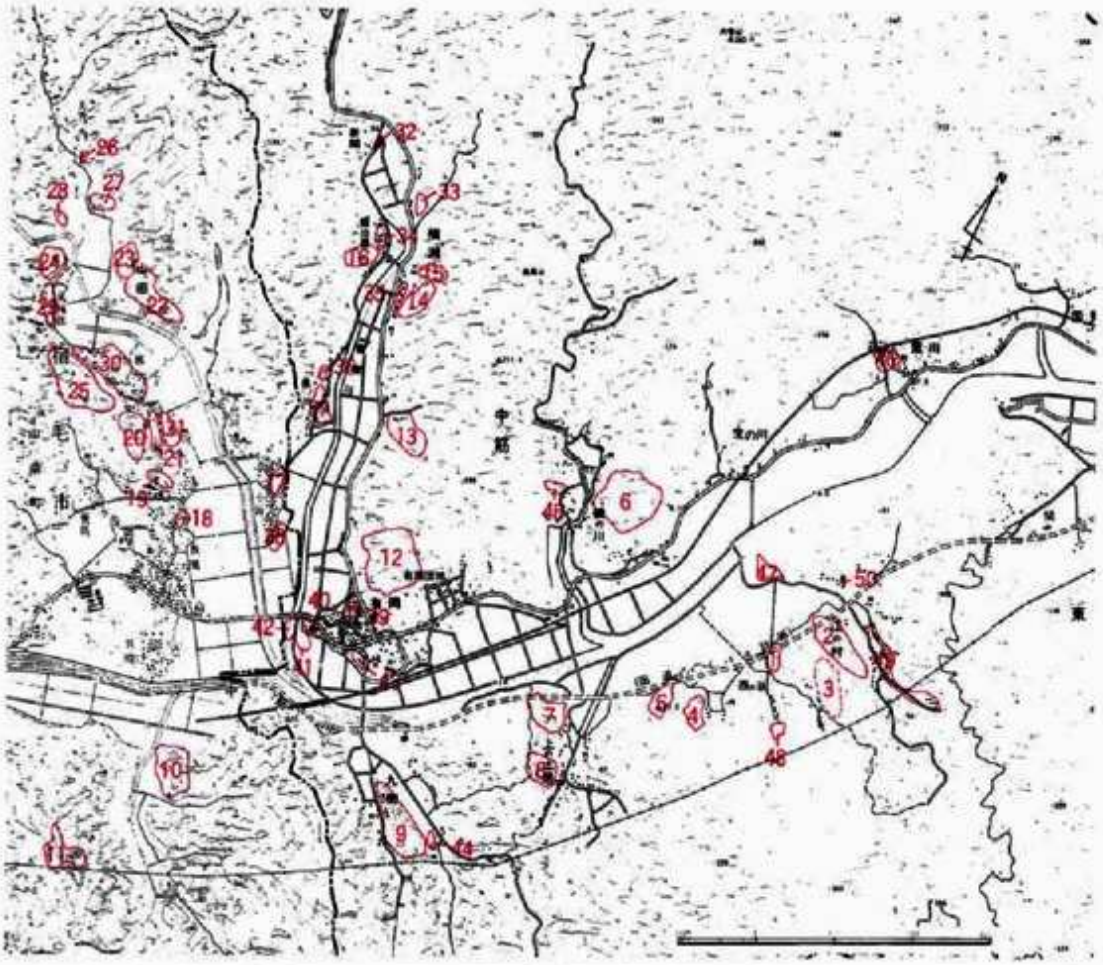
（4） 橋田重欣　1969年　『中村市史』中村市史編纂室

（5） 高知県教育委員会1992年　具同中山遺跡群『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』

（6） 高知県教育委員会1989年　風指遺跡・アゾノ遺跡『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』

（7） 山本大監修1983年　「高知県の地名」『郷土歴史大事典 日本歴史地名大系40』平凡社

Fig. 1　遺跡発掘区位置図



地図No	名称	種別	時代
1	松ガハナ城跡	城跡	中世
2	江ノ内城跡	〃	〃
3	江ノ村西ノ城跡	〃	〃
4	西ノ谷城跡	〃	〃
5	久木ノ城跡	〃	〃
6	磯ノ川城跡	〃	〃
7	長城跡	〃	〃
8	上ノ上屋城跡	〃	〃
9	丸勝城跡	〃	〃
10	黒川新城跡	〃	〃
11	荒城跡	〃	〃
12	右岡城跡	〃	〃
13	奈良城跡	〃	〃
14	中脇城跡	〃	〃
15	安宗城跡	〃	〃
16	竹重城跡	〃	〃
17	小島城跡	〃	〃
18	竹石城跡	〃	〃
19	菊岡城跡	〃	〃
20	伊与田城跡	〃	〃
21	与田城跡	〃	〃
22	山田城跡	〃	〃
23	山田北城跡	〃	〃
24	相井城跡	〃	〃
25	山枝城跡	〃	〃

地図No	名称	種別	時代
26	土居ノ内堀岡遺跡	散布地	中世
27	土居ノ内遺跡	〃	〃
28	観音寺跡	社寺跡	中世・近世
29	馬場住遺跡	散布地	奈良～中世
30	竹部遺跡	〃	弥生～中世
31	下竹部遺跡	〃	奈良～中世
32	新岡遺跡	〃	中世
33	観音院遺跡	〃	奈良～中世
34	鍛冶屋前遺跡	〃	中世
35	柿内遺跡	〃	奈良～中世
36	皇ノ川遺跡	〃	中世
37	横瀬遺跡	〃	縄文～中世
38	小鳥遺跡	〃	縄文～平安
39	興美遺跡	〃	中世
40	久保畑遺跡	〃	弥生
41	フダロ橋下遺跡	〃	縄文
42	横瀬川遺跡	〃	古墳
43	岡花遺跡	〃	弥生～中世
44	丸勝遺跡	〃	中世
45	千蔵院遺跡	〃	〃
46	荒川遺跡	〃	〃
47	江ノ村遺跡	集落跡	中世～近世
48	牛ヶ谷遺跡	散布地	中世
49	江ノ村本村遺跡	〃	〃
50	小松谷寺墓	墓	〃

Fig. 2　周辺遺跡分布図

第Ⅱ章　江ノ古城跡

1．調査の概要

（1）　城跡の概要

江ノ古城跡は，高知県中村市江の村に所在する山城跡である。城跡は貝ヶ森山系から中筋平野に向かって北方に伸びた尾根上にあり，城跡全体の規模は東西約210m，南北約370mで，詰部の標高は58mである。「土佐州郡志」によれば，「日江之本城相伝江野摂津守者居之」とあり[1]，江野摂津守の居城であったと記されている。

江ノ古城にかかる縄張り調査[2]の成果（Fig. 33）によると，最高所の詰の部分には，北側及び北東側に段築をもって小曲輪が形成されており，特に北側に2段下った箇所の曲輪は詰の曲輪にほぼ相当する空間を有している。詰の曲輪の東・西の両斜面には2条・4条の竪堀がそれぞれ配されている。詰の曲輪の南側は堀切によって尾根が切断され，また堀切を越えた南側には土橋状に尾根幅が狭められた部分があり，その東斜面には竪堀2条が設けられている。土橋状部分の南側にも詰の曲輪を凌ぐ広さをもつ平坦地形が存在するが，これ以南に城郭の防御施設とみられるものは現状においては認められず，これを曲輪の1つと即断することはできない。一方，詰の曲輪から北方に2段下った曲輪の北側は二重の堀切によって以北の尾根と隔絶させている。そして，これより北は後世の改変が加えられており，城郭に関する遺構は認め難い。

今次調査は，江ノ古城跡の詰の段北方の堀切から北西方向に2段ほど下った平坦地形部分の一部と，そこからさらに約15m下りた部分の平坦地形（3箇所の平坦地形からなる），そして両者の間の斜面地形部分とを対象として実施したものである。

（2）　調査の方法

今次調査の対象地は，前述のように複数の平坦地形と斜面地形とから構成されているため，調査の便宜上，最高所の平坦地形部分を第1郭，それより北西方向に下った平坦地形部分を第2・3・4郭とそれぞれ呼称することとした。また，両平坦地形間の斜面地形部分はその上端が接する郭の名称を冠し，これに郭を基準とした方向を組み合わせて「第1郭南西斜面」と言い表すものとした。

調査対象地には，重機（ユンボ）等の搬入が不可能であったため，表土の除去・抜根・遺構

の検出及び掘り下げ等，すべて人力でおこなった。遺物の取り上げは，各平坦地形の長軸方向に合わせて一辺３ｍのグリッドを展開させ，これをもとに実施した。なお，３級基準点の埋設をアジア航測株式会社に委託し，グリッドの座標は公共座標に変換できるものとした。遺跡全体の測量はアジア航測株式会社に委託し，航空写真測量によってこれを実施し，縮尺１／50の平面図を作成した。

註

（１）　高知県教育委員会『高知県中世城館跡　―分布調査報告書―』　1984年

（２）　縄張り調査・縄張り図作成に関しては，池田誠氏にお願いし，多大なご教示・ご助力をいただいた。

2．調査の成果

（1） 第1郭（付図2）

第1郭は今次調査対象地の中では最も江ノ古城跡の詰の段に近く，また標高も高い箇所である。調査前はサツキ等が植えられており，これらの花木栽培用の畑として利用されていた。また，このことに際して，重機を用いて尾根上を整形して畑とした経緯があるとのことで，なるほど第1郭と第1郭南西斜面との間の土塁状にみえる高まり部分は調査前から岩盤が露出しており，それまでの経過を如実に物語っていた。

調査に当たっては，A・B2本のトレンチをまず設定し，遺構面・遺物包含層の深度等の確認を図ったが，遺構・遺物は検出されなかった。結果的には，第1郭南西斜面との繋がり等を確認するために全面にわたって岩盤面までの掘り下げを実施し，完掘した。

検出遺構はなく，出土遺物も皆無であった。

（1） 層序（Fig. 3・4）

A－A′，B－B′，C－C′の3つのラインにおける土層堆積状態を図示した。第1郭で確認できた土層の堆積状況は，第Ⅰ層：褐色土（表土層），第Ⅱ層：明褐色～褐色の混礫土，第Ⅱ層b：黄白色混礫土の3層と捉えられる。第Ⅰ層は畑として利用されていた土壌部分である。第Ⅱ層は箇所により褐色ないし明褐色という若干の色調の差異を有するものの，岩盤上部の破砕礫を主体とする層であり，サツキの根の攪乱はこの層まで及んでいる。第Ⅰ層・第Ⅱ層は粒

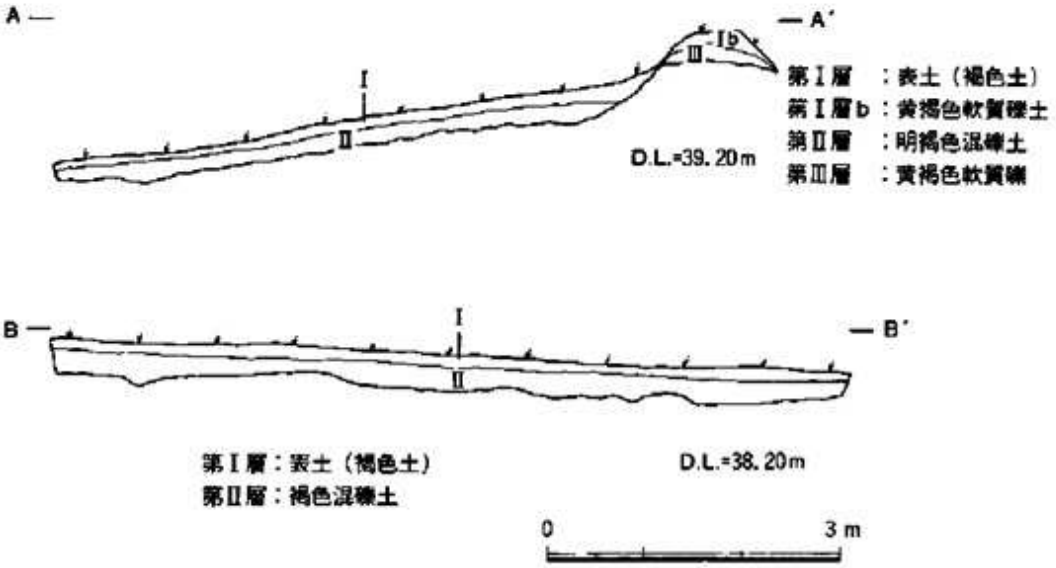


Fig. 3 第1郭堆積土層断面図（A－A′，B－B′）

度等互いに近似しており，かつて同一層であったものが植物の作用によって２つに分層可能となったものと考えられる。第Ⅲ層は岩盤上部の軟質化した部分である。以上の層には遺物は含

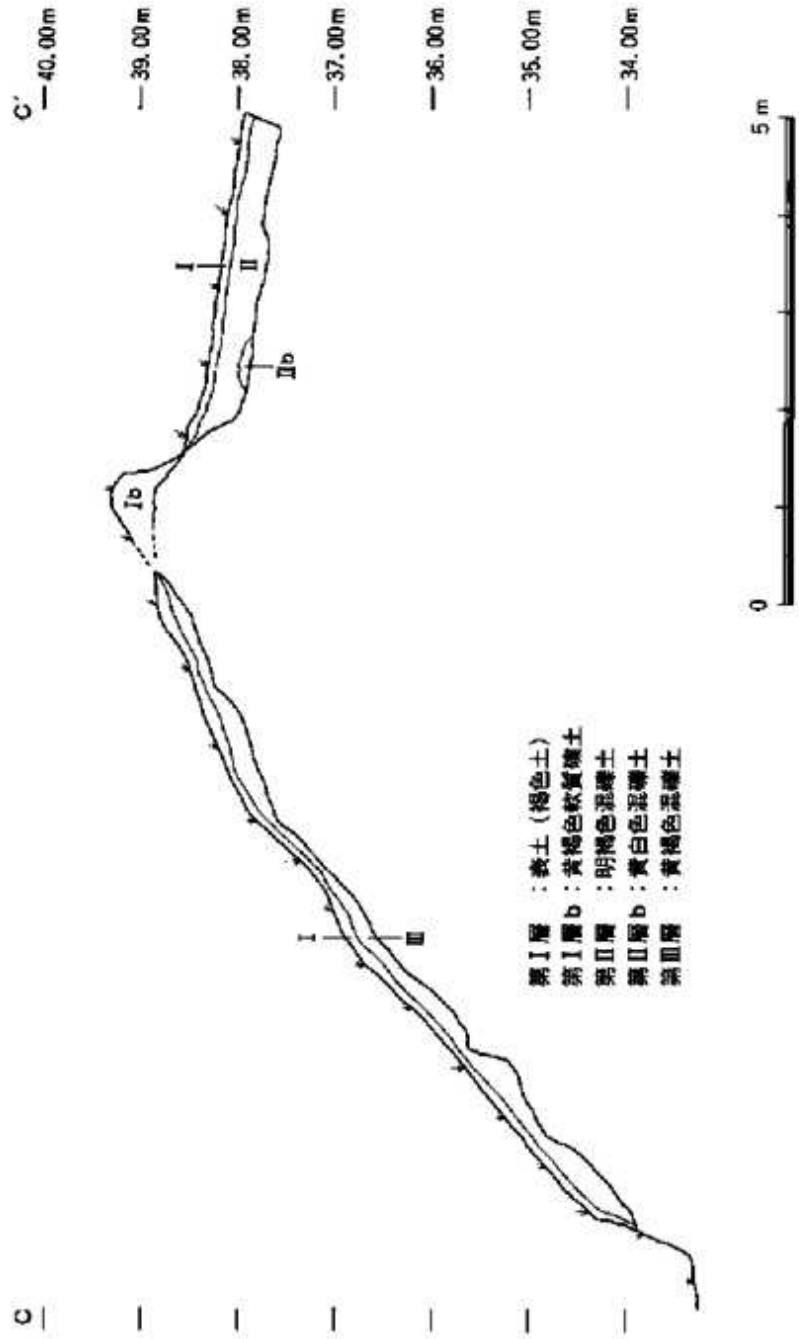


Fig. 4　第１郭・同南西斜面堆積土層断面図（C－C'）

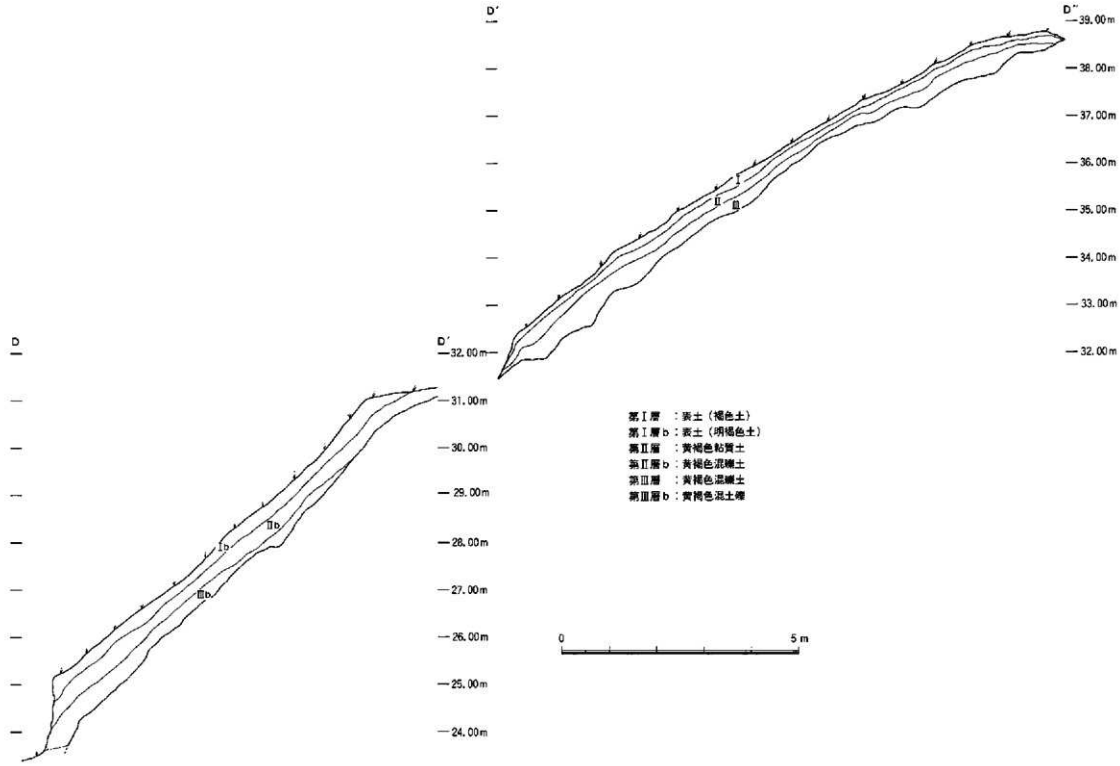


Fig. 5　第1郭南西斜面堆積土層断面図（D－D'－D''）

まれておらず，また岩盤上面においても遺構は検出されなかった。第Ⅰ層～第Ⅲ層を合わせても，岩盤面までの深さはわずか20～30cmであり，仮に遺構・遺物が残されていたとしても，畑として改変された際に消失し，あるいは他所へ搬出されたものと理解されよう。なお，第1郭の南西側斜面際にある上景状高まり部分の堆積土層は，第Ⅰ層b：黄褐色軟質礫土，第Ⅲ層：黄褐色軟質礫であり，いずれも岩盤上部に相当する（土壌）部分であると考えられる。この部分は腐植土壌の形成が進んでおらず，第1郭側の岩盤面の露出も生々しいことから，第1郭の改変に伴って削り残された箇所とみられる。

（2） 第1郭南西斜面（付図2）

第1郭の南及び西側を取り巻く斜面部分で，第4郭に向かって下っている。斜面に平行する2本のセクションベルトを設定し，これによって調査区を3つに分割し，西から南に向かって順にA区・B区・C区と呼称する。また，斜面中段部分に植林等の目的かと考えられる道がつけられており，これの上下によってさらに調査区を分割し，A区上半部・B区下半部等と呼ぶものとした。なお，調査範囲の都合により，C区には上半部しか存在しない。セクションベルトはベルト両側の調査区をもとにABベルト・BCベルトと呼ぶものとした。

もとより城郭の防御施設としての堅堀等の検出を目的として調査をおこなったが，それらの確認には至らなかった。しかし遺物は，B区上半部から土師質土器（近世）・寛永通宝等が，B区下半部から弥生土器・叩石等がそれぞれ出土し，特に弥生土器の出土は注目されよう。

（1） 層序（Fig. 4・5）

ABベルト南壁の堆積状況をFig. 4に，BCベルト南壁の堆積状況をFig. 5に，それぞれ示した。

ABベルト部分では，第Ⅰ層：褐色土（表土層），第Ⅲ層：黄褐色混礫土という層序がみられる。第Ⅲ層は主に岩盤上部の破砕礫から構成される。岩盤面までの深さは後述するBCベルト部分に比べてやや浅い。

BCベルト部分では，上半部で第Ⅰ層：褐色土（表土層），第Ⅱ層：黄褐色粘質土，第Ⅲ層：黄褐色混礫土，下半部で第Ⅰ層b：明褐色土（表土層），第Ⅱ層b：黄褐色混礫土，第Ⅲ層b：黄褐色混土礫という層序となっている。両者間に登山道があったために，厳密な意味で双方の層序を直結させることはできないが，第Ⅰ層が表土層，第Ⅲ層が岩盤上部の風化・破砕礫部分で，第Ⅱ層がそれらの間の漸移層的部分という理解が可能であろう。第Ⅱ層・第Ⅲ層の差は岩盤起源の礫の含有率の違いであり，それは第Ⅱ層b・第Ⅲ層b間においても同様である。

B区上半部の第Ⅰ層・第Ⅱ層から近世の土師質土器，寛永通宝が出土し，B・C区下半部の第Ⅱ層から弥生土器が出土している。

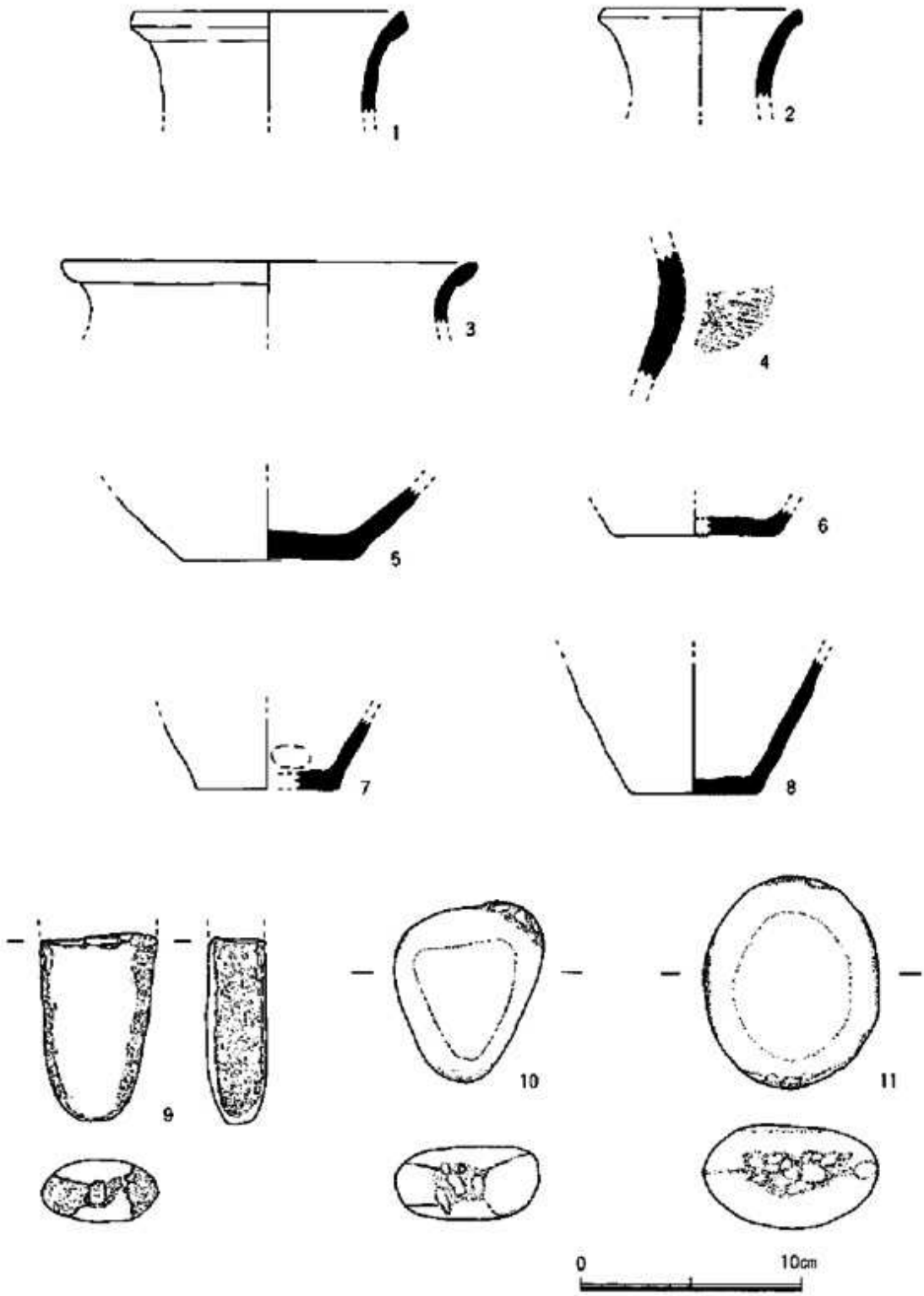
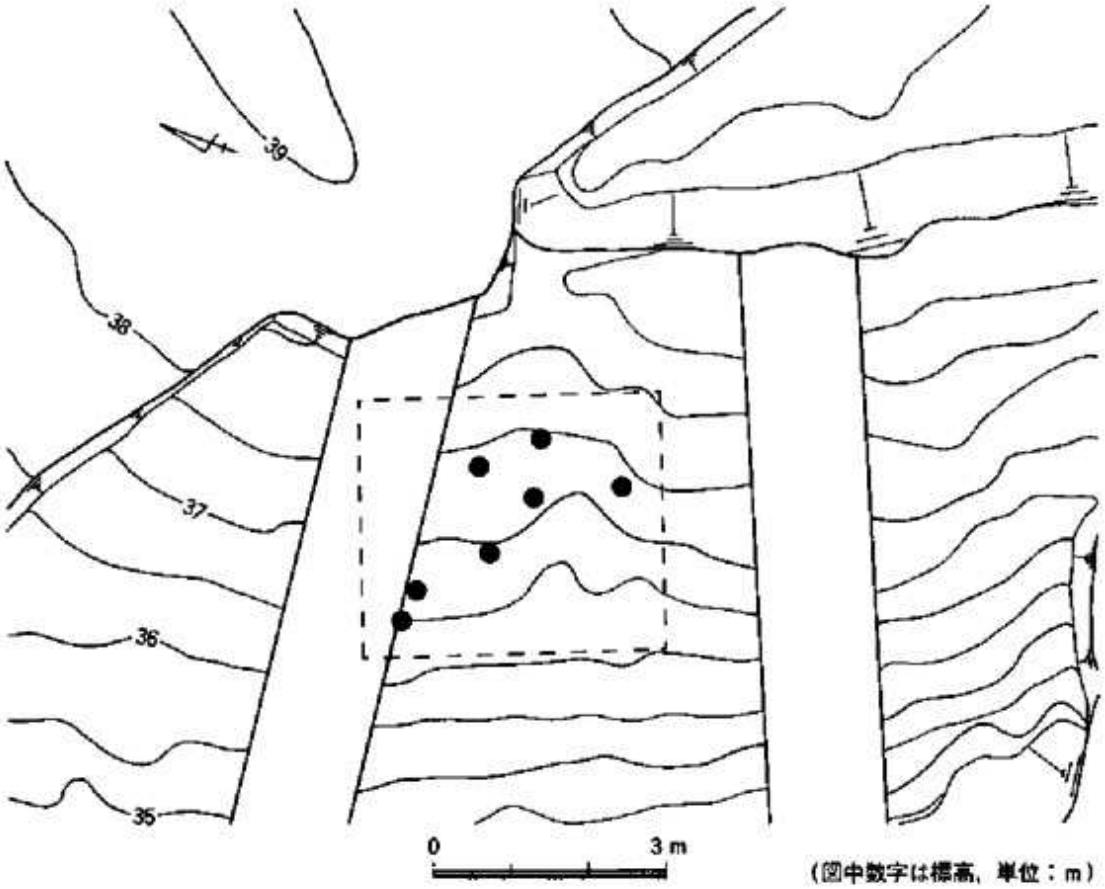


Fig. 6　第1郭南西斜面出土遺物実測図



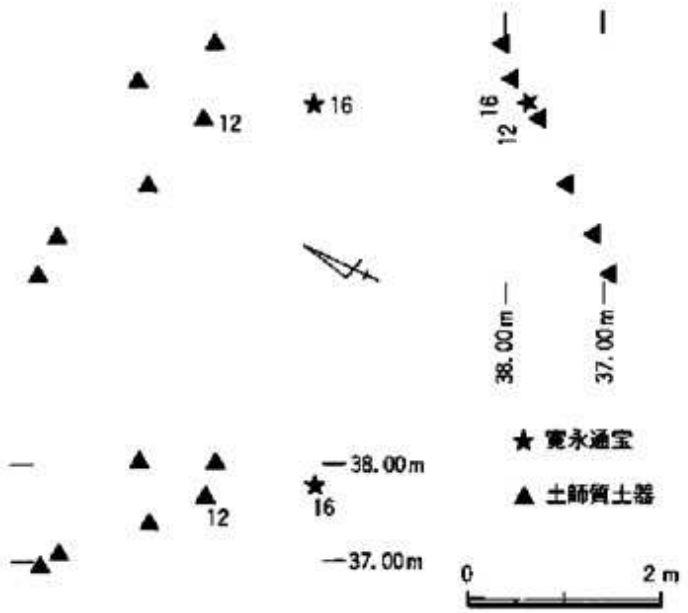


Fig. 7　第1郭南西斜面B区出土遺物分布図

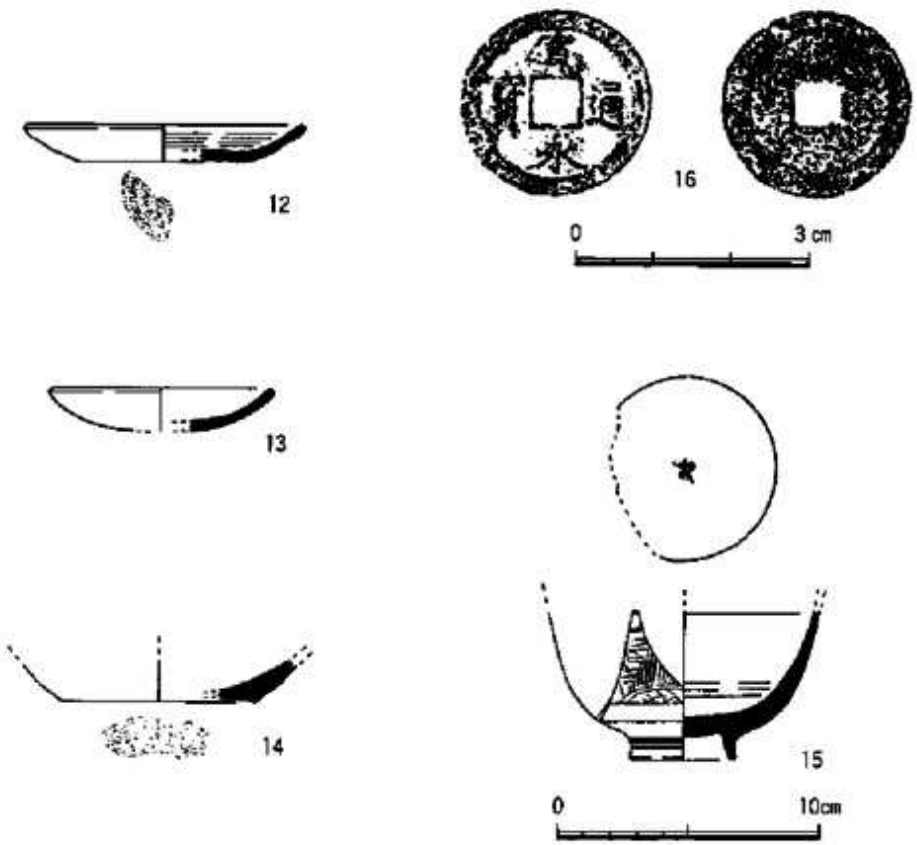


Fig. 8　第1郭南西斜面出土遺物実測図・拓影

（2） 出土遺物（Fig. 6～8）

第1郭南西斜面全体で，弥生土器片99点，陶器片15点，磁器片5点，叩石3点，寛永通宝1点，不明鉄器片2点等が出土しており，弥生土器8点，叩石3点，土師質土器3点，磁器1点，寛永通宝1点を図示した。

1～8はB区下半部第Ⅱ層出土の弥生土器である。1・3は甕の口縁部片とみられ，口縁端部は外方に肥厚させる。2は壺の口縁部片とみられる。4は外面に横位のハケ調整？を施した体部片で，内面はナデ調整である。5～8は底部片である。7は鉢の底部片と考えられる。3～5・8にはタール・ススの付着が認められる。弥生土器片はいずれも器表面の剥落が著しく，器面調整等の観察は困難なものが多い。

9～11はC区下半部出土の叩石である。9は第Ⅱ層出土の棒状の叩石で，砂岩製である。10は第Ⅰ層出土の花崗岩製叩石で，表裏面はやや凹む。11は第Ⅰ層出土の叩石で，砂岩製である。

12～14は土師質土器で12・13は皿，14は坏とみられる。いずれもロクロ成形である。12・13は内面及び外面の一部等に光沢があり，あるいは灯明皿等としての使用に伴って，2次的に付

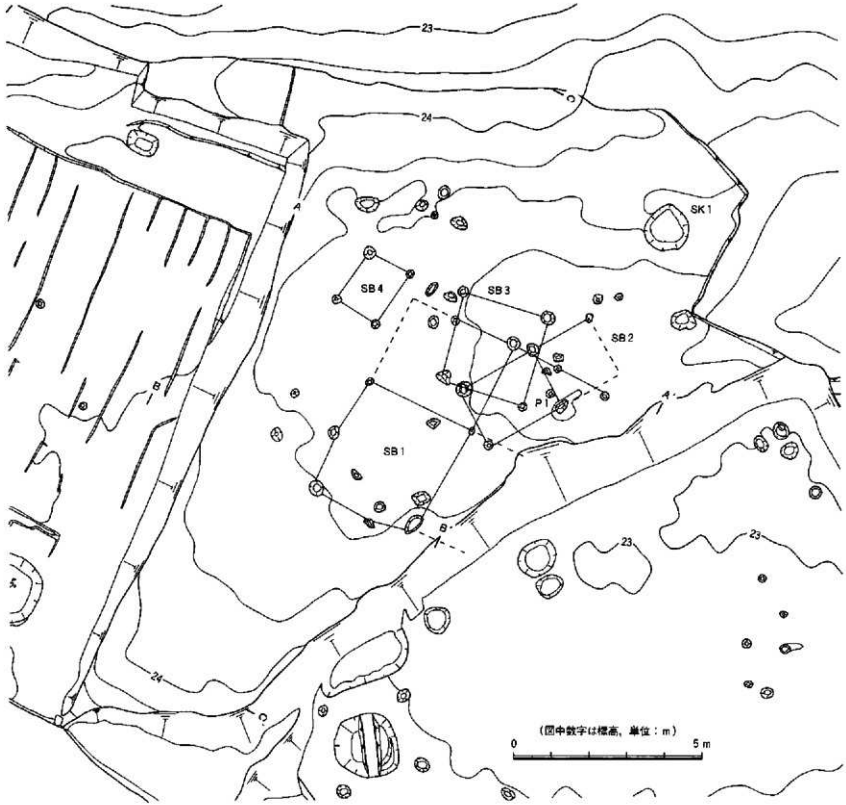


Fig. 9　第2郭全体図

着したものと考えられる。14は胎土にスサ状の繊維を混和させている。12はB区上半部第Ⅱ層出土，13・14は斜面下半部での表採資料である。

15は磁器で，染付の碗である。外面に施文があり，内面見込み中央にも変形文字？が描かれる。C区下半部第Ⅰ層出土。

16は寛永通宝で，B区上半部第Ⅰ層出土。銘字の突出は高く，銘字の表面は平坦である。

なお，B区上半部では，図示したものも含め，土師質土器片・寛永通宝の集中出土地点が存在したため，これをFig. 7に示した。遺物の周囲に遺構等の掘り込みや地形の整形等は認められず，その成因は不明である。

(3) 第2郭 (Fig. 9)

第2郭は後述する第3・4郭の形成，すなわち近世以降の構作及び，屋敷地としての利用等に際して大規模な削平がおこなわれた際に結果的に創出された平坦地形であることが調査によって判明した。第3・4郭は，かつて第2郭と一連であった平坦地形の削平に伴って生成した郭であるとみられるが，その際第2郭のみは削り残され，殆どその影響を受けずに旧状を保つことができたものと判断される。従って，第2郭のみはこの地形改変以前に残された遺構の検出が期待できる平坦地形部分でもあった。調査前の状況では，畑等として利用された様子はなく，所々岩盤の露出がみられたことから，土層の堆積はさほど深くないものと予想された。

調査の結果，岩盤上面において掘立柱建物跡4棟，土坑状遺構1基，及びピット状遺構等の遺構を検出した。このうち，掘立柱建物跡の在り方には，上記の推測に相応するような要素が看取され，この点において明らかに第3・4郭とは異なる様相を呈するものと理解される。

(1) 層序 (Fig. 10)

調査によって確認された層序は，第Ⅰ層：褐色土（表土層），第Ⅱ層：黄褐色粘土，第Ⅱ層b：橙色粘土である。第Ⅰ層は第2郭全体にわたって認められる表土層で，近世以降の遺物若干を含んでいた。第Ⅱ層・第Ⅱ層bは岩盤上部の軟化した部分とみられ，やや掘り過ぎている。したがって，第2郭の堆積土層は基本的に第Ⅰ層の褐色土層のみということとなり，第3・4郭に比べて堆積土層の非常に薄い調査区であった。

(2) 出土遺物 (Fig. 11)

第2郭において出土，及び表面採集された遺物には，陶器片18点，磁器片26点，瓦片12点，凹石1点，砥石片？3点，チャート片1点，不明鉄器片1点，そして土師質土器細片（焼土片？）等があるが，このうち第Ⅰ層出土の凹石1点を図示した。

17は砂岩製の凹石である。表面の凹み部分を使用痕と認めたものであるが，自然礫の可能性

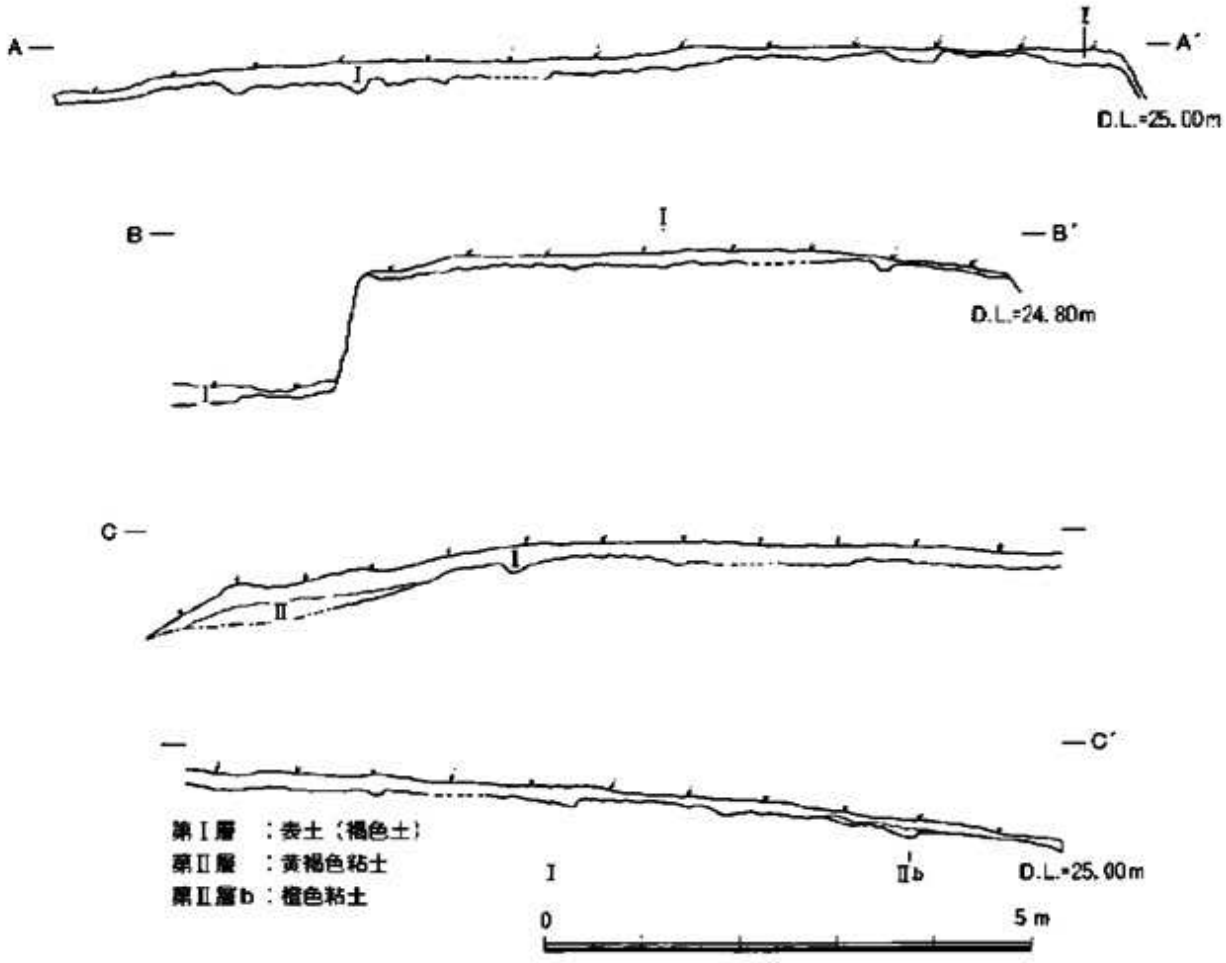


Fig. 10　第2郭堆積土層断面図

も否定できない。

(3) 検出遺構

第2郭で検出された遺構は，掘立柱建物跡4棟，土坑状遺構1基，ピット状遺構30基である。遺構からの出土遺物はただ一例を除くと皆無である。その一例とは，P1（Fig. 9）としたピット状遺構から出土した土師質土器とみられる細片であるが，あまりの細粒のため焼土片のようにもみえ，判然としない。ここでは，掘立柱建物跡4棟，土坑状遺構1基について，以下，個別に記述をおこなう。

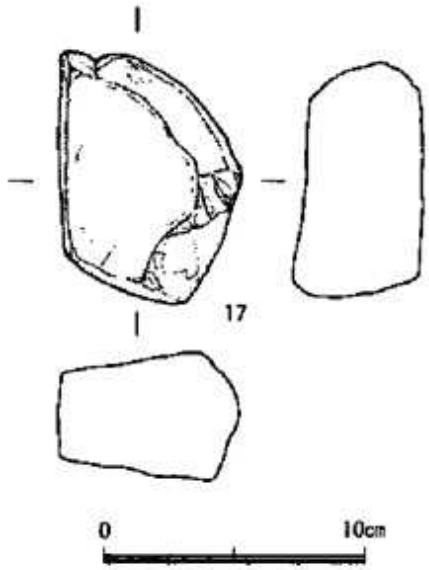


Fig. 11 第2郭出土遺物実測図

1．掘立柱建物跡

① SB1（Fig. 12）

調査区の中央部で検出された桁行2間以上（4.45m以上），梁間2間以上（3.15m以上）のやや南北を指向した総柱の掘立柱建物跡である。棟方向はN－41°18′－Wであるが，棟に若干の歪みがみられる。柱間寸法は，桁行が2.80～3.00m，梁間が2.60～3.20mとばらつきがある。また，桁・梁ともに束柱がみられ，これで柱間寸法をみると，桁行が1.40～1.65m，梁間が1.55～1.65mである。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形で，径20～60cm，検出面からの深さは10～25cmを測る。柱穴底面の標高は24.250～24.575mを測る。埋土は褐色粘質土の単純一層である。

出土遺物は認められない。

② SB2（Fig. 13）

調査区の中央南部で検出された桁行2間（3.70～3.80m），梁間1間以上（1.65～1.70m以上）の東西棟の掘立柱建物跡である。棟方向はN－89°45′－Eである。柱間寸法は，桁行が1.60～2.20m，梁間が1.65～1.70mで，ややばらつきがある。柱穴の掘り方は円形ないし不整形で，径25～45cm，検出面からの深さは10～27.5cmを測る。柱穴底面の標高は24.480～24.730mである。埋土は褐色粘質土の単純一層である。

出土遺物は認められなかった。

③ SB3（Fig. 14）

調査区の中央部で検出された桁行1間，梁間1間の掘立柱建物跡である。棟方向はN－

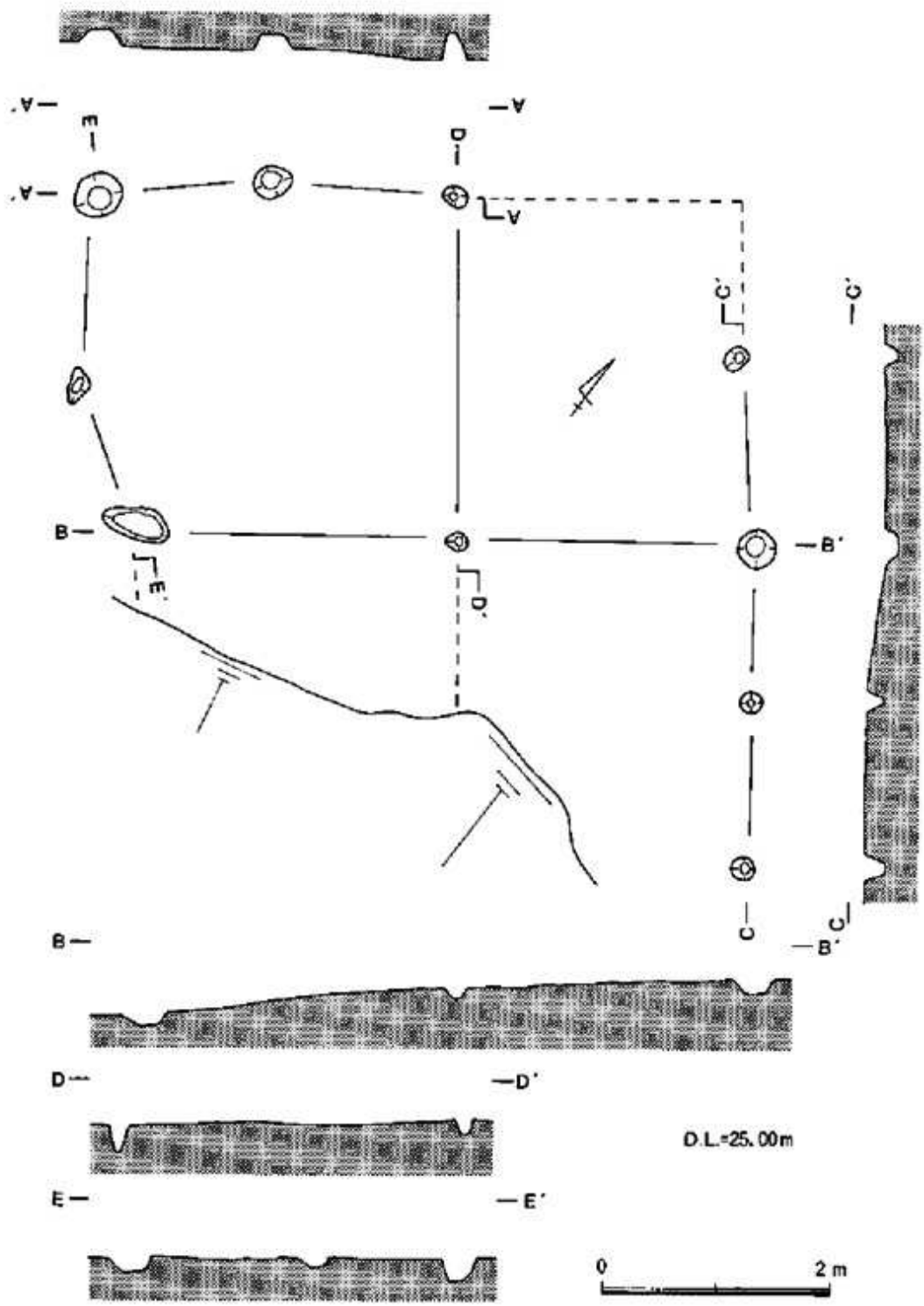


Fig. 12 第2郭 SB 1

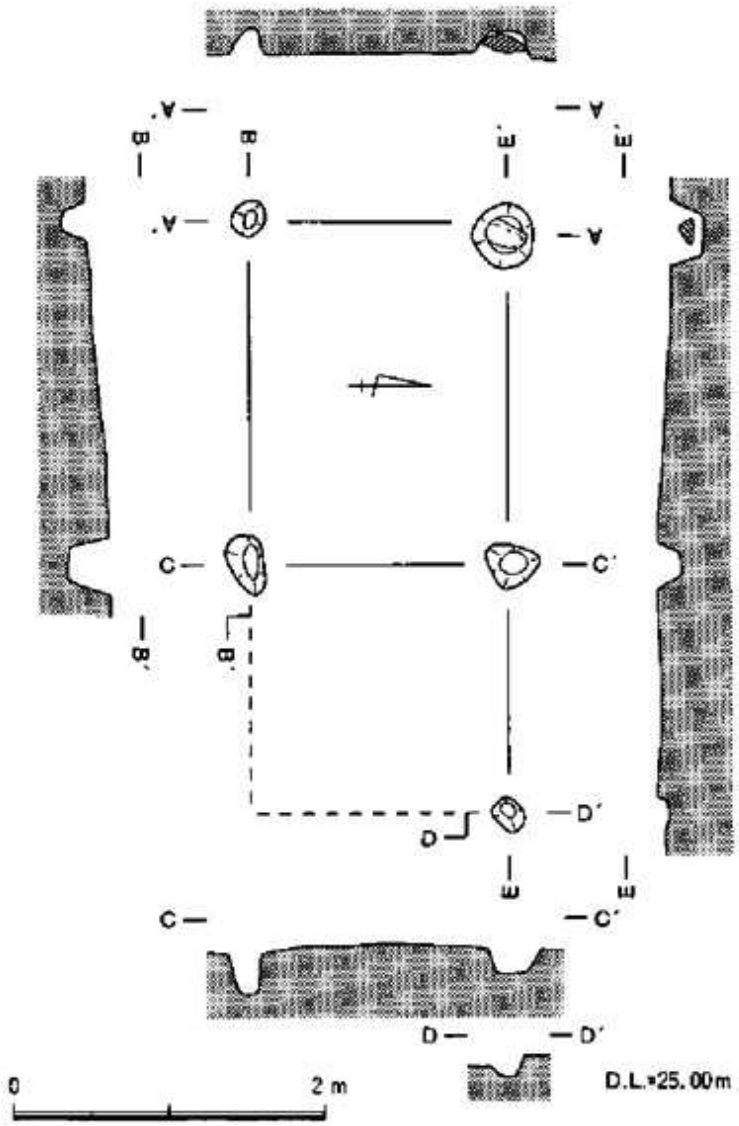


Fig. 13　第2郭 SB2

45°36′－Eである。柱間寸法は，桁行が2.35～2.40m，梁間が2.35～2.40mで，平面形はほぼ正方形を呈する。柱穴の掘り方は円形ないし不整形で，径25～45cm，検出面からの深さは12.5～22.5cmを測る。柱穴底面の標高は24.485～24.700mである。埋土は褐色粘質土の単純一層である。

遺物は認められない。

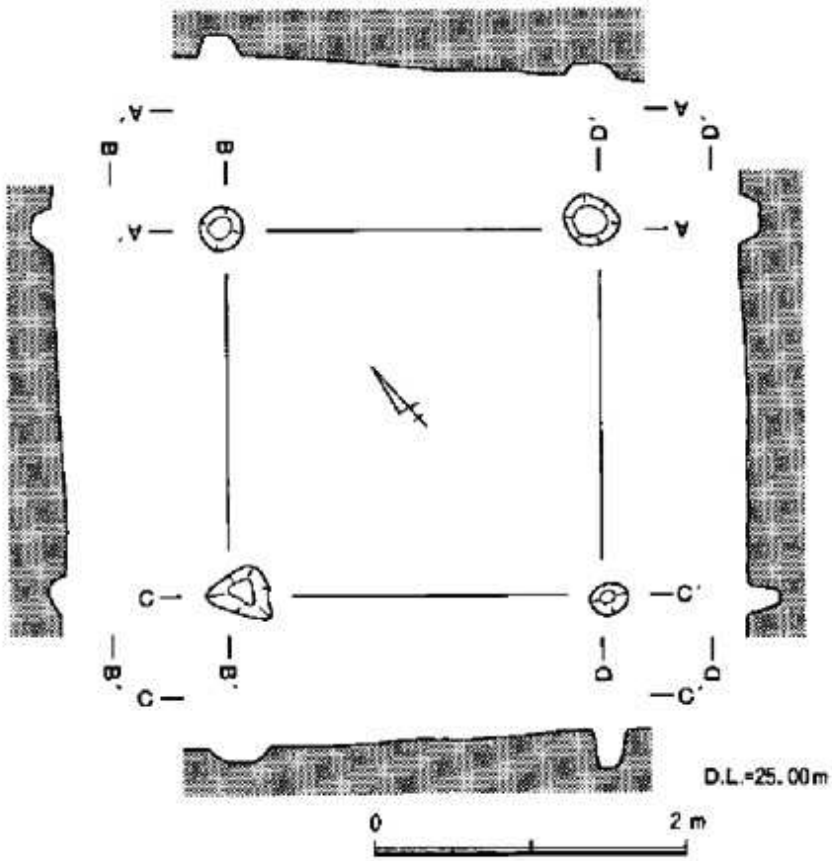


Fig. 14　第2郭 SB 3

④　SB 4 （Fig. 15）

調査区の北部で検出された桁行1間，梁間1間の掘立柱建物跡である。棟方向はN－48°36′－Wを示す。柱間寸法は，桁行が1.55～1.65m，梁間が1.25～1.30mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で，径25～40cm，検出面からの深さは12.5～22.5cmを測り，遺構の遺存状態は良くない。柱穴底面の標高は24.390～24.490mである。埋土は褐色粘質土の単純一層である。

出土遺物は認められなかった。

2．土坑状遺構

①　SK 1 （Fig. 16）

調査区の北東部に位置する。掘り方の平面形は不整形を呈し，長径1.20m，短径1.15m，検出面からの深さは20cmを測る。掘り方断面は船底形を呈し，長軸方向はN－5°48′－Wを示す。埋土は褐色粘質土単純一層である。

遺物は認められなかった。

(4) 第3郭 (Fig. 17)

第2郭の北西側に位置し，第4郭とほぼ同じ標高を示す平坦地形部分で，調査区平面形はほぼ方形を呈する。前述のように第4郭同様，近世以降におこなわれた削平行為によって生成された平坦地形であり，調査前の地表面及び完掘後の岩盤面もほぼ水平をなしていた。岩盤上面にはこれらの際，北東～南西方向へ一定間隔で地均しをおこなったことによって，その削り単位の境部分が「ミミズ腫れ」状に突出して残されていた。

第3郭とした平坦地形は北西方向にまだ続いており，その後一段下ってさらに平坦地形部分が存在する。第3郭の南西側は，現登山道を除いて急斜面となっており，登山道脇の東側部分は石垣によって護岸されている。この石垣もおそらく第3・4郭形成に伴って構築されたものであろう。また，第3郭北東側には第2郭からの旧地形の名残ともとれる細長い尾根状地形が伸びてきており，あたかも土塁のようであるが，その西端部を断ち割ってみると殆ど2次堆積とみられる土壌で構成されており，これも第3郭形成時の残土等によってなされた可能性が高い。

各郭同様，岩盤面までの掘り下げをおこない，土坑状遺構2基及びピット状遺構等の遺構を検出し，遺構出土も含めて弥生土器片53点，須恵

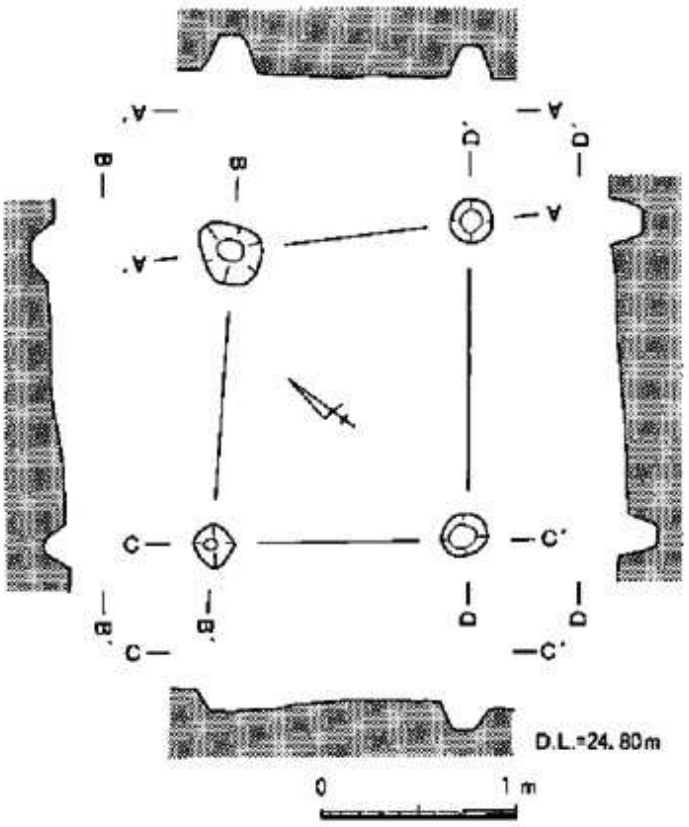


Fig. 15 第2郭 SB 4

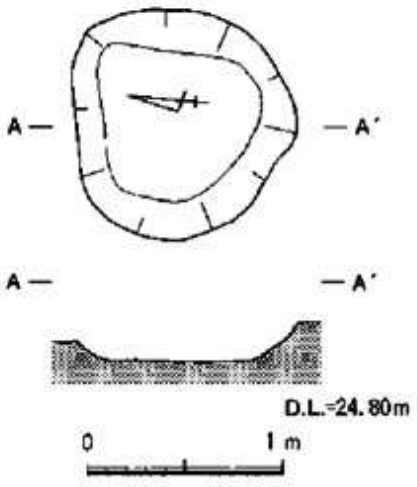


Fig. 16 第2郭 SK 1

器片２点，土師質土器片４点，青磁片５点，陶器片249点，磁器片279点，土錘３点，瓦片74点，チャート砕片？２点，砥石２点，凝石片？３点，寛永通宝１点，煙管１点，銅製品？１点，鉄器片26点，鉄滓（ガラス滓？）４点等の遺物が出土した。なお，第３郭北端部の土坑状遺構ＳＫ１付近において，弥生土器片が出土したことは，第１郭南西斜面での出土と合わせて，貴重な知見が得られたものと評価されよう。

（１） 層序（Fig. 18・19）

第３郭全体に認められた基本層序は，第Ⅰ層：褐色土（表土層），第Ⅱ層：褐色混礫土，第Ⅲ層：明灰褐色粘質土である。第Ⅰ層－第Ⅲ層には岩盤と同質とみられる小角礫が含まれている。これらは第３郭部分が形成された際に生成した土壌が，その後の自然及び人為的作用を経て分層可能になったものと考えられる。以上３層には主に近世以降の遺物が含まれていた。

上記の３層以外がみられるのは，調査区北端部・西隅部，及び北部の土塁状地形部分である。

調査区北端部では第Ⅳ層：明灰褐色粘質土，第Ⅴ層：褐色粘質土，第Ⅵ層：褐色粘質土の堆積が観察された。いずれも礫を含み，第Ⅳ層・第Ⅴ層には弥生土器片の出土をみる。しかし，第Ⅳ層・第Ⅴ層にも近世の遺物が入っており，純粋な遺物包含層の状態で残っていたものではない。

第３郭の南西側斜面際に当たる調査区西隅部では，第Ⅱ層ａ：褐色混礫土，第Ⅱ層ｂ：褐色混礫土，第Ⅲ層ａ：褐色混礫土，第Ⅲ層ｂ：橙色混土礫，第Ⅳ層：暗褐色粘質土，第Ⅴ層：暗褐色混礫土の堆積が確認された。斜面際であることから，岩盤上面の深度がやや深くなっており，岩盤面の整形の及んでいないとみられる第Ⅳ層以下の部分は，近世にもたらされた土壌ではないとみられるが，やはり近世遺物を若干含んでおり，多少の撹乱は免れ得なかったものと考えられる。

第３郭北部の土塁状地形部分では，第Ⅱ層ｂ：暗褐色混礫土，第Ⅲ層ｂ：明褐色混礫土，第Ⅳ層ｂ：橙色混礫土の堆積がみられた。いずれも礫を多く含む土層で，これら３層には遺物を含んでいない。この部分の堆積の形成要因は不明であるが，第３郭形成の際に残土処理等に伴って盛り出された可能性が高いと考えられる。第３郭の旧状が不明なこともあって，中世城郭に伴う土塁跡と位置づけるには，積極的な根拠に欠けると言わざるを得ない。なお，第Ⅰ層の表土層からは近世の遺物が出土している。

（２） 第Ⅰ層～第Ⅴ層出土の遺物（Fig. 20・21）

遺構以外からの遺物は，弥生土器片53点，須恵器片２点，土師質土器片３点，青磁片５点，陶器片242点，磁器片275点，土錘３点，瓦片62点，チャート砕片？２点，砥石１点，凝石片？２点，寛永通宝１点，煙管１点，銅製品？１点，鉄器片14点，鉄滓（ガラス滓？）３点等が出土している。この中から，青磁２点，陶器４点，磁器４点，土錘２点，寛永通宝１点，煙管１

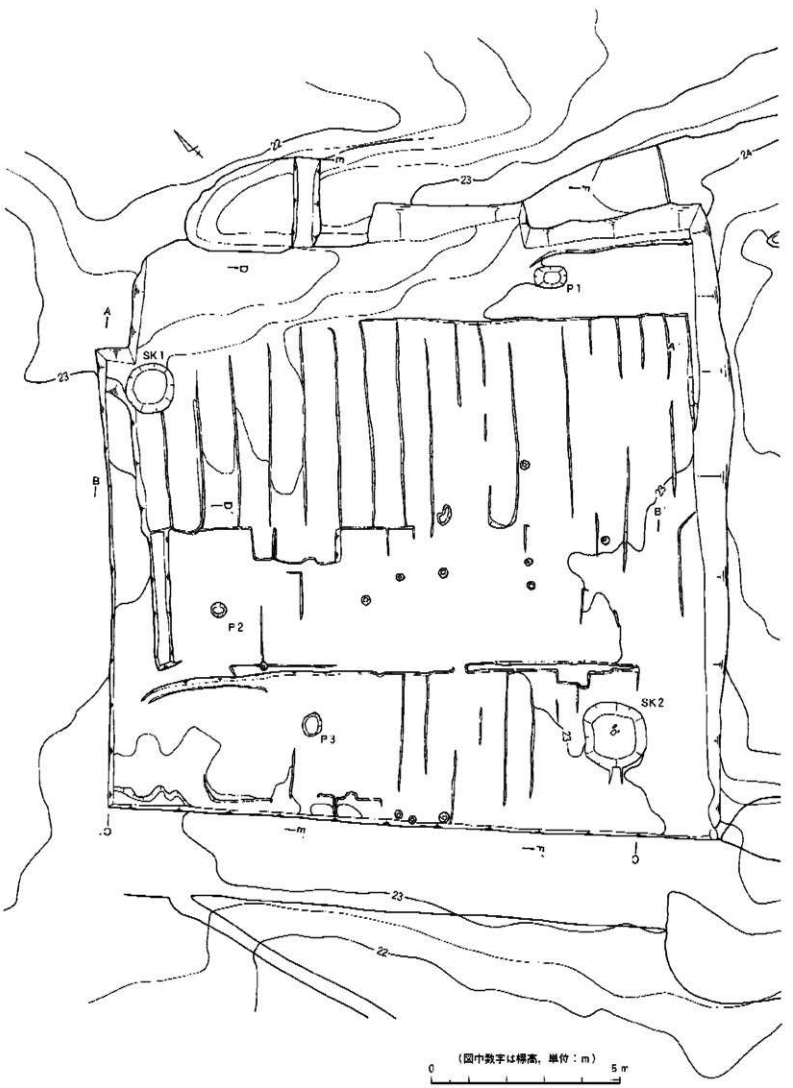


Fig. 17　第3郭全体図

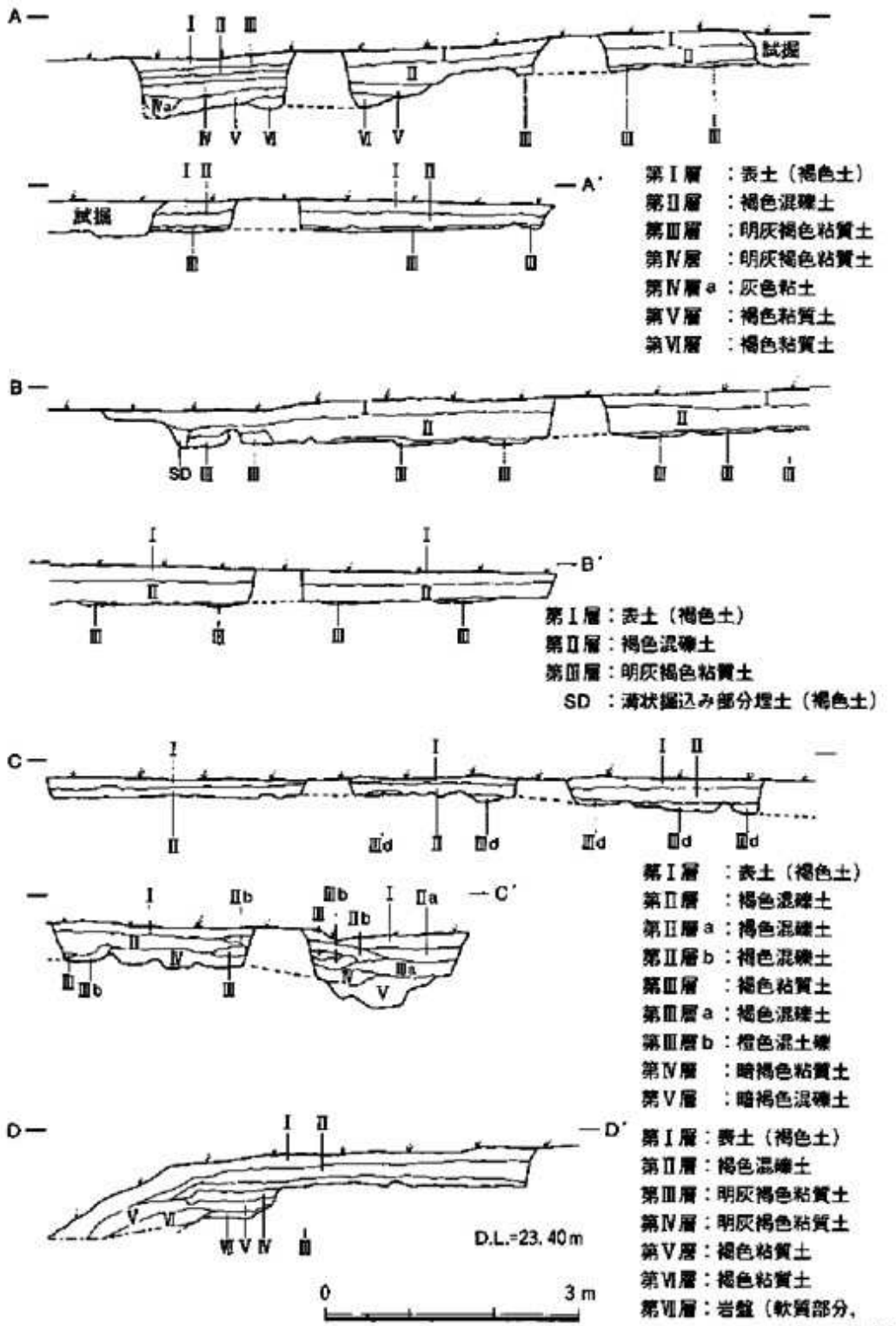


Fig. 18　第3郭堆積土層断面図1

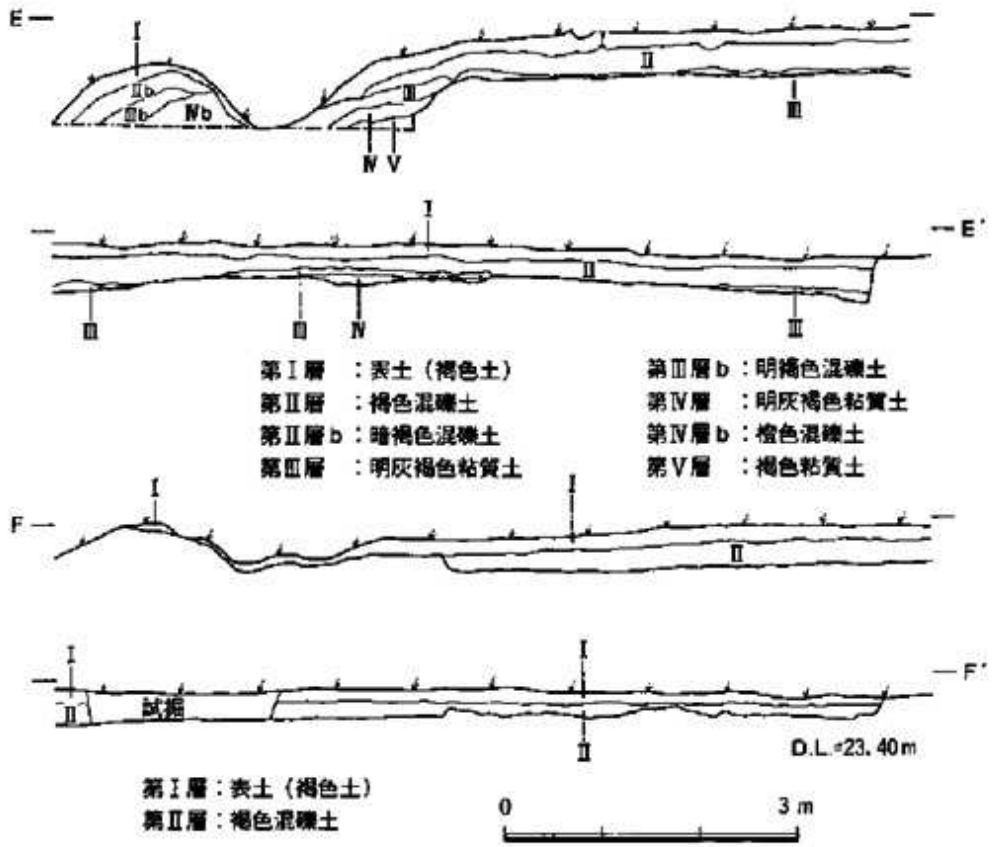


Fig. 19　第3郭堆積土層断面図2

点を図示した。

18～21は陶器である。18・20は碗，19・21は皿である。18は鉄釉で，外面に刷毛目を施す。19は灰釉で，見込に梅花を描く。20・21は鉄釉で，見込は蛇ノ目釉剝ぎを施す。19は第3郭西隅部・第Ⅱ層b出土，18・20・21は土塁状地形部分の第Ⅰ層出土である。

22・23は青磁で，22は碗，23は稜花皿である。22は外面に線描き文，23は内面に線描き文を施す。22は第3郭北端部・第Ⅳ層出土，23は試掘調査時に表土層から出土のものである。

24・27～29は磁器である。24は染付・碗の底部片で，外面に草文？を描く。第3郭北端部・第Ⅴ層出土。27－29は白磁・紅皿で，外面に条線あるいは列点の押圧痕がみられる。肥前系とみられる。27は第Ⅰ層出土，28・29は試掘調査時出土のものである。

25・26は土錘である。いずれも瓦質で，26には紐掛け用とみられる抉り（段？）が観察される。重量は25が13.7g，26が23.0gである。25は第Ⅱ層出土，26は試掘溝埋め戻し土中から採集のものである。

30は寛永通宝である。銘字の突出は高く，銘字表面は平坦である。表裏面ともに被熱によっ

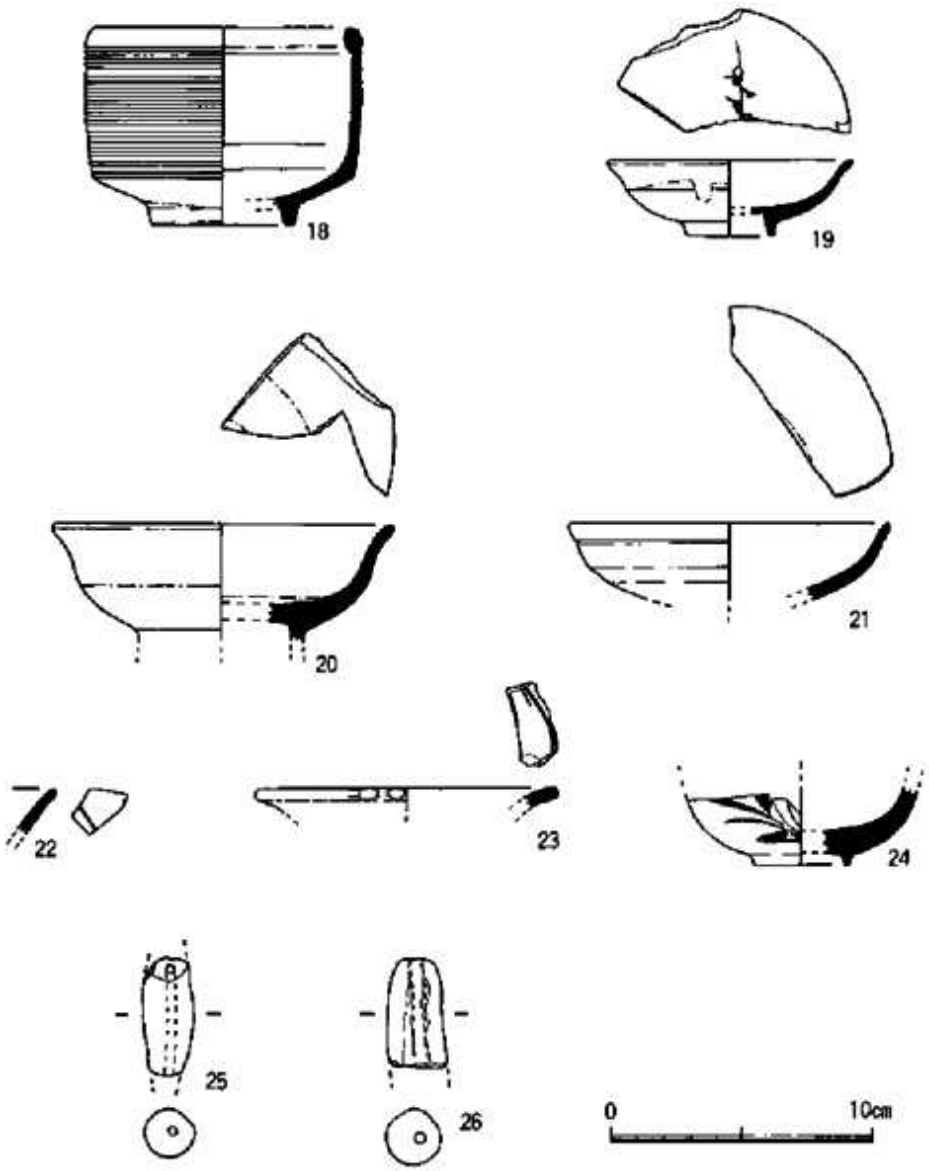


Fig. 20　第３郭出土遺物実測図１

て変質している。第Ⅰ層出土。

31は銅製の煙管・雁首部である。第Ⅱ層出土。

（３）　検出遺構とその出土遺物

検出の遺構は，土坑状遺構２基，ピット状遺構15基である。このうち，土坑状遺構２基，ピット状遺構３基について，以下，個別に記述をおこなう。

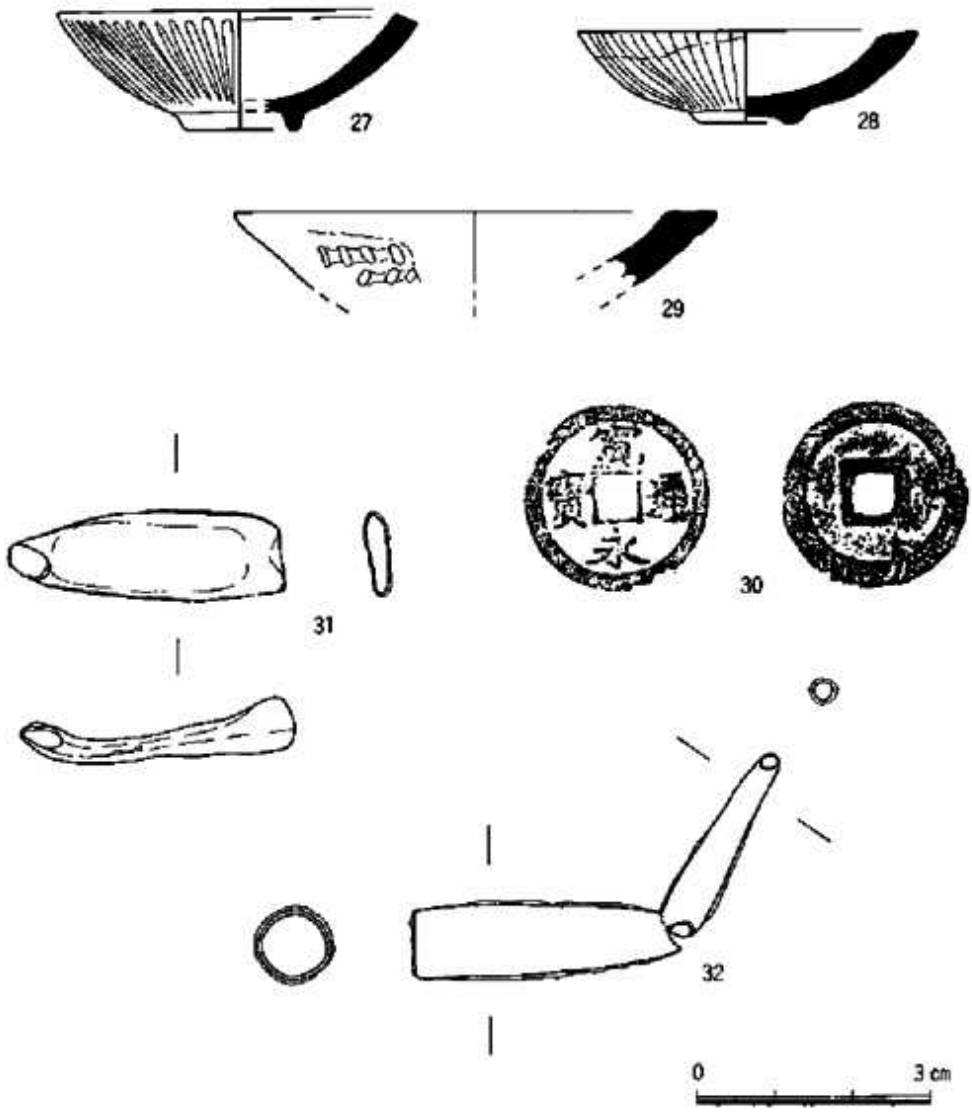


Fig. 21　第３郭出土遺物実測図・拓影２

１．土坑状遺構

①　SK１（Fig. 22）

調査区の北隅部に位置する。掘り方の平面形はほぼ円形を呈し，長径1.40m，短径1.30m，検出面からの深さは70cmを測る。掘り方断面は逆台形を呈し，長軸方向はN－63°36′－Eを示す。埋土はA層：暗褐色混礫土，B層：橙色礫（暗褐色粘土混），C層：灰色粘土（褐色土ブロック混）に分層できる。B・C層は炭化物（炭化木片）を含む。

出土遺物は，陶器５点，磁器４点，瓦片12点，砥石１点，鉄器片？10点であり，これらの中から陶器２点，砥石１点を図示した。

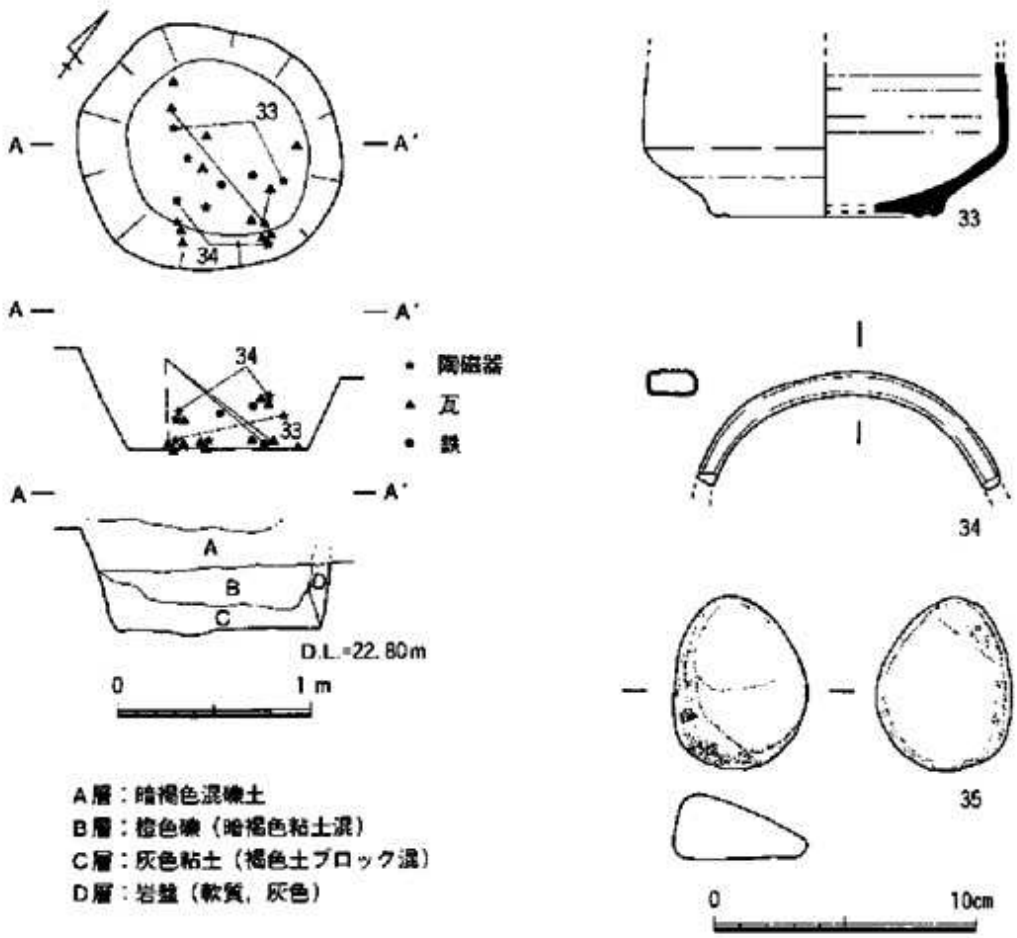


Fig. 22　第3郭 SK1・同出土遺物実測図

33・34は灰釉陶器で，33は器種不明の体部片，34は土瓶の把手部片と考えられる。33は底部外面にススの付着が顕著である。釉の色調等からみて，両者は同一個体の可能性がある。埋土B・C層出土。

35は砂岩製の砥石で，表裏両面に使用痕がみられる。埋土B層出土。

② SK2（Fig. 23）

調査区の南隅部に位置する。掘り方の平面形は隅丸方形を呈し，長径1.85m，短径1.65m，検出面からの深さは90cmを測る。掘り方南西部分には，遺構内へ向かって傾斜する約60cmの緩やかなスロープが取り付く。集水口として機能していたものであろうか。掘り方の断面は台形を呈する。床面外周部分には，幅・深さともに5cm程度の細い溝が床から壁面への立ち上がり部分に沿って一周しており，これは井筒状のものを土坑状遺構の壁面に沿って挿入・設置して

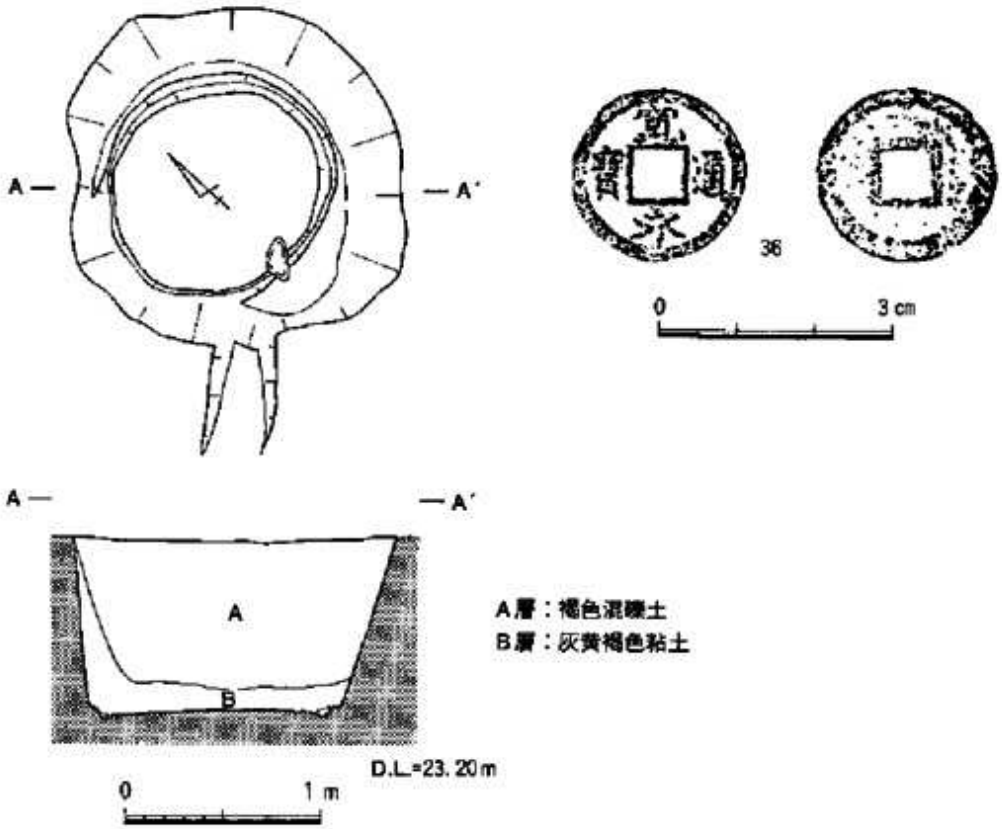


Fig. 23　第3郭SK2・同出土遺物拓影

いた折の板材下端部の跡ではないかとみられる。長軸方向はN－36°36′－Eを示す。埋土はA層：褐色混礫土，B層：灰黄褐色粘土である。A層には岩盤の破砕礫を多く含む。

出土遺物は陶器片1点，寛永通宝1点であり，寛永通宝1点の拓影を示した。

36は寛永通宝で，試掘調査の際に出土のものである。銘字の特徴は第4郭出土の55のそれに最も近似する。

2．ピット状遺構

①　P1（Fig. 24）

調査区北東部で検出した方形のピット状遺構で，長径85cm，短径60cm，検出面からの深さ70cmを測る。掘り方の断面は逆台形である。埋土はA層：暗褐色土，B層：黄褐色混礫土の2層に分層できた。

出土遺物は認められなかった。

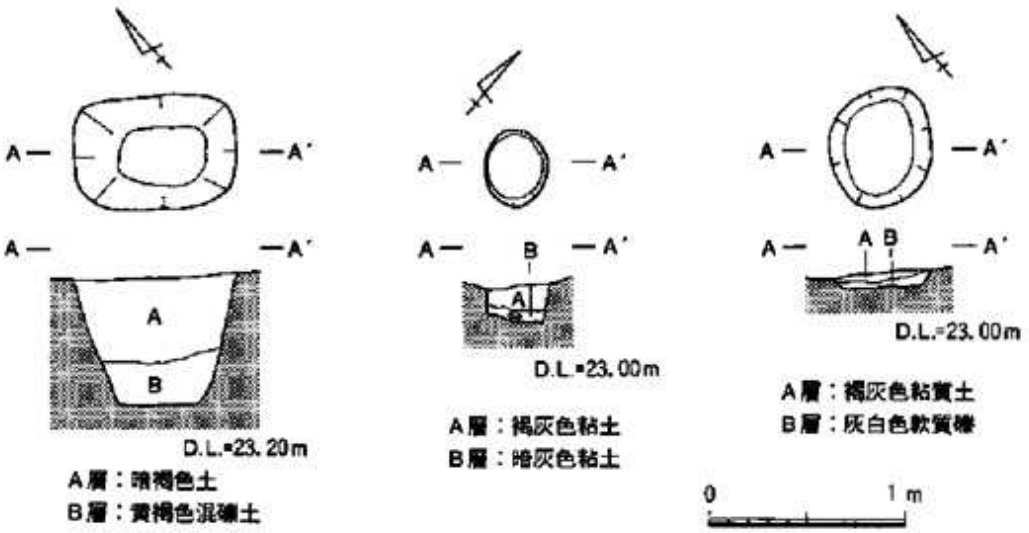


Fig. 24　第3郭P1～P3

② P2（Fig. 24）

調査区北西部で検出した円形のピット状遺構で，長径45cm，短径43cm，検出面からの深さ27.5cmを測る。掘り方の断面は，東側の床面がやや深い不整の四角形を呈する。埋土は，A層：褐灰色粘土，B層：暗灰色粘土の2層に分層できた。

出土遺物は陶器片1点，鉄器片2点，鉄滓（ガラス滓？）1点が挙げられるが，図示できるものはない。

③ P3（Fig. 24）

調査区西部で検出した楕円形のピット状遺構で，長径65cm，短径54cm，検出面からの深さは10cmを測り，遺構の遺存状態はよくない。掘り方の断面は逆台形を呈する。埋土は，A層：褐灰色粘質土，B層：灰白色軟質礫の2層に分層できた。

出土遺物には凝石片？とみられるもの1点があった。

（5） 第4郭（Fig. 25）

第2郭の南下段に位置する平坦地形であり，第3郭同様削平によって人為的に作られた箇所である。調査前は細い篠竹が一面に茂っていたが，若干の果樹が植えられており，果樹栽培に利用されていたことが窺われた。調査区の平面形は東西に長い不整形を呈する。第4郭南側は自然地形とみられる斜面であるが，北側においては直線的に第2郭を削り込んだ形跡がみられ，第2郭と接する北東隅部分は殆ど直角をなしている。この行為によって，第2郭の掘立柱建物跡の一部分が消失しており，この切り合い関係によっても第4郭の遺構群がより新しい年代に

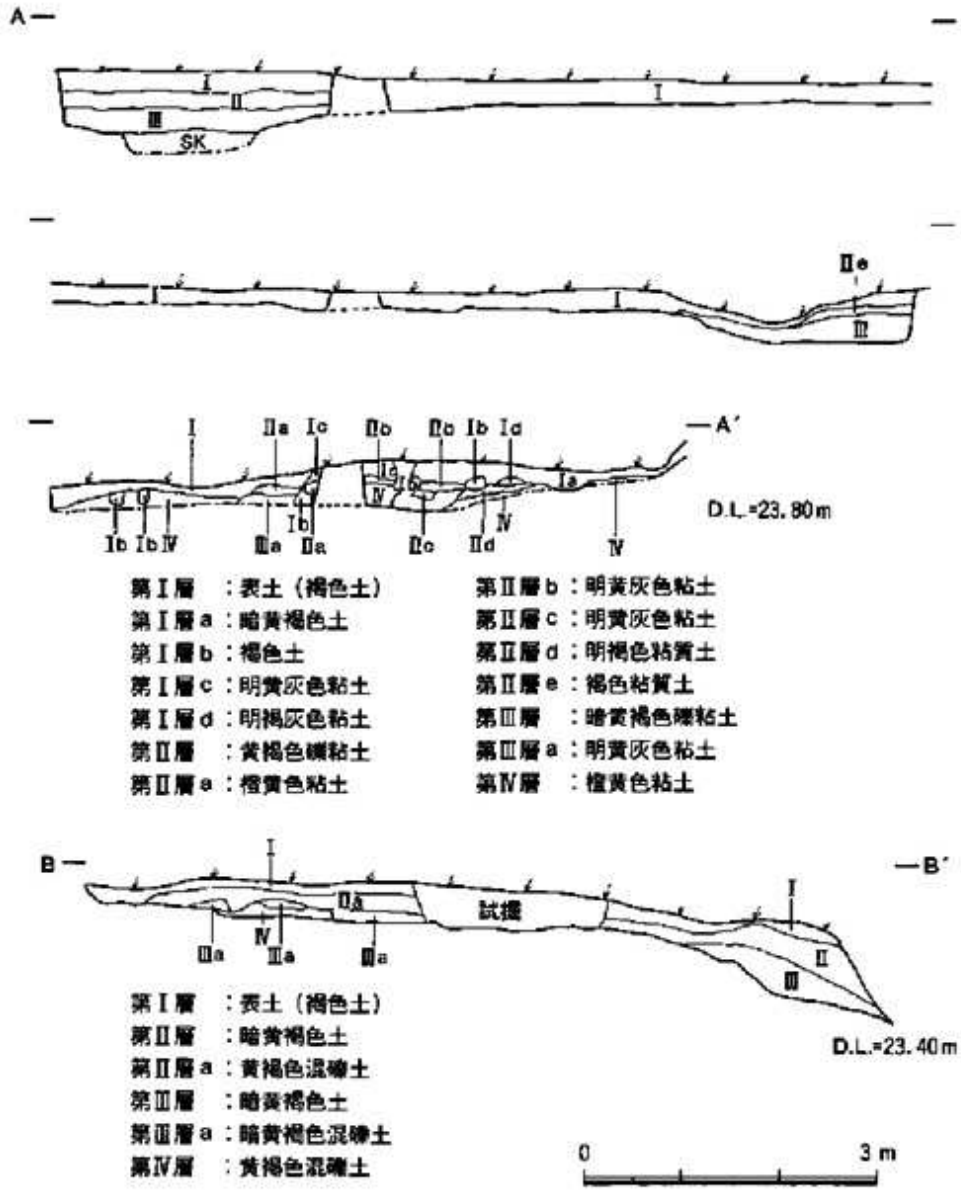


Fig. 26　第4郭堆積土層断面図（A－A′，B－B′）

形成されたものであることが知れる。

第4郭においても岩盤上面までの掘り下げをおこない，土坑状遺構3基，ピット状遺構15基を検出した。遺構出土の遺物はわずかであったが，第Ⅰ層出土のものを中心に，弥生土器片？1点，土師質土器5点，瓦質土器2点，青磁4点，陶器128点，磁器112点，瓦35点，チャート砕片1点，砥石2点，凝石片？4点，寛永通宝2点，煙管1点，鉄器片12点等の出土遺物が得られた。なお，第4郭南側斜面に斜面上方からの廃棄によってできたとみられる円礫等の集積

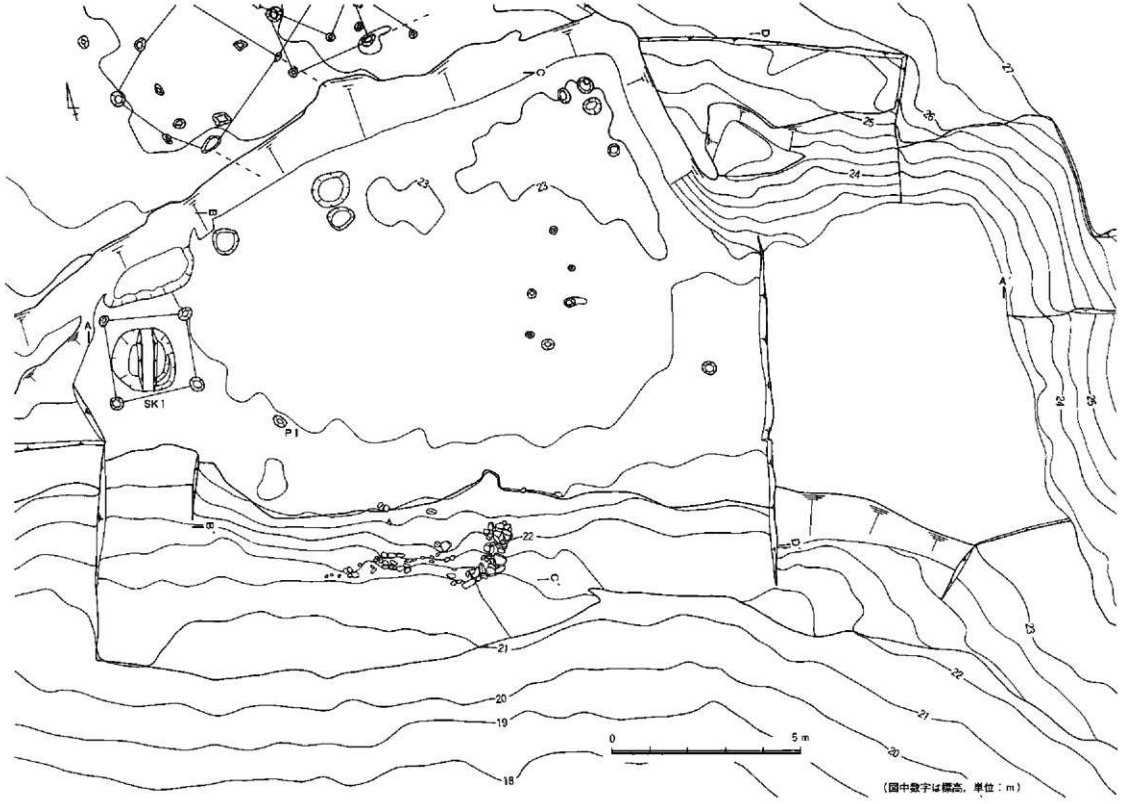


Fig. 25　第4郭全体図

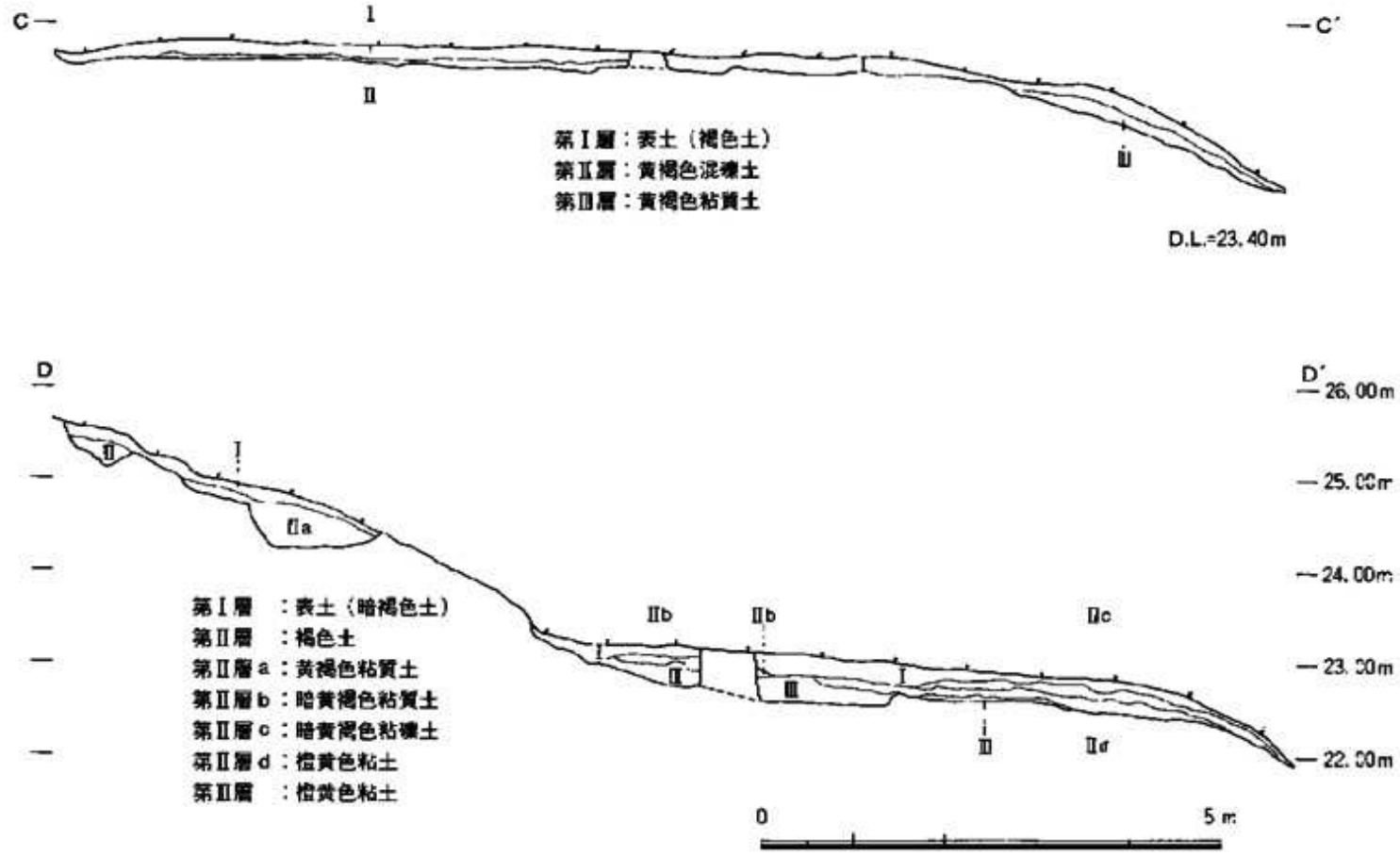


Fig. 27　第4郭堆積土層断面図（C－C′，D－D′）

部分があり，その周囲からも遺物の出土が認められた。

（1） 層序（Fig. 26・27）

第4郭の層序は，第2郭を削平して形成された西半部分と，これ以外の東端部分とでは，変化が著しい。それは遺構の分布とも相関する現象として理解できるが，一連の層位でも観察箇所によってその色調・粒度等に変異幅が大きい。したがって，図示したA－A′，B－B′，C－C′，D－D′の4本の土層断面ライン間での各層名の統一はできていない。よって，各ラインごとに記述をおこなう。

A－A′ラインは第4郭を長軸方向に縦断する形で設定した。観察された層序は，第Ⅰ層：褐色土（表土），第Ⅰ層a：暗黄褐色土（腐植土），第Ⅰ層b：褐色土（腐植土），第Ⅰ層c：明黄灰色粘土，第Ⅰ層d：明褐灰色粘土，第Ⅱ層：黄褐色礫粘土，第Ⅱ層a：橙黄色粘土，第Ⅱ層b：明黄灰色粘土，第Ⅱ層c：明黄灰色粘土，第Ⅱ層d：明褐色粘質土，第Ⅱ層e：褐色粘質土，第Ⅲ層：暗黄褐色礫粘土，第Ⅲ層a：明黄灰色粘土，第Ⅳ層：橙黄色粘土（腐植土ブロックが混じる）である。ライン中央部以西と東端部では大きく様相が異なり，東端部の層序が複雑に映るのは，この部分が果樹の栽培に利用されていた箇所であり，その根の攪乱が影響しているためである。

B－B′ラインは第4郭西端付近においてA－A′ラインに直交するように設定したものである。確認された層序は，第Ⅰ層：褐色土（表土），第Ⅱ層：暗黄褐色土，第Ⅱ層a：黄褐色混礫土，第Ⅲ層：暗黄褐色土，第Ⅲ層a：暗黄褐色混礫土，第Ⅳ層：黄褐色混礫土である。第Ⅱ層a・第Ⅲ層aは，それぞれA－A′ラインの第Ⅱ層・第Ⅲ層に対応するものである。

C－C′ラインは第4郭中央部分でA－A′ラインに直交する形で設定したものである。確認できた層序は，第Ⅰ層：褐色土（表土），第Ⅱ層：黄褐色混礫土，第Ⅲ層：黄褐色粘質土である。第Ⅱ層・第Ⅲ層は岩盤上部の軟質部分とみられるため，堆積土層としては表土層1層のみであり，しかも層厚は非常に薄い。第4郭でも最も土層堆積の薄い部分に相当する。

D－D′ラインは第4郭東半部分でA－A′ラインに直交する形で設定したものである。確認できた層序は，第Ⅰ層：暗褐色土（表土），第Ⅱ層：褐色土，第Ⅱ層a：黄褐色粘質土，第Ⅱ層b：暗黄褐色粘質土，第Ⅱ層c：暗黄褐色粘礫土，第Ⅱ層d：橙黄色粘土，第Ⅲ層：橙黄色粘土である。第Ⅱ層b・第Ⅲ層が，それぞれA－A′ラインの第Ⅱ層e・第Ⅲ層に対応するものである。斜面上にある，第Ⅱ層aを埋土とする落ち込みは，人為的な地形改変によるものと考えられる。

（2） 出土遺物（Fig. 21・28～30）

第4郭では，主に遺構以外から弥生土器片？1点，土師質土器5点，瓦質土器2点，青磁4点，陶器127点，磁器110点，瓦35点，チャート砕片1点，砥石2点，凝石片？3点，寛永通宝

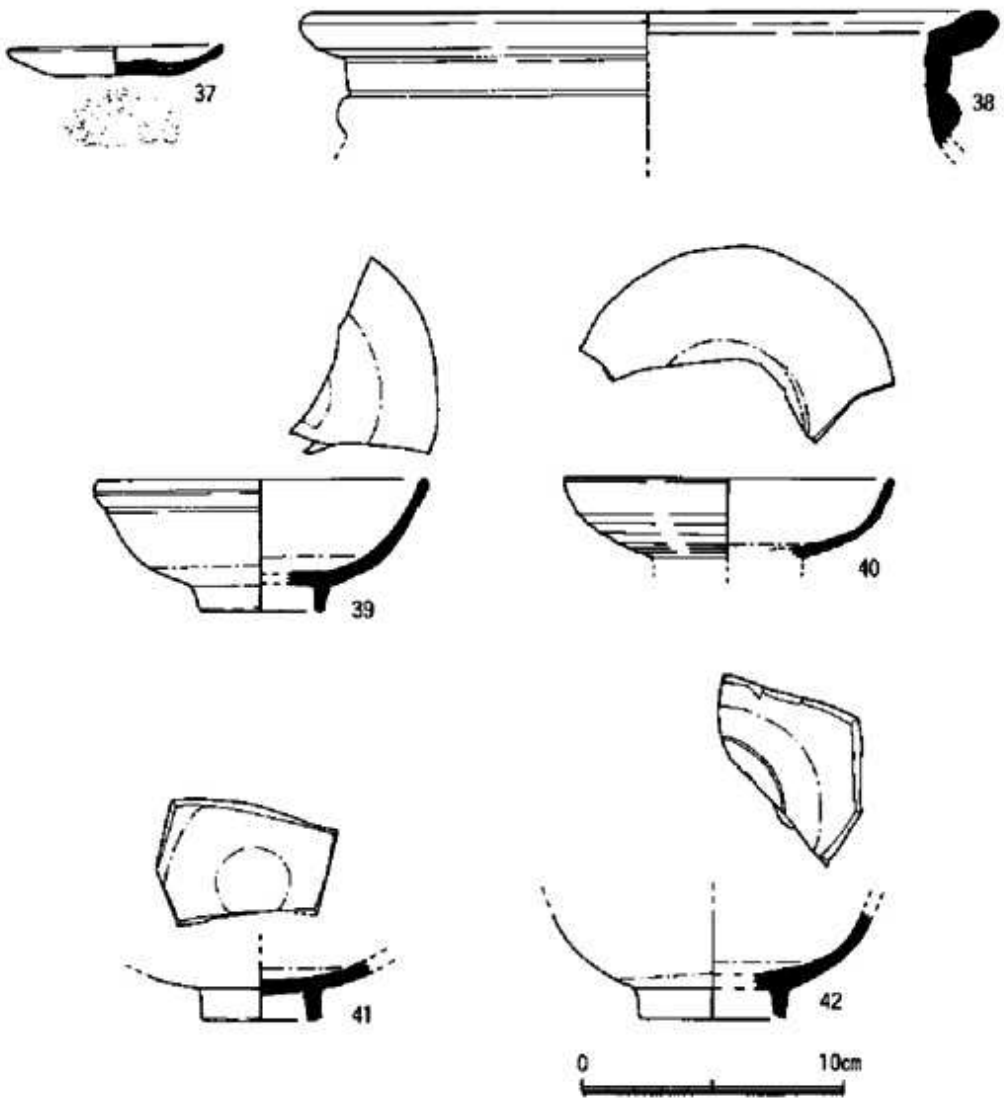


Fig. 28　第4郭出土遺物実測図1

2点，煙管1点，鉄器片12点等の遺物が出土した。その中から土師質土器2点，陶器8点，青磁2点，磁器3点，砥石1点，石製品1点，寛永通宝2点，煙管1点を図示し，以下に記述をおこなう。

37・38は土師質土器で，いずれも第Ⅰ層出土。37は皿で，内外面に透明釉を施したような光沢を有する。外面にはスス・タールの付着がみられる。38は大型の器種の口縁部片である。口縁端部は外傾し，口縁直下外面には凸帯を貼付する。内面にはタールが付着する。

39～46は陶器である。39・42は鉄釉の碗で，見込には蛇ノ目釉剥ぎを施す。いずれも第Ⅰ層

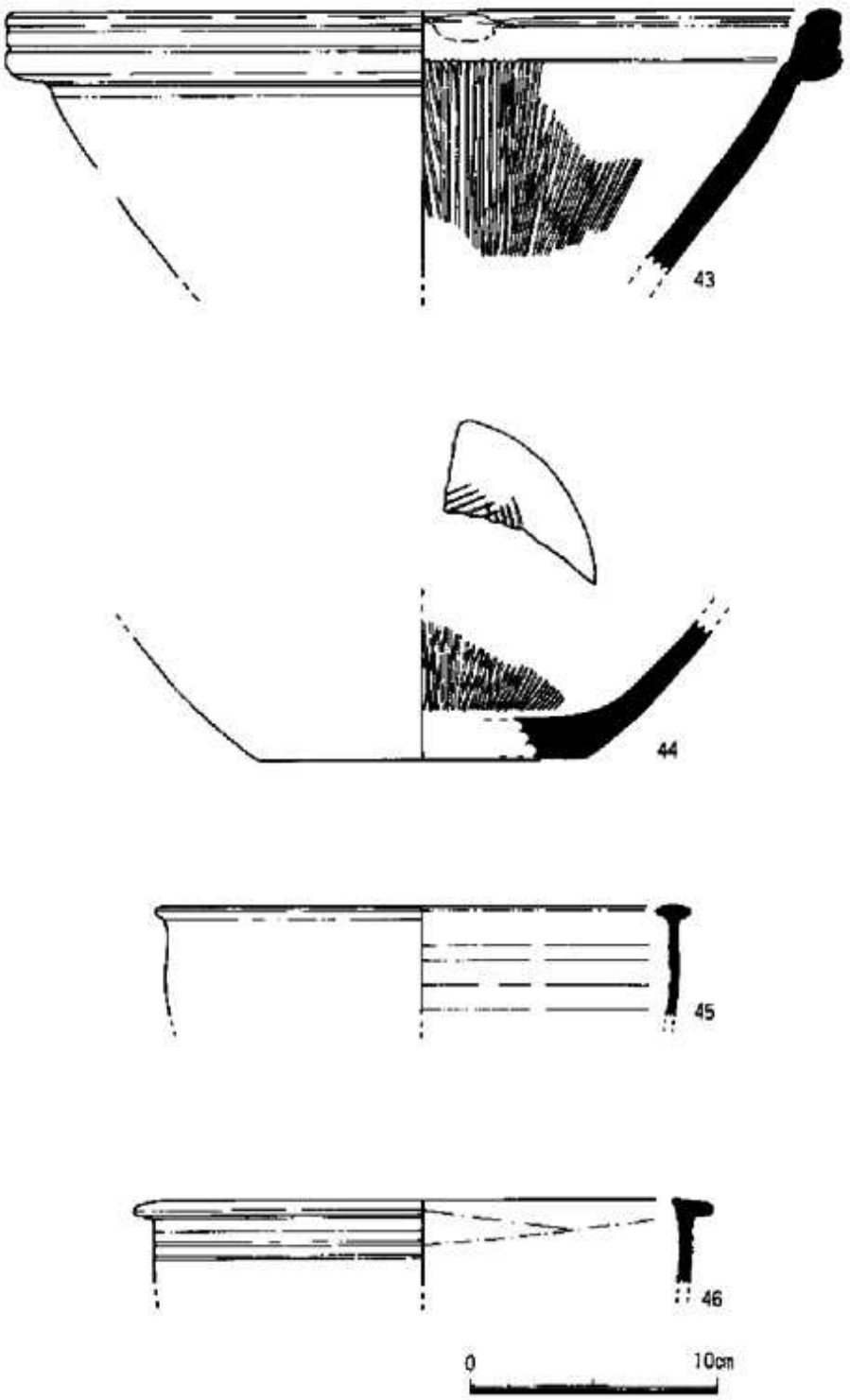


Fig. 29　第4郭出土遺物実測図2

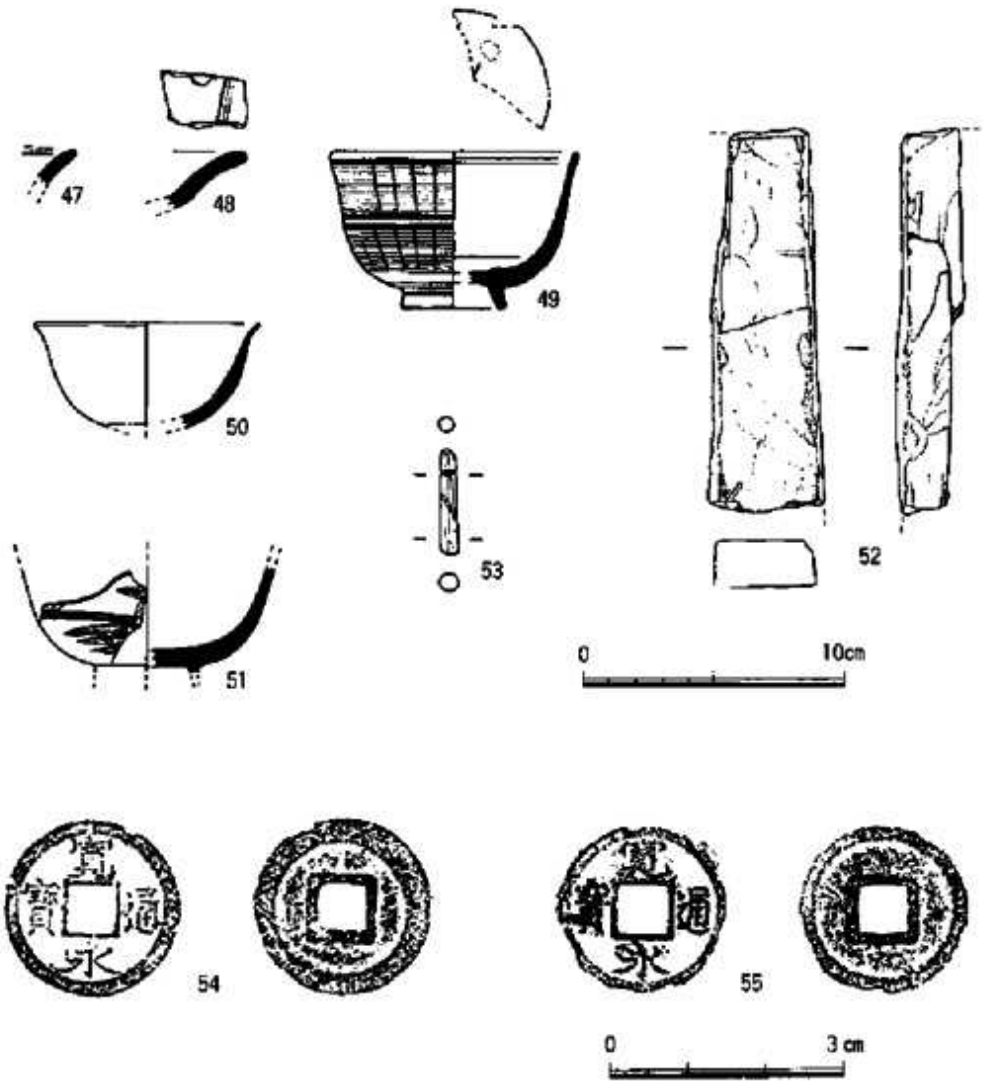


Fig. 30　第４郭出土遺物実測図・拓影３

出土。40は灰釉・皿で，見込には釉剥ぎが観察される。表採資料である。41は鉄釉・皿で第Ⅰ層出土。見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す。43・44は擂鉢片で，同一個体とみられる。43は口縁部～体部片で，口縁部外面に沈線（凹線？）２条を巡らせ，内面の擂目は10本単位とみられる。ピット状遺構Ｐ１及び第Ⅱ層からの出土片が接合したものである。44は第Ⅰ層出土の底部片である。擂目は９本単位とみられ，内面・内底面の擂目は不連続である。

45・46は鉄釉・甕の口縁部片で，第Ⅰ層出土である。45は口縁端部を内外方に拡張し，口縁端面は無釉である。46は口縁端部を外方に拡張させるもので，外面に細沈線２条を巡らす。

47・48は青磁片で，第Ⅰ層からの出土である。ともに稜花皿の口縁部片で，内面には線描き

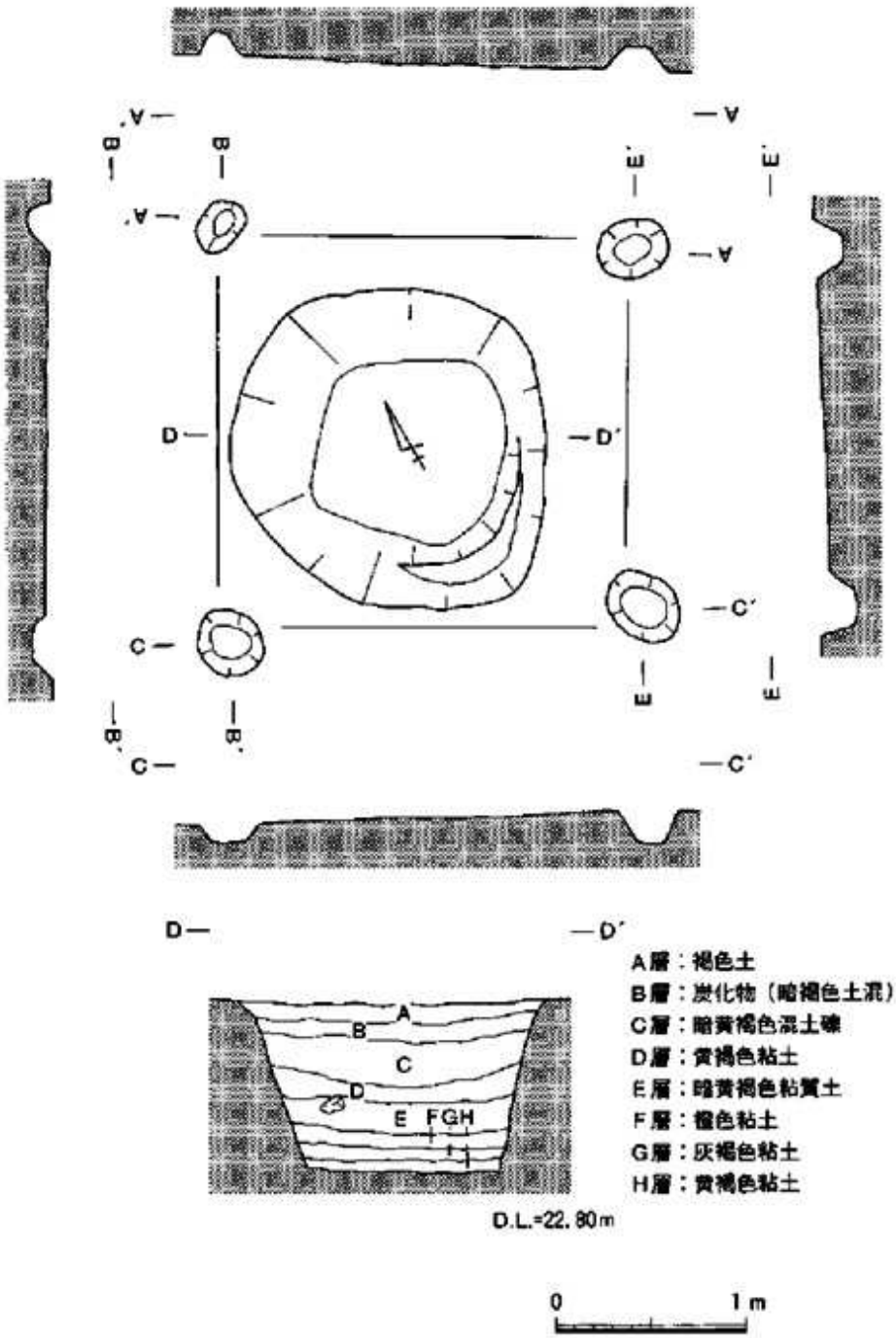


Fig. 31　第4郭 SK 1

の櫛線3条を巡らせ，48には文様の一部とみられる弧線1条が描かれる。

49～51は磁器である。49は染付・碗で，外面には籠状の文様が描かれ，見込中央部にも文様が描かれている。50は青磁釉？を施した碗で，無文である。51は染付・碗で，外面に草文？を描く。49・51は第Ⅰ層出土，50は第Ⅱ層出土である。

52は砥石で，第Ⅰ層出土。砂岩製で，表面・右側面に使用痕がみられる。

53は舌状の石製品で，試掘調査時に表採されたものである。滑石製で，先端部に紐掛けとみられる溝を抉る。

54・55は寛永通宝である。55の銘字は第3郭出土の36のそれに最も近似する。54の銘字部分は，使用に伴う摩耗からか，表面は丸みをもつ。54は第Ⅰ層出土，55は表採資料である。

32は銅製の煙管・吸口部である。第Ⅰ層出土。

(3) 検出遺構

検出の遺構は，土坑状遺構3基，ピット状遺構15基である。検出遺構は主に西半部に偏って存在しており，東端部分には全くみられない。遺構の偏在傾向は，それらが第4郭形成後に設けられた同時代性の高いものであることの傍証ともなろう。しかし，遺構の遺存状態は不良で，その形成年代を示すような遺物を伴った遺構はごくわずかであった。ここでは土坑状遺構1基についてのみ記述をおこなう。

1．土坑状遺構

① SK1 〔Fig. 31〕

調査区の西端部に位置する。4基のピット状遺構に囲まれ，覆屋の想定が可能である。掘り方の平面形は不整の円形を呈し，長径1.70m，短径1.65m，検出面からの深さは85cmを測る。掘り方断面は逆台形を呈す。埋土は，A層：褐色土，B層：炭化物（暗褐色土混じる），C層：暗黄褐色混土礫，D層：黄褐色粘土，E層：暗黄褐色粘質土，F層：橙色粘土，G層：灰褐色粘土，H層：黄褐色粘土である。B層は焚火跡ともとれるような，炭化木のみで構成される層である。またG層からは木片が出土した。

4基のピット状遺構は桁行・梁間ともに1間の掘立柱建物跡を構成する。棟方向はN－58°45′－Wである。柱間寸法は，桁行が2.15～2.25m，梁間が1.90～2.25mである。柱穴の掘り方は平面で円形ないし楕円形で，径30～45cm，検出面からの深さ12.5～20cmを測る。ピット状遺構の埋土は，どれも褐灰色粘質土の単一層である。

土坑状遺構からの出土遺物は，陶器片1点，磁器片1点，礫石？1点があるが，図示できるものはない。ピット状遺構からは，遺物の出土は認められなかった。土坑状遺構とピット状遺構との並行関係を出土遺物から明示することはできないが，両者の位置関係からみても，それらの同時存在を理解する蓋然性は高いものと考えられる。

3．小結

今次調査は，江ノ古城跡のほぼ最下段に相当する郭部分をその対象地とした。その結果，前節までに挙げたように，弥生時代・中世（戦国時代）・近世の遺物及び遺構を検出できた。当該箇所については，中世城郭跡というよりもむしろ近世が主体となる遺跡であることが，事前の試掘調査によって予見されていたが，弥生時代の遺物の出土が確認できたことは余くの予想外であり，今次の調査成果の重要な位置を占めるものといえる。以下，各時代ごとに調査成果の総括と若干の所見を綴り，まとめとする。

（1） 弥生時代の遺物について

遺構の確認には至らなかったが，第1郭南西斜面，及び第3郭北端部分で弥生土器片を検出することができた。いずれの地点においても，後世の植林や，削平等に伴う影響を受けており，原位置を保っているとは考え難いが，ごく近い距離に当該期の遺跡が存在している（あるいは存在していた）ことはほぼ間違いなかろう。

第1郭南西斜面から出土の土器群は，器表面の摩耗・剥落が顕著であるが，口縁端部外面に肥厚帯がみられる点，器面調整に櫛目状のハケ調整が施されている点などから，神西式土器[11]に共通項を見い出すことができる。このことから，今後は高地性集落遺跡という視点からも，江ノ古城跡に注意を払う必要が生じよう。

また，第3郭出土の土器片は図示し得ない状態のものであったが，少なくとも第1郭南西斜面出土土器群とは，明らかに胎土・焼成において異なる特徴をもつ土器片であり，現時点ではより後出的なものとみている。よって，弥生時代にも複数の時期に遺跡が営まれた可能性が指摘できる。

（2） 中世（戦国時代）の遺構・遺物について

今次の調査対象地は，城跡の最下段部分の曲輪に相当すると考えられるが，調査の結果，近世以降の耕作あるいは屋敷地としての利用に際して削平がなされていることが判明し，この影響を免れた第2郭のみは城郭本来の地形を留める可能性が高いと考えられる。第2郭では掘立柱建物跡4棟，土坑状遺構1基，及び多数のピット状遺構を確認することができたが，そのいずれもが遺物を伴わないことから，それらの帰属する年代を近世とする積極的な根拠はない。第2郭のピット状遺構P1からは，唯一土師質土器とみられる微細片が出土しているが，遺構年代の根拠とするにはやや不十分な観がある。しかし，掘立柱建物跡の一部が第4郭の形成に際して破壊されている点，ピット状遺構の密集度が他の曲輪に比較して非常に高い点等を勘案

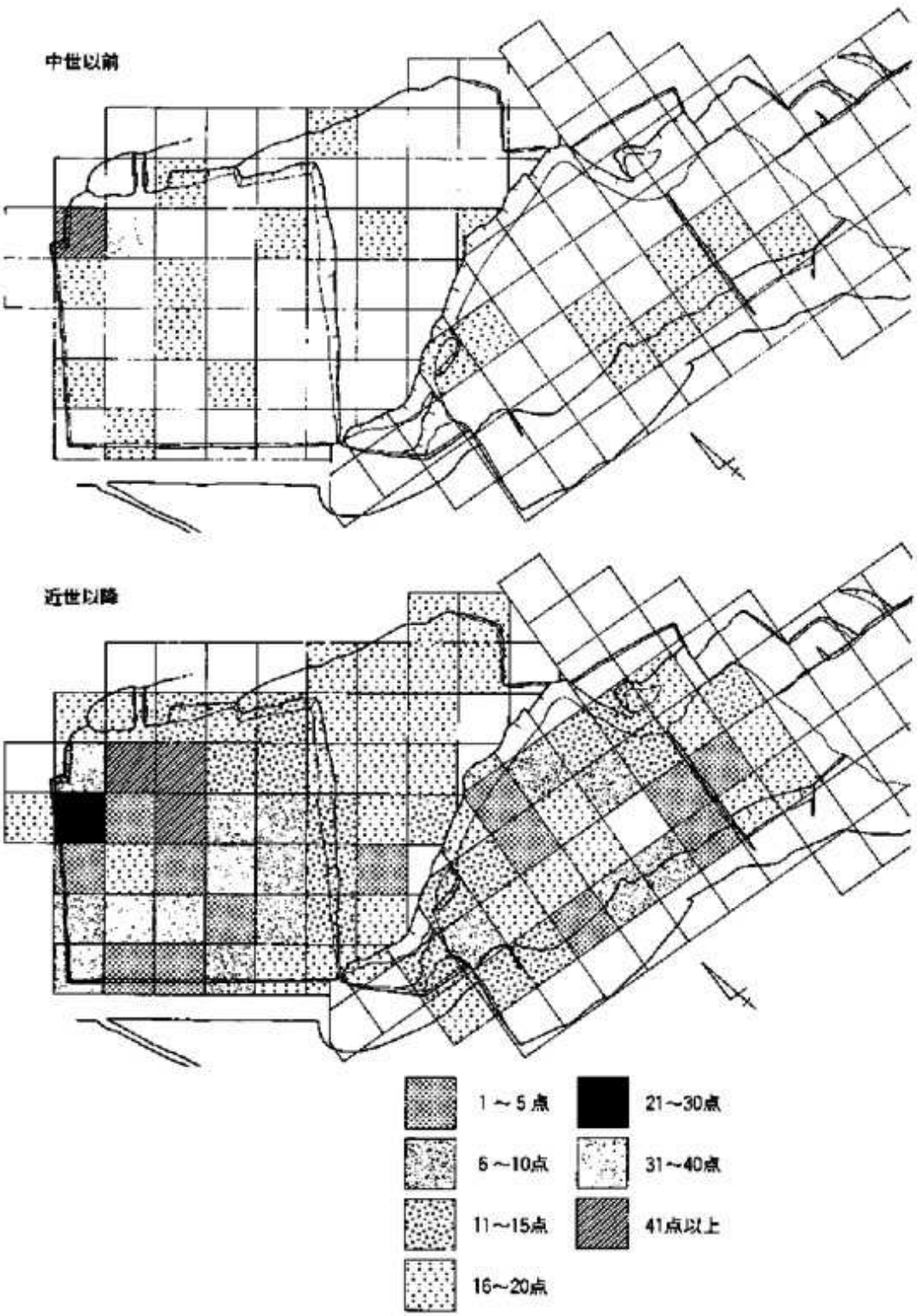


Fig. 32　第2～4郭グリッド別出土遺物分布図（S＝1/400）

すれば，第３・４郭とは明らかに土地利用目的の異なる年代，すなわち江ノ古城の存続年代に相当する可能性の高い遺構群と理解することができよう。

当該期の遺物としては，青磁・皿の細片が第３・４郭の表土層，及び第Ⅱ層中から出土しているが，遺構に伴うものはなく，すべて第２郭部分削平後の２次堆積に含まれているものと考えられる。削平以前には，当該期の遺構もしくは遺物包含層が所在したことを示す資料といえよう。

以上のように，決して良い状態ではなかったが，江ノ古城の稼動時期に当たる遺構（？）・遺物が確認できたことは，江ノ古城全体としての曲輪配置やそれらの役割を考究するうえにおいて，不可欠の資料が得られたものと評価できよう。

（３） 近世の遺構・遺物について

近世の遺構は，第３・４郭から土坑状遺構・ピット状遺構等が確認でき，遺物はほぼ調査区全域から陶磁器片・瓦片等の出土をみた。前述のように，第３・４郭は第２郭を削平したことによって形成されたものであり，特に第３郭の造成は，方形の区画を期して実施された様子が見受けられる。これらのことから，第３郭については屋敷地としての利用が想定できよう。近世以降の遺物の分布状況が特に第３郭に偏ることも傍証的である。（Fig. 32）建物跡の検出はできなかったが，南北２箇所に配された土坑状遺構[2]，さらには第４郭の段状を備えた土坑状遺構は，井戸等の役割をそれぞれ分掌するものとみられ，近世以降の居住・耕作に伴って形成された相関性の高い遺構群であると捉えることができよう。各遺構の性格等については，当該期の類例の渉猟を経て，改めて検討を加える必要があると考えられる。

註

（１） 岡本健児「土佐神西遺跡調査概報」『上代文化』第20輯　1951年（岡本　健児『高知県史』考古資料編，高知県，1973年　所収）

（２） 床面外周部に幅の狭い環状の溝をもつ，第３郭 SK２のような土坑状遺構は，県内においては田村遺跡群 Loc.31，同 Loc.35A，同 Loc.38B，同 Loc.39A，同 Loc.39C，同 Loc.41，同 Loc.42等で13例ほど検出されている。遺構の年代は近世にほぼ限られ，その性格については，座棺を納めた近世墓と判断されたものが６例ある。

松田直則「Loc.31」『田村遺跡群』第８分冊　高知県教育委員会　1986年

松田直則「Loc.35A」・下村公彦「Loc.38B」・下村公彦「Loc.39A」・廣田佳久「Loc.39C」『田村遺跡群』第９分冊　高知県教育委員会　1986年

下村公彦「Loc.41」・松田直則「Loc.42」『田村遺跡群』第10分冊　高知県教育委員会　1986年

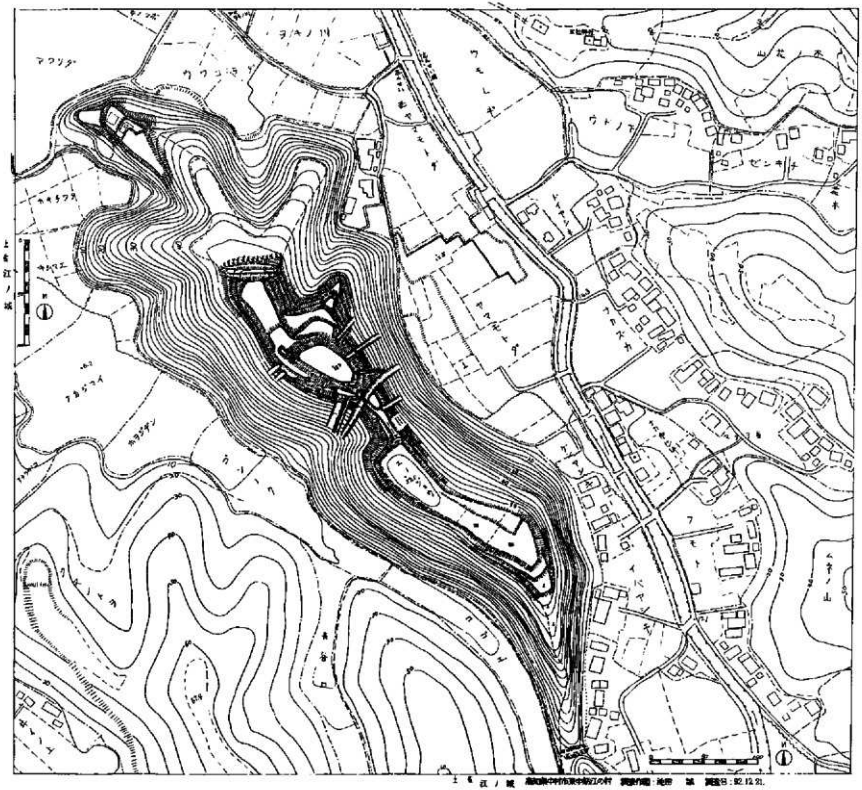


Fig. 33 江ノ古城跡縄張り図

表1　土器・陶磁器観察表1

挿図番号	第1施設・層位	器種・器形	法量(cm)	口径器高底径	形態	文様・調整 外面 内面	色調 内面 外面 断面	備考
Fig. 6-1	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 甕 口縁部片		12.2 (4.6) —	口縁部は外方に肥厚	内外面とも不明	明褐灰　5YR7/2 〃　〃	
Fig. 6-2	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 壺 口縁部片		9.0 (4.5) —	口縁部は外方にやや肥厚	外：不明 内：ナデ	明褐灰　7.5YR7/2 灰　N5	
Fig. 6-3	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 甕 口縁部片		19.0 (3.0)	口縁部は外方に肥厚	内外面とも不明	灰白　10YR8/2 〃　〃	外面にスス付着
Fig. 6-4	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 胴部片		— (4.0) —		外：横位ハケ？(4条/cm) 内：ナデ	明褐灰　7.5YR7/1 〃　〃	外面にタール・スス付着
Fig. 6-5	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 底部片		— (3.3) 7.8	わずかに上げ底	外：ナデ 内：不明	黒　10YR2/1 にぶい黄橙　〃 6/3	外面にタール・スス付着
Fig. 6-6	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 底部片		— (1.2) 7.4	わずかに上げ底	内外面とも不明	灰　N5 〃　〃	
Fig. 6-7	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 鉢 底部片		— (3.2) 6.4	平底	外：不明 内：ナデ、指頭押圧	灰　N6 〃　〃	
Fig. 6-8	第1部南西斜面 B区下半部 第II層	弥生土器 底部片		— (6.2) 5.8	平底	内外面とも不明	明褐灰　5YR7/1 灰　N5	外面にタール・スス付着
Fig. 8-12	第1部南西斜面 B区上半部 第II層	土師質土器 皿		10.7 1.4 6.4		内外面：回転ナデ	にぶい橙　5YR7/4 〃　7.5YR6/4	ロクロ成形、回転糸切り 灯明皿？
Fig. 8-13	第1部南西斜面 下半部 表採	土師質土器 皿		8.4 (1.7) —		内外面：回転ナデ	橙　5YR7/8 〃　〃 7/6	ロクロ成形、回転糸切り 灯明皿？
Fig. 8-14	第1部南西斜面 下半部 表採	土師質土器 坏・底部片		— (1.6) 7.6		外：回転ヘラケズリ 内：回転ナデ 底面：切り離し後、回転ヘラケズリ調整	にぶい橙　7.5YR7/4 浅黄橙　10YR8/3	ロクロ成形 胎土に破線(スサ)含む 底面・外面にタール・スス付着
Fig. 8-15	第1部南西斜面 C区下半部 第I層	磁器・染付 碗		— (5.7) 4.0	削出し輪高台	外：？文、高台外面に界線2 内面：界線2、見込に変形文字？	灰白　7.5Y8/1 〃　〃	ロクロ成形 畳付部は無釉
Fig. 20-18	第3部 土型状地形 第I層	陶器・鉄釉 碗		10.0 7.6 5.4	削出し輪高台	外：施釉、象眼(刷毛目？) 内：口縁部のみ施釉、ロクロ目高台部無釉	にぶい橙　5YR6/3 にぶい赤褐　〃 5/3	ロクロ成形
Fig. 20-19	第3部 第II層b	陶器・灰釉 小皿		9.4 2.9 3.2	削出し輪高台 畳付部は面取り	外：口縁部のみ施釉、回転ヘラケズリ 内：施釉、梅花文(鉄絵)、回転ナデ 高台部無釉	灰白　5Y7/2 〃　〃	ロクロ成形、貫入あり 内面に胎土目1
Fig. 20-20	第3部 土型状地形 第I層	陶器・鉄釉 碗		13.0 (4.5) —	削出し高台	外：中位以上に施釉 内：施釉、見込部は蛇ノ目釉剥ぎ	暗赤灰　7.5R3/1 〃　〃	ロクロ成形
Fig. 20-21	第3部 土型状地形 第I層	陶器・鉄釉 皿		12.2 (3.0) —		内外面施釉 外：細波線1、ロクロ目 内：見込部は蛇剥ぎ	にぶい赤褐　5YR5/4 〃　〃 5/3	ロクロ成形
Fig. 20-22	第3部 第IV層	青磁 碗 口縁部片		(1.8) —		内外面施釉 外：線描き文	明オリーブ灰　5GY7/1 〃　〃	器表面は白く変色、2次被熱？

表2　土器・陶磁器観察表2

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量(cm) 口径 器高 底径	形　望	文様・調整 外面 内面	色調 内面 外面 断面	備　考
Fig. 20-23	第3郭 試掘調査時出土	青磁 緑花皿 口縁部片	11.4 (0.9) —		内外面施釉 内：線描き文	緑灰　7.5GY6/1 〃　〃 灰白　8.5GY8/1	
Fig. 20-24	第3郭 第V層	磁器・染付 碗・底部片	— (3.0) 3.7	削出し輪高台	内外面施釉 外：草文？	灰白　7.5Y8/1 〃　〃	畳付、見込一部に砂粒釉着
Fig. 21-27	第3郭 第I層	磁器・白磁 紅皿	4.7 1.5 1.4	貼付高台	内外面施釉 外：縦位条線 高台部無釉	灰白　5Y8/1 〃　〃	型成形 外面に砂粒釉着
Fig. 21-28	第3郭 試掘調査時出土	磁器・白磁 紅皿	3.4 1.2 1.1	貼付高台？	外：口縁部のみ施釉、縦位条線 内：施釉 高台部無釉	灰白　N8/0 〃　〃 〃　〃	
Fig. 21-29	第3郭 試掘調査時出土	磁器・白磁 紅皿	5.0 (0.9) —		内外面施釉 外：縦～斜位の列点文	灰白　5Y8/1 〃　〃 〃　〃	型成形 口縁端面に砂目？
Fig. 22-33	第3郭 SK1	陶器・灰釉 土瓶？ 体部片	— (5.9) 7.4	上げ底	外：施釉(底部付近無釉) 内：一部施釉、ロクロ目	灰黄褐　10YR5/2 淡黄　2.5Y8/3	ロクロ成形 底部外面に粘土目2、スス付着顕著
Fig. 22-34	第3郭 SK1	陶器・灰釉 土瓶？ 把手部片	全長 (11.6) 全幅　1.9 全厚　0.9	断面隅丸方形		淡黄　2.5Y8/3 〃　〃	貫入あり (33)と同一個体？
Fig. 28-37	第4郭 第I層	土師質土器？ 皿	8.4 1.1 4.4		内外面：施釉(透明釉)？、回転ナデ	橙　7.5YR7/6 〃　〃	ロクロ成形、回転糸切り 外面にスス・タール付着
Fig. 28-38	第4郭 第I層	土師質土器 口縁部片	25.6 (5.3) —	口縁直下に断面カマボコ状の凸帯貼付	外：浅沈線1、ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3 〃　〃 7/3	外面にスス、内面にタール？付着
Fig. 28-39	第4郭 第I層	陶器・鉄釉 碗	12.6 5.1 4.5	削出し輪高台	内外面施釉、高台部無釉 外：口縁直下に細沈線2 内：見込部は蛇ノ目釉剥ぎ	にぶい赤褐　5YR4/3 〃　〃	
Fig. 28-40	第4郭 表採	陶器・灰釉 皿	12.6 (3.3) —		内外面施釉 外：ロクロ目 内：見込部は釉剥ぎ	淡黄　2.5Y7/3 〃　〃	ロクロ成形
Fig. 28-41	第4郭 第I層	陶器・鉄釉 皿？ 底部片	— (2.3) 4.3	削出し輪高台 畳付部は面取り	内外面施釉、高台部無釉 外：回転ヘラケズリ 内：見込部は蛇ノ目釉剥ぎ	灰褐　7.5YR4/2 にぶい褐　7.5YR6/3	ロクロ成形 高台付近にスス付着
Fig. 28-42	第4郭 第I層	陶器・鉄釉 碗・底部片	— (4.0) (5.5)	削出し高台	内外面施釉、高台部無釉 外：回転ヘラケズリ 内：見込部に蛇ノ目釉剥ぎ	黒褐　10YR3/1 〃　〃	ロクロ成形
Fig. 29-43	第4郭 P1、第II層、(接合)	陶器 擂鉢	33.4 (10.8) —	口縁部は外方に肥厚	外：口縁部に沈線2、ケズリ、ナデ 内：擂目(1単位10本／2.8cm)、口縁部に沈線1、ヨコナデ	赤褐　10R5/4 〃　〃	備前焼？
Fig. 29-44	第4郭 第I層	陶器 擂鉢 底部片	— (5.6) 13.2		外：ヨコナデ 内：擂目(1単位9本／2.5cm)、ヨコナデ	赤褐　10R5/4 〃　〃 5/3	備前焼？内面・内底面の擂目は不連続、外底面に敷物圧痕？
Fig. 29-45	第4郭 第I層	陶器・鉄釉 甕 口縁部片	21.0 (4.4) —	口縁端部は内外方に拡張、端部はケズリにより面をなす	内外面：施釉、ロクロ目 口縁端面は無釉	にぶい赤褐　5YR4/4 〃　〃 4/3	ロクロ成形
Fig. 29-46	第4郭 第I層	陶器・鉄釉 甕 口縁部片	21.4 (3.5) —	口縁端部は外方に拡張	外：施釉(口縁端面無釉)、細沈線2、ロクロ目 内：施釉、ロクロ目	黒褐　5YR3/1 〃　〃	ロクロ成形

表3　土器・陶磁器観察表3

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態	文様・調整 外面 内面	色調 内面 外面 断面	備考
Fig. 30-47	第4部 第I層	青磁 稜花皿 口縁部片	- (1.5) -		内外面施釉 内：線描き条線3	オリーブ灰 5GY6/1 〃 〃	
Fig. 30-48	第4部 第1層	青磁 稜花皿 口縁部片	- (2.2) -		内外面施釉 内：線描き条線3・弧線1	緑灰 10G6/1 〃 〃	
Fig. 30-49	第4部 第1層	磁器・染付 碗	9.4 6.0 4.0	削出し高台 畳付部は面取り	内外面施釉 外：簾状文、高台外面に界線1 内：界線3、見込中心部に？文	明青灰 10BG7/1 〃 〃	ロクロ成形 見込・畳付部に砂目1
Fig. 30-50	第4部 第II層	磁器・青磁？ 碗	8.8 (4.0) -		内外面施釉(底部無釉)	灰白 10Y7/1 〃 〃	ロクロ成形 貫入あり
Fig. 30-51	第4部 第I層	磁器・染付 碗・体部片	- (4.1) -	削出し高台	内外面施釉 外：草文？	灰白 10Y8/1 〃 〃	ロクロ成形

表4　土　錘　計　測　表

挿図番号	出土地点・層位	法量 (cm) (g) 全長 全幅 孔径 重量	形態	調整	色調	備考
Fig. 20-25	第3部 第II層	(4.6) 2.0 0.4 13.7	紡錘形	ナデ、縫孔はほぼ中央で屈折	暗灰 N3/0	瓦質
Fig. 20-26	第3部	(4.2) 2.2 0.5 23.0	下端部に段、縫掛け用の抉りか？	押圧、ナデ、ミガキ(ヘラナデ？)	暗灰 N3/0	瓦質 試掘溝出土

表5　石器・石製品計測表

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm) (g)	全長 幅 全厚 重量	形　態	石　材	備　考
Fig. 6-9	第1部南西斜面 C区下半部 第Ⅱ層	叩石		(8.5) 5.4 2.9 180.0	棒状	砂岩	先端部、左右側縁部に敲打による小剥離
Fig. 6-10	第1部南西斜面 C区下半部 第Ⅰ層	叩石		8.2 6.6 3.3 255.0	表裏面はやや凹面	花崗岩	側縁部2箇所に敲打による剥離痕
Fig. 6-11	第1部南西斜面 C区下半部 第Ⅰ層	叩石		9.7 7.9 4.7 495.0		砂岩	上下端部に剥離痕
Fig. 11-17	第2部 第Ⅱ層	凹石		8.8 7.0 4.9 480.0	表面に凹んだ摩耗痕？	砂岩	自然礫？
Fig. 22-35	第3部 SK1 埋土B層	砥石		6.7 5.2 2.5 85.0	表裏両面に使用痕	砂岩	下端部に小剥離痕
Fig. 30-52	第4部 第Ⅰ層	砥石		14.7 4.0 2.2 220.0	表面・右側面に使用痕	砂岩	粗砥－中砥
Fig. 30-53	第4部 試掘調査時表採	舌状石製品		4.0 0.7 0.6 3.0	断面やや括円形を呈する円柱状で、下方に向かって径を増す 先端部側に硬掛け用とみられる溝を持つ	滑石	縦方向の研磨痕 舌？

表6 銭貨計測表

挿図番号	出土地点・層位	銭種	法量 (cm) (g)	直径 孔径 全厚 重量	材質	備考
Fig. 8-16	第1郭南西斜面 B区上半部 第1層	寛永通宝		2.50 0.60 0.20 3.60	銅	銘字の突出度高い 銘字表面は平坦
Fig. 21-30	第3郭 第1層	寛永通宝		2.50 0.60 0.15 2.10	銅	銘字の突出高く銘字表面は平坦 銘字自体やや大きい 表裏面とも被熱による変質あり
Fig. 23-36	第3郭 SK 2 試掘調査時出土	寛永通宝		2.35 0.70 0.10 2.40	銅	銘字の特徴は(55)に最も近似
Fig. 30-54	第4郭 第1層	寛永通宝		2.40 0.65 0.15 2.00	銅	銘字表面に丸み 銘字の特徴は(36)(55)にやや近似
Fig. 30-55	第4郭 表採	寛永通宝		2.20 0.60 0.10 1.30	銅	銘字の特徴は(36)に最も近似 周縁部欠損

表7 金属製品計測表

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm) (g)	全長 全幅 全厚 重量	材質	備考
Fig. 21-31	第3郭 第II層	煙管 雁首部		3.50 1.10 0.70 2.50	銅	首部のみ残存，脂返し部途中で折損 ラウ接長部は断面楕円形，他は偏平 脂返し部は断面円形
Fig. 21-32	第4郭 第I層	煙管 吸口部	復元長	5.90 1.00～0.35 — 5.80	銅	吸口部先端は欠損，ほぼ中央部辺りで「く」字状に折れ曲がっている 断面円形 ラウ接合部付近はやや脚らみをもつ

第Ⅲ章　ハナノシロ城跡

1．調査の概要

(1)　城跡の概要

ハナノシロ城跡は，中村市江の村に所在する。江の村は，中村市街地から宿毛方面に約5㎞程向かった中筋川右岸に位置し，貝ケ森山系の山並北麓の谷川沿い小集落である。江の村には，現在中世城郭が4ヶ所確認されている。江の村本集落の南方丘陵には江ノ古城跡が所在し，当時の江ノ村の中心的存在の城郭である。ハナノシロ城跡は，江ノ古城跡が構築されている南側丘陵の西端に位置し，標高35m前後を測る尾根上に構築されている。長宗我部地検帳では，「古城」と記載されているのみで，検地段階ではすでに廃城になっていることがわかる。周辺の小字図を観るとヤグラノ下・城ノ下など城にかかわる地名が現存しており，城跡の地点もハナノシロという小字で中世城郭の存在が予想された。調査と並行する形になったが，城跡の縄張り図を作成したので，各曲輪の概略を説明していくことにする。

城跡は，曲輪と呼称する人工的に削平された平坦部を形成している。[1] 曲輪1は，標高35mを測り城跡の最上部に位置する。調査前の規模は，南北29m，東西幅12mを測る隅丸方形状の形態を呈する。周縁には土塁状の痕跡は認められなかった。曲輪1の斜面部分は，曲輪2と5の南北斜面が切岸になっており，西側部分は一部緩傾斜で，現在でも曲輪1への登山道になっている。

曲輪2は，1の南側に位置する曲輪で標高29mを測る。曲輪1との比高差は，約6m程になる。規模は南北19m，東西で北側部分が11m南側部分が9mを測りやや撥型状を呈する。北側の曲輪1と南側の曲輪3に挟まれている。一段低い西側部分には，帯曲輪の4が位置しており曲輪2の北西隅が4からの入口になり虎口になる可能性が強い。

曲輪3は，2の南側に位置し城跡南端の曲輪である。規模は，南北25m，東西の最大幅12mを測る。曲輪3は，全面平坦部を呈しておらず東部がやや一段高く西部が低くなっている。東部の高まりは，南北約19m東西幅2.5mを測り中央部との比高は平均0.5mである。この部分は，土塁の痕跡と考えられる。西部は中央部との比高差0.5～1mを測り北側部分の比高差が大きい。そのため曲輪2の西側部分からなだらかに曲輪3に進入することができる。東側と南側斜面は，切岸になっており西側部分は緩傾斜である。曲輪3の南部には小さな平坦部が2ヶ所認められ，曲輪3に伴うものとして曲輪3－a・bとして説明する。曲輪3－aは，曲輪3の1.5m南下部分で，東西7m南北幅2.5mの平坦部である。さらに3.5m南下部分には，東西約11m南北幅

7 mの平坦部が存在する。曲輪3の東方下で標高22 mの場所には，城跡が構築されている尾根状の谷部になっており，現在は段状に平坦削平された畑地となっている。この場所は曲輪の配置等から堀切が存在すると考えられる。この谷部から東方は城外と考えられる。さらに東方尾根上には，小字名が西ノ城と呼称されている箇所があり踏査をしたが，堀切等城郭に係わる遺構は確認できなかった。

(2) 調査の方法

調査対象地は，南北の範囲が城跡の曲輪1から曲輪3東方の谷部までで，西側は曲輪4の平坦部から東側は曲輪1～3の東側斜面全体である。調査対象面積は約5,000㎡である。調査の便宜上，すでに城跡の概要で述べたごとく平坦部分は曲輪1～4とそれぞれ名称して調査を進めた。調査にあたっては，トラバース測量を行い基準点の設定をし，曲輪1と2・3・4の形状が異なるため地形にあわせた任意の3 mグリッドを設定した。曲輪1の基準線は，公共座標第Ⅳ系の北から東へN－25°－Eに振れている。さらに曲輪2・3・4の基準線は，真北で設定した。グリッドの名称は，南北を北からA・B・C，東西を西から1・2・3とし，北西コーナを基準として呼称することにした。さらに小グリッドは，西から1～25としグリッド名称はA1－1～A1－25とした。平坦部の調査は，試掘調査の各トレンチを拡張しベルトを残しながら全面発掘を行った。また東側斜面については，曲輪2のラインに幅2 mのトレンチを設定し，地山を確認した後機械力を利用し斜面堆積の表土層を全面掘削した。掘切状を呈している谷部に関しては，2ヶ所のトレンチを設定し調査を進めた。

(3) 層序

ハナノシロ城跡は，県内他の城跡同様土壌の堆積は薄い。曲輪1は，Ⅰ層の暗褐色の表土層を除去すると全体的に地山の岩盤となり遺構を検出することができた。C2－1からB2－21区にかけてやや厚く堆積している。東側斜面については，Ⅰ層が平坦部と比べるとやや厚く堆積している。B2－25区から斜面下の部分では，階段状に平坦部を形成しており，平坦部を中心に2～3層の堆積がみられる。Ⅰ層は表土層で暗褐色土，Ⅰ′層暗褐色土（締りが強い），Ⅱ層黄褐色粘質土，Ⅲ層褐色粘質土である。Ⅰ′層は，斜面下端部のB3－22区で堆積している。

曲輪2は，全体的に平坦部は2層堆積している。Ⅰ層は暗褐色土，Ⅱ層は褐色土である。Ⅱ層の褐色土を除去した段階で遺構を検出している。Ⅱ層は，北側に比較的堆積しており，曲輪3に近い南側になると認められない。東側斜面は，E2－21－25，E3－21－23ラインの断面図を掲載しているが，階段状に平坦部が形成されている部分を中心として2層堆積している。斜面下端部のE3－23区部分は，4層堆積している。Ⅰ層暗褐色土，Ⅱ層明黄褐色土，Ⅲ層黄

褐色土，Ⅳ層オリーブ褐色土である。

曲輪3は，北側のG2－2区がⅠ層のみでG2－7区より南側に行くに従いⅡ層が厚く堆積している。H2－2区では，Ⅰ層除去後土壙状遺構を検出しておりその南部は流れ込みで4層が堆積している。平坦部の基本層序は，Ⅰ層褐色土，Ⅱ層黄褐色土，Ⅱ′層黄橙色土，Ⅲ層暗褐色土，Ⅳ層黄色粘質土である。東側斜面部は，G2－8～10，G3－6・7ラインであるが，Ⅰ層のみの堆積でその下は地山の岩盤である。

曲輪4は，他の曲輪と比較したら堆積状況が厚い。南側部分は，F1－8・13・18区周辺で3層，E1－13・18区では5層の堆積が認められた。Ⅰ層は暗褐色土，Ⅱ層は鈍い黄褐色土，Ⅱ′層褐色土，Ⅲ層褐色土，Ⅳ層にぶい黄褐色土，Ⅴ層黄褐色土である。

註

（1）「くるわ」は，曲輪や郭の文字を使用し城郭用語として定着している。県内中世城郭の報告書でも，曲輪・郭の用語を使用している。定着していると考えていた「曲輪」について，第6回全国城郭研究者セミナーにおいて青森県浪岡町の工藤清泰氏は問題提起をしている。発表の題を「KURUWAと遺構の変遷について」とされ「曲輪」をローマ字で表記されている。さらに柴田龍司氏（「曲輪」について　千葉城郭研究第2号）は，「曲輪」用語の特質性を見いだす必要性を述べられ「曲輪」用語として地域使用の原点をも追究し，東北は「館」，関東は「曲輪」，四国は「段」，南九州は「城」と防御区画を呼ぶ例が多いとされている。千田嘉博氏（城館調査ハンドブック）は，「くるわ」を表記する漢字には郭と曲輪があり，郭は「カク」とも読みもともと都市を囲む城壁など侵入しにくくした外縁の防御施設をさし，曲輪はそうした防御施設に守られた内部をさす。だから城館の平坦部を呼ぶには普通「曲輪」の文字を使用するとしている。高知県では，長宗我部地検帳で詰・二ノ段等の名称が城跡内に残っている場合がある。城跡内で「詰」等の名称が場所比定できるのであれば，それらの用語を使用すべきであり，名称の残らない城跡や場所比定できない場合は，上述したことから「曲輪」としての表記を現段階では用いる方がよいと考える。本報告書の中で，第Ⅱ章と第Ⅲ章で「くるわ」表記の不統一があるが，第Ⅲ章のハナノシロ城跡では，「詰」等の名称が残っていないため「曲輪」の用語を使用した。

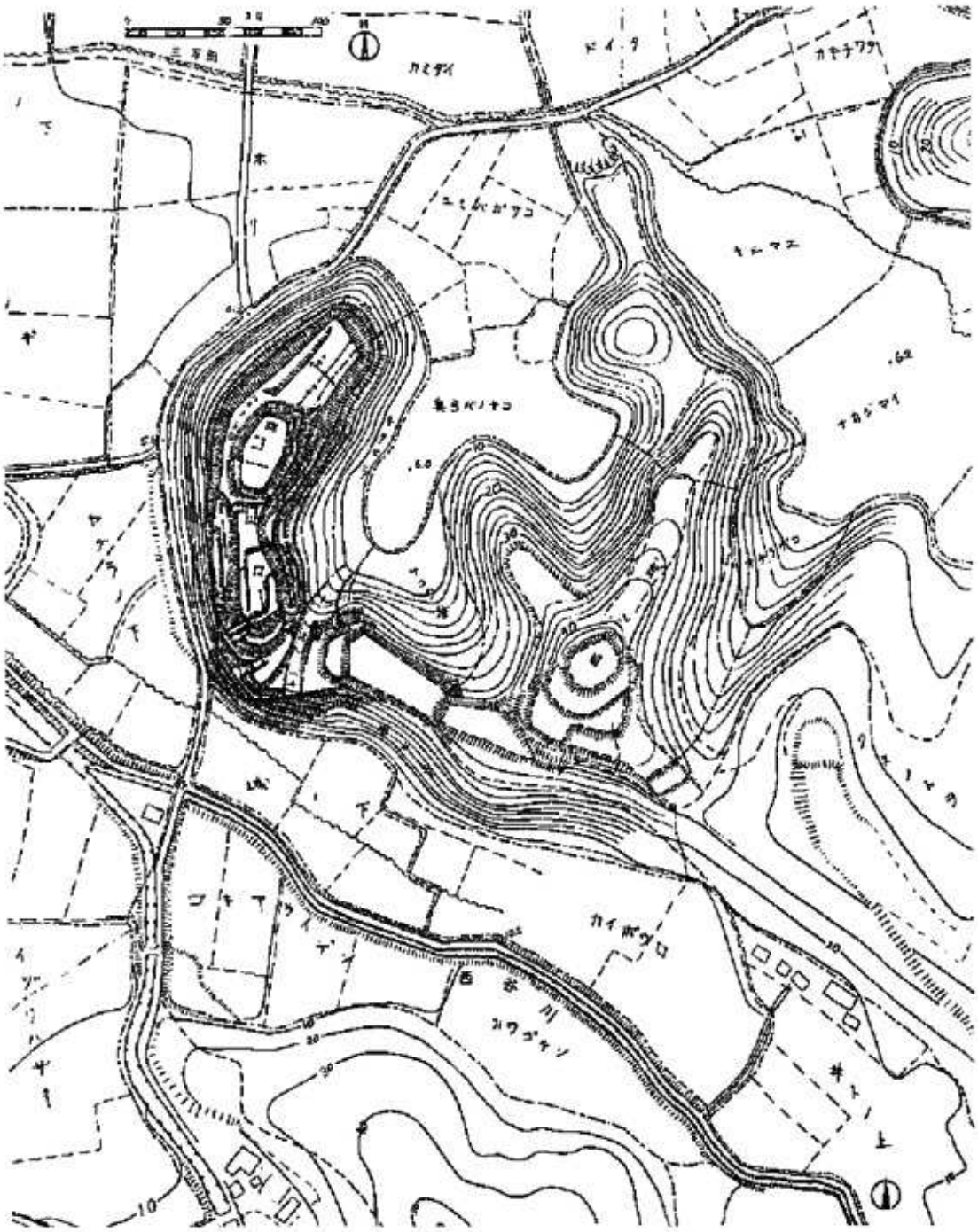


Fig. 34　ハナノシロ城跡縄張り図

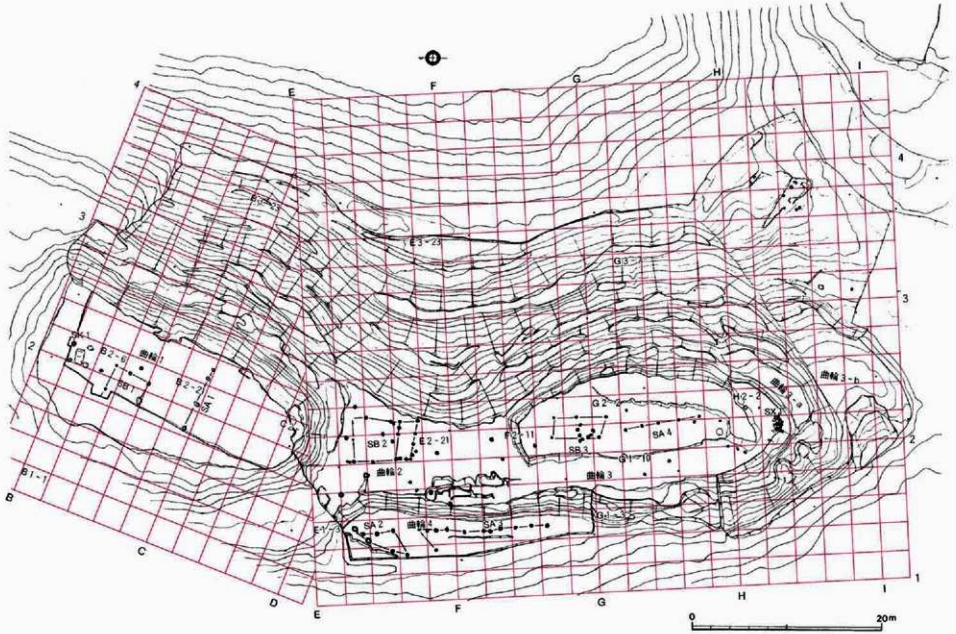


Fig. 35　ハナノシロ城跡全体図

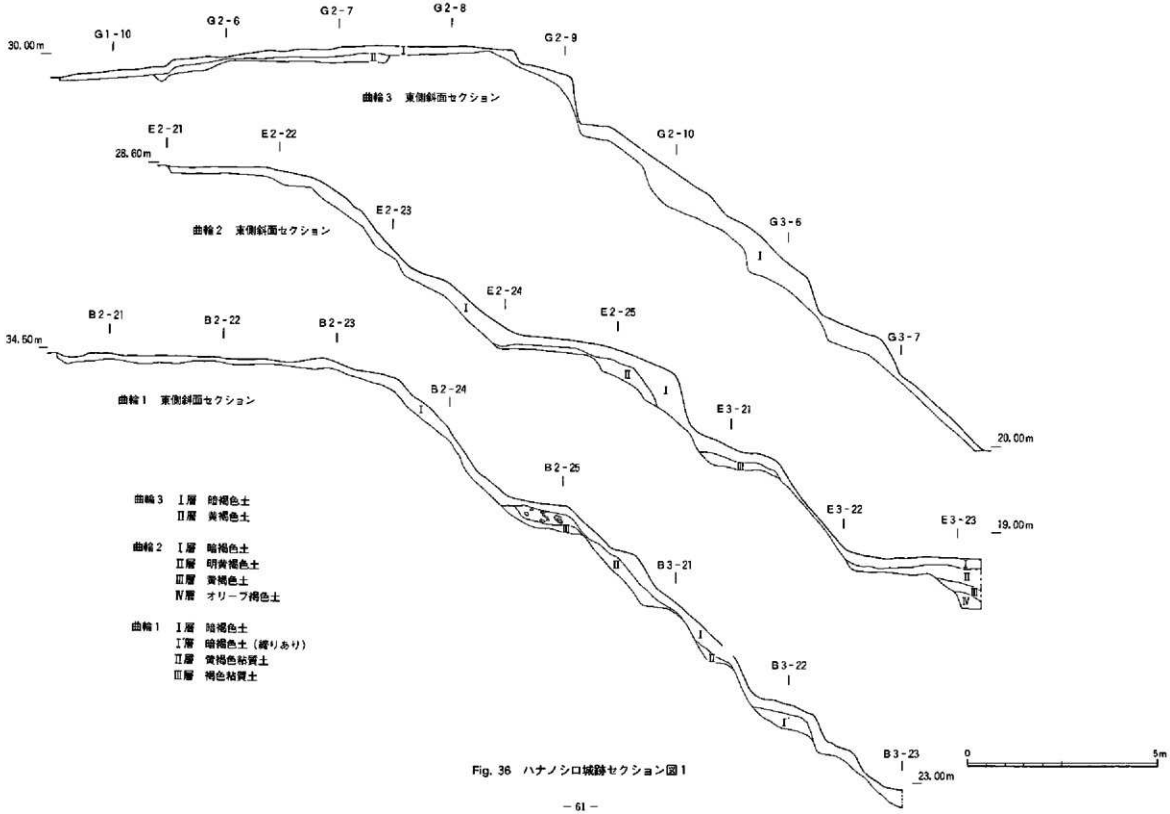
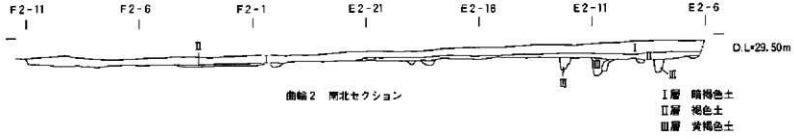
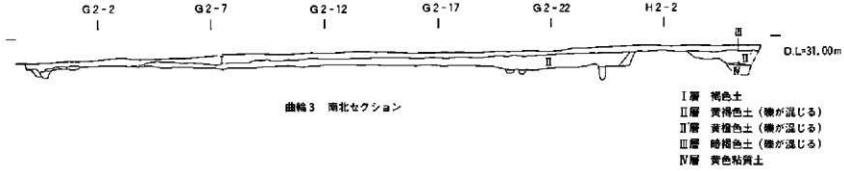


Fig. 36 ハナノシロ城跡セクション図1





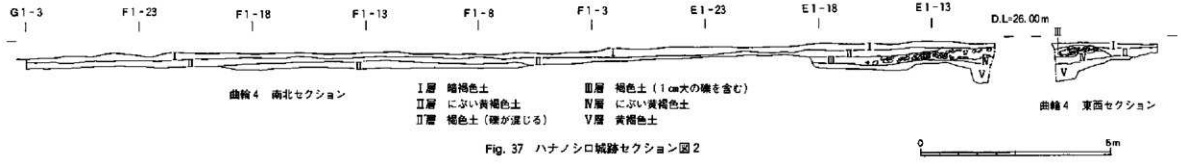


Fig. 37　ハナノシロ城跡セクション図2

2．検出遺構

（1） 検出遺構の配置

ハナノシロ城跡は，５ヶ所の曲輪から構成されている。調査区範囲は曲輪１－４の平坦面と東側斜面・堀切部分で，北側部分の曲輪５は調査対象外である。検出遺構は，曲輪１で掘立柱建物跡１棟と柵列・覆屋が付く土坑１基等である。曲輪１は，ハナノシロ城跡の頂上部の平坦面であるが一部北西側部分の調査はできなかった。遺構は，数少ないがまとまった配置をしている。曲輪２は，曲輪１の南側に位置し比高差は約６ｍを測り急斜面を造り出している。さらに１と３に挟まれた小さな曲輪である。検出遺構は，掘立柱建物跡１棟と虎口状遺構，柱穴群である。曲輪３は，南端の郭であるがさらに南下段に小規模な平坦面が二段付設する。これらの平坦面を曲輪３－ａ・ｂと名称した。検出遺構は，掘立柱建物跡１棟，柵列，土塁状遺構，集石遺構，柱穴で，３－ａの西側では竪堀状遺構２条，３－ｂの西側でも竪堀状遺構１条である。曲輪４は，２の西側に位置し細長い曲輪である。検出遺構は柵列のみである。曲輪３の東側では堀切状遺構を検出した。

（2） 曲輪１

SA１

調査区のほぼ中央部にあたるＢ１－25，Ｂ２－21，Ｂ２－22区の第Ⅱ層下より検出した。

表８　SA１計測表

Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	Pit 間 (m)	備考
1	20	46	38	33.83	3.86	
2	37	68	40	33.76	2.96	焼礫片
3	28	50	36	33.85	1.08	
4	22	37	28	33.94		
				全 長	6.90	

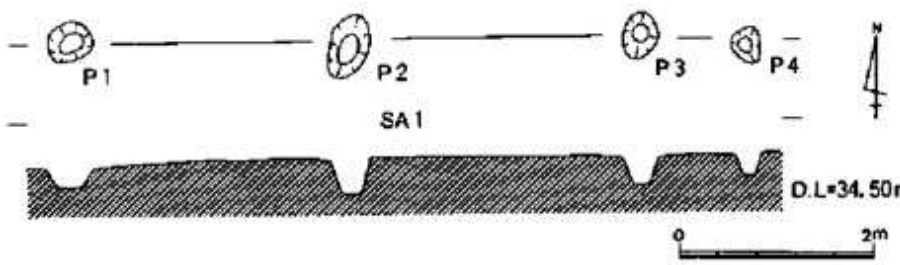


Fig. 38　SA１実測図

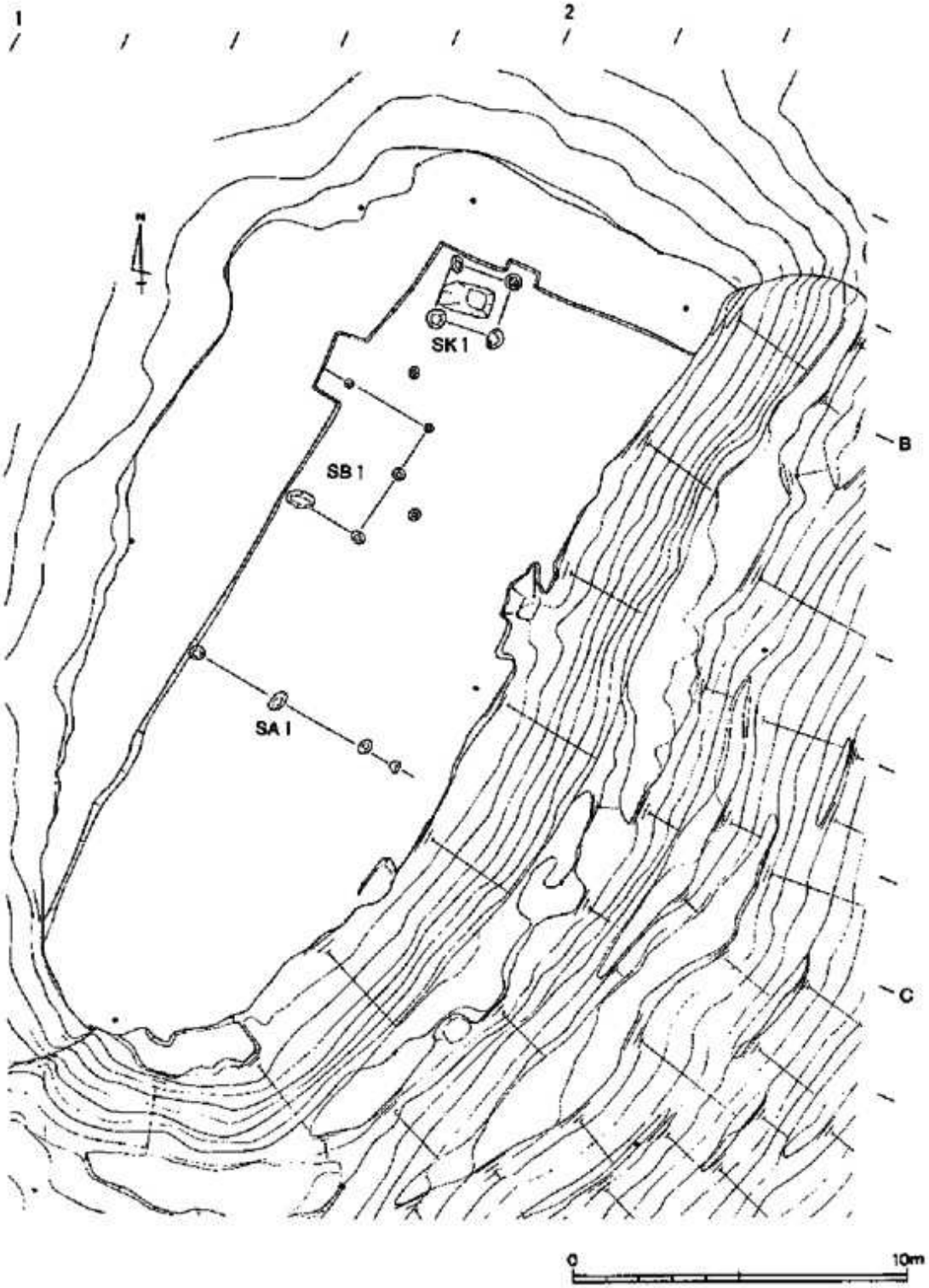


Fig. 39　曲輪 1 遺構全体図

SB１に並行して南側に位置し，東西方向に地形に沿って延びている。柱間は，1.08～2.96ｍを測り，東側で狭くなっている。柱穴の掘り方は円形状を呈し，直径28～68cm，深さ22～37cmを測る。埋土は黄褐色土層で，出土遺物はＰ２から青磁片が出土しているが細片で実測不可能である。

SB１

調査区の西端Ｂ１－10・15，Ｂ２－６・11・16区のⅡ層下岩盤面で検出した。西側部分は調査区外のため，建物の規模は明確にできなかったが，２間×２間以上の東西棟であると考えられる。柱間は桁行2.36～2.80ｍ，梁間1.66～2.26ｍを測る。柱穴の規模は，南西隅の柱穴が直径88cmと大きな楕円形を呈しており，その他は24～50cmを測る円形である。検出面からの深さは，28～42cmを測る。埋土は単層の黄褐色土層で，出土遺物は皆無である。

表９　SB１計測表

Pit NO	桁行柱間（m）	桁行間（m）	Pit NO	梁間柱間（m）	梁間間（m）	Pit NO	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）	標高（m）	備考
１～４	2.36		１～２	2.26	3.92	１	42	50	34	33.81	
			２～３	1.66		２	32	40	36	33.91	
３～５	2.80					３	28	28	26	33.92	
						４	28	88	54	33.90	
						５	28	28	24	33.96	

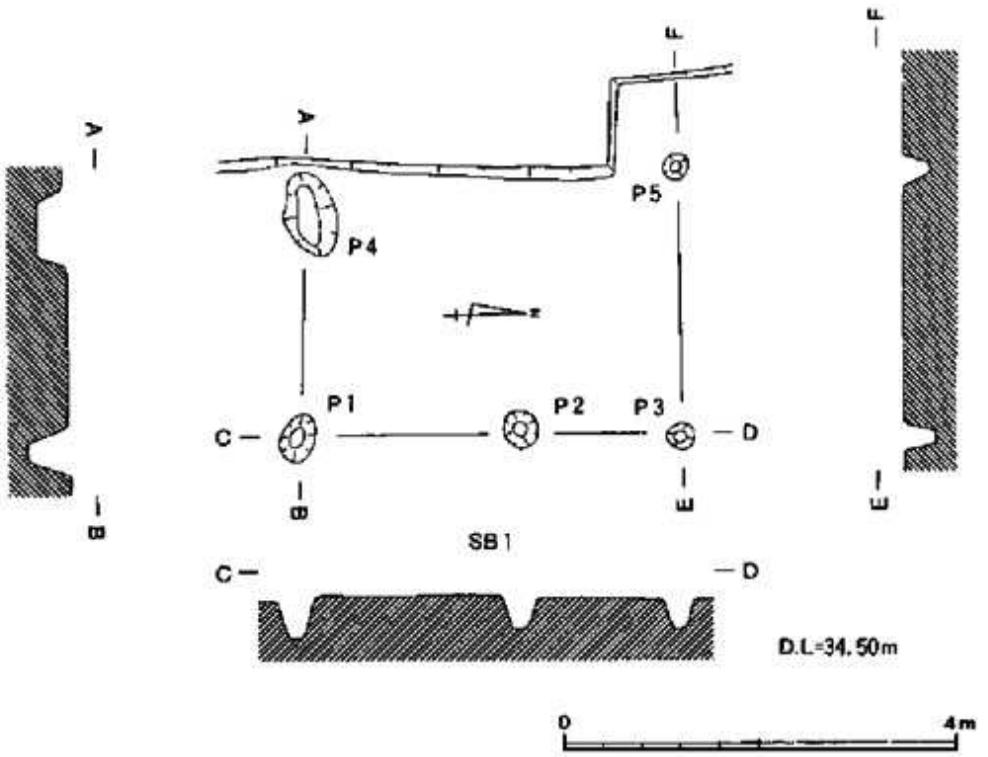


Fig. 40　SB１実測図

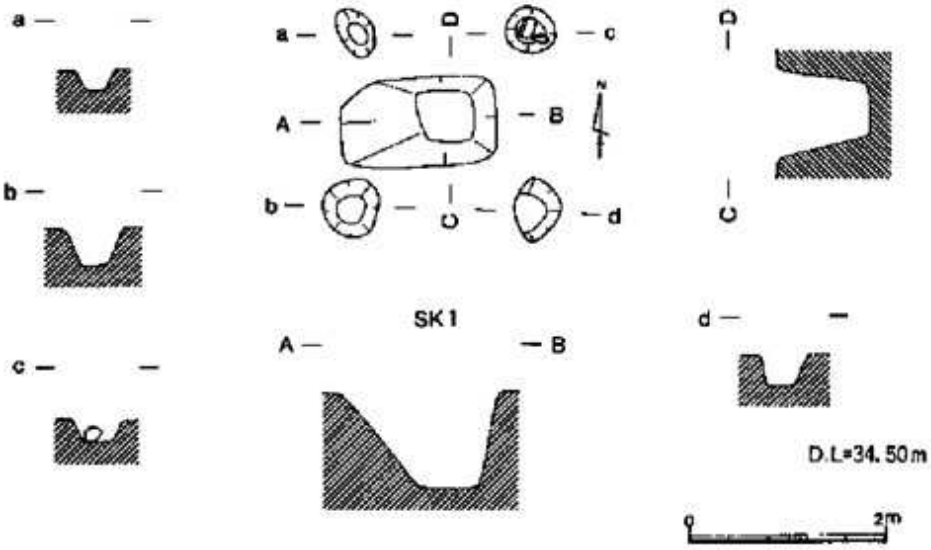


Fig. 41　SK 1 実測図

SK 1

調査区の北部Ｂ１－５，Ｂ２－１区のⅡ層下において検出した。規模は，長径1.8m，短径１ｍを測る方形をしており，検出面からの深さは１ｍと深く掘削している。西壁は緩傾斜で，東壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。埋土は，Ⅰ層の黄褐色粘質土層（河原石を含む）とⅡ層の黄褐色砂礫土層に分かれる。Ⅰ層の河原石は３－５㎝大のものが213個西側から流れ込むように混入している。土坑の四隅には，覆屋と考えられる柱穴を確認した。柱穴の平面形は円形で，規模は直径30㎝で深さは検出面から20－40㎝を測る。柱間は1.8～２ｍを測りほぼ等間隔である。埋土は単層の黄褐色土層で，出土遺物は皆無である。

（３）　曲輪２

SB 2

Ⅱ郭の北部に位置する。Ｅ２－６・７・11・12・16・17区にかけての第Ⅱ層下で検出した。建物の規模は，２間×３間の南北棟である。梁間は，4.16m，桁行6.02ｍを測る。柱間は桁行0.90～2.66m，梁間1.12ｍ～2.66ｍと幅があり，北東部の柱穴は欠損している。柱穴の掘り方は，円形状を呈し，直径16～36㎝とまばらで，深さ13～31㎝を測る。埋土は黄褐色土層で，出土遺物はＰ６から釘が出土しているが実測不可能のため図示していない。

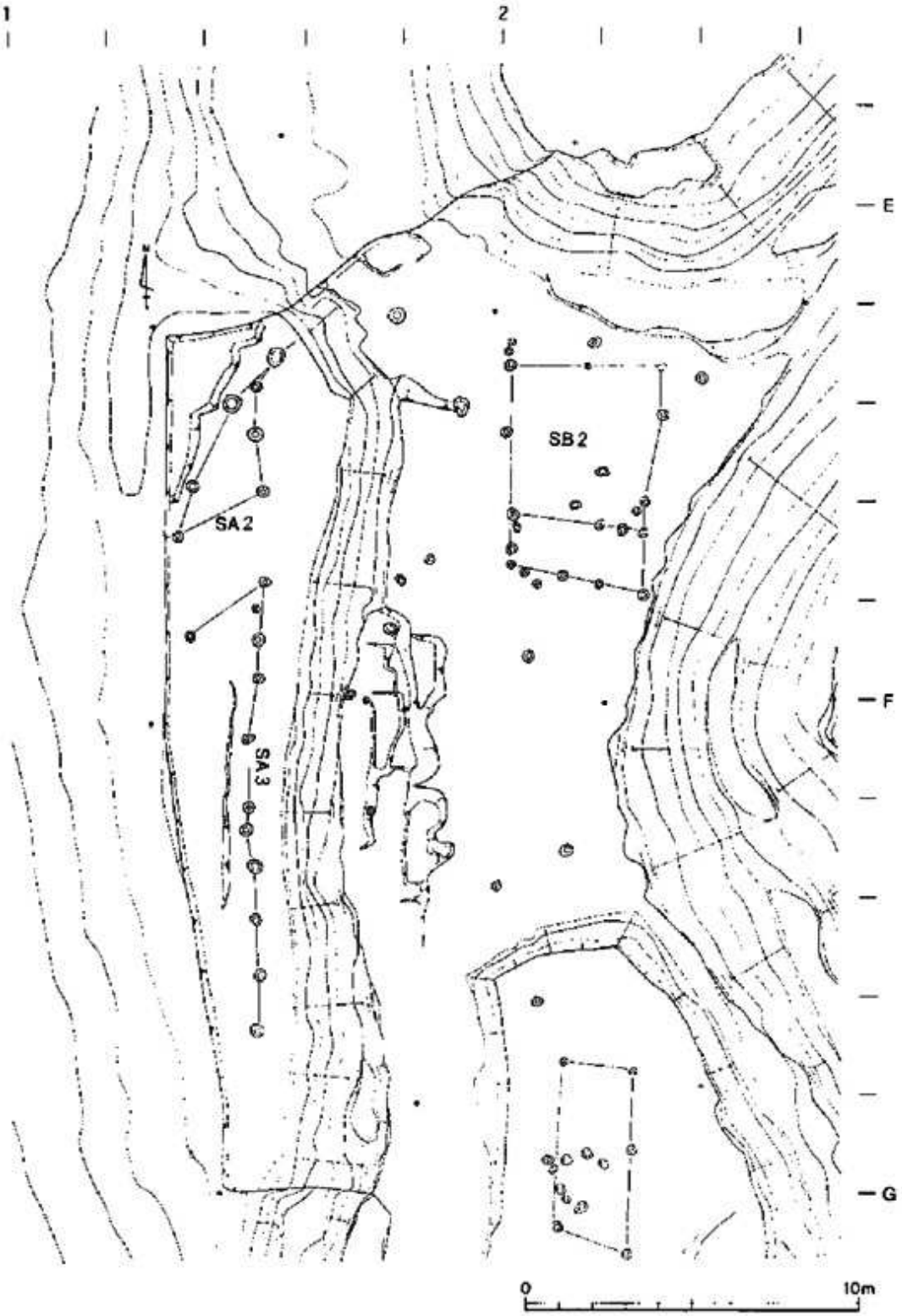


Fig. 42　曲輪2・4遺構全体図

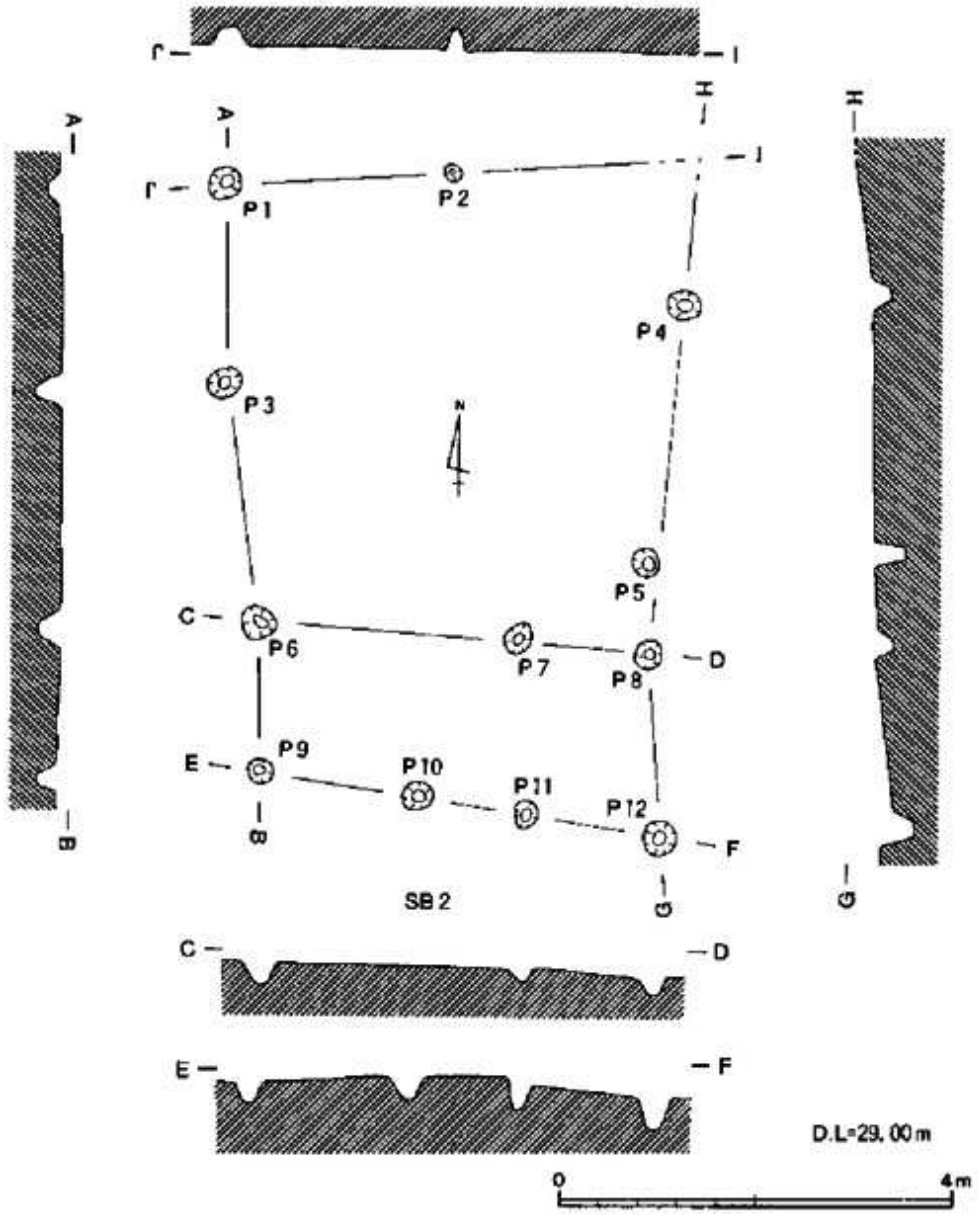


Fig. 43　SB 2　実測図

表10　SB 2 計測表

Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長軸 (cm)	短軸 (cm)	標高 (m)	備考
1～3	2.04	6.02	1～2	2.30		1	19	36	32	28.74	
3～6	2.48					2	22	20	16	28.75	
6～9	1.50		6～7	2.66	4.00	3	28	36	30	28.63	
			7～8	1.34		4	19	34	30	28.60	
4～5	2.66					5	31	30	26	28.42	
5～8	0.90		9～10	1.64	4.16	6	23	36	32	28.66	釘
8～12	1.86		10～11	1.12		7	13	34	26	28.70	
			11～12	1.40		8	17	30	27	28.56	
						9	20	26	24	28.66	
						10	24	32	29	28.68	
						11	30	30	26	28.57	
						12	34	36	32	28.56	

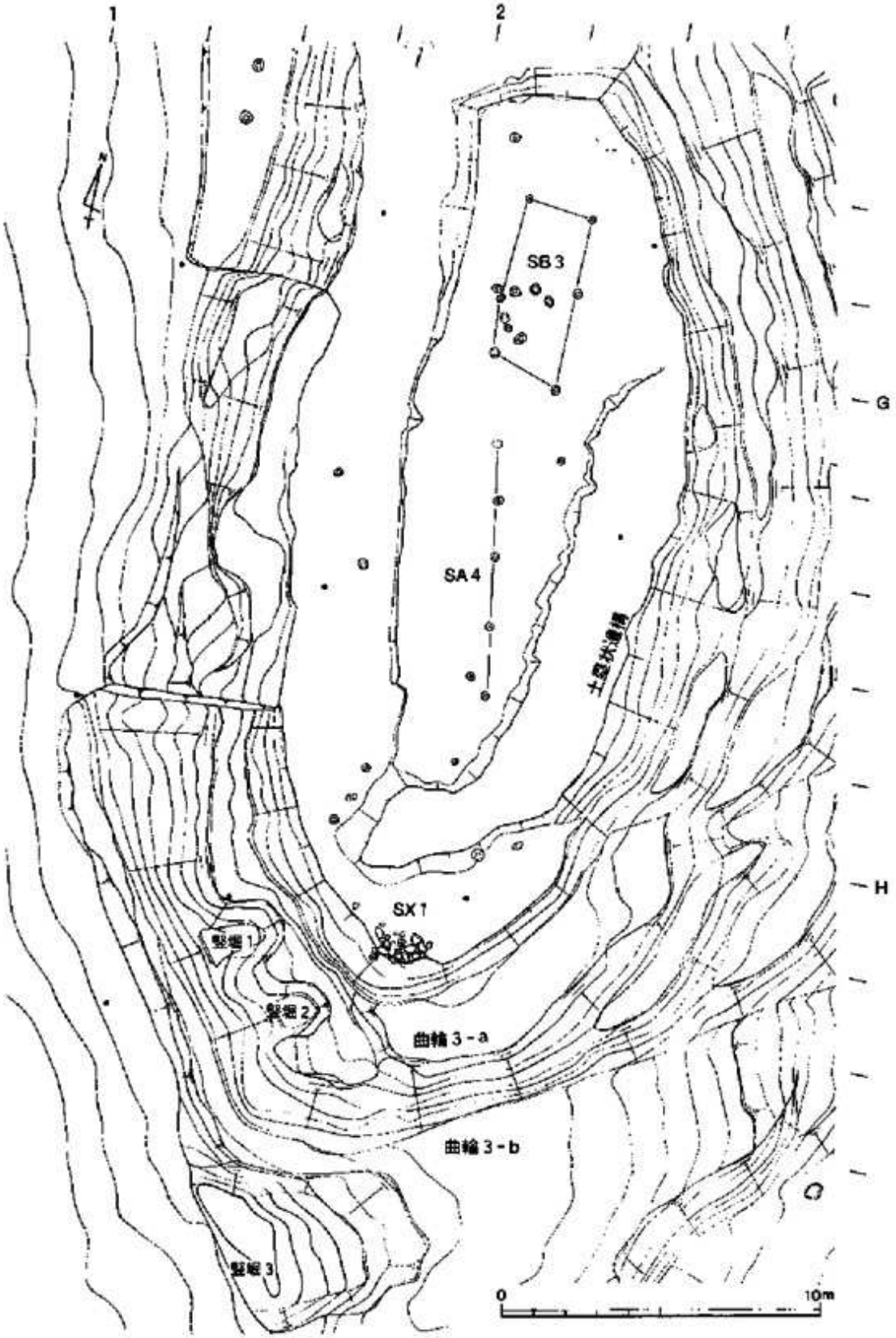


Fig. 44　曲輪3遺構全体図

（4） 曲輪３

SA４

調査区のほぼ中央部でSB３の南側に位置する。Ｇ２－６・12・17区のⅡ層下で検出した。西側の土塁状遺構に沿って南北方向に延びており，土塁状遺構に付随した性格を持つ柵列と考えられる。主軸方向はＮ－８°－Ｗである。柱間寸法は，1.8～2.22ｍを測る。柱穴の掘り方は円形状を呈し，直径24～32cmを測る。埋土は単層の黄褐色土層で，出土遺物は皆無である。

SB３

曲輪３の北部に位置する。Ｆ２－16・17・21・22，Ｇ２－１・２の第Ⅱ層下より検出した。建物の規模は，１間×２間の南北棟である。梁間は，2.26ｍ，桁行は5.50ｍを測る。柱穴の規模は，直径20～34cmを測る円形であり，検出面からの深さは15～21cmと揃っている。埋土は単層の黄褐色土層で出土遺物は皆無である。

竪堀１

曲輪３の南西斜面部に位置する。表土を検出した段階で，Ｈ１－９・10区において検出した。南西斜面部の標高26～28ｍの地点に掘削されており規模は小さく，幅2.4ｍ，深さ1.8ｍを測る。埋土は，西側斜面に向かって落ち込むように２層が堆積している，１層は褐色土層（破砕礫混入），Ⅱ層は褐色土層である。出土遺物は皆無である。

竪堀２

曲輪３の南西斜面部で，竪堀１の南側に隣接して位置する。表土を除去した段階のＨ１－15区で検出した。南西斜面の標高26～27ｍの地点から掘削されており，規模は，幅1.8ｍ，深さ

表11　SA４計測表

Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	Pit 間 (m)
1	18	32	26	29.94	1.8
2	32	32	26	29.86	1.78
3	19	27	26	30.02	2.22
4	17	28	24	30.04	2.18
5	20	26	24	30.01	
				全長	7.98

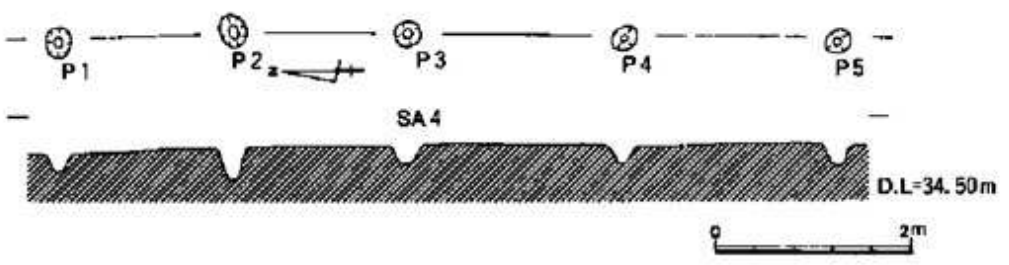


Fig. 45　SA４実測図

表12　SB３計測表

Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	備考
1～3	2.40	5.50	1～2	2.14	2.14	1	21	25	20	29.96	
3～5	3.10					2	15	24	22	29.92	
			3～4	2.26	2.26	3	15	32	28	30.02	
2～4	1.73	4.98				4	17	28	20	29.92	
4～6	3.25					5	19	32	26	29.97	
						6	20	34	30	29.86	

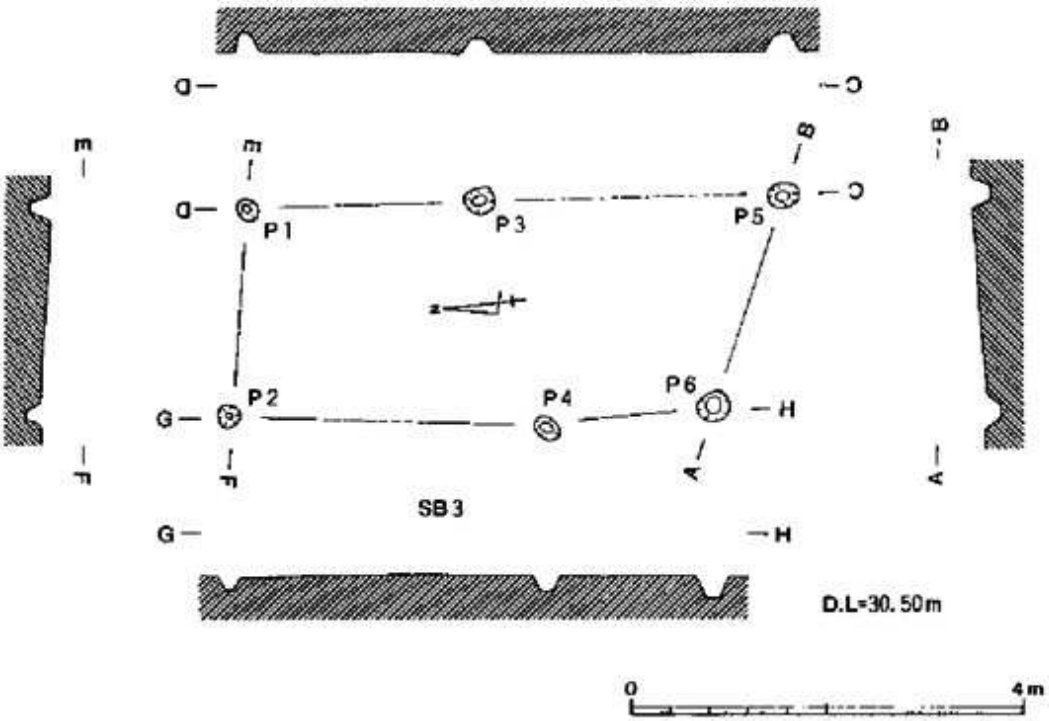


Fig. 46　SB３実測図

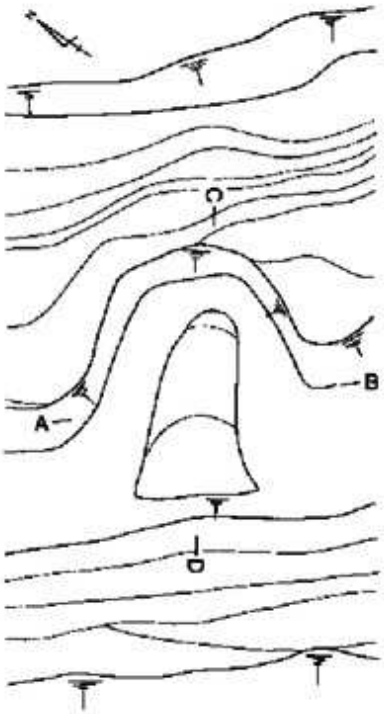
0.75mを測る。竪堀１よりやや小規模であるが，同じ防御的性格をもった遺構と考えられる。埋土は，単層の褐色土層で出土遺物は皆無である。

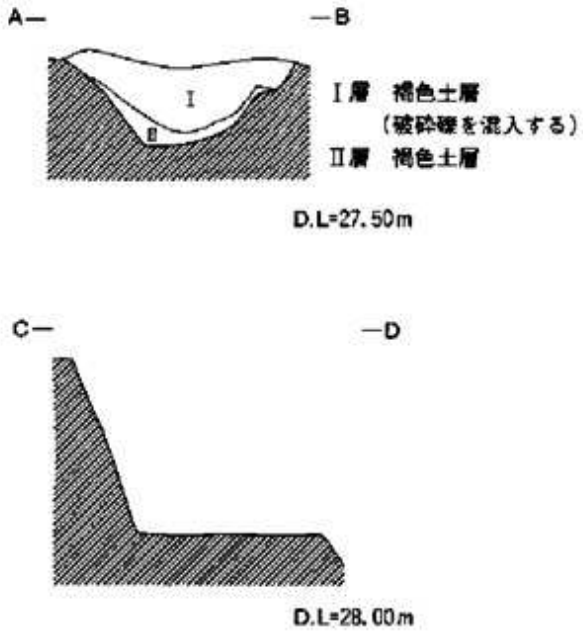
竪堀３

曲輪３－ｂの南西部に位置する。Ｈ１－25，Ｈ２－21，Ｉ２－１区から西側斜面に向かって標高25mの地点から掘削されている。規模は，幅5.4m，深さ1.8mを測る。埋土は単層の褐色土層である。出土遺物は皆無である。

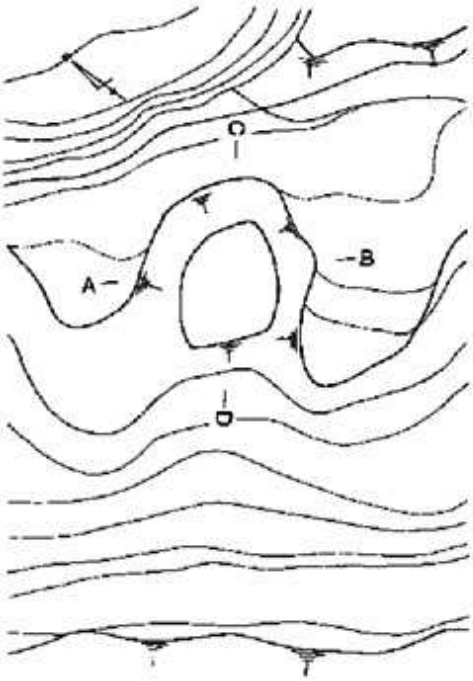
土塁状遺構

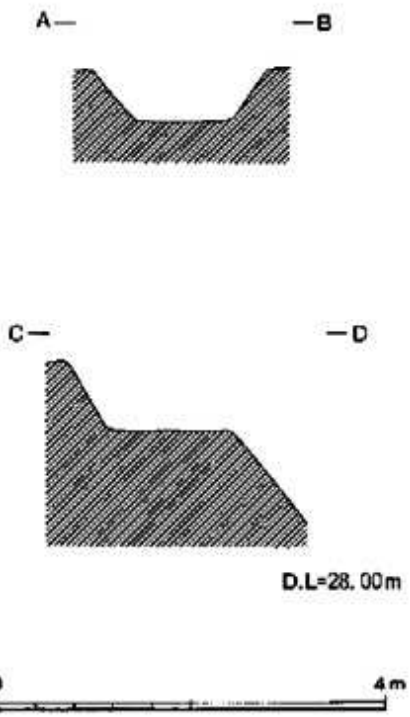
曲輪３の東南部に位置する。地表面観察の段階で，一段高く盛り上がった部分が確認でき表土層を除去した段階で，Ｇ２－３・７・８・12・13・17・18・21－23，Ｈ２－１・２区において検出した。土塁の基礎は，西側部分の地山を削り造りだしている。盛土部分は，東側から南





竪堀1





竪堀2

Fig. 47　竪堀1・2実測図

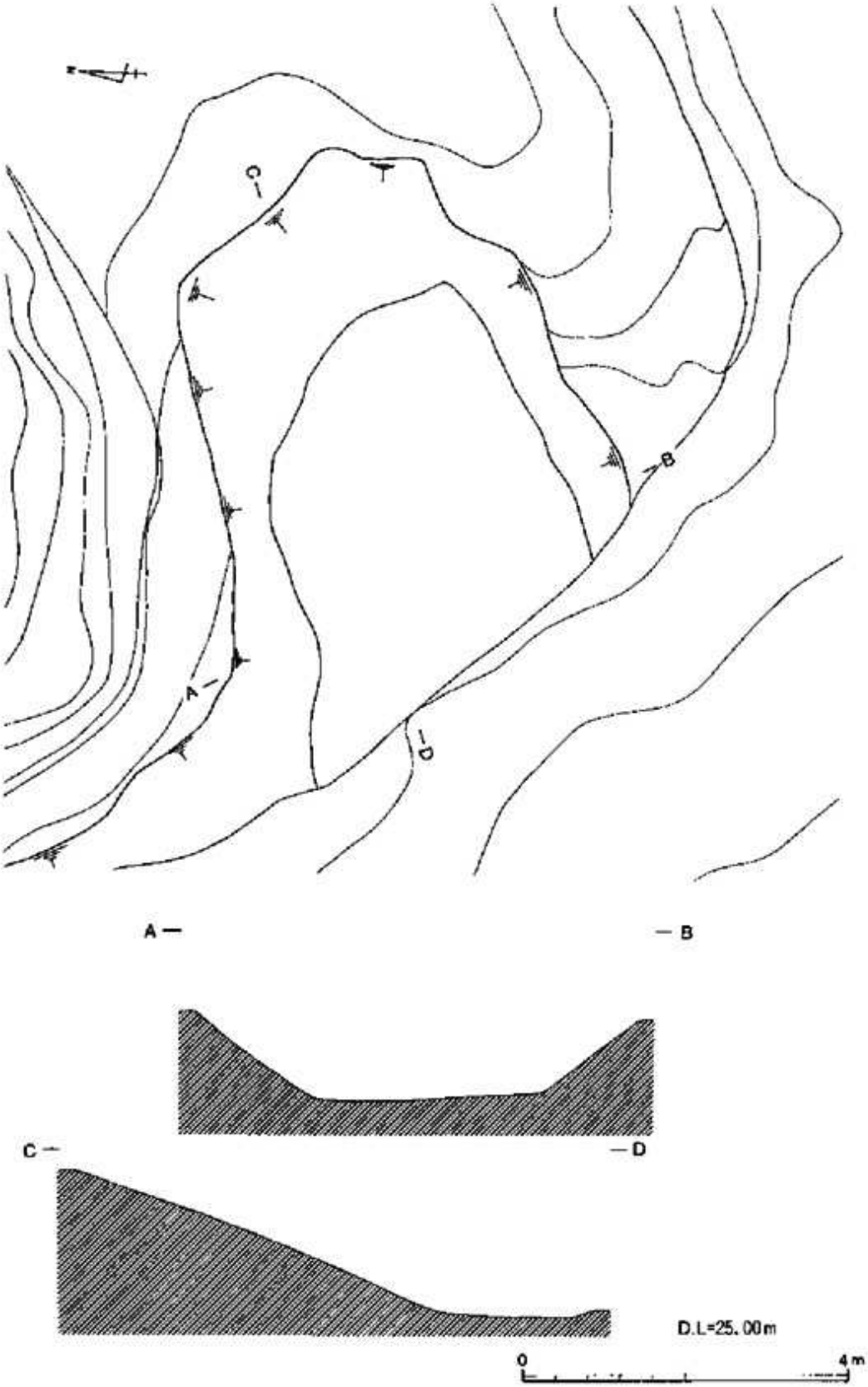


Fig. 48 竪堀3実測図

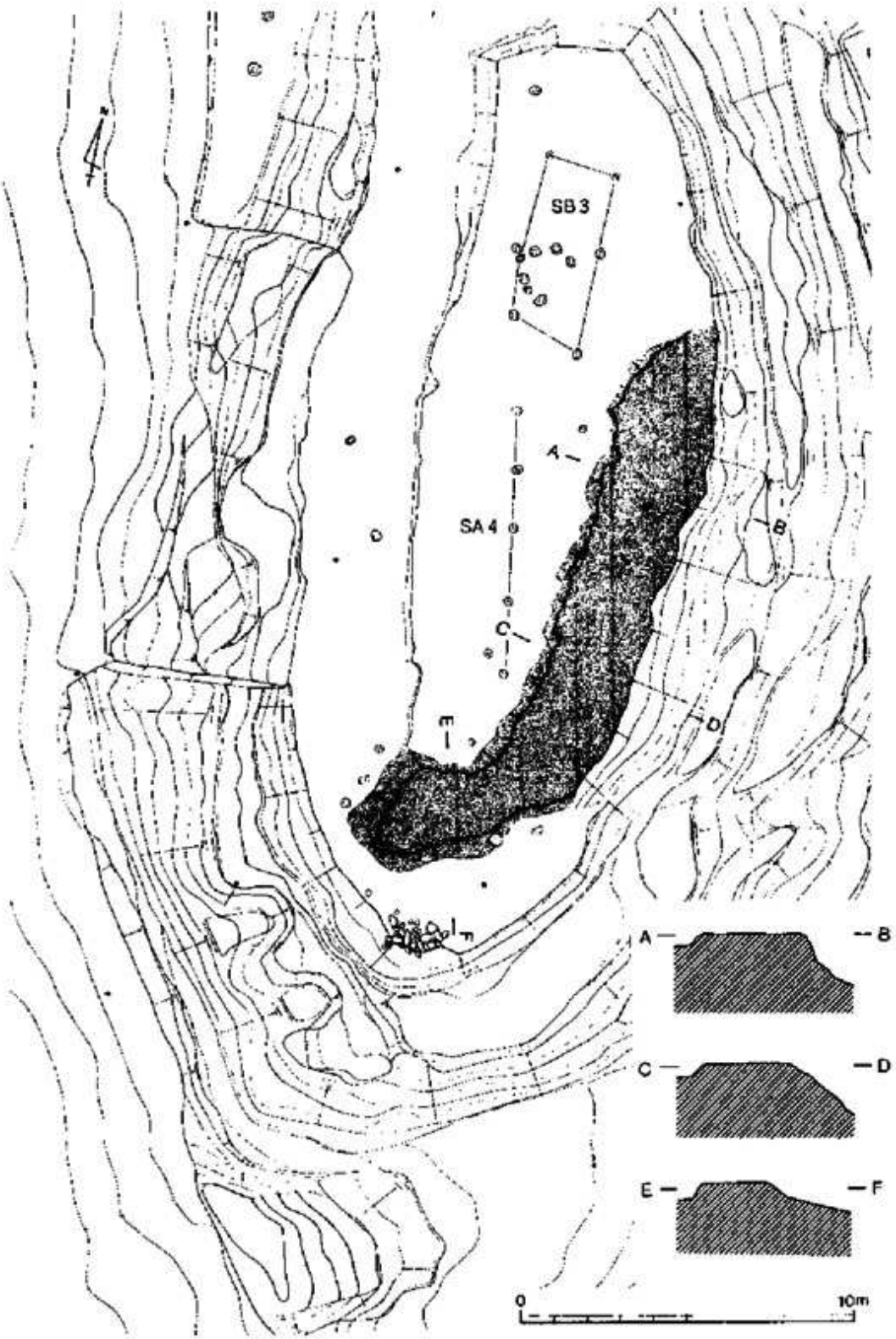


Fig. 49　土塁状遺構

側斜面に流れ込んでいる状況で一部しか確認できなかった。規模は，長さ南北が19m，東西３mを測り，Ｇ２－22区周辺で西側に折れ曲がっている。幅は，上端で２～2.5mを測る。

SX１

土墨状遺構の南部に位置する。Ｈ２－６・７区の斜面において，Ⅱ層を除去した段階で検出した。土墨の腰巻き石と考えられ，人頭大から拳大の山石が34個出土している。山石直下では，白磁片が１点出土しているが細片で実測不可能である。

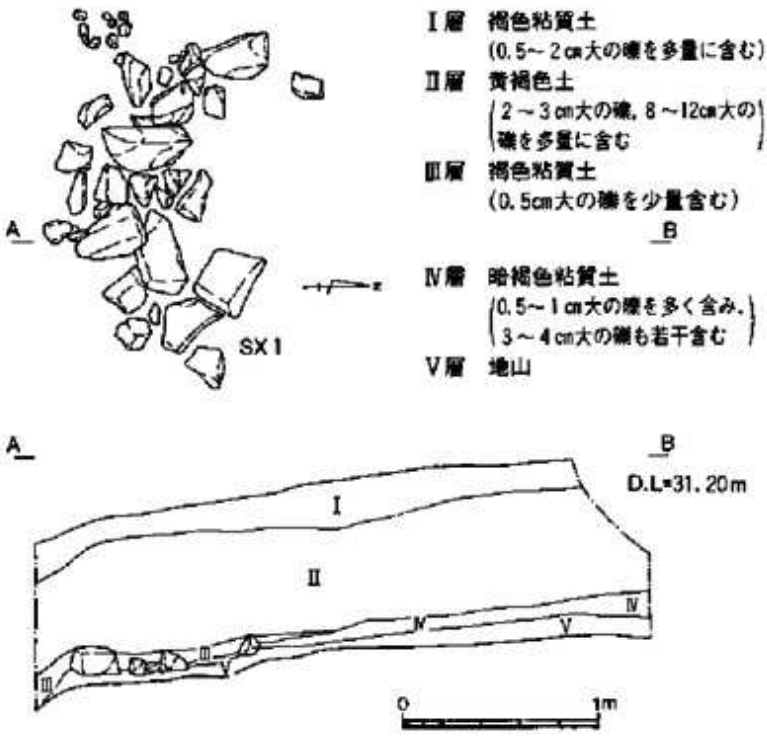


Fig. 50　SX１実測図

(5)　曲輪４

SA２

曲輪４の北部に位置する。

Ｅ１－８・12・13・17区のⅣ層を除去した段階で検出した。南側に位置するSA３と同列に延びる柵列跡と，北部から南西部側に延びる柵列跡がＰ１で交わり三角形に近い形をしている。柱間は，1.42～2.92mを測り幅がある。柱穴の掘り方は円形状を呈し，直径28～60cmを測る。埋土は褐色土の単層で，出土遺物は皆無である。

SA３

調査区のほぼ中央部から南側にあたるＥ１－18・22・23，Ｆ１－３・８・13・18区のⅡ層を除去した段階で検出した。SA２の南側に位置し，曲輪４の地形に沿って北側から南側にかけて柵列が延びている。柱間寸法は，最短で0.70m，最長で2.84mと幅があるが，平均的には1.6～1.8mである。柱穴の掘り方は，円形状を呈しており直径は28～48cmを測り，埋土は褐色土単層である。出土遺物は，Ｐ３から青磁口縁部片が１点出土しており，Ｐ６からは青磁碗が１点出土している。

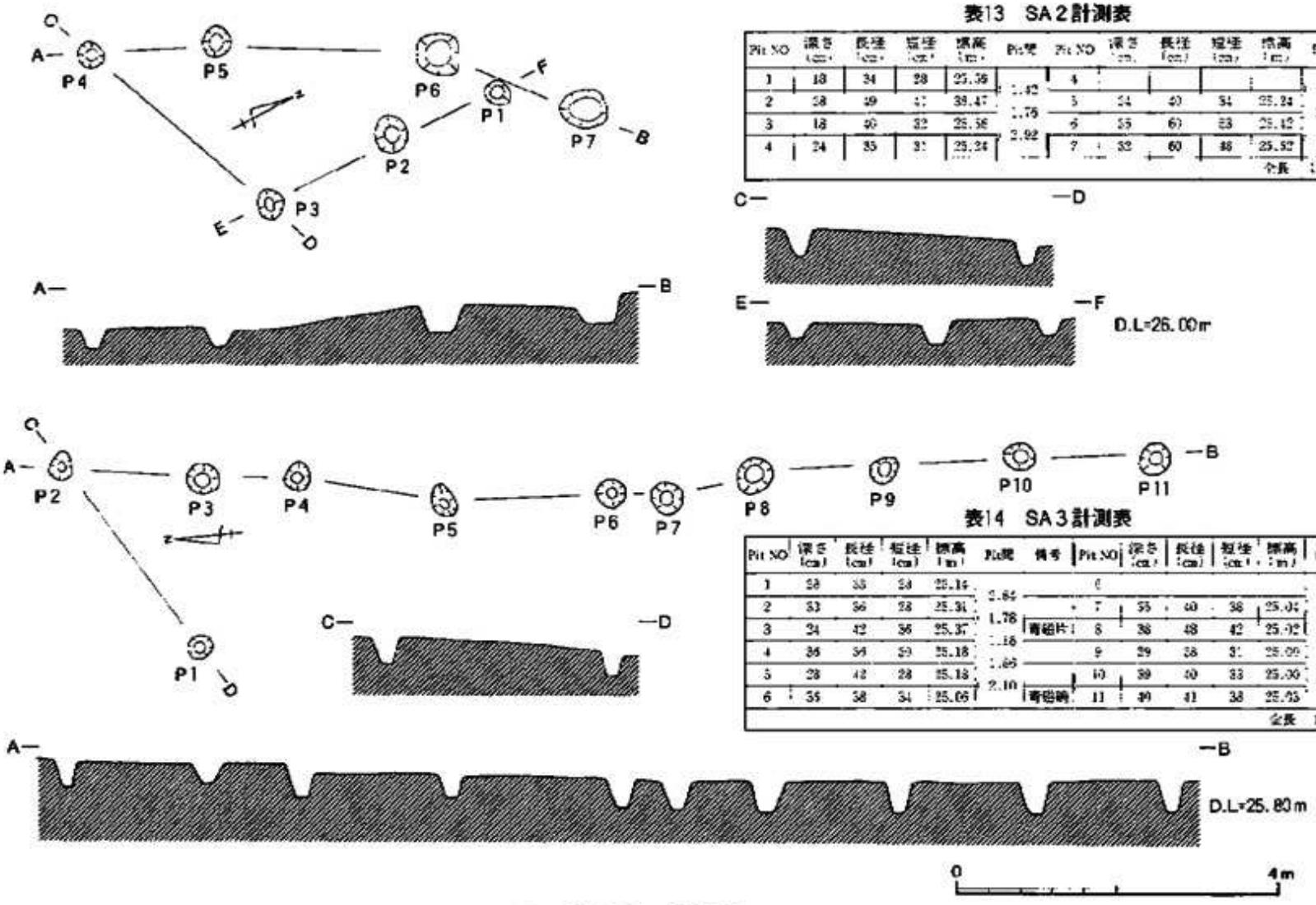


表13　SA2計測表

Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	Pit間	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	Pit間
1	18	34	28	25.36		4					
2	38	39	41	25.47	1.82	5	34	40	34	25.24	1.58
3	18	40	32	25.56	1.75	6	35	60	38	25.42	2.73
4	24	35	31	25.24	2.92	7	32	60	48	25.52	1.95
										全長	12.42

表14　SA3計測表

Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	Pit間	備考	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	Pit間
1	28	38	34	25.14			6					
2	32	36	28	25.34	2.84		7	35	40	38	25.04	
3	24	42	36	25.37	1.78	青磁片	8	38	48	42	25.02	1.10
4	36	34	30	25.18	1.18		9	29	38	31	25.09	1.54
5	28	42	28	25.18	1.65		10	39	40	33	25.00	1.70
6	35	38	34	25.06	2.10	青磁碗	11	39	41	38	25.03	1.66
											全長	10.36

Fig. 51 SA2・3実測図

（6） その他の遺構

雛壇状遺構

曲輪２・３の東側斜面に位置する。城跡の東側斜面部に帯状の平坦部が数段にわたり人工的削平を受けている。県内でも斜面部の調査は少なく，整堀以外検出された遺構の性格を含めた検討が不十分であるため，ここでは仮称として雛壇状遺構とし説明していくことにする。説明を加えるにあたり，帯状平坦部を雛壇状遺構Ａ～Ｅとする。曲輪２の南東部東側斜面の標高26ｍラインに遺構Ａが削平されている。平坦部の規模は，長さ5.50ｍ，幅0.95ｍを測る。曲輪２の平坦部からの比高差は３ｍで傾斜角45°である。遺構Ｂは，Ａから傾斜角40°で標高24ｍの地点である。規模は，長さ11.8ｍ，幅２ｍで両端部は50～60㎝で狭くなる。遺構Ｃは，Ｂから傾斜角30°で，標高21ｍの地点で削平されている。規模は，長さ23.5ｍで中央部幅0.80ｍ，南北がやや広く1.70～2.10ｍを測る。遺構Ｄは，Ｃから傾斜角30°で標高18.5ｍの地点である。規模は，長さ21.5ｍ，幅1.8～1.9ｍを測る。遺構Ｅは全面調査不可能であったが，Ｄから傾斜角15°で標高18ｍの地点である。検出した長さ14.4ｍ，幅2.3ｍを測る。雛壇状遺構Ａ～Ｅ以外にも曲輪３の東側斜面に同様な帯状平坦部が認められたが，断面観察で人工的な削平かどうか不明な箇所があるためここでは説明を省くことにする。しかし曲輪２・３の遺構配置や，南東部に位置する堀切状遺構の関連から，曲輪３の東側斜面に防御的機能を持たせた雛壇状遺構を造りだしている可能性は強く，Ａ～Ｅと同様な遺構の性格を有すると考えられる。

虎口状遺構

曲輪２の北西部ＳＢ２の西側に位置する。曲輪２と４の北部で，Ⅰ層を除去した段階でＥ１－４・５・９・10区において検出した。曲輪４のＳＡ２の東側櫓列から曲輪２のＳＢ２の北西隅部分にとる虎口である。曲輪２の標高28.5ｍラインから28ｍラインまで傾斜角20°に地山を削平し，28ｍラインで平場を形成している。北側部分は調査区外であるが検出した平場面の規模は，長さ3.8ｍ，幅1.8ｍを測る。さらに曲輪４に向けては，26ｍラインまで傾斜角54°を測る。虎口に伴うものと考えられるＰ１・２のピットを検出した。Ｐ１が楕円形状を呈し長径60㎝，短径40㎝，深さ39㎝を測る。Ｐ２は円形状を呈し径50㎝，深さ20㎝を測る。埋土は，単層の褐色土で出土遺物は皆無である。

堀切状遺構

曲輪３の南東部斜面下で東尾根から続く鞍部となる地点で，調査区のＨ３－４区に位置する。調査前は，鞍部の北半分が平坦部になっており畑地として利用されていた。今回は，調査範囲である北半分の調査を実施した。堀切としての明確な掘り込みは部分的にしか確認できず，自然地形を利用した堀切状の遺構と考えられる。堀切の人工的な掘削部分は，Ⅱ～Ⅲ層を除去した段階で検出しており，規模は中央部上端幅8.03ｍを測る。堀底は，中央部のＡ－Ｂラインは緩やかに立ち上がるが，北側下端部Ｅ～Ｆライン西側は段状に掘削されている。層序は，Ａ～

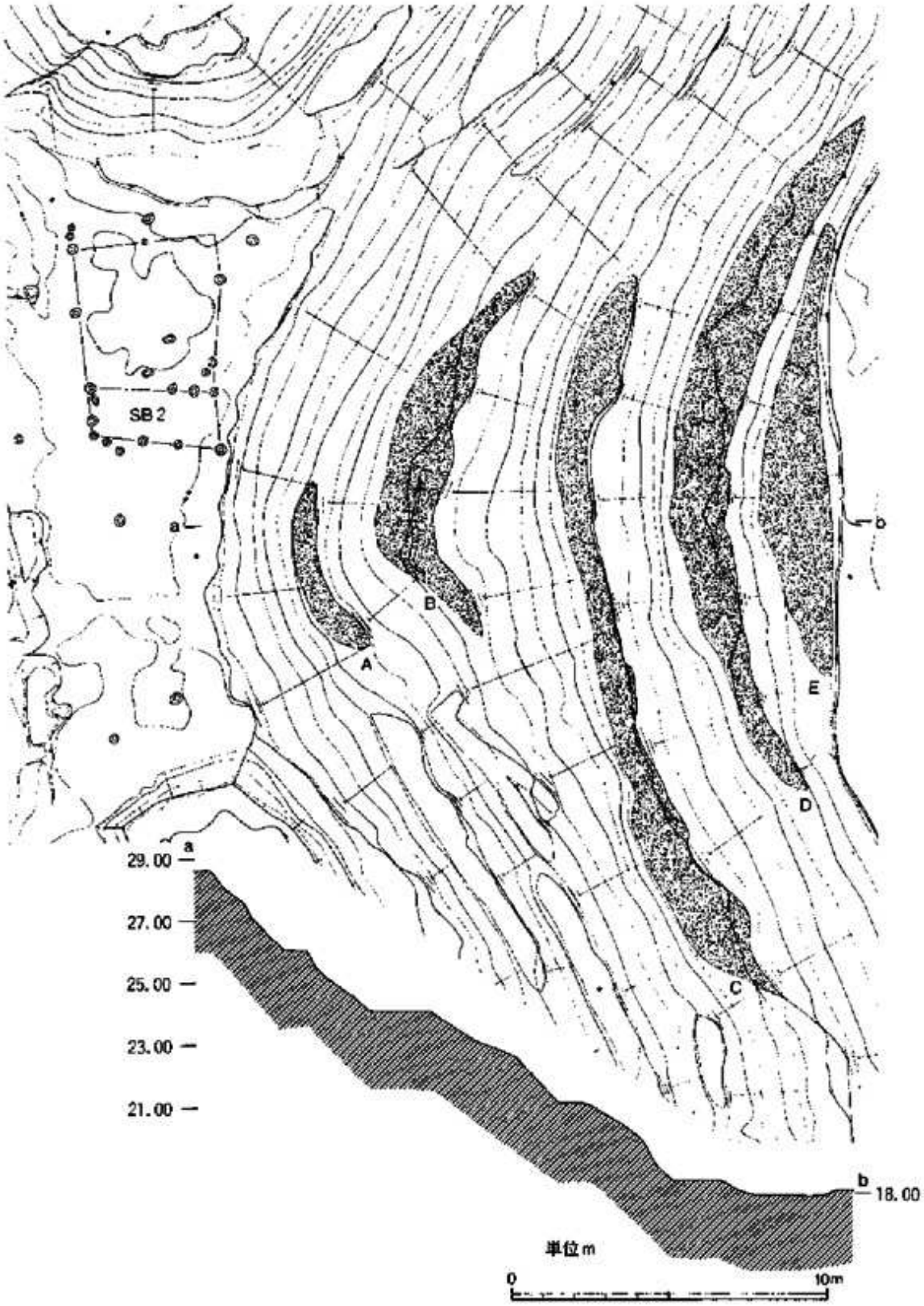


Fig. 52 崩壊状遺構

BラインでⅠ層暗褐色粘質土，Ⅱ層褐色粘質土，Ⅲ層にぶい黄褐色粘質土，Ⅳ層暗褐色粘質土，Ⅴ層明褐色土，Ⅵ層黄褐色粘質土である。堀切状遺構中央部で確認できたⅡ層は，北側の下端部では確認できないが，その代わりⅢ層が厚く堆積している状況である。遺物は総点数365点出土している。

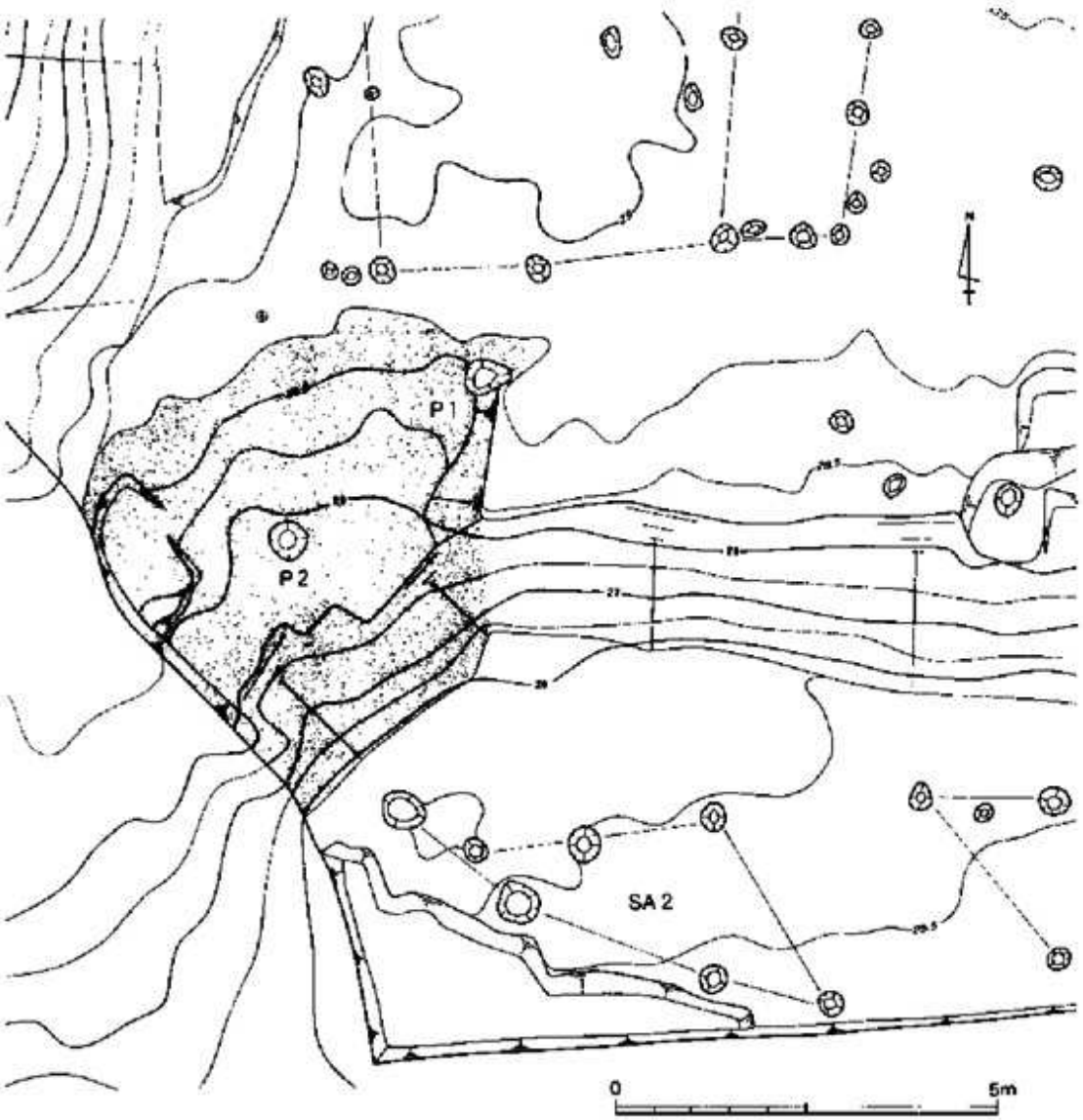


Fig. 53　虎口状遺構

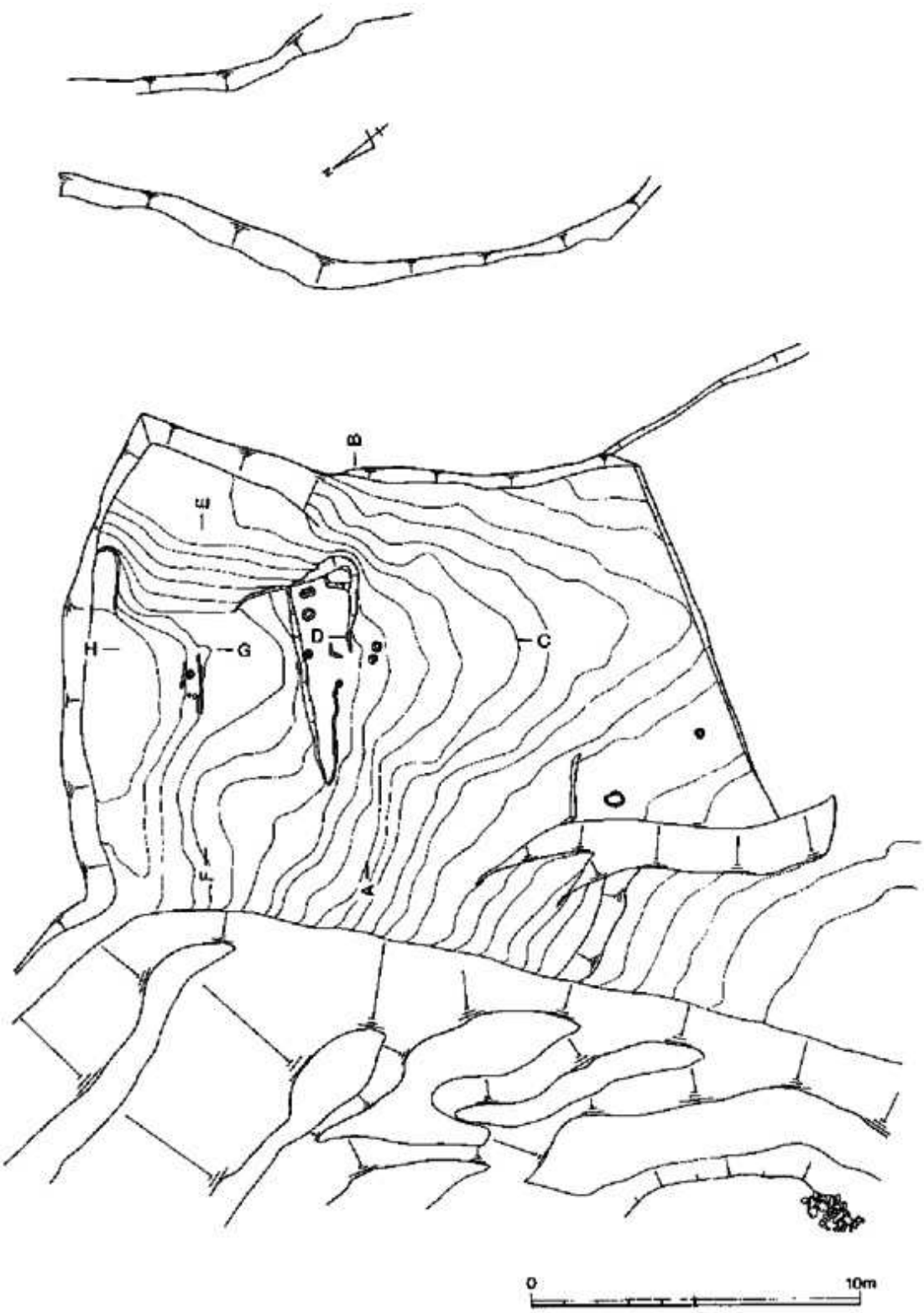


Fig. 54　堀切状遺構

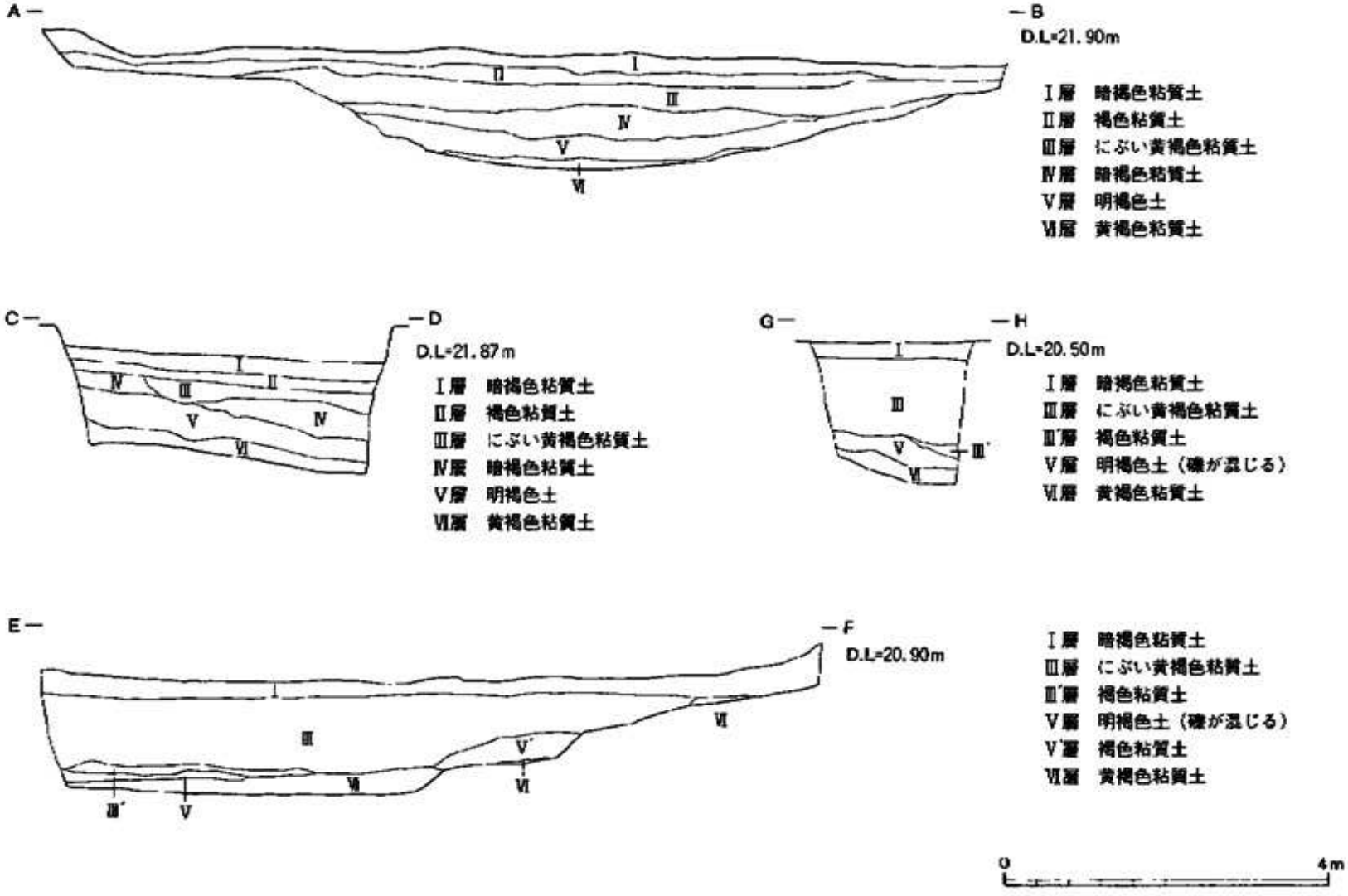


Fig. 55 堀切セクション図

3．出土遺物

調査で出土した遺物は総点数550点余りと少なく，土師質土器，国産陶器，輸入陶磁器，石製品，金属製品，弥生土器等が出土している。中でも，土師質土器の出土量が最も多く211点出土しており，全体の38％を占めているが細片が多く摩耗が激しい。国産陶器が次いで多く184点出土しており，33％を占めている。中でも備前焼が最も多く，瀬戸・美濃焼が若干出土している。輸入陶磁器は106点出土しており，19％を占めている。青磁，白磁が出土しているが，青磁93点，白磁13点と青磁の出土量が圧倒的に多い。

曲輪１からは20点余りの土器類が出土している。他の曲輪に比べ出土数は最も少数である。青磁，土師質土器，国産陶器等が出土している。青磁は４点出土しており，SA１のP２からは口縁部片が１点出土している。国産陶器では天目茶碗の口縁部片が出土している。曲輪２では総点数101点が出土している。土師質土器が62点と最も多く，次いで青磁が21点出土している。他には国産陶器が数点出土している。曲輪３では30点余りの土器類が出土している。土師質土器，国産陶器，青磁，白磁等が出土しており，国産陶器の中では天目茶碗が出土している。曲輪４では45点余りの土器類が出土している。土師質土器が29点と最も多く，青磁，白磁，国産陶器，古銭等が数点出土しており，SA３のP６からは半欠けの青磁碗が出土している。国産陶器では備前焼の擂鉢が出土している。遺物全体に言える事だが，細片の物が多く，実測できる物は少ない。

堀切状遺構からは365点の土器類が出土している。他の曲輪に比べ出土数は圧倒的に多く，出土総点数の約60％を占めている。国産陶器157点，土師質土器112点，青磁47点，白磁が５点，砥石，鉄製品が若干出土している。国産陶器は備前焼片が主である。また弥生土器が18点余り出土している。以下実測可能な遺物について，種類・器種ごとに説明をしていくが法量等の詳細は観察表を参照されたい。

（１） 土師質土器

１，２は堀切から出土した土師質土器の底部である。内面には不定方向のナデがみられ，底部は共に回転糸切り痕が残る。22は曲輪２から出土した羽釜である。胴部から口縁部にかけて内湾し，口縁端部は狭い平坦面をなしており肩部には鍔が付く和泉・河内型の羽釜に属する。口縁部外面には二条の凹線による段を持ち，内面には横位・斜位の刷毛調整が施されている。

（２） 青磁

３，４，５は堀切から出土した皿である。３は口縁部のみであるが，体部から外上方に開き

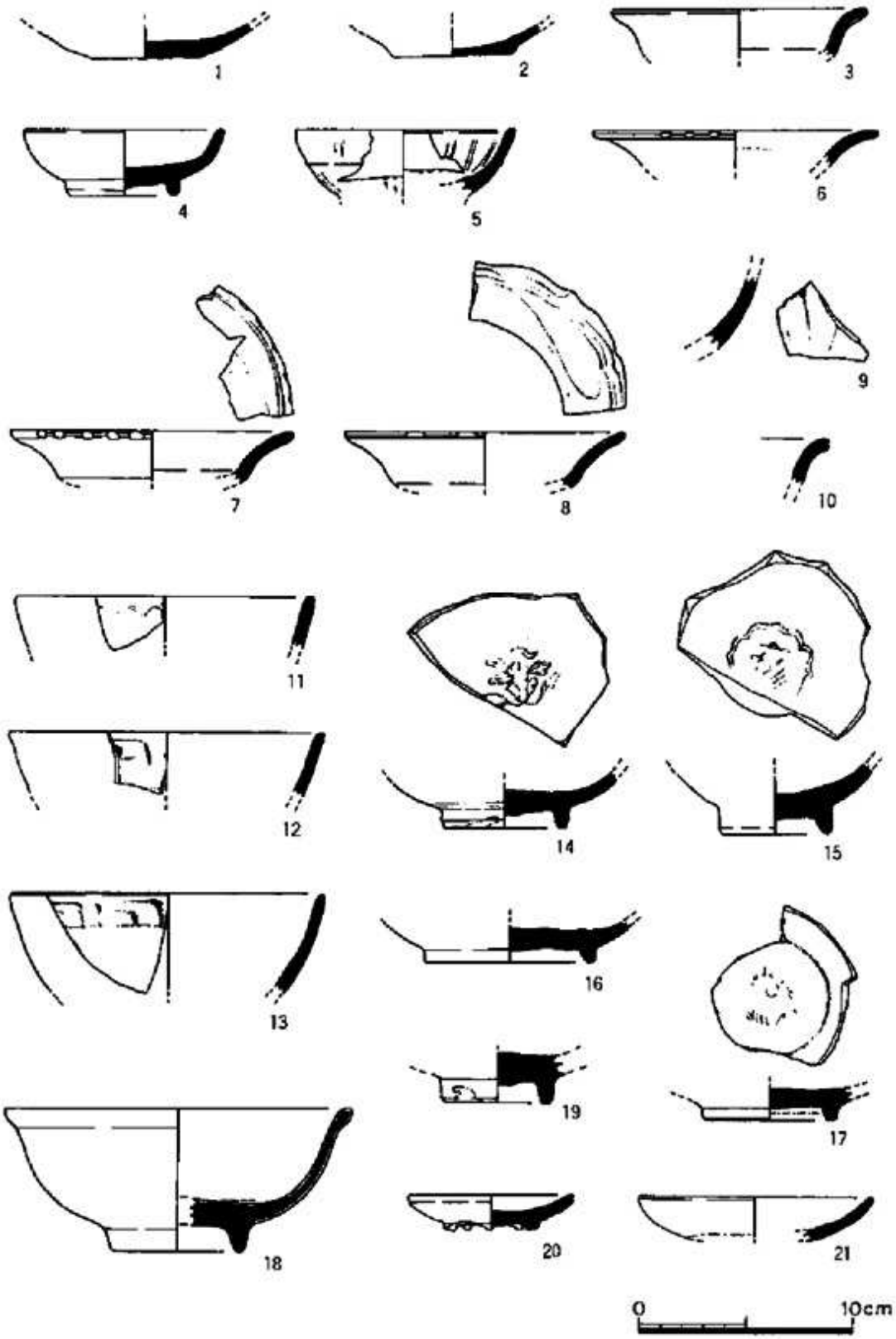


Fig. 56 出土遺物実測図 1

口縁部が外反するものである。4は体部からやや内湾気味に上方に伸び，口縁部に至る高台付きの皿である。内外面無文で高台内面途中まで明緑灰色の釉が施され，一部は底部外面にまで至る。5は外面体部に稜をもち，内外面に縦方向の浅い沈線が入るもので底部には高台が付くタイプの皿と思われる。

6，7，8も堀切から出土した稜花皿である。7，8は体部で屈曲し，外上方に立ち上がり口縁部は外反する。7は口縁部内面に二条の櫛描が施され，端部は抉りがはいる。8は口縁部内面に波状の櫛描が三条施され，端部には抉りがはいる。6は口縁部のみであり，内面には一条の櫛描が施され，端部には同じく抉りがはいる。9は曲輪2から出土の碗の体部で浅い蓮弁文が描かれ明緑灰色の釉が施されている。10は碗の口縁部で，内外面無文で口縁部が外反するものである。11は口縁部外面に浅い蓮弁文を施す碗である。共に堀切出土の遺物である。12，13は口縁部外面に雷文帯を施す碗である。12は曲輪4のSA3－P3からの出土で口縁部が若干外反し，透明度の高い明緑灰色の釉が施されている。内外面とも貫入はみられない。13は体部から内湾気味に上方に開き，オリーブ灰色の釉が施されている。14は碗の底部である。内面見込には印花文が押されており，外面は高台上部に三条の沈線が施されている。高台外面は斜めに削られており，途中まで明緑灰色の釉がかかり，畳付から外面底部は露胎である。15も碗の底部である。高台外面には一条の沈線が入り，内面見込には花文の中に「寿」が印刻されている。オリーブ灰色の釉が畳付を通りこし，高台内側まで施され一部は外面底部にまで及んでいる。共に堀切出土の遺物である。16，17は皿の底部である。17は堀切出土で見込には一条の界線とその中に草花文が浅く施されている。高台は畳付の外面を斜めに削り，釉は畳付を通り越して高台内側にまで施され一部は外面底部にまで至る。16は曲輪2出土の遺物で断面が台形状の高台で，畳付を通り越し高台内側にまで施釉される。内外面ともに密な貫入がはいる。19は堀切出土の碗の底部である。高台部の畳付外面を斜めに削りとり，畳付途中まで施釉されている。外面底部は露胎であるが一部釉がかかる。18は曲輪4のSA3－P6から出土した半欠けの碗である。口縁部が外反するタイプで，底部から体部にかけて膨らみ外上方に伸びる。内面見込には二条の界線が入る。畳付を越えて高台内面まで明緑灰色の釉がかかり，一部は外面底部中央に施される。内外面とも密な貫入がはいる。

(3) 白磁

20は堀切から出土した皿である。高台にはアーチ状の抉り込みが二箇所確認できる。底部から内湾気味に立ち上がり，外上方に伸びて口縁端部を丸くおさめるタイプである。白濁色の釉で全面施釉され，内面見込には三箇所の目痕が確認出来る。21は体部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る皿である。底部には高台が付くタイプと思われる。胎土は陶器に類似しており，白濁色の釉が体部下半途中まで施され他は露胎で残す。内外面共に密な貫入がはいる。

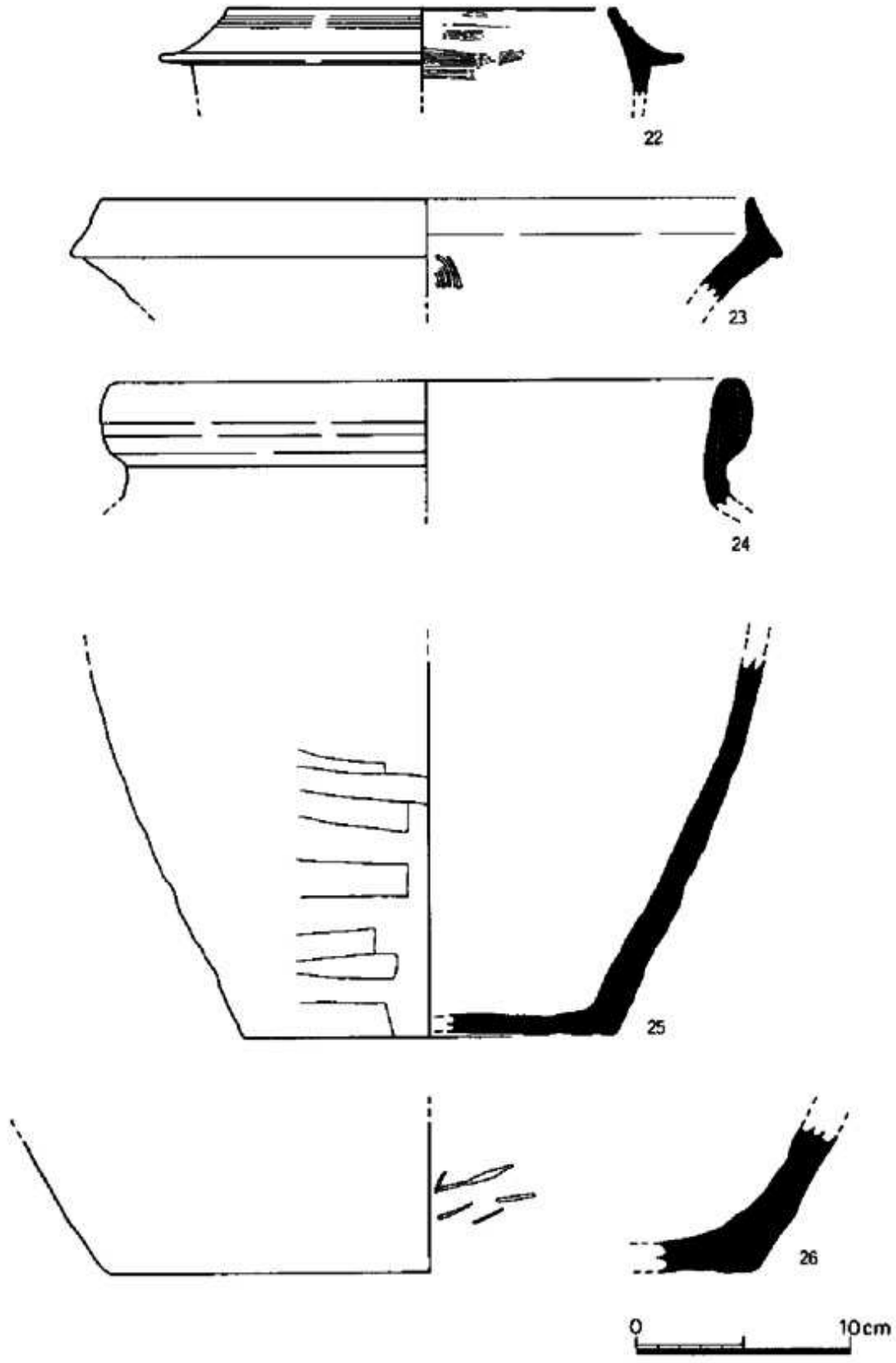


Fig. 57　出土遺物実測図 2

（4） 備前焼

23は擂鉢の口縁部である。口縁部は幅広く，上方に内傾して立ち上がる。体部内面には五条の条線が確認できる。24は甕の口縁部である。口縁端部を折り曲げた玉縁状を呈し上方に立ち上がるタイプで間壁氏編年のⅣ期に位置付けられる。25は壺の底部で，外面には篦での削り痕が残る。26は甕の底部で，同じく篦痕が数箇所残る。

（5） 土製品

27は土錘である。全長3.5cm，全幅1.7cm，孔径0.7cm，重量8.6ｇを測る。ほぼ完形であり，一部煤が付着している。

（6） 石製品

28は堀切から出土した砥石である。下部は一部欠損しているがほぼ完形品で，上面と両側面を磨いている。全長13cm，全幅6.9cm，全厚3.6cm，重量370ｇを測る。

（7） 金属製品

堀切より出土した性格不明金属製品である。方形の形態を呈し，全体的に薄い造りで錆化が著しい。全長8.5cm，全幅4.0cm，全厚0.2cm，重量2.58ｇを測り，中央上部に一ヶ所の穿孔がみられる。

（8） 古銭

33，34は曲輪４から出土した天聖元宝，元豊通宝である。本城跡出土の古銭はこの２枚のみである。33の天聖元宝は，外径2.4cm，内径2.0cmを測り，初鋳年次は北宋時代（1023年）である。34の元豊通宝は，外径2.4cm，内径2.0cmを測り，初鋳年次は北宋時代（1078年）のもので読み方としては共に順読である。

（9） 弥生土器

30は広口壺の口縁部である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け口縁部を肥厚させている。31・32は底部である。共に堀切から出土しており，弥生中期Ⅳ様式の特徴を持つ。

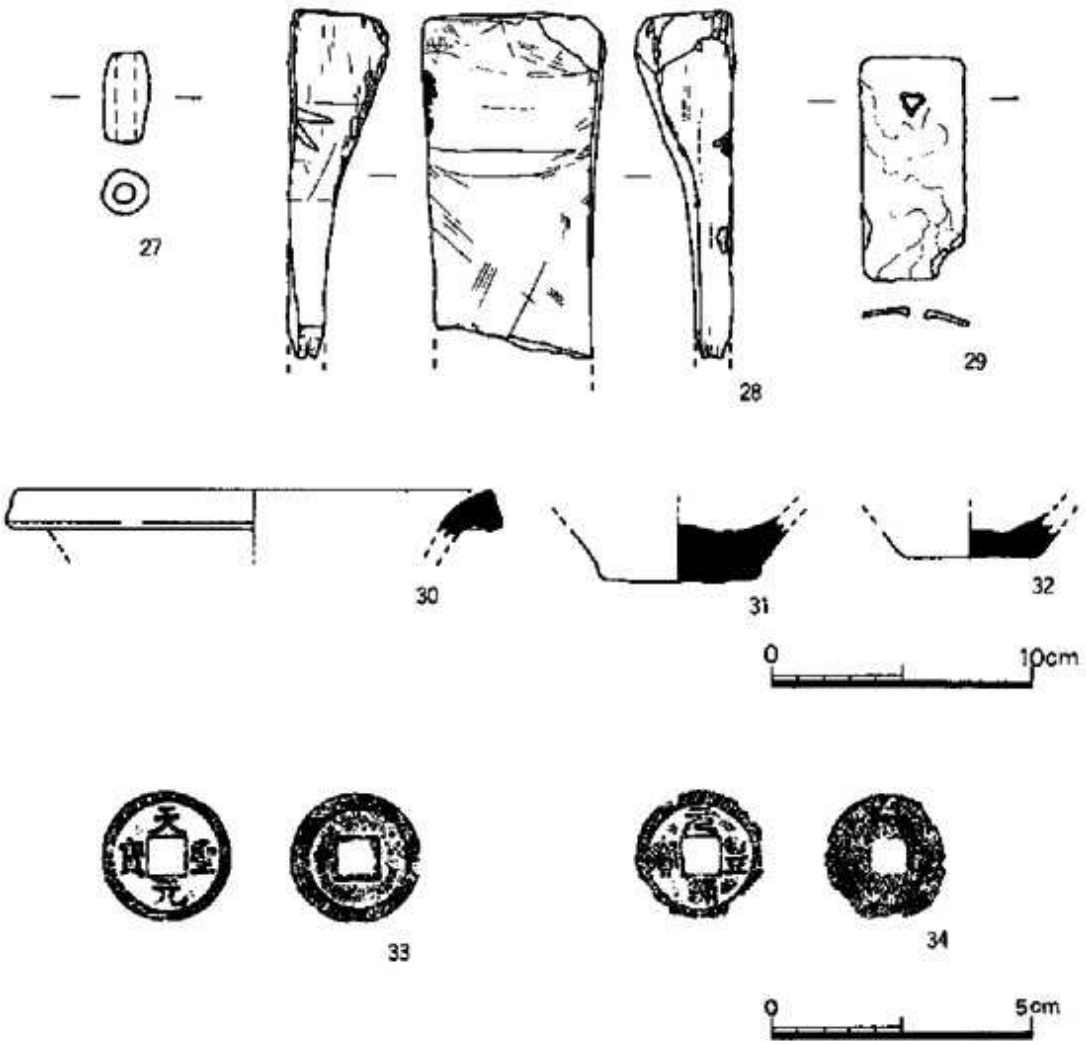


Fig. 58　出土遺物実測図 3

表15　出土土器法量表1

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外	色調 内(断)	成形	出土Grid	層位
1	土師質土器	坏	—	—	5.0	—	橙色7.5YR7/6	〃	堀切		Ⅳ層
2	〃	〃	—	—	5.4	—	浅黄橙色10YR8/3	〃	〃		〃
3	青磁	皿	11.8	—	—	—	灰白色10Y7/2	〃(灰白色10Y8/1)	〃		Ⅱ層
4	〃	〃	9.2	3.0	4.8	0.6	灰白色10Y7/	〃	〃		〃
5	〃	〃	10.0	—	—	—	オリーブ灰色2.5GY6/1	〃(灰白色N7/)	〃		〃
6	〃	鉢	13.2	—	—	—	灰オリーブ色7.5Y6/2	〃(灰白色10Y7/1)	〃		Ⅳ層
7	〃	〃	13.1	—	—	—	オリーブ灰色2.5GY6/1	〃(灰白色N7/)	〃		Ⅱ層
8	〃	〃	13.0	—	—	—	灰オリーブ色5Y5/3	〃(灰白色N7/)	〃		Ⅳ層
9	〃	碗	—	—	—	—	明緑灰色7.5GY7/1	〃(灰白色2.5Y8/2)	曲輪2	F1-10	Ⅱ層
10	〃	〃	—	—	—	—	オリーブ灰色10Y6/2	〃(灰白色7.5Y7/1)	堀切		〃
11	〃	〃	13.6	—	—	—	明オリーブ灰色5GY7/1	〃(灰白色10Y8/1)	〃		Ⅳ層
12	〃	〃	14.4	—	—	—	明緑灰色7.5GY8/1	〃(灰白色2.5GY8/1)	曲輪2	E1-23 SA3, P3	
13	〃	〃	14.4	—	—	—	オリーブ灰色10Y5/2	〃(灰白色N8/)	堀切		Ⅲ層
14	〃	〃	—	—	5.6	0.8	明緑灰色7.5GY7/1	〃(灰白色7.5Y7/1)	〃		Ⅳ層
15	〃	〃	—	—	4.9	0.7	オリーブ灰色5GY6/1	〃(灰白色7.5Y7/1)	〃		
16	〃	皿	—	—	7.7	0.6	オリーブ灰色10Y6/2	〃(灰白色7.5Y8/1)	曲輪2		Ⅰ層
17	〃	〃	—	—	6.0	0.6	灰オリーブ色7.5Y5/3	〃(灰白色10Y7/1)	堀切		
18	〃	碗	15.8	6.6	6.0	1.1	灰オリーブ色7.5Y6/2	〃(灰黄色2.5Y7/2)	曲輪4	F1-8 SA3, P6	
19	〃	〃	—	—	4.8	1.0	オリーブ灰色2.5GY6/1	〃(灰色N6/)	堀切		Ⅳ層
20	白磁	皿	7.7	1.6	4.3	0.2	灰白色7.5Y8/1	〃	〃		Ⅳ層
21	〃	〃	10.8	—	—	—	灰白色5Y8/1	〃	曲輪4	E1-23	Ⅱ層

表16　出土土器法量表2

挿図番号	種別	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	高台高	色調 外	色調 内(断)	曲輪	出土Grid	層位
22	土師質土器	羽釜	17.8	—	—	—	黄橙色10YR8/6	浅黄橙色10YR8/3	曲輪2	F 1 - 5	I層
23	備前焼	播鉢	29.8	—	—	—	橙色5YR6/6	〃	強切		II層
24	〃	甕	30.0	—	—	—	赤褐色10YR4/3	〃	〃		〃
25	〃	壺	17.0	—	—	—	灰色7.5Y5/1	灰黄色2.5Y6/2	〃		IV層
26	〃	甕	29.6	—	—	—	明赤褐色2.5YR5/6	〃	〃		〃
30	弥生土器	壺	18.0	—	—	—	灰白色2.5Y8/2	〃	〃		II層
31	〃	〃	—	—	6.0	—	にぶい黄橙色10YR7/4	〃	〃		〃
32	〃		—	—	5.0	—	浅黄色2.5Y7/3	〃	〃		〃

4．小結

ハナノシロ城跡は，標高35m前後の尾根上先端に築かれた中世山城で、主に５カ所の曲輪で構成されている。調査前は，南東部から続く丘陵で谷状地形を呈している地点で堀切状の遺構が残存している可能性があった。その他土塁，竪堀等の遺構は現状の地形からは確認することができなかった。

調査成果としては，城の中心部分にあたる曲輪１（詰）で，掘立柱建物跡が１棟・土坑・柵列と考えられる遺構を検出した。この曲輪は，全面を調査できなかったが，SB１が詰の中心的な建物であるとすると，通常の場合詰平坦部の周縁に土塁か柵列を構築するのであるが，本城跡には認められないことから中央部の柵列が詰の機能を考えていく上で重要な意味を持つと考えられる。曲輪１の南部は，意識的に遺構を構えずひとつの空間として利用しているものと考えられる。この空間を兵だまりの空間として利用したとすれば，ひとつの攻撃機能を持たせていることになる。この曲輪からは，堀切状遺構まで見渡すことができ立地的な面からも良好な場所である。

曲輪２は，掘立柱建物跡１棟と虎口状の遺構を検出した。掘立柱のSB２は，曲輪の北側部分に構築されており，虎口状遺構から直にこの建物に進入できる仕組みになっている。この曲輪は，曲輪１と３に挟まれ天秤状の形態をした一段低い部分である。人為的に掘削して平坦部を形成しているのか自然のものか不明であるが，城の縄張りとしては特異なものである。

曲輪３は，土塁状遺構・柵列・掘立柱建物跡・集石遺構・竪堀１～３を検出した。この曲輪は，西側部分に傾斜し西端部は一段低く，北部に行くほどさらに低くなり北西端部は曲輪２に緩傾斜で続いている。土塁状遺構は，東部の縁辺部のみ削り残して基礎とし，平坦部を削りだした残土を盛って土塁を造りだしている。これらの行為により，平坦部がやや西側に傾斜し段部も形成していると考えられる。柵列は土塁状遺構の南北ラインに沿って検出した。この柵列は，城において通常柵列を構える地点とは考えられず，土塁状遺構に付属する柵列と理解している。さらにSB３の性格であるが，柵列と方向が一致している点，土塁状遺構の北端部ラインに構築されている点，建物の規模としては小規模でSB２等の建物とは性格が異なる点などがあげられ，土塁状遺構と柵列に係わる防御的性格を有しているものと考えられる。集石遺構は，土塁状遺構の南端部斜面で検出している。土塁の土留め用に使用した集石と考えられる。西側斜面には竪堀を３条検出しているが，竪堀の配置からして敵が西側から回り込んで進入してこないような意図が窺われる。これらのことから，この曲輪全体は，防御面もさることながら攻撃面に重点を置いた遺構の配置がなされている。

曲輪４は，柵列のみを検出している。曲輪２に付属した帯曲輪的性格も考えられるが，柵列が地形に沿って直線的な並びで検出でき，一間分は西側に折れ曲がっている。北端部には，曲輪２にはいる虎口状遺構が存在することから，城跡への登山道から入口部にかけて柵列で防御

する性格を持つ曲輪と考えられる。

その他堀切状遺構及び雛壇状遺構を検出している。城跡の東斜面の調査を今回実施することができた。雛壇状遺構は，斜面部を段状に人工的に掘削しており，攻撃・防御面での役割をはたしているものと考えられる。この遺構は，東南部の丘陵から敵が進入してくると，まず堀切状遺構で防御し曲輪3からの攻撃を加える。その段階でさらに斜面部を利用し，攻撃を加えるための有効的な遺構と考えられる。竪堀以外斜面部がどのように利用されていたか，仮名称した雛壇状遺構もあわせ，今後の課題である。しかし，今回は山城調査でも初めて斜面部の様相をつかむことができた。県下的に見ても小規模な山城であるが，防御するには大変優れた城の造り方をしていると考えられる。

ハナノシロ城跡の東側には江ノ古城跡が存在するが，江ノ古城跡の調査は一部分で全体的な様子は不明であるが，出土遺物から同じ時期に利用された城であると考えられる。縄張り調査では，ハナノシロ城跡と比べれば規模の大きい山城であることがわかる。江ノ古城跡は，江ノ村集落の本城的な役割を持った城で，ハナノシロ城跡はその支城としての役割をはたし，城の立地や小字の復元，縄張りの特徴から中筋川の河川交通を見張る性格の城である可能性も考えられる。

出土遺物については，土師質土器，青磁，白磁，備前，瀬戸・美濃系，土製品，石製品，金属製品等が出土している。堀切状遺構からの出土が365点と圧倒的に多く，次いで曲輪2・4・3・1の順で出土している。出土遺物の破片数の中で，出土数が最も多いのが土師質土器で38％を占めている。次いで国産陶器が33％，輸入陶磁器19％となる。土師質土器の出土割合がその多くを占める点は，土佐の中世城郭の中で一般的な出土傾向を示している。土師質土器については細片で摩耗しているため，実測不可能なものが多かった。これら土師質土器は，精選された胎土で焼成は悪く黄橙色を呈する特徴を持ち，中村城跡・栗本城跡等の土師質土器と類似している。在地土器の研究が遅れているが，長宗我部地検帳の安並村検地で土器工人の記載があり，土師質土器の生産集団の存在も想定される。輸入陶磁器では，青磁の皿，稜花皿，碗と白磁では皿が出土している。青磁碗は，蓮弁文，雷文帯，内外面無文で口縁部が外反するものがみられる。雷文帯碗は15世紀前後に出現年代が求められ，内外面無文で口縁部が外反する碗は15世紀中頃から後半代に位置づけられる。白磁では，アーチ状高台を持つ皿が出土している。鎬蓮弁文碗など若干古い様相を持つ青磁類が出土しているが，概ね輸入陶磁器は，15世紀中頃から後半期の時期に編年されるものが多い。さらに国産陶器については，備前焼がその多くを占めている。細片であるが瀬戸・美濃系の天目茶碗が出土しており，小規模城郭でも出土している点が注目される。備前焼は，壺・甕・擂鉢類が出土しており，甕は口縁部幅広の玉縁状を呈するものや，擂鉢では口縁部の幅が肥厚するものなどがみられ備前焼の編年でⅣ期の特徴を有する。これら出土遺物は，堀切状遺構を除けば曲輪2からの出土が多く，検出遺構からもハナノシロ城跡のなかでは生活空間としての中心的な曲輪であったと考えられる。

中村市では，城跡の調査が比較的多く実施されている。中村市で現在確認されている71城郭の中で，長宗我部氏が土佐を統一する段階でその多くの城跡が廃城になり，長宗我部氏の中心的城郭として中村城跡が存在することになる。その他栗本城跡や扇城跡等のように一時期渡川合戦時に再利用された城跡を除けば，塩塚城跡をはじめその他多くの城跡は，ハナノシロ城跡と同時期に機能していたと考えられる。

[参考文献]

（1） 上田秀夫　1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 NO 2』日本貿易陶磁研究会

（2） 岡本健児　1974年「渡川城跡の発掘調査」『土佐史談』137号　土佐史談会

（3） 岡本健児　1984年「土佐神道考古学・土器（かわらけ）考」『土佐史談』166号　土佐史談会

（4） 岡本健児　1989年「元親の城と瓦生産」『長宗我部元親のすべて』新人物往来社

（5） 小野正敏　1982年「15～16世紀の染付碗　皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 NO 2』日本貿易陶磁研究会

（6） 小野正敏　1991年「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社

（7） 北野隆亮　1990年「15・16世紀貿易陶磁器－1980年代の編年研究を中心として－」『貿易陶磁研究 NO10』貿易陶磁研究会

（8） 木村剛朗他　1985年『栗本城跡』中村市教育委員会

（9） 藤沢良祐　1991年「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社

(10) 前川　要・千田嘉博・小島道裕　1991年「戦国城下町研究ノート」『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集

(11) 真壁忠彦・藍子　1966・1967年「備前焼研究ノート(1)~(3)」『倉敷考古館研究集報』1・2・5 倉敷考古館

(12) 間壁忠彦　1990年「備前焼」『考古学ライブラリー60』ニューサイエンス社

(13) 松田直則　1985年『中村城跡』中村市教育委員会

(14) 松田直則　1987年「高知県に於ける中世土器の様相」『中世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会

(15) 森田　勉　1982年「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 NO 2』日本貿易陶磁研究会

(16) 森田尚宏・松田直則・岡本桂典　1989年『岡豊城跡第1～5次発掘調査報告書』高知県教育委員会

(17) 森田尚宏　1992年『扇城跡』㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター
(18) 森田尚宏　1992年『岡豊城跡Ⅱ－第６次発掘調査報告書－』㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター
(19) 由上雅弘　1990年「戦国時代の山城－西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について－」『中世城郭研究論集』新人物往来社
(20) 山本　大　1972年『高知県の歴史』山川出版社
(21) 山本哲也　1987年　『塩塚城跡』中村市教育委員会
(22) 横山勝栄　1991年「山間地域の小型城郭」『中世の城と考古学』新人物往来社

付章

中世江ノ村の復元

松田直則

1．はじめに

中村市江の村は，今回中村宿毛高規格道路の建設が計画され，村として持ち合わしていた村落景観が大きく変わろうとしている。我々が高規格道路建設に伴う発掘調査に入る頃の江の村は，石井進氏の言葉を借りれば「中世の村とは，それほど遠く，はるかな存在でもない。われわれの身近に，まだ案外にも残っているものなのだ。[1]」まさにそんな言葉で表現できるほど，のどかで中世の景観を感じることができる静かな農村であった。

近年高知県でも，各地で大規模に推進されている圃場整備事業で，過去を解読する貴重な手がかりが破壊されているのが現状である。その中で中村市江の村は，高知県のなかでも過疎地域であるがゆえ，開発からも逃れてきているところであり今日に残る伝承や慣行，地名など中世以来の要素がまだ生き残っている地域と考えられる。

今回高規格道路に伴う江ノ古城跡とハナノシロ城跡の発掘調査成果をもとに，城郭研究及び長宗我部地検帳と地籍図の検討を含め，中世江ノ村の復元にアプローチしていきたい。

2．歴史地理学的アプローチ

高知県では，長宗我部地検帳が中世を研究する上で欠かせない文献資料である。歴史地理学的研究は，小林健太郎・島田豊寿氏によって，長宗我部地検帳と地籍図を利用した中世城下町の研究が進められている。[2] ここでもこれら歴史地理学的方法論を援用していきたい。江ノ村も天正17年に検地が実施されている。山田郷内江ノ村地検帳によると，当時の江ノ村はハサマノ村，江ノ村，牛ノ谷村，久木ノ村の小村から構成されている。[3] 検地面積は，140町７反余りのうち屋敷数が88で居屋敷が56となっている。江ノ古城跡とハナノシロ城跡の調査に入る段階で，城跡と集落の関係を捉えていくために明治年間作成の地籍図を取り寄せ長宗我部地検帳との検討をしていると，この江の村は当時の小字が多く残っている場所であることがわかった。さらに開発といえば中筋川の付け変えのみで圃場整備による開発も進んでおらず中世の景観を復元していく上で地名を活用していける地域であることもわかった。ここでは，現地踏査や聞き取りまでの詳細な調査はできなかったが，歴史地理学的な方法論の一部を援用し江ノ村の中世景観復元の基礎資料としたい。

遺跡No	遺跡名	種別	時期
1	久木ノ城跡	城跡	中世
2	西ノ谷城跡	城跡	中世
3	西ノ谷遺跡	集落跡	弥生～古墳
4	ハサノシロ城跡	城跡	中世

遺跡No	遺跡名	種別	時期
5	江ノ村遺跡	集落跡	弥生～古墳
6	江ノ古城跡	城館	中世
7	江ノ日本杉遺跡	散布地	中世
8	手越谷等	墓	中世

Fig. 59　江の村所在遺跡群

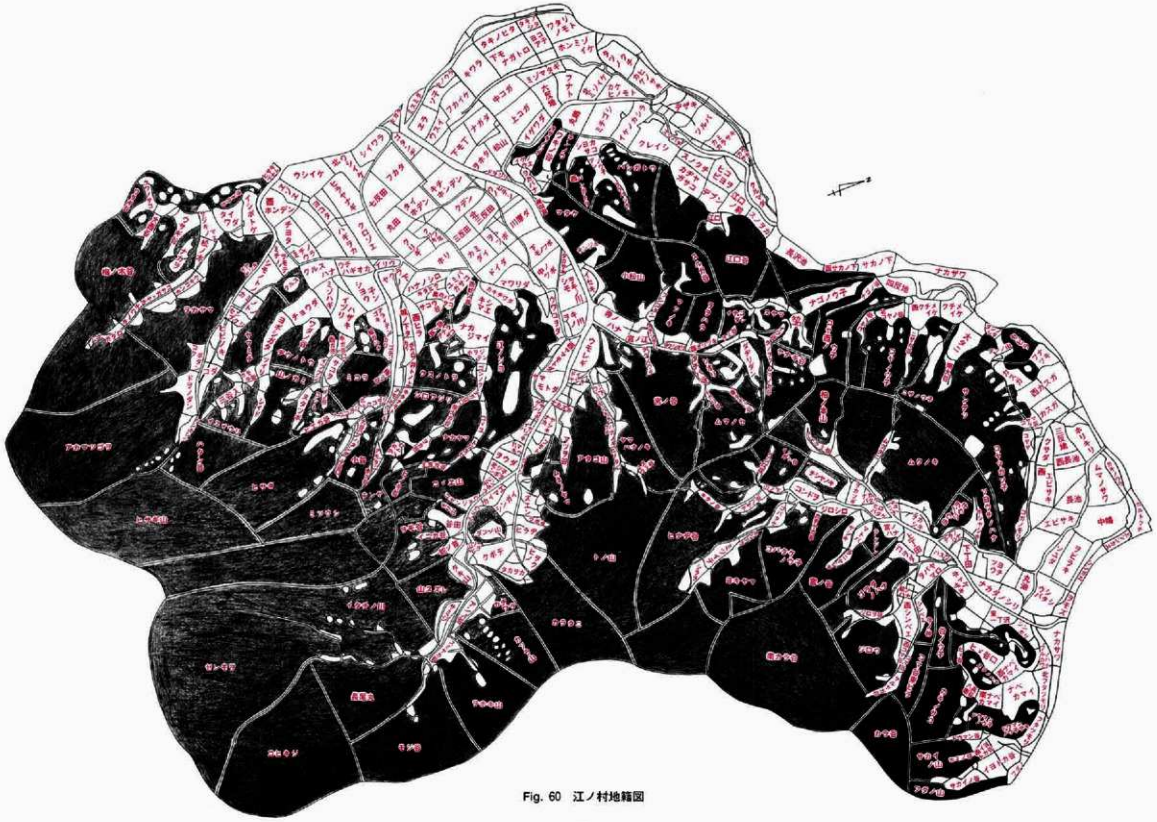


Fig. 60　江ノ村地籍図

3　長宗我部地検帳と地籍図の検討

昭和52年測量の，5,000分の1の地形図をベースに法務局から取り寄せた明治20年前後に作成した地籍図を参考に復元し，小字境界図（Fig. 61）を作成した。復元した小字境界図は，作成段階で現地形を踏査して精査をしていないため不備な点が多く存在するかも知れないことをお断りしておく。さらに山地部の境界を確定することは困難で，概ね稜線・谷筋を利用して復元している。中筋川の改修等で地形が改変されている地域は，現状から境界を確定することが難しく推定の域をでない。しかし隣接する磯ノ川村・生ノ川村・荒川村の境界は中筋川となっており，自ずと江ノ村を復元すると旧中筋川が復元できることになる。地籍図は，法務局所蔵の字図を中村市税務課が転写していることから法務局所蔵の字図複写・複写の縮小等を行いさらに中村市税務課所蔵の字図を照合し参考にした。[4] この地籍図の小字名と区画を参考に小字境界図を5,000分の1の地形図にあわせて小字境界復元地図（Fig. 62）を作成した。この段階で現地の踏査と地元住民古老の聞き取り調査を実施しているとさらに完璧なものになり得たかも知れない。長宗我部地検帳と地籍図の検討をしていくが，検地の単位とホノギについて若干述べておきたい。

検地の単位は，「反・代・分・勺・才」を使っている。1反は50代，1代は6分で勺・才には単位の数は付かない。この中で特に「代」は，中世的な単位である。長宗我部氏による「長宗我部地検帳」では，この単位が使用されるが同時期に行われた他地域の「太閤検地」では「反」の次ぎに来る単位として「畝」が使用されている。「畝」は現在に至るまで土地を測る単位となっているが，土佐においては長宗我部氏の後入国した山内氏に至っても「代」の単位を使用しなくてはいけない背景が存在したようである。明治になって地租改正による強制によってはじめて「畝」が単位として登場することになる。「代」が「畝」の代わりに使用されなかった背景には，「土佐」の持つ特殊性が想定できる。それは生産力が他地域に比べて低い段階から抜け出せなかった点がまず挙げられ，中世的な土地所有関係が解消されなかったこと等とされている。それゆえに中世的土地所有関係も含めて把握できる点に長宗我部地検帳の意義と重要性が指摘されている。[5]

ホノギは土佐では特に多用する特殊用語である。竹村義一氏[6]によると土地の一区画を言い面積はだいたい小字ぐらいとされ，大字や小字と言う場合には人家のある集落全体をさし，ホノギの場合は屋敷・畠・田・林地・雑地などの地目で土地そのものを指して言っている。さらに「地籍一筆の見出しの働きをする小冠書」のこととされており一筆の土地をそれと明確に把握させるための指示作用に本質があるとされている。ここでは長宗我部地検帳で読み取れる地籍の小冠書を「ホノギ」の名称で使用し，明治年間の現地籍地名を「小字」として説明をしていくことにする。17－30表までのホノギ・小字一覧表を作成したが，[7] これは地検帳記載のホノギと明治年間の地籍図にみられる小字を検討し比定できる地点を照合し，検地を実施した月・日順に地検帳記載の水田・畠・屋敷・荒地で区分し面積を掲載している。

4　中世地名の復元

天正17年10月29日から11月17日まで実施した山田郷内江ノ村地検帳から詳細な中世地名を検討していきたい。ホノギ・小字一覧表及び小字境界復元地図（Fig. 62）をもとに，検地日ごとに見ていきたい。小字境界復元地図は，11月１日に検地を実施したホノギでスノクチ，現地継地名(以下小字とする)でスノヲカに比定できる地点から復元をしている。検地日は，Fig. 63の検地実施日復元地図を参照していただきたい。

1）10月29日検地分

地籍図（Fig. 60）では江ノ村全体を掲載しているが，ここではハサマノ村は割愛し江ノ村から検討していくことにする。江ノ村は，ホノギでカスカの地点からである。小字境界復元地図をこの地点は作成していないが，概略をみていくことにする。ホノギのカスカからイチフチ江ノ渕まで検地している。小字でカスカはカスガ，タンノ山はダンノ山と考えられ，□タリノモトおよびイチフチ江の渕の小字は不明である。この地点は荒地が大部分で28反43代を占めている。屋敷としてタンノ山で下々山畠ヤシキと記載されており，合計３反２代である。下々山畠とされタンノ山と記載されていることから山であることがわかるが，簡単な山小屋程度のものが存在していた可能性がある。水田はカスガで４反21代３分と記載されており，すべて下々田であるため荒地に近い田であることが想定できる。タンノ山の次ぎに□タリノモトとイチフチ江ノ渕は，現小字では不明であるが，小字でカスガの隣接する地点にフナツキの名称が確認できる。□タリノモトをワタリノモトと仮に読むとすれば，中筋川を渡る「船の着く場＝フナツキ」と理解し，このフナツキがワタリノモトと推定することができる。

2）11月１日検地分

検地では，大谷から船戸まで実施している。ホノギで大谷と記載されている地点は，下々山畠と荒地が大半である。下々山畠と記載されている地点は，１反10代５分であり荒地はその他すべてで８反33代にもなる。このホノギで，大谷は小字で大谷及び南ヲウ谷となっているところで，小さな谷地形を呈している場所である。この北側部分は中筋川の氾濫原の荒地と考えられ，下々山畠と記載されている地点は山側に近い小字で南ヲウ谷付近と考えられる。次に検地されている場所は，クチメ□と記載されているが，小字で大谷に隣接するクチメ池があたるであろう。クチメ池は，隣接して西クチメ池や，細い谷部であるがニザカ谷も含まれると考えられる。クチメ□は，荒地が６反26代４分となっているが北側の中筋川の氾濫原も含めた面積と考えられる。ホノギのセビラが10反以上の荒地面積を有しているが，小字ではこの名称では確認できない。しかしスノクチの地名を考えると，小字の四反地・ナカザワ・サカノ下・西サカノ下・長沢池と想定でき，中筋川の広い氾濫原を想定できる。スノクチはスノヲカに比定でき

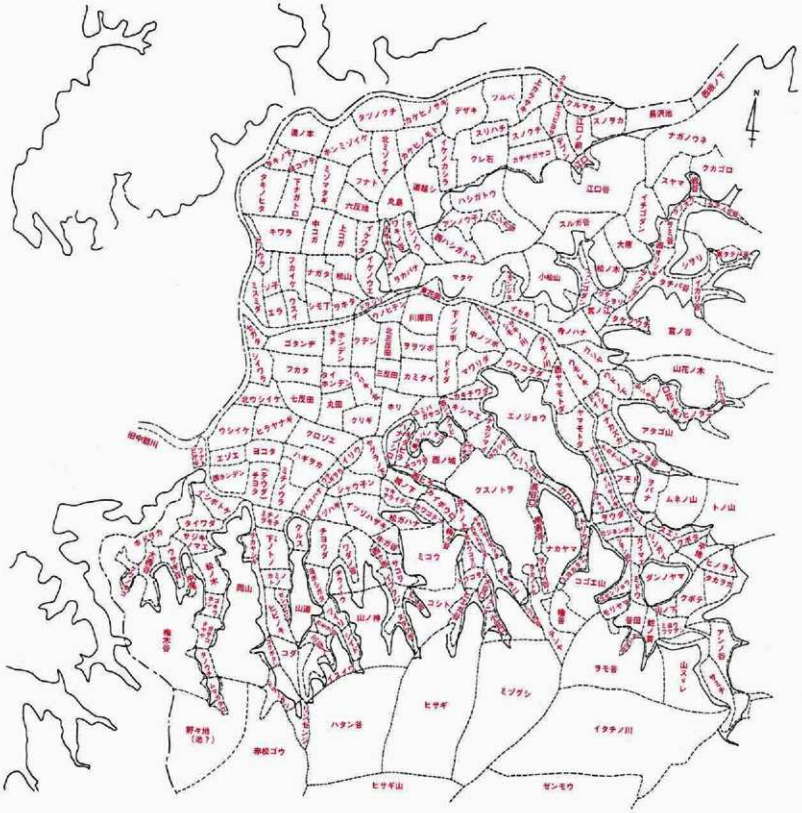


Fig. 61　江ノ村小字境界図

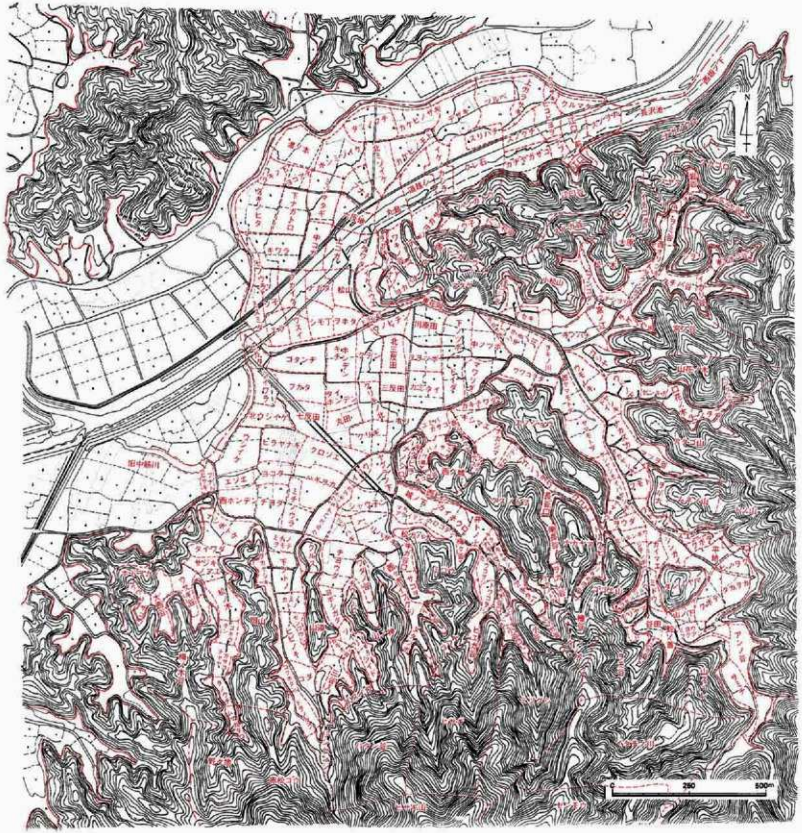


Fig. 62　江ノ村小字境界復元地図

る。この地点から，小字界復元地図を作成している。このスノクチから土地が広がってくる。ホノギの江クチノ谷は，小字で江口ノ前・江口に比定できる。小字の江口ノ谷は山部分でこの地をいれると面積的に照合できない。山裾部分である江口付近が，検地で下々山畠で２反47代５分の面積を有する地点と考えられる。

検地では再びスノクチに帰ってくるが，荒地で15反２代２分の面積を有している地点である。小字でスノクチが残っているので，その周辺部のヒコビヨヲ・デブン・カヂヤガサコも含まれていると考えられる。クレ石に関しては小字でクレ石が残っており水田は下々田が２代と少なく，他は荒地で13反30代の面積を有する。山裾部分であるが荒地が多いようである。カラサキは小字でカラサキと上カラサキが比定できる。しかし荒地として記載されている面積をみると35反46代と広い面積を検地している。クレ石の面積の約２倍以上である。西隣のツルベ・デザキ・カケヒノサキも含まれていると考えられる。ここで重要な点は，船戸の名称である。ホノギでも小字でもフナトが確認でき，地検帳では下々田１反35代と記載されている。周辺では荒地が多く存在しているのにこの地ではまとまった田が確認できるのである。これらのことは，検地以前には荒地と区別できる土地が存在していたことであり，地名から推測すると川舟の停泊地に係わる建物跡などが残存していた可能性を示す。11月１日検地分の地目別総面積をみてみると水田が２反25代１分，畠が６反２代４分，荒地が145反７代１分となっており，ヤシキは認められずフナトを除いたら荒地がほとんどで，中筋川の氾濫原が多い土地であることが推定できる。

3）11月２日検地分

前日に実施した船戸から検地を実施している。この船戸も下々田として２反24代８分の面積が記載されている。前述したが江ノ村本集落と係わりのある船着場と考えられる。次ぎに地検帳ではシゾキカギニ人と記載されているが，これはフナト西隣のミゾマタギになるのか地検帳原本との検討が必要である。地検帳で「東ダ道ゴシ」と記載されている地点は，現地名では確認できない。しかし次ぎに「同じ西四反地」とあり，小字の六反地に比定できるかも知れない。次ぎのタキノ下は，小字でもタキノ下・タキノシタがあり比定できる。ホノギでシマ池は不明で，ソネはソ子，エラはエラとでてくる。その他ホトコロは不明で，フカ池・ナガタ・ナカトロは比定できる。ヨコアテは11月１日に検地した場所に帰っている。コガノ丁は，小字で同じ名称は認められないが，上コガ・中コガが類似した名称であることからこの付近に比定できると考えられる。その後検地では再び船戸とコガノ丁に戻っている。この日に検地した土地は，船戸とコガノ丁には水田が記載され水田総計10反３分となっている。その他畠及び屋敷はまったく存在していない。荒地が100反16代１分記載されているようにその大部分は，中筋川に近い氾濫原が多いことを読み取ることができる。

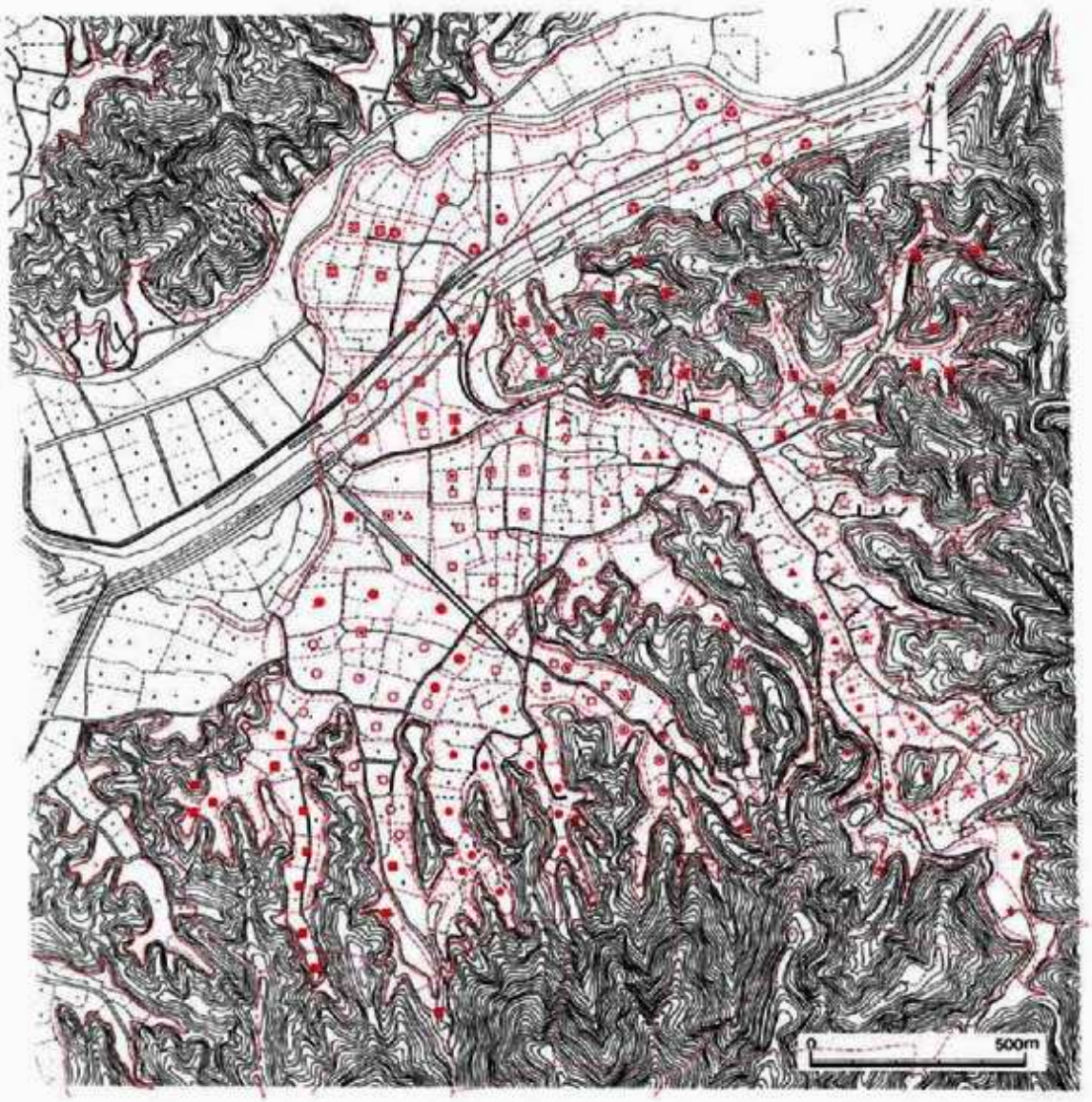


Fig. 63　検地実施日復元地図

4）11月3日検地分

コガノ丁から宮ノサキまで検地を実施している。このあたりから荒地が少なくなり水田及び屋敷の記載が多くなっている。水田は87反8代2分，畠が7反33代3分，屋敷が18反40代4分，荒地が15反14代2分となっている。この検地日から中筋川の氾濫原の荒地をほぼ終了させ丘陵

部の谷部にはいりこみ，屋敷を構えることができる土地になっていることがわかる。コガノ丁は，前述しているが上コガ・中コガに比定できこの土地からウハシガ谷までは，下・下々田と記載されているところが多い。ヲカハナから長法寺までは，屋敷が多く記載されている。下屋敷が多い中で，長法寺のみ中ヤシキである。寺院関係では，その他に吉祥寺の名称も見えるがこの地は下ヤシキと記載されている。寺の下から宮ノサキまでは，ホノギで竹ノ内ヤシキとして一筆のみ下ヤシキが記載されているのみで，他は水田・畠・荒地が多くなっている。これらの点に関しては検地が，谷平坦部に入っていることから理解できる。

5）11月5日検地分

11月4日は，検地を実施していない。11月5日はホノギで宮ノサキからユハタヲシまでである。この検地日の土地は，五社大明神が所在している地点であり，屋敷の記載も多いが，小字との比定も不明なところが多い。水田は，下・下々田も存在するが中田もみられる点が特徴である。水田の合計は，7反37代である。畠は下々畠で，計2反28代と少ない。屋敷は，中ヤシキが5ヶ所でその他下・下々ヤシキもみられ14反40代1分である。荒地も11反29代であるが屋敷面積より狭い。ホノギでトイヤシキで現地名でドイヤシキに比定できる土地は，2反10代5分の面積を有し中ヤシキの中でも一番広い点が注目される。中ヤシキの記載地点は，五社大明神が所在する場所に近く，この土地周辺が江ノ村の中心集落と考えてよいであろう。江ノ村集落の中心を流れる小河川を挟んで対岸の丘陵には，中世城郭の江ノ古城跡が構築されており，この地周辺は城主である江氏の屋敷跡の可能性も想定できる。

6）11月6日検地分

ホノギでは，フモトヤシキからスミタまで検地している。ここでは万福寺の寺名がみえ，小字ではフモト内に比定できると考えられる。この土地は，水田が14反24代程存在し，屋敷も14反7代とほぼ同じ面積を有している。この土地は，荒地及び畠地は1反もみられず水田と屋敷がみられることから，江ノ村の中でも本集落の一部を占める土地であることがわかる。ホノギで，クボタヤシキから高岡までは，下・下々ヤシキが8ヶ所を占め屋敷の密集地帯であることがわかる。その中でも，フモトヤシキから万福寺にかけての下・下々ヤシキは万福寺に関係する寺屋敷の可能性もある。この日の検地は，前日の検地地点より谷部に入り込んでいることがわかる。

7）11月7日検地分

ホノギでタンヤシキから松モトヤシキまで検地している。この日の検地は，江ノ村本集落が形成されている谷部の奥に位置する。各地目別の面積は，水田が15反48代でありその多くを占めている。その他畠地が4反24代3分，屋敷が7反41代1分，荒地が11反21代である。これら

の中で，下・下々ヤシキと記載されている場所は，江ノ古城跡が構築されている丘陵の南側裾部に集中している。この屋敷集中地点の小字は，カイマエ，シンカイ，ヲウダになる。この地域でもホノギでハンフクジの名称が確認でき，寺院が存在していたことがわかる。小字ではハンフクジの名称はみられないがイニカ谷内に所在していた可能性がある。

8）11月8日検地分

ホノギでユハヤシキからチヒキノヲまでを検地している。下と中ヤシキの記載がみられるが，ホノギのユハヤシキがイバヤシキに比定できるのみで，他は小字との比定が不明である。しかし小字でイバヤシキに隣接してゲシヤシキの名称が確認でき，さらに小河川を挟んで対岸にはナカヤシキなどもみられる。この周辺は，江ノ古城跡の東側の平坦地で屋敷を構える場所としては適している。この日に江ノ古城跡が所在する丘陵も検地している。城跡部分の丘陵のホノギは，江ノ古城ツメノタン・二ノ塀・東二ノ塀・三ノ塀の記載がみられる。

9）11月9日検地分

江ノ古城跡が構築されている丘陵の南側に，谷部を挟んで同じように西側に突出する丘陵がのびる。この丘陵の西端部には，西ノ城と記載されている場所や，ハナノシロ城跡が構築されている。11月9日は，この丘陵を取り囲むように検地を実施している。地目別の面積は，水田が6反25代，畠地が2反15代，屋敷地が6反35代2分，荒地が15反22代4分である。この場所も，下ヤシキが4ヶ所記載されているが，小字では不明な箇所が多い。前日の検地場所と屋敷面積は変わらない。屋敷としてホノギで記載されているトウコウシヤシキは，小字でトウコウジ・北トウコウジに比定できる。ホノギで大谷と記載されている地点の不明な屋敷は，小字で大谷口となっている場所あたりが大谷に比定でき，屋敷もこの場所付近と考えられる。ホノギで西ノ城の記載がみえるが，小字も同様で城跡が発見できる可能性もあり，踏査を実施したが城郭としての遺構は確認できなかった。

10）11月10日検地分

ホノギでメウカイダから，古城とされる地点まで検地を実施している。ホノギで古城とされている地点は，発掘調査を実施したハナノシロ城跡である。この日の検地は，丘陵先端に構築されているハナノシロ城跡から北側部分を中心とした場所である。地目別の面積は，水田部分が62反11代3分と大部分を占めており，畠地が2反6代と少なく荒地が11反13代となっている。水田は，小字で中ノツボからヲヲツボに比定できる地点で，中田が多く存在し上田も2反近く認められる。この地の特徴としては，屋敷がまったく認められないことである。畠地で2反6代と記載されているが，この面積はハナノシロ城跡の各曲輪の平坦面とほぼ同じ面積になる。ハナノシロ城跡は，検地段階ではすでに廃城となっており下々山畠となっている。発掘調査の

結果でも，出土遺物から機能した時期を考察すると15世紀後半から16世紀前半代であることが解明されているので，文献面と一致する。

11）11月11日検地分

ホノギでヒキヂからスミタまで検地している。小字では三反田やキチホンデン，フカダを中心とした場所である。この地も屋敷・畠地はまったく認められない。地目の面積は，水田が61反30代1分と前日の10日検地分とさほど変わらないが，荒地が21反43代と多くなっている。これは中筋川の氾濫原に近くなっていることが考えられる。さらに水田においても下々田が多い。

12）11月12日検地分

ホノギでクリノ木からシャウ子ンまで検地している。この場所は，ハナノシロ城跡の西側部分にあたり，城に係わる地名では，小字でもホリ・ヤクラノ下・城の下等の名前が残り，これらはハナノシロ城跡に係わる地名と考えられる。地目の面積をみると荒地は非常に少なく45代で，水田は50反45代，この中でも下・中田が多くなっている。畠地は，小字でホリの部分で15代認められる。屋敷はまったく認められない。

13）11月13日検地分

ハナノシロ城跡からみて，南側谷筋に入った平坦地である。ホノギでカマタからカモウ谷まで検地している。小字でイツリハザキやチョウダなどがみられる地点から，奥に谷部が2ヶ所に分かれている。ホノギでウシノ谷口からニシカイチまで，畠地や屋敷が記載されている。この地域は，小字で牛ヶ谷口から西ヶ市に比定でき，現在でも数軒の人家が所在しており，屋敷の記載が4反6代みられるがこの場所に当時も屋敷が構えられていたと考えられる。水田は，45反15代4分と記載されており上田から下々田まで存在する。小字でイツリハザキ・松ガハナ及び牛ガ谷口にかけて上田がひらけている。畠は1反22代4分で荒地も1反36代5分と少ない。

14）11月14日検地分

ホノギで神地から牛イケまで検地している。検地が始まる神地は，小字の比定はできない。しかし次ぎに検地している場所が，ホノギではクルスノハナで小字を検討するとクルスハナに比定できると考えられる。現地形図と照合すると，クルスハナの場所に現在でも神社が存在している。これらのことから，神地のホノギは，小字でクルスハナの一部神社地と推定できる。この地域は，水田と荒地がほとんどで水田が37反21代で，荒地が22反2代程記載されている。水田は，上田から下々田まであり上田から中田は神社地前の北側部分と考えられる。下田から下々田にかけては，中筋川の氾濫原に近い場所を想定でき，小字ではヒラヤナギあたりになる。さらに川岸になると荒地になる。この荒地は，小字でシイワラ・ウシイケあたりである。

15) 11月16日検地分

11月15日は検地されていない。16日は，ホノギでホドヲカからカミノトノまで検地している。

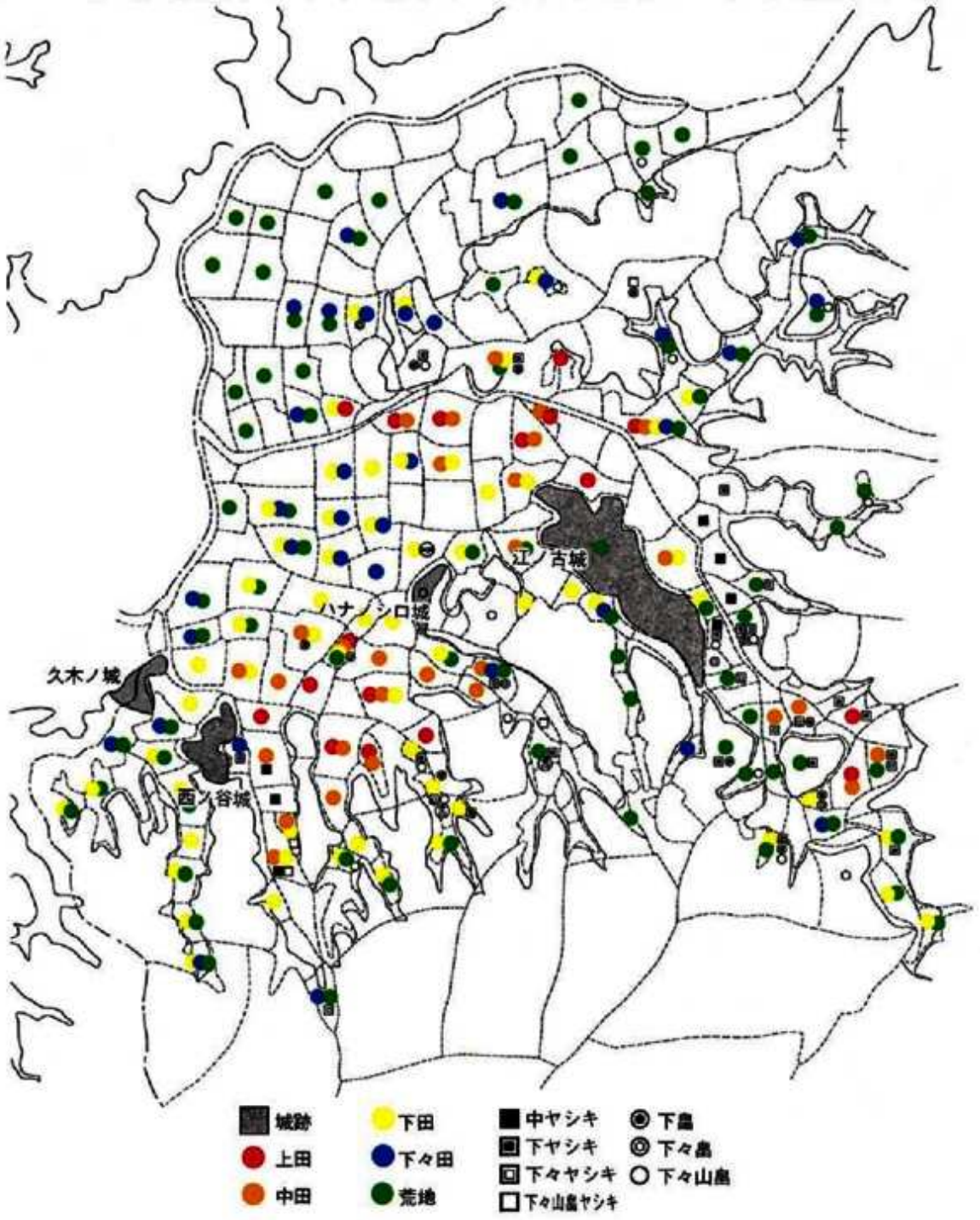
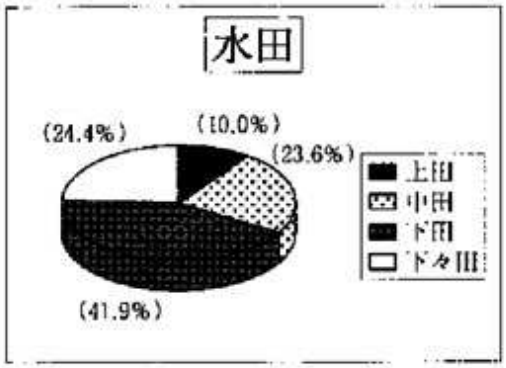


Fig. 64　長宗我部地検帳地目内訳図

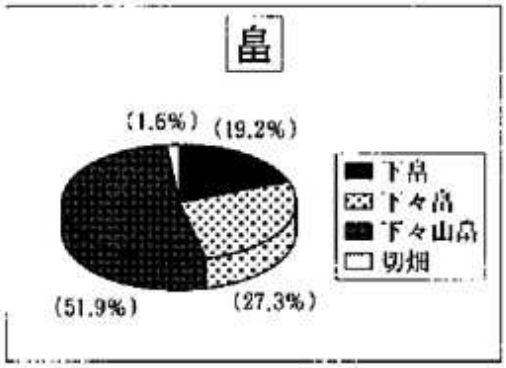
水田

	反	代	分	勺才	%
上田	57	26	2	1/2	10.0
中田	135	24	3	4/1	24.4
下田	240	7	1	0	41.9
下々田	140	3	5	4/1	24.4
合　計	573	12	0	0	



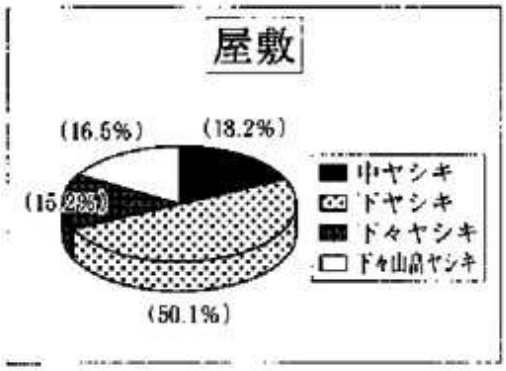
畠

	反	代	分	勺才	%
下畠	6	10	5	2/1	19.2
下々畠	8	41	2	0	27.3
下々山畠	16	39	2	4/1	51.9
切畑	0	25	2	0	1.6
合　計	32	16	5	3/4	



屋敷

	反	代	分	勺才	%
中ヤシキ	14	47	4	0	18.2
下ヤシキ	41	9	1	0	50.1
下々ヤシキ	12	23	4	0	15.2
下々山畠ヤシキ	13	27	4	1/2	16.5
合　計	82	8	1	1/2	



地目別割合

	反	代	分	勺才	%
水田	573	12	0	0	52.7
畠	32	16	5	3/4	3.0
屋敷	82	8	1	1/2	7.5
荒地	400	29	4	1/4	36.8
合　計	1,088	16	5	1/2	

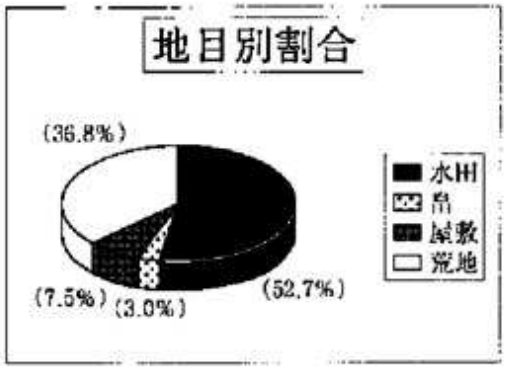


Fig. 65　江ノ村地目別割合グラフ

この地域は，すべて久木ノ村にはいっている。水田がその多くを占め，62反39代の面積を有する。中でも上・中田が多く存在し，良好な土地が多い点が特徴である。畠地は少なく１反も存在しない。屋敷地は，ヲカヤシキ・シモノトノ・カミノトノなどをあわせて２反30代程みられる。センプクジというホノギがみられるが，小字でもゼンフクジの地名が認められ寺が存在していたことが窺われる。しかしこの地は，屋敷の地目でも等級が下々屋敷となっており，10代程の面積であることから当時寺が存在していても小規模なものであった可能性が強い。

16) 11月17日検地分

この日の検地は，久木ノ村の中心部にはいっている。ホノギで城ノシタから糸ノサコまで検地を実施している。この地域では，城跡の存在を窺わせる城ノシタのホノギがみえることから分布調査で周辺の踏査を実施している。小字で岡山の場所で西ノ谷城跡，梅ノ木谷の丘陵先端部で久木ノ城跡を確認している。さらにホノギ・小字共にリンセン寺という名称が残り寺が存在していたことがわかる。前日検地分のゼンフクジとあわせて久木ノ村には計２ヶ所の寺院があったことになる。これらホノギのなかで，城ノシタからリンセン寺まで屋敷地が集中しており，中・下・下々ヤシキ等３反27代程の面積を有している。これら屋敷群は，西ノ谷城跡を構築した在地勢力の屋敷群と捉えても可能であろう。水田をみても屋敷が記載されている場所は，中・下田が多く，その他は下・下々田となっており水田の合計は59反29代程を有している。

5　中世江ノ村の景観

長宗我部地検帳と地籍図を元に，中世江ノ村の詳細地名を検地日ごとに特徴的な面をみてきた。ここでは，Fig. 66で中世江ノ村の復元を試みたが，城郭と集落の配置から神社・寺・船着場の関係を歴史地理学・考古学・城郭研究の面から予察し，土佐に於ける中世小村の風景を描き出してみたい。まず地検帳では，ハサマノ村，江ノ村，牛ノ谷村，久木ノ村の小村から構成されているが，今回は小字境界復元地図をもとに 江ノ村から久木ノ村までを対象に見ていきたい。

考古学の研究として，この地域では平成元年に江ノ村遺跡の発掘調査[8]が実施されている。その他は，今回実施された西の谷遺跡，江ノ古城跡，ハナノシロ城跡である。江ノ村遺跡では，弥生時代から古墳時代と中近世の遺構・遺物が出土している。中近世の詳細をみると，掘立柱建物跡と溝跡・ピット群が検出されている。出土遺物から，13～14世紀と15世紀代，近世の18世紀代に大きく分かれる。掘立柱建物跡は，一部調査区外で規模までは不明であるが柱穴の並びから確実に建物跡が存在していたことは間違いない。出土遺物を検討すると青磁盤や白磁の碗，染付皿などが出土している。その他建物周辺のピットの遺物を見ると東播系須恵器等が出土しておりやや古い遺物も混入しているが，青磁稜花皿や染付破片等を考えると概ね15世紀代

から16世紀初頭の時期にこの集落が機能していたことを推測することができる。[9] 発掘調査された地点を地籍図の小字でみるとヲカバナにあたる。地検帳のホノギを見ると下々畠や下々ヤシキの記載がみえる。この調査地点が地検帳記載の下々ヤシキ地点に照合できるかどうか検討しなければならないが集落の一部である点と，さらに検地の約100年以前から輸入陶磁器も入手できる階層の屋敷が存在していたことは確実である。その他考古学的研究は，本報告書に成果が掲載されているためここでは割愛したい。

城郭研究では，江ノ古城跡を中心に縄張り調査がなされている。西ノ谷城跡と久木ノ城跡については，縄張りの詳細を今回掲載できなかった。西ノ谷城跡はハナノシロ城跡よりやや規模の大きい山城で，4ヶ所の主要な曲輪で構成され主郭は堀切で守られている。久木ノ城跡はその支城と考えられ，この地域では最も小規模な城跡である。ハナノシロ城跡と同様に，丘陵の先端部に構築されており，丘陵の谷部を堀切として防御機能を持たせている。江ノ古城跡・ハナノシロ城跡は江ノ村に構築されており，西ノ谷城跡・久木ノ城跡は久木ノ村に所在する。これら現江の村で確認できた城跡を見ていると，江ノ村と久木ノ村の中心的集落を防御する目的で構築された城が江ノ古城跡と西ノ谷城跡で，ハナノシロ城跡と久木ノ城跡は本城に伴う別の役割を果たした城として考えられないかどうか，城郭を中心とした村の景観を復元しながら予察をしてみたい。

ここで江ノ村の中世をみていくが，考古学の研究では，江ノ村遺跡やハナノシロ城跡が最も機能した年代は15世紀後半から16世紀前半代であることが出土遺物から言え，さらに江ノ古城跡も同様の年代を考えることができる。長宗我部氏の検地は，天正年間で16世紀末の年代である。両者の研究をあわせて考えるには年代的な差が100年前後認められ，正確な同時代の景観復元は現段階では不可能である。しかし，両城跡は地検帳では廃城となっており考古学的研究成果と一致する。地名の復元にしても，現在まで中世の地名が残存している点や地形も著しい変化が認められないことから，当時の100年前後の差は中世の村の復元をしていく上で大きな支障は認められないと考える。

Fig. 64では，城郭を中心としてみた長宗我部地検帳記載の地目別内訳図を作成した。江ノ古城跡を中心として江ノ村の地目を見ると，江ノ古城跡の東側谷地形では屋敷と記されている場所が20ヶ所認められ江ノ村の本集落であることは一目瞭然で理解できる。屋敷が集中する地点は，高知県が実施した分布調査でも土師質土器片や青磁破片が表採されており，江ノ村本村遺跡の名称で埋蔵文化財包蔵地として周知されている。[10] さらに上田・中田・畠もみられ小村の景観が窺い知れる。谷地形の奥部になると下田や荒地が多くなる。ハナノシロ城跡の南側谷地形では，軒数も少なくなるが下々ヤシキが3ヶ所記載されているのみである。久木ノ村に所在する西ノ谷城跡をみると，江ノ古城跡と同じく東側谷地形に屋敷と記載されているところが7ヶ所認められる。さらに周辺では，中田が多く北側には上田も広がる。西ノ谷城跡の支城と考えられる久木ノ城跡の南側谷地形では，下田・下々田・荒地がひろがり屋敷は認められない。

各城跡に係わる屋敷関係をみていくと，江ノ古城跡が20ヶ所でハナノシロ城跡が3ヶ所である。久木ノ村に所在する西ノ谷城跡と久木ノ城跡は7ヶ所と0ヶ所となる。さらに地検帳記載の面積をハサマノ村を除き，江ノ村・牛ノ谷村・久木ノ村を比較すると，江ノ村が754反2代，牛ノ谷村が60反49代，久木ノ村が150反15代である。これらの数字で単純に比較はできないが，牛ノ谷村には城跡が存在しないことから久木ノ村と面積をあわせれば，江ノ村の約1／3に近い数字がでてくる。現段階の資料では，詳細な点まで言うことはできないが村として規模の比較をすることが可能である。江ノ村の規模は，久木ノ村の約3倍近い面積を有し，地目で田畠をみても同様であることから村としての生産力も推定可能となる。さらに屋敷数もそれに近い数字がでてくる。城郭の規模も江ノ古城跡と西ノ谷城跡の縄張りを比較すると自ずとその差が認められる。城郭の規模・構造は，生産力も含めた，村そのものが持ち合わしている総合的な力に規定されているものかも知れない。これらのことから本地域に於ける15世紀代の小規模城郭の在り方や性格まで追究して行けるのではないだろうか。[11]

当時の中筋川も復元できたが，その周辺は荒地が多く中筋川の氾濫原が多く確認できる。その中で，中筋川を利用した水運に係わる船着場の名称がでてくる。江ノ村では，ホノギでも船戸やワタリノモトの名称が残る。しかし，久木ノ村でのホノギはみられないが小字でヒサギフナトと確認できる。[12]船戸やワタリノモトは，江ノ村集落に係わる河川交通の小河津と考えられる。さらに隣接する久木ノ村ではヒサギフナトがそれにあたるであろう。この場所は，検地の段階では周辺に荒地が多いなか，下々田の記載がみられる点が興味深い。大胆な推測になるが，15世紀後半から16世紀前半代には，この地に河津に係わる施設が存在していたのではないだろうか。[13]戦国時代という社会的背景の中，城郭が機能していた段階では，交通手段である河川を見張ることは重要な意味を当時もっていたであろう。これらのことから，久木ノ村のような小村でも村としての河津を占有した可能性があると考える。城郭の立地と船戸名称が残る場所からみて，久木ノ城跡がヒサギフナトを監視する性格をもっていたのではないだろうか。さらにハナノシロ城跡も同様で，江ノ村の船戸との係わりがでてくる。今後両城跡の縄張り等詳細な検討をしていかなければならないが，堀切等の遺構等で同じ手法を使い城を構築していれば，さらに城郭の性格を考えていく手段になる。

城郭の所在した場所は，長宗我部地検帳を見るとすべて廃城になっており，さらに城跡部分の記載方法にも相違が認められる。江ノ古城跡は，ツメノタン・二ノ塀・東二ノ塀・三ノ塀と記載されすべて下々久荒となっている。ハナノシロ城跡は，古城とのみ記載され下々山畠で2反6代の面積を有している。ハナノシロ城跡の各曲輪の平坦部は，南北の長さが約150mで幅平均して18～23mを測り，下々山畠とされた面積とほぼ一致する。久木ノ村の，西ノ谷城跡で，城の名称がでてくるのは城ノシタのみである。このホノギは，城が構築されている丘陵下の平坦地と理解している。城跡そのものは，小字で岡山とされる丘陵に構築されている。久木ノ城跡は，地検帳にはまったく記載がなく周辺のホノギでも城に係わる名称は見当たらない。以上

現江ノ村に構築されていた城郭は，天正年間にはすべて廃城になっているが，城郭の規模によって地検帳の記載も異なっていることがわかる。久木ノ村所在の２城跡は，構築されていた場所さえ記載されておらず，天正年間にはすでに忘れ去られている。中村市で，中世城郭が71ヶ所確認されているが，各村ごとに江ノ村と同様な城の配置がされている可能性がある。

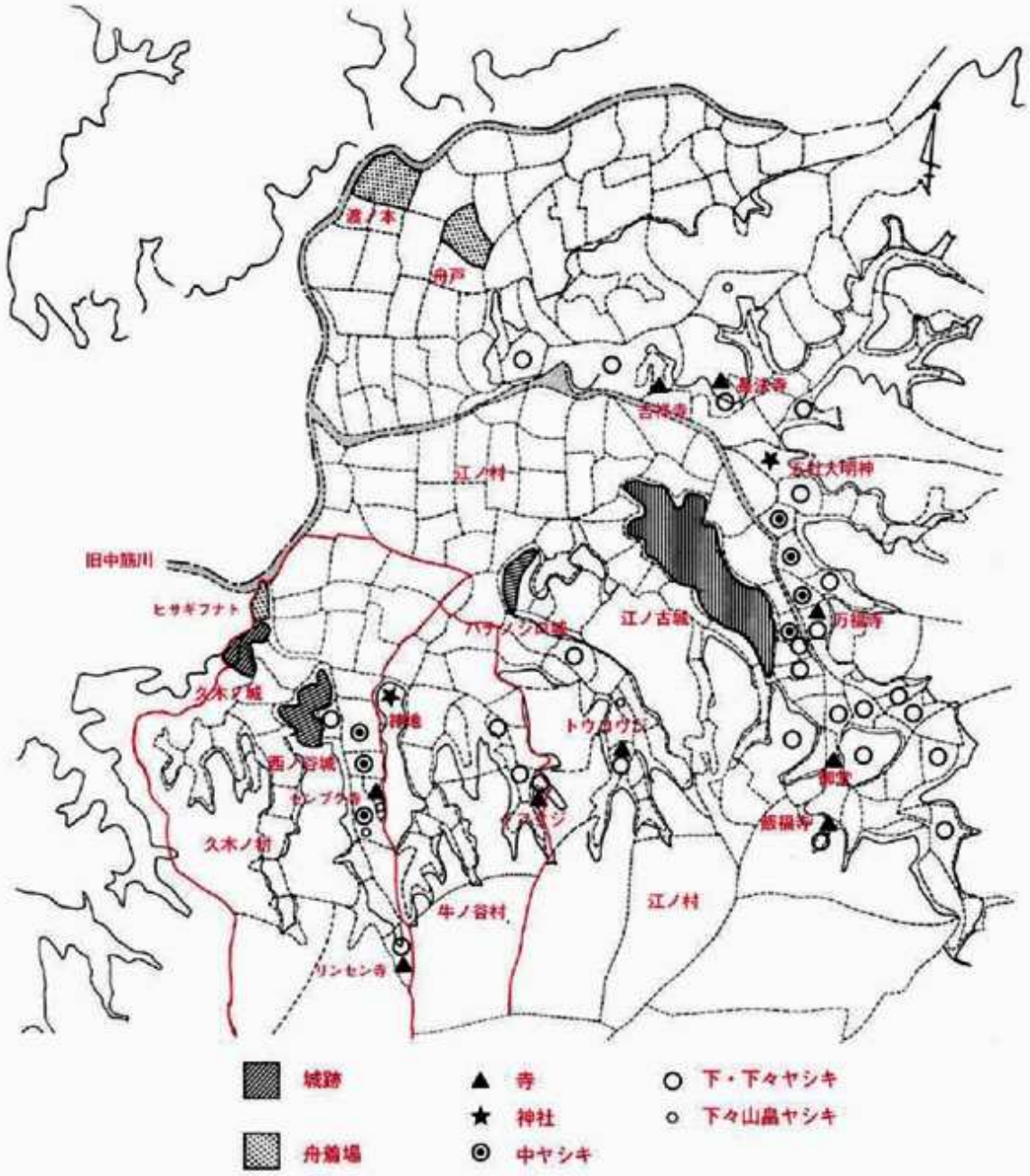


Fig 66　中世江ノ村復元図

江ノ村を含む中筋川流域の諸村は，流域の南北にわたって展開する山田郷内の村々である。山田郷内の村々は，一条氏の家臣の所領であったところが多いとされている。寺関係では，現在でも小松谷寺が所在し五輪塔などが残っている。この場所付近のホノギでは，吉祥寺・長法寺等の寺名がでてき小松谷寺殿給と記載されていることから，現在の小松谷寺周辺に場所比定ができるであろう。小松谷寺殿は，京都の公家で和歌の師として長宗我部氏に招かれた小松谷寺覚桜のことであろうとされている。寺以外でも小松谷寺給地が多くみられるが，長宗我部氏以前の一条氏時代にも保護をうけており，長宗我部氏時代にはさらに優遇されていたようである。[18]江ノ村には，寺と確認できるホノギがその他に万福寺やハンフクジ・トウコウジなどがみえる。さらに御堂は寺に関係する名称と考えられる。牛ノ谷村では，ホノギでイフクジと記載されているが寺であるかどうかは確定できない。久木ノ村では，センブクジとリンセンジの記載がみられ，この名称は地検帳で「寺」がみられるので，この村に２ヶ所の寺院が存在していたことは間違いない。江ノ村や久木ノ村のような小村でも，寺が数多く存在している。これらの寺は，長法寺と吉祥寺を除き，集落の中心に１ヶ所と谷地形の奥まったところに１ヶ所の配置になっている。神社であるが，江ノ村には五社大明神やさらに久木ノ村と牛ノ谷村の境に神地の記載がある。これら記載されている地点を復元すると小字でゴシャとクルスになる。この小字の地点は，現在でも神社が立地しており場所的にも変化はしていないようである。長法寺と吉祥寺は，小松谷寺殿の寺で長宗我部支配後に創建されたものと推定すれば，城・屋敷・寺・神社の配置をみると，一条氏時代城跡が機能していた時期の江ノ村の風景が少なからずみえてくる。

大胆な推論も含まれるが，戦国期の中世江ノ村復元を簡単に予察として述べてみる。江ノ古城跡は，東側谷部の集落を防御するに良好な丘陵に構築されており，今回の江ノ古城跡の発掘成果でも確認されているように丘陵先端部にも城郭の遺構が構えられている。集落の中央部には小河川が流れており，それを挟んで江ノ村の中心屋敷が建ち並んでいる。この集落の入口部には，五社大明神と記載された神社が鎮座する。この神社より北西側で，吉祥寺・長法寺周辺の屋敷は，江ノ村遺跡を除き長宗我部の時期でこれら寺関係の屋敷と考えているが今後の検討が必要な点である。江ノ古城跡東側谷平坦部に形成された集落は，その中心に万福寺の寺院が建立されておりこの寺の周囲には中居敷が多く，各屋敷に取り囲まれている景観を想像できる。谷平坦部の奥にも集落の展開をみるが，この周辺は下・下々屋敷が建ち並んでおりその谷奥には，さらにハンフクジの名称を持つ寺院や御堂が存在する。江ノ村で最も西端に突出している丘陵の先端部には江ノ古城跡の支城で，河川を監視する役割を果たしたハナノシロ城跡が位置する。直接河津である船戸と係わりのある施設は，江ノ村遺跡として発掘調査されたヲカバナに所在する建物と考える。

久木ノ村をみると，ほぼ江ノ村と同じ集落構成が取られている。西ノ谷城跡が東側谷平坦地の本集落を守るように構築されている。久木ノ村にも当時神社が鎮座していたことが確認でき

る。ホノギで神地と記載されており，牛ノ谷村と久木ノ村の境の丘陵先端にこの神地が比定でき，現在でも神社が存在する。江ノ村と同様に集落の入口部分に位置している。ここから久木ノ村の集落が開けてくるが，中ヤシキと記載されている3箇所付近が中心的集落とみることができる。その中にはセンブクジの名称を持つ寺が存在する。さらに谷奥には下々ヤシキとリンセンジという寺がある。西ノ谷城跡の支城と考えられる久木ノ城跡は，最も北側に突出した丘陵の先端部に構築されている。久木ノ城跡のすぐ北側は，ヒサギフナトの名称がみえ河津の存在が確認できる。以上久木ノ村の景観を俯瞰してみたが，城郭の立地や集落の配置，神社・寺の配置等江ノ村とまったく同様で，江ノ村そのものを小規模化した村との印象を持たざるを得ない。中世の江ノ村を検討した結果，土佐に於ける中世小村の一事例として地域的特色を捉えることができたと考える。しかしこの地域的特色が，中筋川流域の諸村にも当てはまるかどうか，小地域の普遍性と特殊性を洗い出すためにも，今後比較検討をして行く必要性がある。

6　おわりに

中村市江の村は，現在発掘調査が終了し高規格道路の建設が進み，江の村の景観が初めて変わろうとしている。今回発掘調査にはいろうとした時に，村としての景観を素直に感じとることができた。この村の景観を中世まで遡り復元して行くには，研究の現状を踏まえ歴史地理学

Fig. 67　中世江ノ村鳥瞰図

的手法の援用を大胆に用いるべきであると考えた。さらに城郭の部分的な発掘調査だけでは，城郭そのものも把握することはできないため縄張り調査も実施した。調査準備の段階で，特に中世遺跡の場合周辺の小字界・地名等の資料を収集することと，城郭では縄張り調査の必要性が少なくともあることを今回痛感した。土佐でも中世遺跡の発掘調査が頻繁に実施されるようになったが，遺構・遺物の考察も基本的に重要であるが，今後歴史地理学的手法や城郭研究も援用しながら地域の中で遺跡を捉えていく方法を心がけたいと思う。歴史地理・城郭・文献面に不勉強な筆者であるが，不十分さを認識しつつ中世江ノ村の復元を試みた。Fig. 67に，中世江ノ村を鳥瞰した絵を掲載しているが，地籍図や長宗我部氏地検帳から主に復元したものである。推定で復元した部分が多いが，中世江ノ村の風景を描き出してみた。今回は，時間的制約もあり城郭研究や，中筋川流域諸村の考古学的研究を取り入れることができなかった。次回には，周辺諸村の比較検討を含め，土佐に於ける中世小村の研究を進めて行きたい。今回小稿をまとめるにあたり，小字境界復元地図等の作成に門脇　隆・松村信博・竹村三栄氏をはじめ高知県埋蔵文化財センターの各氏に協力頂き，さらに城郭研究の面では池田誠氏に教示頂いた。最後になったが記して感謝する次第である。

註

（1）「中世の村を歩く」『週刊朝日百科　日本の歴史』中世Ⅰ－2の「中世の村を歩く」の巻頭や『中世の村落と現代』でも述べられている。さらに現在の村の中に，中世以来の要素がまだ生き残っていると指摘している。

（2）小林健太郎　1985年『戦国城下町の研究』大明堂及び松本豊寿　1967年『城下町の歴史地理学的研究』吉川弘文館が代表的な研究である。

（3）山本大監修　1983年「高知県の地名」『郷土歴史大事典　日本歴史地名大系40』平凡社

（4）法務局作成の地籍図地名と中村市作成の地籍図地名が異なる場合がある。ここでは，Fig. 60の地籍図は法務局作成の地籍図をトレースし，さらに地名も法務局作成の地名を掲載している。Fig. 61の小字境界図及び小字境界復元地図は異なる部分のみ中村市作成の地名を採用している。

（5）横川末吉　1961年「長宗我部地検帳と長宗我部検地」『長宗我部氏地検帳の研究』高知市立市民図書館

（6）竹村義一　1976年「土佐日記地理考」『甲南国文』や同1982年「長宗我部地検帳のホノギと小字の関係について」『地理』

（7）一覧表の現地籍地名(小字)についても，地名が法務局作成のものと異なる部分のみ中村市作成の地名を掲載している。

（8）前田光雄　1990年『江ノ村遺跡』中村市教育委員会

（9）在地土器の編年が確立されていないことから輸入陶磁器の編年を採用しなければならな

いが，輸入陶磁器の性格から詳細な年代を抽出することはできない。上田秀夫1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 NO 2』日本貿易陶磁研究会の編年によると，概ね15世紀代の輸入陶磁器が出土している。

(10) 高知県教育委員会 1988年『高知県遺跡地図－幡多ブロック－』

(11) 横山勝栄 1991年「山間地域の小型城郭」『中世の城と考古学』新人物往来社では，小型山城は，集落の展開と密接な関連を保持しつつ存在するとされ，身近な地域に展開し地域と一体をなす点に存在意義があるとされている。

(12) 久木ノ村に隣接する上之土居村で，11月21日検地の最初に「久木船戸」のホノギがでてくる。

(13) 四万十川と後川合流地点の木ノ津では，一条氏の河津が存在していることが文献で確認できる。さらに中筋川下流の森沢では船戸の地名がつく場所が存在する。

(14) 山本大 1963年「解説」『長宗我部地検帳 幡多郡 中』高知県立図書館

【参考文献】

伊藤正敏 1991年「地籍図に見る紀伊国賀太荘」『中世の村落と現代』吉川弘文館

海老澤衷 1991年「豊後国田染荘の復元と景観保存」『中世の村落と現代』吉川弘文館

小島道裕 1984年「戦国期城下町の構造」『日本史研究』257巻

小島道裕 1989年「城館関係地名の地域性」『日本歴史』499号

小島道裕 1990年「平地城館跡と寺院・村落－近江の事例から－」『中世城郭研究論集』新人物往来社

小林健太郎 1982年 「長宗我部氏時代の城下町」『高知の研究 2』古代・中世篇 清文堂

小林健太郎 1985年 『戦国城下町の研究』大明堂

斎藤慎一 1989年「中世後期の本拠と国人領主」『中世城郭研究』第３号 中世城郭研究会

斎藤慎一 1991年「本拠の展開」『中世の城と考古学』新人物往来社

坂井秀弥 1991年「絵図にみる城館と町」『中世の城と考古学』新人物往来社

柴田龍司 1991年「中世城館の画期－館と城から館城－」『中世の城と考古学』新人物往来社

千田嘉博 1989年「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』第129号

千田嘉博 1991年「中世城館研究の構想」『中世の城と考古学』新人物往来社

竹本豊重 1991年「地頭と中世村落－備中国新見荘－」『中世の村落と現代』吉川弘文館

宅間一之 1988年『木塚城跡』春野町教育委員会

中村市史編纂室 1969年『中村市史』中村市

中井 均 1991年「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として－」『中世の城と考古学』新人物往来社

宮地羅城　1989年「土佐国古城略史全」土佐史談復刻叢書　(1)
武藤致和編　『南路志』下巻 文化十年　1960年12月活字本
村田修三　1987年「中世の城館」『講座・日本技術の社会史』6巻・土木　日本評論社
村田修三　1987年「城の発達」『中世城郭事典』2　新人物往来社
矢野城楼　1989年『土佐の政所』高知市民図書館
山上雅弘　1990年「戦国時代の山城－西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について－」『中世城郭研究論集』新人物往来社
山本　大　1972年『高知県の歴史』山川出版社
山本　大　1982年「中世の土佐」『高知の研究2』古代・中世篇　清文堂

表17　ホノギ・小字一覧表　1

日	ホノギ	現地地名(小字)	水田 反代分勺才	水田 等	畠 反代分勺才	畠 等	屋敷 反代分勺才	屋敷 等	荒地 反代分勺才	小計 反代分勺才
29	カスカ	カスガ							0 34 3	0 34 3 0
29	〃	〃							1 45 0	1 45 0 0
29	〃	〃							14 25 5	14 25 5 0
29	〃	〃	1 21 3	下々						1 21 3 0
29	〃	〃	0 33 2	下々						0 33 2 0
29	〃	〃							1 6 0	1 6 0 0
29	〃	〃	1 1 0	下々						1 1 0 0
29	〃	〃	1 15 4	下々					0 3 2	1 19 0 0
29	〃	〃			0 10 0	切畑				0 10 0 0
29	タンノ山	ダンノ山					1 13 0	下々山畠ヤシキ		1 13 0 0
29	〃	〃					1 39 2	下々山畠ヤシキ		1 39 2 0
29	ロクリノモト	不明							3 10 2	3 10 2 0
29	〃	〃							2 16 1	2 16 1 0
29	イチノチ江ノ瀬	〃							5 2 0	5 2 0 0
小計			4 21 3		0 10 0		3 2 2		28 43 1	36 27 0 0

日	ホノギ	現地地名	水田	水田 等	畠	畠 等	屋敷	屋敷 等	荒地	小計
1	太谷	大谷・ホラウ谷							1 45 0	1 45 0 0
1	〃	〃							1 37 0 1/2	1 37 0 1/2
1	〃	〃			1 10 5	下々山畠				1 10 5 0
1	〃	〃							0 23 2	0 23 2 0
1	〃	〃							1 45 5	1 45 5 0
1	〃	〃							2 33 5	2 43 5 0
1	クチメ口	クチノ瀬							6 26 4	6 26 4 0
1	マヤノ谷	コヤノ谷							1 2 5	1 2 5 0
1	〃	〃							1 2 5	1 2 5 0
1	〃	〃							4 1 4	4 1 4 0
1	〃	〃							0 36 3	0 36 3 0
1	〃	〃	0 20 0	下々					2 38 0	3 8 0 0
1	〃	〃			0 23 2 1/2	下々山畠				0 23 2 1/2
1	ナカオノ谷	ナゴノ谷							3 22 2	3 22 2 0
1	〃	〃			1 0 0	下々山畠				1 0 0 0
1	〃	〃			0 20 8	下々山畠				0 20 8 0
1	セヒウ	不明							2 15 2	2 15 2 0
1	〃	〃							8 6 5 1/2	8 6 5 1/2
1	〃	〃							0 46 0	0 46 0 0
1	スノクチ	スノカ・スノクチ							0 27 2	0 27 2 0
1	〃	〃							0 10 2	0 10 2 0
1	江クチノ谷	江口ノ谷・江口			1 4 0 3/4	下々山畠			0 26 0	1 30 0 3/4
1	〃	〃			0 26 0	下々山畠			0 30 0	1 6 0 0
1	〃	〃			1 17 5	下々山畠				1 17 5 0
1	スノクチ	スノクチ							15 2 2	15 2 2 0
1	クレ石	クレ石							1 1 2	1 1 2 0
1	〃	〃							4 10 2	4 10 2 0
1	〃	〃							1 5 0	1 5 0 0
1	〃	〃							1 18 0	1 18 0 0
1	〃	〃							1 6 3	1 6 3 0
1	〃	〃							3 11 5	3 11 5 0
1	クロ石	(クレ石か)	0 20 0	下々					1 27 0	1 47 0 0
1	カラスサキ	カラサキ・上カラサキ							21 11 0	21 11 0 0
1	〃	〃							14 35 0	14 35 0 0
1	ミソ池・コソアケ	ホンミゾイケ・北ミゾイケ・サコアテ							30 41 0	30 41 0 0
1	船戸	フナト							2 10 5	2 10 5 0
1	〃	〃							4 21 1	1 21 1 0

表18　ホノギ・小字一覧表　2

日	ホノギ	現地籍地名（小字）	水田 反 代 分 勺 才	等	畠 反 代 分 勺 才	等	屋敷 反 代 分 勺 才	等	荒地 反 代 分 勺 才	小計 反 代 分 勺 才
1	船戸	フナト							0 46 0	0 46 0 0
1	〃	〃	0 48 0	下々					0 23 3	1 21 3 0
1	〃	〃	0 37 1	下々					0 8 2	0 45 3 0
	小計		2 25 1		6 2 4 1/4		0 0 0		145 7 0	153 34 5 1/4

日	ホノギ	現地籍地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
2	船戸	フナト	1 19 5 1/2	下々					0 48 0	3 87 5 1/2
2	〃	〃	1 5 3	下々						1 5 3 0
2	シゾキガミ	不明	0 28 2	下々					3 34 1	4 12 3 0
2	東ダ	不明							0 32 2	0 32 2 0
2	〃	〃							3 0 0	3 0 0 0
2	タキノド	タキノド・タキノヒタ							8 2 2	8 2 2 0
2	シマ池	不明							0 44 3 1/2	0 44 3 1/2
2	〃	〃							1 13 2	1 13 3 0
2	ソネ	ソ子(ソネ)							11 46 2	11 46 2 0
2	ふうエ	エウ							2 3 2	2 3 2 0
2	〃	〃							1 3 2	1 3 2 0
2	ホトコロ	不明							2 36 2	2 38 2 0
2	ソカ池	フカイケ							2 36 0	2 36 0 0
2	ナカダ	ナガタ							2 47 2	2 47 2 0
2	ナカトロ	下ナガトロ							1 20 2	1 20 2 0
2	〃	〃							1 8 2	1 8 2 0
2	〃	〃							21 31 2	21 31 2 0
2	ヨコアテ	ヨコアテ							8 20 2	8 20 2 0
2	コガノ丁	上コガ・中コガ							18 30 1 1/2	18 30 1 1/2
2	舟戸		0 41 1	下々						0 41 1 0
2	〃		0 34 1	下々					2 12 2	2 46 3 0
2	〃		1 2 0	下々					0 40 1	1 42 1 0
2	コガノ丁	上コガ・中コガ	0 28 3	下々					0 20 0	0 48 3 0
2	〃	〃	0 17 0	下々					0 15 1 1/2	0 32 1 1/2
2	〃	〃	0 19 1 1/2	下々					1 0 3	1 19 4 1/2
2	〃	〃	0 20 0	下々					0 21 2	0 41 2 0
2	〃	〃	0 16 0	下々					0 10 0	0 26 0 0
2	〃	〃	0 22 0	下々					0 15 5	0 37 5 0
2	〃	〃	0 23 0	下々					0 23 3 1/2	0 46 3 1/2
2	〃	〃	1 23 4	下々					0 49 1	2 22 5 0
	小計		10 0 3		0 0 0		0 0 0		100 16 1	110 16 4 0

日	ホノギ	現地籍地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
3	コガノ丁	上コガ・中コガ	0 32 5	下々					0 18 1	1 1 0 0
3	〃	〃	0 30 0 1/2	下々					0 5 1 1/2	0 35 2 0
3	〃	〃	0 34 3 1/2	下々					0 6 4	0 41 1 1/2
3	〃	〃	0 38 0	下々					0 6 2	0 44 2 0
3	ナガタ								5 2 2	5 2 2 0
3	コガノ丁		0 37 5	下々						0 37 5 0
3	〃		0 45 2	下々						0 45 2 0
3	シモ丁	下モ丁	5 37 3	下々					2 45 0	8 32 3 0
3	ナカレタモト	不明	1 17 3 1/2	下々					0 22 1	1 39 4 1/2
3	大タ	ヲホタ	2 0 0	下						2 0 0 0
3	〃	〃	2 9 4	下						2 9 4 0
3	〃	〃	0 40 1 1/2	下						0 40 1 1/2
3	〃	〃	0 48 0 1/2	下						0 48 0 1/2
3	〃	〃	1 3 1	下						1 3 1 0
3	〃	〃	0 43 3	下						0 43 3 0
3	〃	〃	1 17 0	下						1 17 0 0

表19　ホノギ・小字一覧表　3

口	ホノギ	現地籍地名(小字)	水田 反代分勺才	等	畠 反代分勺才	等	屋敷 反代分勺才	等	荒地 反代分勺才	小計 反代分勺才
3	オタ	(大タ?)	1 17 0	下						1 17 0 0
3	〃	〃	2 37 5	下					0 5 0 1/2	2 42 5 1/2
3	[illegible]ハナ	ワカバナ			0 8 2	下々山畠				0 8 2 0
3	イチノ木	不明	1 2 4	下						1 2 4 0
3	ワダ	イケワタ	1 20 0 1/2	下						1 20 0 1/2
3	[illegible]		0 45 5 1/2	下						0 45 5 1/2
3	〃		0 45 3	下々						0 45 3 0
3	〃		1 7 1 1/2	下々						1 7 1 1/2
3	〃		1 3 5 1/2	下々						1 3 5 1/2
3	〃		0 48 1	下々	0 18 5	下々畠				1 17 0 0
3	〃		0 35 0	下々						0 35 0 0
3	〃		0 35 2 3/4	下々						0 35 2 3/4
3	ワキノ谷	ワキノ谷	2 12 5	下々						2 12 5 0
3	〃	〃	2 6 1	下						2 6 1 0
3	〃	〃	1 21 3 1/2	下々						1 21 3 1/2
3	〃	〃	1 9 0	下々						1 9 0 0
3	テンノワ	テンノウ	0 38 2 3/4	下々						0 38 2 3/4
3	ウハシガ谷	ハシカ谷	2 38 5	下々						2 38 5 0
3	〃	〃	1 7 0	下々						1 7 0 0
3	〃	〃	1 19 2	下々						1 19 2 0
3	ウハガ谷	(同じ?)	1 11 3	下々						1 11 3 0
3	〃	〃	2 8 4 1/2	下々						2 8 4 1/2
3	〃	〃	1 25 1	下々						1 25 1 0
3	〃	〃	1 1 5	下々					1 23 3	2 25 2 0
3	〃	〃	1 40 0	下々						1 40 0 0
3	ウハシガ谷	ウハシガ谷-ハシカ谷	2 20 0	下々						2 20 0 0
3	〃	〃	0 2 0	下々						0 2 0 0
3	〃	〃	1 21 2	下						1 21 2 0
3	〃	〃	1 11 5 1/2	下						1 11 5 1/2
3	〃	〃	0 39 0	下						0 39 0 0
3	テンノ谷	ソンノウ子							0 2 3	0 2 3 0
3	ウハシガ谷		2 9 2	下						2 9 2 0
3	〃		0 10 1	下						0 10 1 0
3	〃				0 13 2	下々山畠				0 13 2 0
3	ハヤシ						0 23 2	下ヤシキ		0 23 2 0
3	ワカハナ				0 25 5	下畠				0 25 5 0
3	〃						0 20 1	下ヤシキ		0 20 1 0
3	〃						1 40 5	下ヤシキ	0 11 0	2 1 5 0
3	ワキノ谷						0 40 0	下々山畠・ヤシキ		0 40 0 0
3	カメノコウ						0 34 3	下ヤシキ		0 34 3 0
3	ムチヤシキ				0 8 0	下畠				0 8 0 0
3	シモヤシキ						0 24 3	下ヤシキ		0 24 3 0
3	[illegible]ブナヤシキ						0 8 2	下ヤシキ		0 8 2 0
3	タニヤシキ						1 11 3	下ヤシキ		1 11 3 0
3	マタゲ	マタケ					1 10 3	下ヤシキ		1 10 3 0
3	高サキ	タカサキ	1 40 3	上						1 40 3 0
3	〃	〃	0 6 4	中						0 6 4 0
3	モンシュ	モンジョ	6 39 3	上						6 39 3 0
3	トノ・タン	不明					1 1 2	下ヤシキ		1 1 2 0
3	香神寺						2 35 5 1/2	下ヤシキ		2 35 5 1/2
3	イセキ谷						0 40 0	下ヤシキ		0 40 0 0
3	長法寺						0 48 5	中ヤシキ		0 48 5 0
3	寺ノド	寺ノハナ	0 40 2	上						0 40 2 0
3	フカタ	不明	1 23 0	中						1 23 0 0
3	〃	〃	1 11 3	中						1 11 3 0

表20　ホノギ・小字一覧表　4

口	ホノギ	現地略地名(小字)	水田 反代分勺才	等	畠 反代分勺才	等	屋敷 反代分勺才	等	荒地 反代分勺才	小計 反代分勺才
3	フカタ	不明	1 13 1	中						1 13 1 0
3	〃	〃	1 2 1	中						1 2 1 0
3	〃	〃	3 8 3	中						3 8 3 0
3	フンコノタン	フンゴダン			0 3 2	下々山畠			0 6 4	0 10 0 0
3	〃	〃	0 10 1	下々						0 10 1 0
3	スルガ谷	スルガ谷			0 43 2 1/2	下畠				0 43 2 1/2
3	〃	〃					2 32 3	下々山畠ヤシキ		2 32 3 0
3	クホヤシキ	不明	0 28 1	下々	0 7 0	下々山畠				0 35 1 0
3	〃	〃	0 25 0	下々	0 31 4	下々畠				1 6 4 0
3	〃	〃					1 38 0	下々山畠ヤシキ		1 38 0 0
3	シツリ				0 36 0	下々畠			1 4 0	1 40 0 0
3	〃				1 40 5 1/2	下々畠				1 40 5 1/2
3	〃		0 22 0	下々	1 20 3	下々畠				1 42 3 0
3	田ノツク	タノヲク	1 30 5 1/2	下々						1 30 5 1/2
3	〃	〃							0 8 0	0 8 0 0
3	シヅリザク	クチシヲリ	0 36 5	下々						0 36 5 0
3	〃	〃							0 5 2	0 5 2 0
3	シワリ	シヲリ							0 27 3	0 27 3 0
3	〃	〃							1 6 0	1 6 0 0
3	〃	〃			0 10 3	下々山畠				0 10 3 0
3	中ヤシキ				0 15 5	下畠			0 35 0	1 0 5 0
3	竹ノ内ヤシキ						1 30 2 1/2	下ヤシキ		1 30 2 1/2
3	シヅリ		0 40 0	中						0 40 0 0
3	宮ノ谷	宮ノ江	0 6 3	下						0 6 3 0
3	〃	〃							0 18 5	0 18 5 0
3	宮ノサキ	宮ノハナか宮ノ江	1 0 5	中						1 0 5 0
3	〃	〃	0 31 1 1/2	中					0 5 0	0 39 1 1/2
	小	計	87 8 2 1/2		7 33 3		18 40 4		15 14 2	128 46 5 1/2

口	ホノギ	現地略地名	水田	等	畠	等	屋敷	等	荒地	小計
5	宮ノサキ		0 40 1 1/2	下々					0 14 3	1 4 4 1/2
5	〃		0 8 1 1/4	下					0 17 3 1/4	0 25 4 1/2
5	〃		0 36 4	中						0 36 4 0
5	楯ノ口(五社大明神)	ゴシャ								0 0 0 0
5	宮ノサキ		1 6 0 1/2	中					0 18 0	1 24 0 1/2
5	〃		1 5 2	下					0 17 2	1 22 4 0
5	イモシヤ		1 4 0	中					0 6 0	1 10 0 0
5	〃				0 17 0	下々畠			0 27 0	0 44 0 0
5	〃		0 42 3	下						0 42 3 0
5	エボシタカ		0 41 0	下						0 41 0 0
5	ウトノド	ウドの下					0 37 0 3/4	下ヤシキ		0 37 0 3/4
5	宮地ヤシキ						0 44 2	下ヤシキ		0 44 2 0
5	勝サキ		1 3 0	下々			0 41 3	下ヤシキ		1 47 3 0
5	[illegible]						0 42 0	下ヤシキ		0 42 0 0
5	〃				0 24 3	下々畠			0 25 3	1 0 0 0
5	〃						0 20 4	上々山畠ヤシキ	1 22 2	1 43 0 0
5	ナモトヤシキ						0 30 3	下ヤシキ	1 16 5	1 47 2 0
5	水タミ谷	ミヅタミ谷			0 25 3	下々畠			1 15 0	1 40 3 0
5	〃	〃							1 12 2	1 12 2 0
5	ヒノ谷	ヒノタニ							0 27 3	0 27 3 0
5	門ハ				0 10 0	下々畠				0 10 0 0
5	トイヤシキ	ドイヤシキ					2 10 5	中ヤシキ		2 10 5 0
5	杉本ヤシキ						1 40 1	中ヤシキ		1 40 1 0
5	シヤスイン						0 9 0	下々ヤシキ		0 9 0 0
5	〃						0 10 3	下々ヤシキ		0 10 3 0

表21　ホノギ・小字一覧表　5

山	ホノギ	現地籍地名（小字）	水田		畠		屋敷		荒地	小計
			反 代 分 勺 才	等	反 代 分 勺 才	等	反 代 分 勺 才	等	反 代 分 勺 才	反 代 分 勺 才
5	ヤスカヤシキ	ヤカズカ・ヤカヤシキ					1 15 2	中ヤシキ		1 15 2 0
5	スキヨシ						1 23 1	中ヤシキ		1 23 1 0
5	イバヤシキ	イバヤシキ					1 11 1 1/2	中ヤシキ		1 11 1 1/2
5	マツヲ	マツヲ谷					1 15 5	下ヤシキ	1 4 2	2 20 1 0
5	ニシワキ	不明					0 34 3	下ヤシキ	0 21 0	1 5 3 0
5	〃	〃							1 17 0	1 17 0 0
5	ユハタヲシ	〃			0 48 0 1/2	下ヤ畠			0 15 0	1 13 0 1/2
5	〃	〃			0 8 0	下ヤ畠			0 2 0	0 5 0 0
	小　計		7 37 0 1/4		2 28 0 1/2		14 40 1 1/4		11 29 1 1/4	36 34 3 1/4

山	ホノギ	現地籍地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
6	フモトヤシキ	ソモト					1 35 4	下ヤシキ		1 35 4 0
6	寺ノ下	〃					0 20 3	下ヤシキ	0 10 4	0 31 1 0
6	〃	〃			0 5 0	下畠				0 5 0 0
6	万福寺	〃					1 16 0	下ヤシキ		1 16 0 0
6	〃	〃					0 6 4	下ヤシキ		0 6 4 0
6	〃	〃			0 4 3	下々山畠				0 4 3 0
6									0 15 5 1/2	0 15 5 1/2
6	シンカイ	シンガイ	1 18 0 1/4	中						1 18 0 1/4
6	〃	〃	1 0 0	中						1 0 0 0
6	〃	〃	1 24 0	中	0 10 2	下畠				1 38 2 0
6	〃	〃	1 16 2 3/4	中						1 16 2 3/4
6	クボタヤシキ	クボタ					0 41 2	下ヤシキ		0 41 2 0
6	ドイ	不明					2 3 2	下ヤシキ	0 2 0	2 5 2 0
6	岡モト	〃					0 30 0	下ヤシキ		0 30 0 0
6	ヒウザ	ヒラザ	1 0 0	上						1 0 0 0
6	〃	〃					2 23 4 1/4	下ヤシキ		2 23 4 1/4
6	テウ田	不明	0 38 1 1/2	中						0 38 1 1/2
6	カド	〃					0 36 5	下ヤシキ		0 36 5 0
6	〃	〃					0 37 4 1/2	下ヤシキ		0 37 4 1/2
6	高ヲカ	タカオカ					1 28 2	下ヤシキ		1 28 2 0
6	高田	〃					1 0 4	下ヤシキ	0 4 3	1 5 1 0
6	〃	〃	0 0 1	中						0 0 1 0
6			1 31 3	下						1 31 3 0
6	田アチヤシキ	不明					0 26 2	中ヤシキ		0 26 2 0
6	ツボテ	クボテ	0 39 0	上						0 39 0 0
6	〃	〃	1 21 1	中						1 21 1 0
6	リコヲカ	不明	1 49 0 1/2	中	0 6 2	下々山畠				2 5 2 1/2
6	〃	〃	0 16 2	中						0 16 2 0
6	スミタ	〃	1 16 5 3/4	中						1 16 5 3/4
	小　計		14 24 5 3/4		0 26 1		14 7 0 3/4		0 33 0 1/2	29 41 2 0

山	ホノギ	現地籍地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
7	タンヤシキ	ダンノヤマ					1 22 2	下ヤシキ	0 13 5	1 36 1 0
7	山ノ下	山ノド	1 39 0	下	0 6 0	下畠				1 45 0 0
7	メウフクアン	ミョウフクアン							1 21 3	1 21 3 0
7	〃	〃	0 41 1 1/2	下々						0 41 1 1/2
7	カチハラ	カヂワラ	1 8 5 1/2	下						1 8 5 1/2
7	〃	〃	0 19 0	下						0 19 0 0
7	〃	〃	0 5 0	下々						0 5 0 0
7	メウフクアン	ミョウフクアン			0 10 0	下々畠				0 10 0 0
7	アンノ谷	アンノ谷					0 45 1	下ヤシキ		0 45 1 0
7	〃	〃							0 11 4	0 11 4 0
7	〃	〃	0 44 1	下					0 12 0	1 6 1 0
7	ヌタワキ		0 46 5 1/2	下々					0 11 3	1 8 2 1/2

表22　ホノギ・小字一覧表　6

日	ホノギ	現地籍地名（小字）	水田 反代分勺才	等	畠 反代分勺才	等	屋敷 反代分勺才	等	荒地 反代分勺才	小計 反代分勺才
7	スミヤカ谷	スミヤカ谷	1 4 0	下					0 15 0	1 19 0 0
7	イモシ谷	イモジ谷							0 10 0	0 10 0 0
7	サミチヤシキ	サ ミ チ	4 30 0 1/2	下					0 20 1 1/2	5 0 2 0
7	(山スヽレ)	山スズレ			0 11 0	下々山畠				0 11 0 0
7	〃	〃			0 6 0	下々山畠				0 6 0 0
7	ミョウフクアン	ミョウフクアン							0 40 0	0 40 0 0
7	イツノ谷	イニカ谷			0 13 2	下々山畠			0 15 0	0 27 2 0
7	〃	〃					1 2 1 1/2	下々ヤシキ		1 2 1 1/2
7	〃	〃			0 6 4	下畠			0 11 2	0 18 0 0
7	〃	〃	1 37 5	下						1 37 5 0
7	ハンツクジ	(飯福寺)	0 42 1	下						0 42 1 0
7	〃	〃					0 9 3	下ヤシキ		0 9 3 0
7	〃	〃			0 6 0	下々畠				0 6 0 0
7	御　堂	ミ ド ウ							0 18 0	0 18 0 0
7	カウゼンジャウ	ゴゼンジャウ			0 20 0	下々山畠			0 30 0	1 0 0 0
7	〃	〃							0 23 3	0 23 3 0
7	カイマイ	カイマエ	1 14 4	中			0 18 1	下々ヤシキ		1 32 5 0
7	タナカ	不　明					0 30 3 1/2	下ヤシキ		0 30 3 1/2
7	田　中	〃	0 15 0	下						0 15 0 0
7	シンガイ	シンガイ					0 25 2	下ヤシキ		0 25 2 0
7	田　中	不　明					0 30 2	下ヤシキ		0 30 2 0
7	シレン坊	ジインボウ							2 0 5	2 0 5 0
7	大　タ	ウ ウ ダ							0 13 2	0 13 2 0
7	〃	〃							0 13 2	0 13 2 0
7	〃	〃					0 41 0	下々ヤシキ	0 30 5	1 21 5 0
7	大ワキヤシキ	不　明							0 21 1	0 21 1 0
7	ソ マ エ	サザエ山					1 16 3	下ヤシキ		1 16 3 0
7	〃	〃			0 26 1	下畠				0 26 1 0
7	〃	〃							0 25 0	0 25 0 0
7	山キリ	ヤマキワ			0 40 0	下々畠				0 40 0 0
7	西ヤシキ	不　明							0 40 0	0 40 0 0
7	〃	〃			0 38 2	下々畠			0 5 0	0 43 2 0
7	既モトヤシキ	〃			0 42 0	下々山畠			0 18 0	1 10 0 0
	小　計		15 48 0		4 24 3		7 41 1		11 21 0 1/2	39 34 4 1/2

日	ホノギ	現地籍地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
8	ユハヤシキ	イバヤシキ			0 8 2	下々山畠				0 8 2 0
8	〃	〃					1 1 0	下ヤシキ		1 1 0 0
8	ユキミツヤシキ	不　明					2 33 0	下ヤシキ		2 33 0 0
8	ケシヤシキ	ゲシヤシキ	0 25 2	下					0 30 0	1 5 2 0
8	山本タ	ヤマモトダ	2 43 3	下						2 43 3 0
8	カリラ	不　明					0 43 2	中ヤシキ		0 43 2 0
8	ツカリキ	〃			1 14 4	下畠				1 14 4 0
8	カワラヤシキ						1 19 4 1/2	下ヤシキ		1 19 4 1/2
8	山本タ	ヤマモトダ	1 6 1	中						1 6 1 0
8	フロノモト	不　明	1 15 1	中						1 15 1 0
8	〃	〃					0 30 2	下々山畠ヤシキ		0 30 2 0
8	ミチウ	〃							0 7 0	0 7 0 0
8	江ノ六城 フメノチン	エノジョウ							0 25 0	0 25 0 0
8	二ノ斛	〃							0 20 0	0 20 0 0
8	東二ノ斛	〃							0 30 0	0 30 0 0
8	三の斛	〃							0 6 4	0 6 4 0
8	タンチウ	不　明							0 7 2	0 7 2 0
8	イモシ谷	〃			0 20 5 1/2	下々畠			0 45 2	1 16 1 1/2
8	〃	〃	0 10 0	下々					0 19 2 1/2	0 29 2 1/2

表23 ホノギ・小字一覧表 7

日	ホノギ	現地筋地名(小字)	水田 反代分勺才	等	畠 反代分勺才	等	屋敷 反代分勺才	等	荒地 反代分勺才	小計 反代分勺才
8	イモシヤ	不明	0 3 0	下々						0 3 0 0
8	フロノ本	〃			0 17 2	下々畠			0 21 0	0 38 2 0
8	ケンタ	〃	0 5 0	下々					0 28 2	0 33 2 0
8	〃	〃	0 15 4	下々					0 23 0	0 38 4 0
8	〃	〃	1 2 0	中						1 2 0 0
8	〃	〃	0 31 2	下					0 16 0	0 47 2 0
8	〃	〃	1 10 3	上						1 10 3 0
8	〃	〃	0 48 0 1/2	中						0 48 0 1/2
8	〃	〃	1 39 1 1/2	上					0 3 0	1 42 1 1/2
8	〃	〃	1 6 5 1/2	上					0 6 0	1 12 5 1/2
8	〃	〃	1 8 1 1/2	上					0 2 5 1/2	1 11 1 0
8	〃	〃	0 21 3	上						0 21 3 0
8	〃	〃	0 3 2	下						0 3 2 0
8	フロノモト	〃	1 13 0	中						1 13 0 0
8	ロタヤカセコ	〃	0 40 4	中					0 3 0	0 43 4 0
8	ウケカウタ	ウリンワダ	1 6 4	上						1 6 4 0
8	ソトケンタ	不明	1 40 2 1/2	中						1 40 2 1/2
8	〃	〃	0 37 0 1/2	上						0 37 0 1/2
8	ヲモタ	〃	1 4 3	上						1 4 3 0
8	中ノツホ	中ノツボ	1 12 5	上						1 12 5 0
8	〃	〃	1 18 4 1/2	上						1 18 4 1/2
8	〃	〃	1 16 2	上						1 16 2 0
8	〃	〃	1 2 0 1/2	上						1 2 0 1/2
8	スミタ	不明	1 0 0	上						1 0 0 0
8	マタケ	マタケ	1 21 1	中	0 8 2	下畠			0 2 0	1 31 3 0
8	〃	〃	0 42 2	下	0 22 0	下畠			0 10 4	1 25 0 0
8	丸日テン	ウノヒテン	2 8 3	上						2 8 3 0
8	大田	ヲホタ	0 18 0	上						0 18 0 0
8	〃	〃	2 20 0	下						2 20 0 0
8	大タ	〃	0 40 1	下						0 40 1 0
8	ウノヒテン	ウノヒテン	1 15 2	中						1 15 2 0
8	〃	〃	2 20 0	中						2 20 0 0
8	川原ギ	川原樋	2 11 5	中						2 11 5 0
8	ケシタ	不明	0 28 0 3/4	下						0 28 0 3/4
8	シリタ	〃	2 15 1 1/2	中						2 15 1 1/2
8	チヒキノワ	〃			0 38 4	下々山畠			0 5 2 1/2	0 44 0 1/2
小計			44 28 0 1/4		3 30 1 1/2		6 27 2 1/2		6 12 0 1/2	60 47 4 3/4

日	ホノギ	現地筋地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
9	エケノ前								0 46 4	0 46 4 0
9	コンノタ	ゴンノサク							2 16 4	2 16 4 0
9	水谷	南ツカ谷・井戸口							4 2 3	4 2 3 0
9	ナカ谷	〃							1 33 0	1 33 0 0
9	コンノタ	ゴンノサク							1 33 0	1 33 0 0
9	メウカ谷	ミヨガタニ	0 40 0	下々						0 40 0 0
9	ミツノ谷	水ヶ谷							1 30 2	1 30 2 0
9	城ノ下	城ノ下							0 44 3	0 44 3 0
9	中ヤシキ	不明							1 15 2	1 15 2 0
9	ナモトヤシキ	ナモトヤシキ					1 40 0	下々山畠ヤシキ		1 40 0 0
9	西の城	西ノ城			0 6 1 1/2	下々山畠				0 6 1 1/2
9	大谷	不明	2 26 5	下			0 16 0	下々ヤシキ		2 42 5 0
9	〃	〃							0 8 0	0 8 0 0
9	山ノ谷	〃	1 0 0	中			0 35 0	下々ヤシキ	0 4 2	3 19 2 0
			1 30 0	下						
9	中山ヤシキ						1 27 4	下々ヤシキ	0 33 0	2 10 4 0

表24　ホノギ・小字一覧表　8

字	ホノギ	現地蹟地名（小字）	水田 反代分勺才	等	畠 反代分勺才	等	屋敷 反代分勺才	等	荒地 反代分勺才	小計 反代分勺才
9	トウコウジヤシキ	トウコウジ・北トウコウジ					0 21 4	下々ヤシキ	0 5 2	0 27 0 0
9	ウメノ谷	梅ケ谷			1 22 4	下々山畠				1 22 4 0
9	カイホウ口	カイホウ口	0 28 1	下々	0 5 0	下々畠				0 33 1 0
9	ウメカ谷	梅ケ谷			0 31 1	下々山畠				0 31 1 0
9	カイホウ	カイボウ口					1 45 0	[illegible]		1 45 0 0
小計			6 25 0		2 15 0 1/2		6 35 2		15 22 4	30 18 0 1/2

字	ホノギ	現地蹟地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
10	メウカイダ	不明	1 19 2	上						2 10 2 0
			1 0 0	中						
10	ツカダ	ツカダ	0 35 2 1/2	下						0 35 2 1/2
10	キシマイ	キシマイ	2 17 2 1/2	中					0 5 4	2 23 0 1/2
10	〃	〃	1 34 5	中					0 2 0	1 36 5 0
10	コケノ前	不明	0 45 4	下々						0 45 4 0
10	ハネザコ	アイラサコ	1 5 0	下						1 5 0 0
10	ボウシテン	ホウジアン	1 18 0	下						1 18 0 0
10	ゴンノタ	ゴンノツタ	1 1 3 1/2	下						1 1 3 1/2
10	〃	〃	0 3 5 1/2	下々					10 5 2 1/2	10 9 2 0
10	ウチビシヲ	不明	1 8 4	下						1 8 4 0
10	ドイダ	ドイダ	1 14 2 1/2	下						1 14 2 1/2
10	〃	〃	1 0 1	下						1 0 1 0
10	〃	〃	1 11 2	下						1 11 2 0
10	〃	〃	1 16 2	下						1 16 2 0
10	〃	〃	1 12 0	下						1 12 0 0
10	ドマリダ	マリリダ	1 15 2	下						1 15 2 0
10	〃	〃	1 1 2	中						1 1 2 0
10	中ノツホ	中ノツホ	1 41 0	中						1 41 0 0
10	〃	〃	1 21 4	中						1 21 4 0
10	〃	〃	0 46 2	中						0 46 2 0
10	〃	〃	2 34 3	中						2 34 3 0
10	〃	〃	3 0 1 1/2	中						3 0 1 1/2
10	〃	〃	0 31 0	上						0 31 0 0
10	〃	〃	0 32 0 1/2	上						0 32 0 1/2
10	カワラダ	川原田	1 20 3	上						1 20 3 0
10	大ツホ	ザツツボ	0 44 0	中						0 44 0 0
10	〃	〃	2 7 1	中						2 7 1 0
10	〃	〃	0 46 3	中						0 46 3 0
10	〃	〃	1 6 0	中						1 6 0 0
10	〃	〃	1 49 2	中						1 49 2 0
10	〃	〃	1 8 1	中						1 8 1 0
10	〃	〃	1 10 0	中						1 10 0 0
10	〃	〃	1 0 0	中						1 0 0 0
10	〃	〃	1 0 0	中						1 0 0 0
10	〃	〃	1 10 2	中						1 10 2 0
10	〃	〃	1 7 2	中						1 7 2 0
10	〃	〃	1 2 4	下						1 2 4 0
10	〃	〃	1 10 4	下						1 10 4 0
10	〃	〃	0 48 2	下						0 48 2 0
10	〃	〃	0 48 2	下						0 48 2 0
10	〃	〃	2 25 4	下						2 25 4 0
10	ウチビシオ	不明	1 16 2	下						1 16 2 0
10	ミバノサコ	ミミバガサコ	0 32 0	下						0 32 0 0
10	〃	〃	0 47 2	下						0 47 2 0
10	〃	〃	1 9 2	下						1 9 2 0
10	〃	〃	1 46 2	下						1 46 2 0

表25　ホノギ・小字一覧表　9

日	ホノギ	現地調査名（小字）	水田		畑		屋敷		荒地	小計
			反代分勺才	等	反代分勺才	等	反代分勺才	等	反代分勺才	反代分勺才
10	ハノサコ	ハノサコ							1 0 0	1 0 0 0
10	〃	〃	1 0 2	下						1 0 2 0
10	〃	〃	0 47 2	下						0 47 2 0
10	古城	ハナノシロ			2 6 0	下々通				2 6 0 0
	小計		62 11 3 1/2		2 6 0		0 0 0		11 13 0 1/2	75 30 4 0

日	ホノギ	現地調査名	水田		畑		屋敷		荒地	小計
11	ヒキチ	キチホンデン	0 33 2	下						0 33 2 0
11	三反ダ	三反ダ	0 22 5 1/2	下々						0 32 5 1/2
11	〃	〃	0 35 5 1/2	下						0 35 5 1/2
11	〃	〃	1 20 2	下						1 20 2 0
11	〃	〃	2 10 2	下						2 10 2 0
11	〃	〃	1 0 0	下						1 0 0 0
11	〃	〃	2 9 1 1/2	下						2 9 1 1/2
11	〃	〃	1 1 5 1/4	下						1 1 5 1/4
11	〃	〃	3 26 2	下						3 26 2 0
11	〃	〃	1 18 1	下						1 18 1 0
11	クデン	クデン	7 5 4	下						7 5 4 0
11	サンタンダ	三反田	0 47 3	下						0 47 3 0
11	クデン	クデン	1 1 4	下						1 1 4 0
11	サンタンダ	三反田	1 5 4	下						1 5 4 0
11	〃	〃	0 25 3 1/2	下						0 25 3 1/2
11	ヒキチ	キチホンデン	1 18 3	下						1 18 3 0
11	ソデダ	不明	1 13 2	下						1 13 2 0
11	ヒキチ	キチホンデン	1 1 5	下々						1 1 5 0
11	ホンデン	タイホンデン	0 43 3	下々						0 43 3 0
11	〃	〃	1 7 2	下々						1 7 2 0
11	〃	〃	1 0 0	下々						1 0 0 0
11	〃	〃	1 10 3	下々						1 10 3 0
11	〃	〃	1 23 2 1/2	下々						1 23 2 1/2
11	〃	〃	0 45 2	下々						0 45 2 0
11	〃	〃	1 10 1	下々						1 10 1 0
11	〃	〃	1 1 1	下々						1 1 1 0
11	〃	〃	1 7 3	下						1 7 3 0
11	〃	〃	0 47 4	下						0 47 4 0
11	〃	〃	1 2 0	下						1 2 0 0
11	〃	〃	1 1 1	下						1 1 1 0
11	〃	〃	0 41 2	下						0 41 2 0
11	ウマバ	不明	2 23 4	下々						2 23 4 0
11	〃	〃	1 3 0	下々					0 12 0	1 15 0 0
11	〃	〃	1 2 2	下々						1 2 2 0
11	〃	〃	1 4 3	下々						1 4 3 0
11	〃	〃	1 3 0 1/2	下々						1 3 0 1/2
11	〃	〃	0 25 0	下々					0 15 0	0 40 0 0
11	シモデ	シモデ							1 0 0	1 0 0 0
11	〃	〃							1 31 2	1 31 2 0
11	〃	〃							0 41 0	0 41 0 0
11	〃	〃							1 10 0	1 10 0 0
11	〃	〃							3 10 0	3 10 0 0
11	〃	〃							5 0 0	5 0 0 0
11	フカタ	ソカタ	0 7 0	下々					1 8 2	1 15 2 0
11	〃	〃	0 40 0	下々					4 35 0	5 25 0 0
11	ヒタンダ	七反田	0 10 0	下々					0 40 0	1 0 0 0
11	〃	〃	0 47 0	下々						0 47 0 0
11	〃	〃	0 32 0 1/2	下々					0 20 0	1 2 0 1/2

表26　ホノギ・小字一覧表　10

日	ホノギ	現地該地名（小字）	水田 反代分勺才	等	畠 反代分勺才	等	屋敷 反代分勺才	等	荒地 反代分勺才	小計 反代分勺才
11	セタンダ	七反田	0 30 0	下々					0 20 0	1 0 0 0
11	〃	〃	1 0 0	下々					0 20 3	1 20 3 0
11	ヨコタ	ヨコタ							0 30 0	0 30 0 0
11	セタンダ	七反田	0 48 5	下々						0 48 5 0
11	〃	〃	0 48 5	下						0 48 5 0
11	〃	〃	1 10 5	下々						1 10 5 0
11	〃	〃	1 38 2	下々						1 38 2 0
11	〃	〃	1 10 0	下々						1 10 0 0
11	スミタ	不明	1 6 3	下々						1 6 3 0
	小計		61 30 1 3/4		0 0 0		0 0 0		21 43 1	83 23 2 3/4

日	ホノギ	現地該当名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
12	クリノ木	クリギ	1 34 1	下々						1 34 1 0
12	〃	クリギ・クリキノ北	2 10 1 1/2	下々						2 10 1 1/2
12	〃	〃	1 4 1 1/2	下々						1 4 1 1/2
12	〃	〃	1 4 1 1/2	下々						1 4 1 1/2
12	〃	〃	0 43 5 1/4	下々						0 43 5 1/4
12	〃	〃	1 0 1 1/2	下						1 0 1 1/2
12	丸タ	丸田	0 47 3	下々						0 47 3 0
12	〃	〃	1 12 3	下						1 12 3 0
12	ハ・ホテン	不明	1 6 3	下						1 6 3 0
12	ヒキチ	キチホンデン・クイトシデン	1 10 1	下						1 10 1 0
12	〃	〃	0 48 5 1/2	下						0 48 5 1/2
12	〃	〃	0 43 5	下						0 43 5 0
12	〃	〃	1 4 5 1/2	下						1 4 5 1/2
12	〃	〃	2 4 0	下						2 4 0 0
12	二反タ	不明	1 14 1	下						1 14 1 0
12	〃	〃	1 2 5 1/2	下						1 2 5 1/2
12	〃	〃	1 5 2	下						1 5 2 0
12	ゆリ	ホリ	1 9 0	下						1 9 0 0
12	〃	〃			0 15 2	切畑				0 15 2 0
12	ヤタウノド	ヤタウノド	0 22 0	下						0 22 0 0
12	〃	〃	0 27 4 1/2	下						0 27 4 1/2
12	井頭	イリウ	2 41 0 1/2	下						2 41 0 1/2
12	ヤタウノド	ヤダウノド	0 45 5	下						0 45 5 0
12	〃	〃	1 2 1 1/2	下						1 2 1 1/2
12	〃	〃	2 17 2	下						2 17 2 0
12	〃	〃	0 42 1 1/2	下						0 42 1 1/2
12	ホリ	ホリ	0 33 1	下						0 33 1 0
12	〃	〃	0 42 2	下						0 42 2 0
12	城ノシタ	城ノド	1 42 5	下						1 42 5 0
12	タホテ	不明	2 21 2	中						2 21 2 0
12	カイホウ口	カイホウ口	2 2 3	中						2 2 3 0
12	〃	〃	1 8 0	中					0 45 2	2 3 2 0
12	カリコテン	カリゴテン	2 2 1	中						2 2 1 0
12	サキホハタ	不明	3 43 3	中						3 43 3 0
12	マギアライテン	ゴキアライテン	0 14 1	中						0 14 1 0
12	シャウテン	シャウテン	4 30 4	中						4 30 4 0
	小計		50 45 5 3/4		0 15 2		0 0 0		0 45 2	52 6 3 3/4

日	ホノギ	現地該地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
13	カマタ	不明	1 15 1	中						1 15 1 0
13	マツノハナ	〃	0 38 2	上						1 38 2 0
			1 0 0	中						
13	ウシノ谷口	牛ガ谷口	2 25 1	上						2 25 1 0

表27　ホノギ・小字一覧表　11

日	ホノギ	現地種地名（小字）	水田 反 代 分 勾才	等	畠 反 代 分 勾才	等	屋敷 反 代 分 勾才	等	荒地 反 代 分 勾才	小計 反 代 分 勾才
13	ウシノ谷口	牛ガ谷口	1 7 1	上						1 7 1 0
13	〃	〃	0 12 0 1/2	上						0 12 0 1/2
13	ナモトヤシキ	不　明					2 20 2	下ヤシキ		2 20 2 0
13	サコウシクカ	サ コ ウ			1 10 1	下畠				1 10 1 0
13	イ ノ 谷	イ ノ 谷					0 30 5	下ヤシキ		0 30 5 0
13	〃	〃	1 11 3	下						1 11 3 0
13	ヒンヤミ谷	不　明	1 23 3	下々						1 23 3 0
13	ヌタツボ	ヌタツボ	0 31 5	下					0 5 0	0 36 5 0
13	〃	〃							0 13 0	0 13 0 0
13	イフクジ	イフクジ					0 15 0	下ヤシキ		0 15 0 0
13	〃	〃			0 4 3	下々山畠	0 5 0	下ヤシキ		0 9 3 0
13	〃	〃	0 46 3	下						0 46 3 0
13	ニシカイナ	西 ヶ 迫	1 19 1	下						1 19 1 0
13	〃	〃			0 2 3	下々山畠				0 2 3 0
13	〃	〃					0 35 1	下ヤシキ		0 35 1 0
13	ウシノ谷口	牛ガ谷口	1 20 2	上						1 20 2 0
13	イフリハザキ	イフリハザキ	1 8 1	上						1 8 1 0
13	〃	〃	1 1 3	上						1 1 3 0
13	〃	〃	0 32 1	下						0 32 1 0
13	アマツ、ミ	不　明	0 36 2	下						0 36 2 0
13	〃	〃	0 31 0	上						0 31 0 0
13	〃	〃	0 30 5	中						0 30 5 0
13	イフリハザキ	イフリハザキ	0 6 3	中						0 6 3 0
13	〃	〃	1 2 1	中						1 2 1 0
13	〃	〃	0 48 5	中						0 48 5 0
13	アマツ、ミ	不　明	0 35 2	中						0 35 2 0
13	町　タ	チョウダ	2 0 0	上						4 10 5 0
			2 10 5	中						
13	ワ　タ	ワダノ谷	2 0 0	上						2 48 5 0
			0 48 5	中						
13	〃	〃							0 32 5	0 32 5 0
13	ヨ コ タ	不　明	2 36 1 1/2	中						2 36 1 1/2
13	〃	〃	0 41 5	中						0 41 5 0
13	ケンモチ	〃	2 0 5 3/4	下						2 0 5 3/4
13	〃	〃	1 0 2	下						1 0 2 0
13	エホシカタ	ヨボシガタ	1 35 1	中						1 35 1 0
13	ツエヲチ	フ イ リ	1 29 2	下						1 29 2 0
13	セイドウ	シ イ ド	1 26 3	下					0 2 0	1 28 3 0
13	〃	〃	0 25 2	下						0 25 2 0
13	〃	〃							0 20 0	0 20 0 0
13	カモウ谷	カモヲ谷	1 10 0	下					0 2 0	1 12 0 0
13	〃	〃	3 16 5	下						3 16 5 0
13	〃	〃							0 7 5	0 7 5 0
13	〃	〃							0 4 1	0 4 1 0
13	〃	〃			0 5 3	下々山畠				0 5 3 0
小計			45 15 4 3/4		1 22 4		4 5 2		1 36 5	52 31 3 3/4

日	ホノギ	現地種地名	水田		畠		屋敷		荒地	小計
14	持　地	不　明	1 25 5	中						1 25 5 0
14	タルスノハナ	タルスハナ	2 3 5	上						2 3 5 0
14	〃	〃	0 45 2	上						0 45 2 0
14	西ハキヲカ	ウチハギヲカ	0 14 2	中						0 14 2 0
14	〃	〃	0 35 3	上					0 15 0	1 10 3 0
14	〃	〃	0 40 0	上					0 2 0	0 42 0 0
14	〃	〃	1 25 0 1/2	中						1 25 0 1/2

表28　ホノギ・小字一覧表　12

日	ホノギ	現地籍地名（小字）	水田 反	代	分	勺	才	等	畑 反	代	分	勺	才	等	屋敷 反	代	分	勺	才	等	荒地 反	代	分	勺	才	小計 反	代	分	勺	才
14	西ハヤサカ	ウチハヤサカ	0	28	0	1/2		中																		0	28	0	1/2
14	〃	〃	1	1	2			下																		1	1	2	0
14	〃	〃	1	20	0	1/2		下																		1	20	0	1/2
14	〃	〃	1	7	5			中																		1	7	5	0
14	〃	〃							0	7	5			下々畠												0	7	5	0
14	クロゾヘ	クロゾエ	1	5	1			下																		1	5	1	0
14	〃	〃	1	16	4			下																		1	16	4	0
14	寺　前	ヒラヤナギ	1	7	5	1/2		下																		1	7	5	1/2
14	〃	〃	1	10	0			下																		1	10	0	0
14	〃	〃	1	12	2			下																		1	12	2	0
14	〃	〃	1	4	0	1/2		下																		1	4	0	1/2
14	〃	〃	1	5	2			下																		1	5	2	0
14	〃	〃	1	0	1			下																		1	0	1	0
14	〃	〃	1	47	0			下																	0	13	0	2	10	0	0
14	ヤマダシ	不　明	1	37	4	1/2		下々																		1	37	4	1/2
14	（北ダシ）	〃	0	40	1			下々																		0	40	1	0
14	〃	〃	0	27	3			下々																		0	27	3	0
14	〃	〃	1	1	3	1/2		下々																		1	1	3	1/2
14	〃	〃	0	22	5	1/2		下々																		0	22	5	1/2
14	〃	〃	1	2	0	1/2		下々																		1	2	0	1/2
14	〃	〃	0	39	0			下々																		0	39	0	0
14	〃	〃	0	38	4	1/2		下々																		0	38	4	1/2
14	〃	〃	2	12	5	1/2		下々																		2	12	5	1/2
14	〃	〃	0	25	0			下々																	0	8	0	0	33	0	0
14	〃	〃	0	7	0			下々																	0	28	3	0	35	3	0
14	〃	〃	0	20	0			下々																	0	43	0	1	13	0	0
14	中ザワ	〃	0	20	0			下々																	0	25	0	0	45	0	0
14	シイワラ	シイワラ																							1	42	0	1	42	0	0
14	〃	〃																							3	42	3	3	42	3	0
14	中　ダ	不　明																							1	3	0	1	3	0	0
14	シイワラ	シイワラ																							1	21	2	1	21	2	0
14	サイケ	ウシイケ																							1	1	3	1	1	3	0
14	〃	〃																							1	21	3	1	21	3	0
14	〃	〃																							1	23	2	1	23	2	0
14	〃	〃	3	10	3			下々																	7	13	0	10	23	3	0
小　計			37	21	0	1/2			0	7	5				0	0	0				22	2	4		59	31	3	1/2			

日	ホノギ	現地籍地名	水田 反	代	分	勺	才	等	畑 反	代	分	勺	才	等	屋敷 反	代	分	勺	才	等	荒地 反	代	分	勺	才	小計 反	代	分	勺	才
15	カドワカ・ヒノデ・センプクジ	カドワカ	1	9	3			下々																		1	9	3	0
15	ホンデン	ホンデン	0	33	3			下々													1	1	0			1	37	3	0
15	西ホンデン	西ホンデン	1	12	0	1/2		下																		1	12	0	1/2
15	サ・ノダ	不　明	1	9	3			下																		1	9	3	0
15	シ　バ	〃	0	46	2	1/2		下																		0	46	2	1/2
15	〃	〃	0	35	5			下																		0	35	5	0
15	ニシホンデン	西ホンデン	1	10	0	1/2		下																		1	10	0	1/2
15	ヨコタ	ヨコタ	1	15	0			下																		1	15	0	0
15	東ホンデン	不　明	1	7	0			下													0	13	1			1	20	1	0
15	〃	〃	2	3	1			下													0	2	0			2	5	1	0
15	シタヨコタ	ヨコタ	1	3	2			下																		1	3	2	0
15	〃	〃	1	33	2			下																		1	33	2	0
15	中ヨコタ	〃	1	20	5			下																		1	20	5	0
15	カリヨコタ	〃	1	1	2			下																		1	1	2	0
15	東クロバナ	不　明	1	3	1			下																		1	3	1	0
15	ハギオカ	ハギオカ	2	35	1			下																		2	35	1	0

表29　ホノギ・小字一覧表　13

日	ホノギ	現地籍地名（小字）	水田 反	代	分	厘	歩	等	畠 反	代	分	厘	歩	等	屋敷 反	代	分	厘	歩	等	荒地 反	代	分	厘	歩	小計 反	代	分	厘	歩
16	ハギオカ	ハギオカ	4	0	0			中	0	8	3			下畠												0	41	5	0	
			5	33	2			下																						
16	丁ダ	チヨウダ	2	32	0			中																		2	32	0	0	
16	〃	〃	1	5	2	1	2	中																		1	5	2	1	2
16	〃	〃	2	8	5			下																		2	8	5	0	
16	〃	〃	3	9	0			下																		3	9	0	0	
16	〃	〃	2	0	0			下																		2	0	0	0	
16	石仏ノハナ	イシボトケ	2	0	3			下																		2	0	3	0	
16	道ノウラ	ミチノウラ	1	21	2			中																		1	21	2	0	
16	道ノオモテ	ミチノオモテ	1	20	2			上																		1	20	2	0	
16	タルスハナ	タルスハナ	1	12	4			上																		1	12	4	0	
16	トリイダキ	不　明	0	43	2	1	2	中																		0	43	2	1	2
16	ジンデン	〃	1	30	3	1	2	中																		1	30	3	1	2
16	カドタ	〃	1	37	3			上																		1	37	3	0	
16	樋ノ本	〃	1	5	2			上																		1	5	2	0	
16	〃	〃							0	13	0			下々畠										0	1	2	0	14	2	0
16	岡ヤシキ	タカヤシキ	0	12	0			下々							0	24	5			下々ヤシキ						0	36	5	0	
16	岡ノト	不　明	1	8	4			上																		1	8	4	0	
16	川ソダ	〃	0	40	0	1	2	上																		0	40	0	1	2
16	〃	〃	0	46	0			中																		0	46	0	0	
16	〃	〃	1	31	2			中																		1	31	2	0	
16	ヤリノト	〃	1	18	4			中																		1	18	4	0	
16	センダクジ	ゼンタクジ													0	10	2			下々田畠ヤシキ						0	10	2	0	
16	〃	〃	1	0	0			中																		1	0	0	0	
16	〃	〃	0	43	3			下																		0	43	3	0	
16	シモノトノ	シモノトノ	1	46	3			中							0	30	0			中ヤシキ						2	26	3	0	
16	カミノトノ	カミノトノ													1	15	0	1	2	中ヤシキ						1	15	0	1	2
小計			62	39	1	1	2		0	21	3	0			2	30	1	1	2		1	20	3			67	11	3	0	

日	ホノギ	現地籍地名	水田 反	代	分	厘	歩	等	畠 反	代	分	厘	歩	等	屋敷 反	代	分	厘	歩	等	荒地 反	代	分	厘	歩	小計 反	代	分	厘	歩
17	綾ノシタ	不　明	1	11	2			中																		1	11	2	0	
17	ビ・ノ木	ヒビノキ	1	6	2			下																		1	6	2	0	
17	綾ノシタ	不　明	1	33	1			中																		1	33	1	0	
17	ウルシノ木	ヒビノキ	1	6	0			中																		1	6	0	0	
17	ト　〃	〃													0	12	1			下々田畠ヤシキ						0	12	1	0	
17	川原ダ	〃	1	11	2			下																		1	11	2	0	
17	〃	〃	1	41	2			下																		1	41	2	0	
17	川原ヤシキ	〃	1	5	3			中							0	25	0			中ヤシキ						1	30	3	0	
17	〃	〃							0	6	3			下々畠												0	6	3	0	
17	マツノ木子	〃													0	6	2	1	2	下々田畠ヤシキ						0	6	2	1	2
17	コクボダン	コクボダン	0	47	2			下																		0	47	2	0	
17	ヒトツダモト	不　明													0	47	3			中ヤシキ						0	47	3	0	
17	シャコウイン	〃	1	29	2			下							0	11	0			下ヤシキ						1	40	2	0	
17	谷　ダ	〃	0	40	5			下																		0	40	5	0	
17	チモトヤシキ	〃	1	16	5			中																		1	16	5	0	
17	〃	〃													1	10	2			中ヤシキ						1	10	2	0	
17	リンセンジ	リンセンジ													0	15	0			下ヤシキ						0	15	0	0	
17	〃	〃	2	29	3			下々													0	28	0			3	7	3	0	
17	フタギバ	不　明	0	28	2			下々																		0	28	2	0	
17	ズ・レ谷	〃							0	16	5			下々畠												0	16	5	0	
17	馬ノ太良	ムマガタラ	0	46	0			下々													2	15	0			2	31	0	0	
17	〃	〃	1	19	5			下													0	2	0			2	1	5	0	
17	トビノス	不　明																			0	32	0			0	32	0	0	
17	馬ノ太良	ムマガタラ	1	5	0			上																		1	5	0	0	
17	田ノウチ	タノウチ	1	8	2			下																		1	8	2	0	

表30　ホノギ・小字一覧表　14

目	ホノギ	現地耕地名(小字)	水田		畑		屋敷		荒蕪	小計
			反代分勺才	等	反代分勺才	等	反代分勺才	等	反代分勺才	反代分勺才
17	柳ヶ谷	不明							0 13 2	0 13 2 0
17	赤ヤカサコ	チャヤガサコ	0 18 5	下					0 9 0	1 7 5 0
17	〃	〃							0 17 3	0 17 3 0
17	ドウワンダ	不明	1 35 0	ド						1 35 0 0
17	田ノウチ	タノウチ	1 6 1	下					0 2 0	1 8 1 0
17	松ノ本	松ノ木	1 35 5	ド						1 35 5 0
17	ホンゴキウ	ホンゴキウ	1 12 5	下						1 12 5 0
17	クロノシタ	不明	1 22 0	ド						1 22 0 0
17	〃	〃	1 30 1	ド					0 3 0	1 33 1 0
17	ヲカノ後	〃							0 16 0	0 16 0 0
17	田ノウチ	タノウチ	1 12 1	ド						1 12 1 0
17	エ・ヲタ	不明	1 5 2	下						1 5 2 0
17	サシキノ前	サジキノマエ	1 6 0	下					0 2 3	1 8 3 0
17	〃	〃	0 43 5	ド						0 43 5 0
17	松ノ本	松ノ木	2 5 1	ドヶ					0 3 0	2 8 1 0
17	サユノシリ	不明	0 45 0	ドヶ					0 5 0	1 0 0 0
17	クロノワラ	〃	1 11 3	ドヶ						1 11 3 0
17	ヲカタ	〃	1 3 2	ドヶ						1 3 2 0
17	五代タ	〃	0 45 3	ドヶ						0 45 3 0
17	リタ	タイリダ	1 5 1	ドヶ						1 5 1 0
17	ビヤタ	不明	1 1 5	ドヶ						1 1 5 0
17	シバ	〃	1 33 1	ドヶ						1 33 1 0
17	サカレタ	〃	0 45 5	ドヶ						0 45 5 0
17	リタ	タイリダ	1 7 4	ドヶ						1 7 4 0
17	〃	〃	0 35 0	ドヶ					0 5 0	0 40 0 0
17	ホトリカ	ホドオカ							0 20 3	0 20 3 0
17	イリリタ	不明	1 6 0	ドヶ						1 6 0 0
17	トウノウシタ	〃	1 1 2	ドヶ						1 1 2 0
17	西ノ谷	〃	3 10 3	ド					0 10 0	3 20 3 0
17	田ノウチ	タノウチ	1 18 0	ド					0 2 0	1 20 0 0
17	中西谷	不明	2 3 5	ドヶ						2 3 5 0
17	大西谷	大西谷	1 8 5 1/2	下					0 3 0	1 11 5 1/2
17	金ノサコ	クワノサコ	0 47 1	ド					0 12 0	1 9 1 0
17	〃	〃							0 18 3	0 18 3 0
小計			59 29 2 1/2		0 23 2		3 27 2 1/2		6 19 2	69 99 3 0

写　真　図　版

江ノ古城跡第２～４郭調査前状況（東より）

同完掘状況（東より）

江ノ古城跡第1郭調査状況（西より）

同完掘状況（西より）

江ノ古城跡第１郭Ａ－Ａ'ライン堆積土層断面（西より）

同第１郭調査状況（南東より）

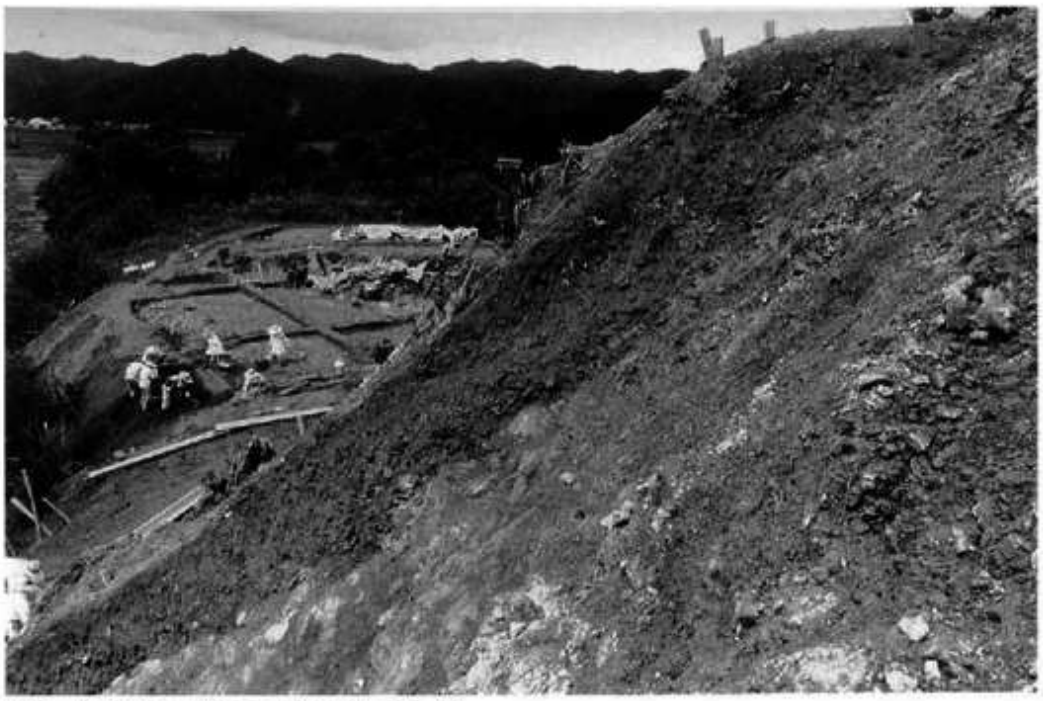
江ノ古城跡第1郭南西斜面伐採状況（西より）

同調査状況（西より）

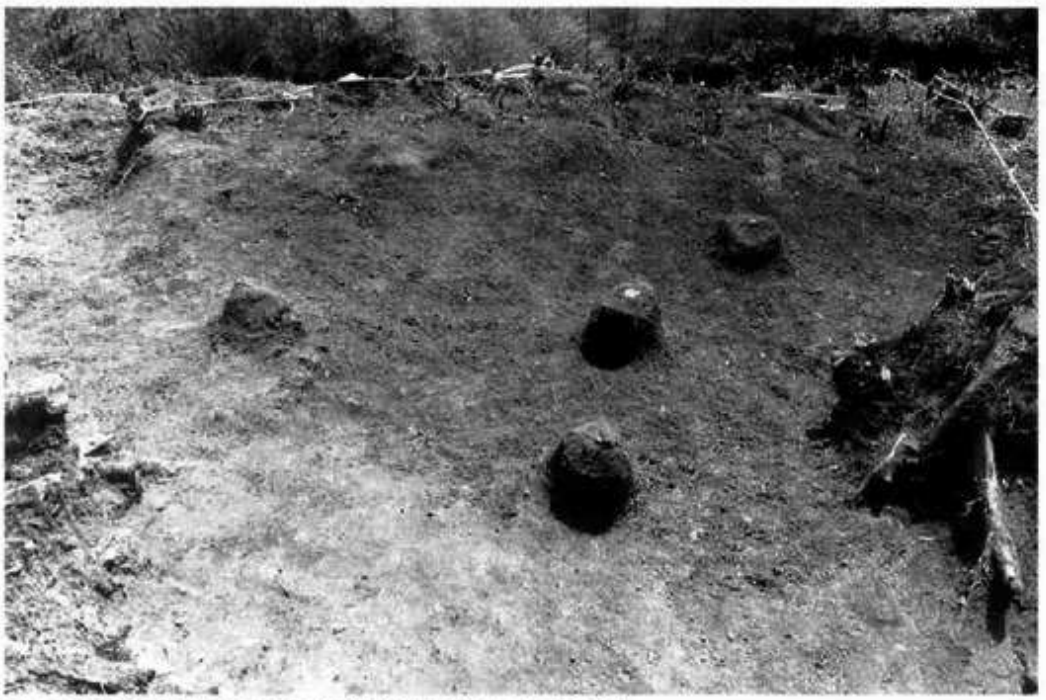
江ノ古城跡第１郭南西斜面調査状況（西より）

同完掘状況（西より）

江ノ古城跡第1郭南西斜面D′－D″ライン堆積土層断面（南より）



同D－D′ライン堆積土層断面（南東より）



江ノ古城跡第１郭南西斜面Ｂ区遺物出土状況（北東より）

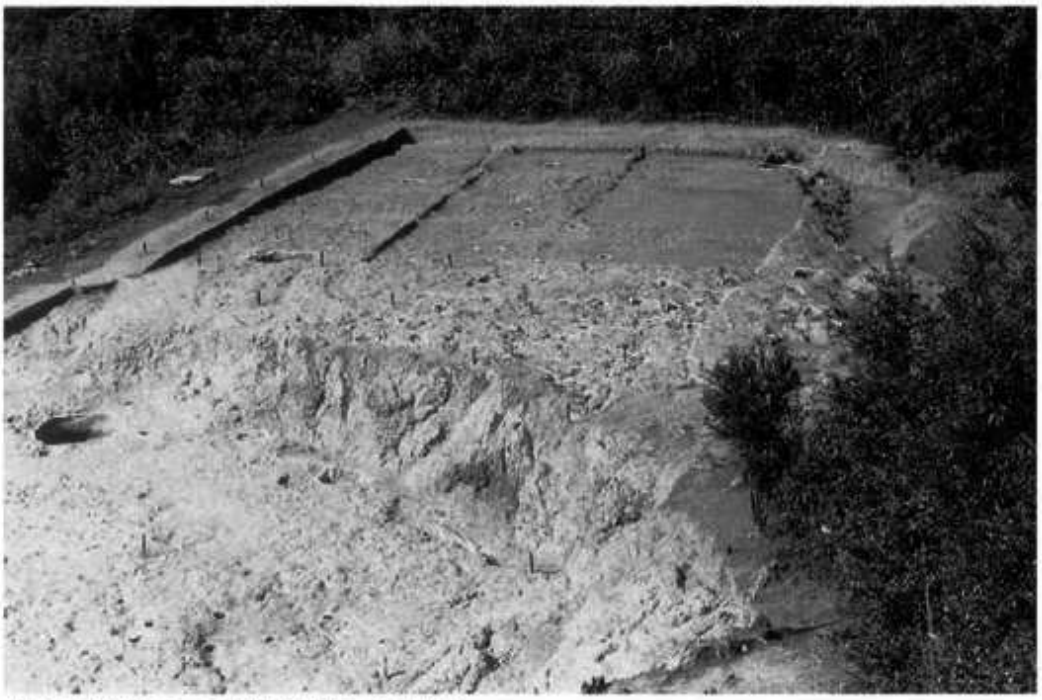
同寛永通宝(16)出土状況

江ノ古城跡第１郭南西斜面Ｂ区下半部弥生土器出土地点（北西より）

同弥生土器出土状況

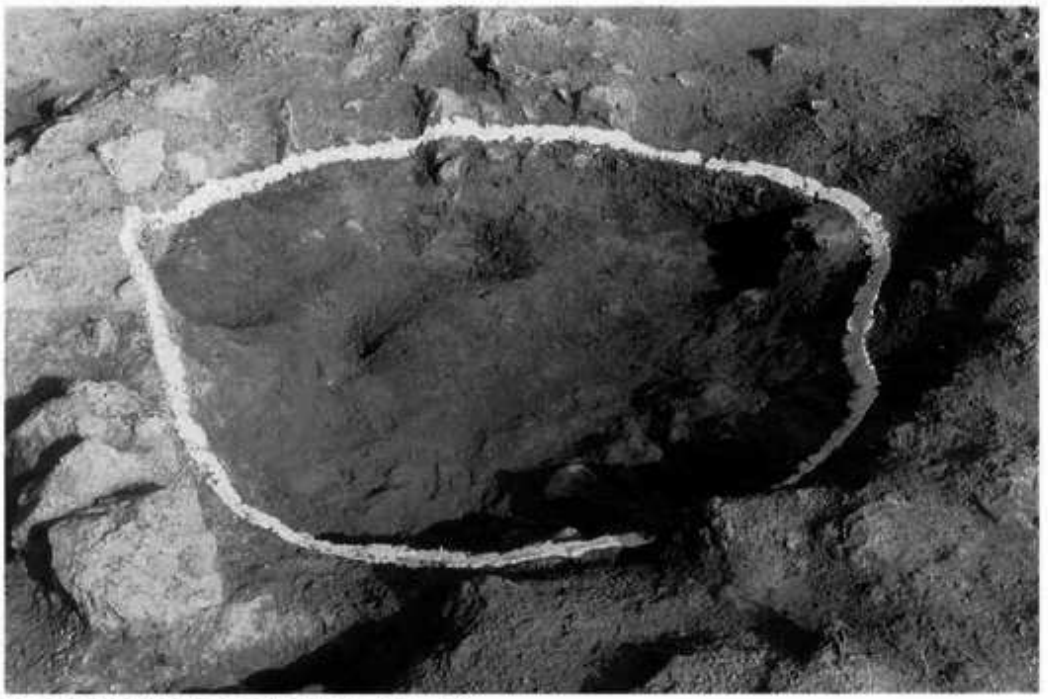
江ノ古城跡第2郭調査前状況（東より）

同遺構検出状況（東より）

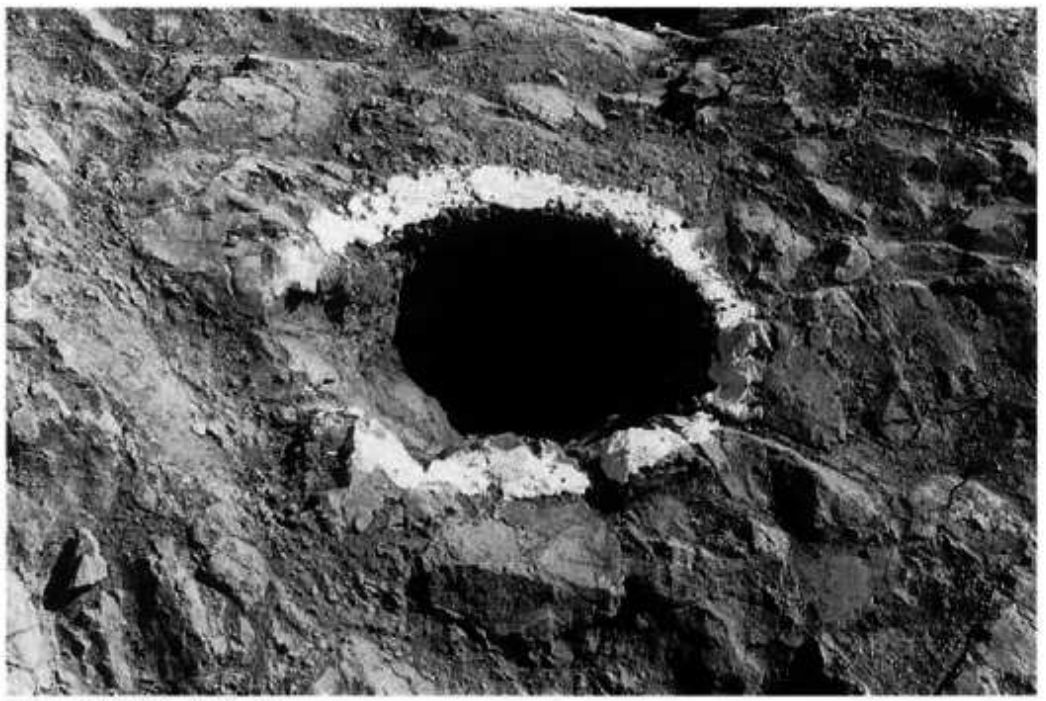


江ノ古城跡第２・３郭完掘状況（東より）

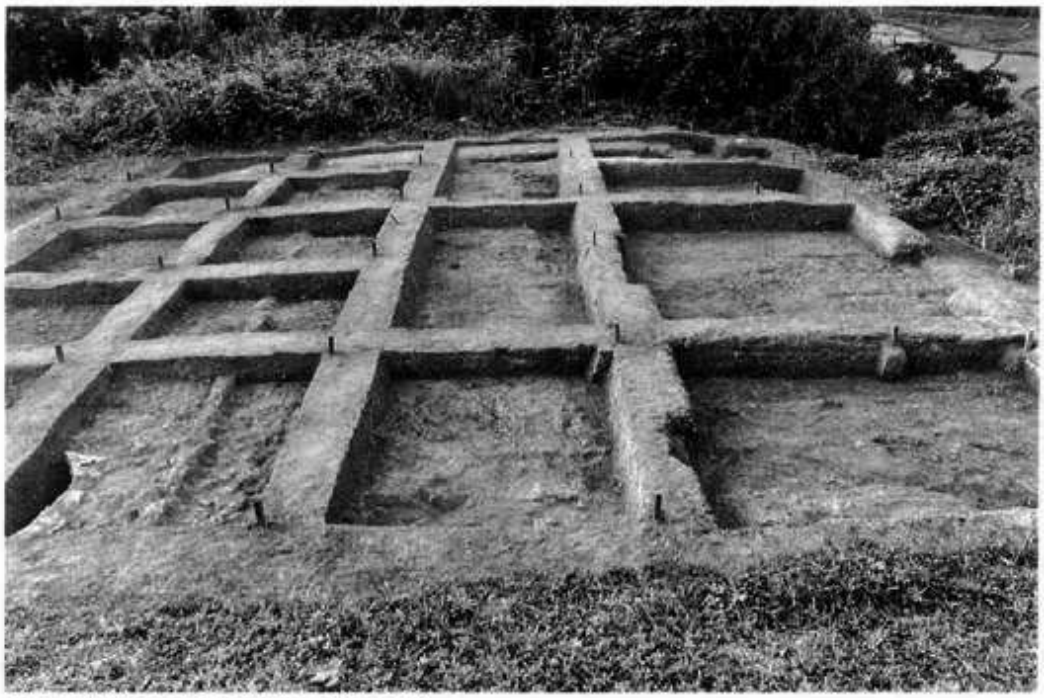
同第２郭Ｃ－Ｃ'ライン堆積土層断面（北西より）



江ノ古城跡第２郭ＳＫ１完掘状況（西より）



同Ｐ１完掘状況（北より）



江ノ古城跡第3郭調査状況（南東より）

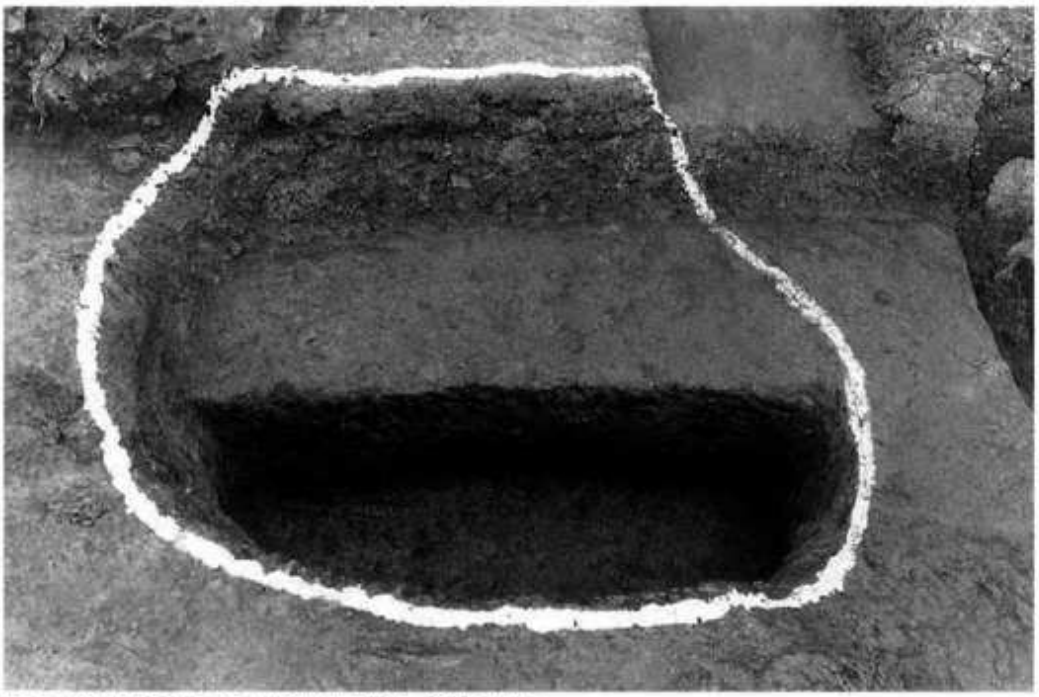
同遺構検出状況（南より）

江ノ古城跡第3郭E－E'ライン堆積土層断面（西より）

同北東端部堆積土層断面（北西より）

江ノ古城跡第3郭SK1検出状況（北東より）

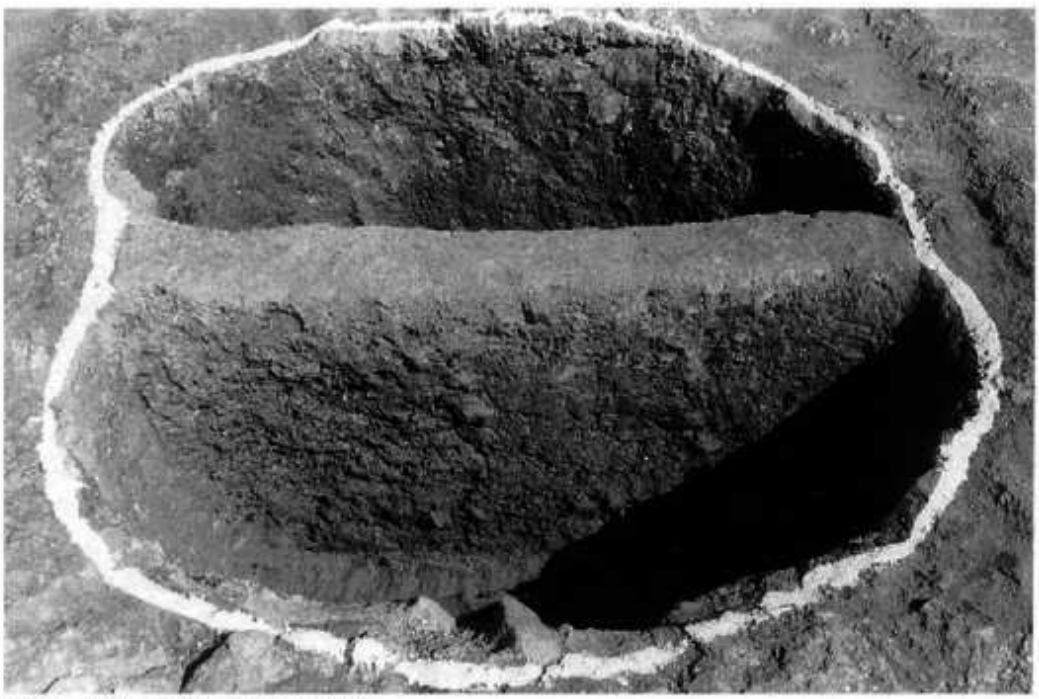
同遺物出土状況（南東より）



江ノ古城跡第3郭SK1堆積土層断面（南東より）

同完掘状況（北東より）

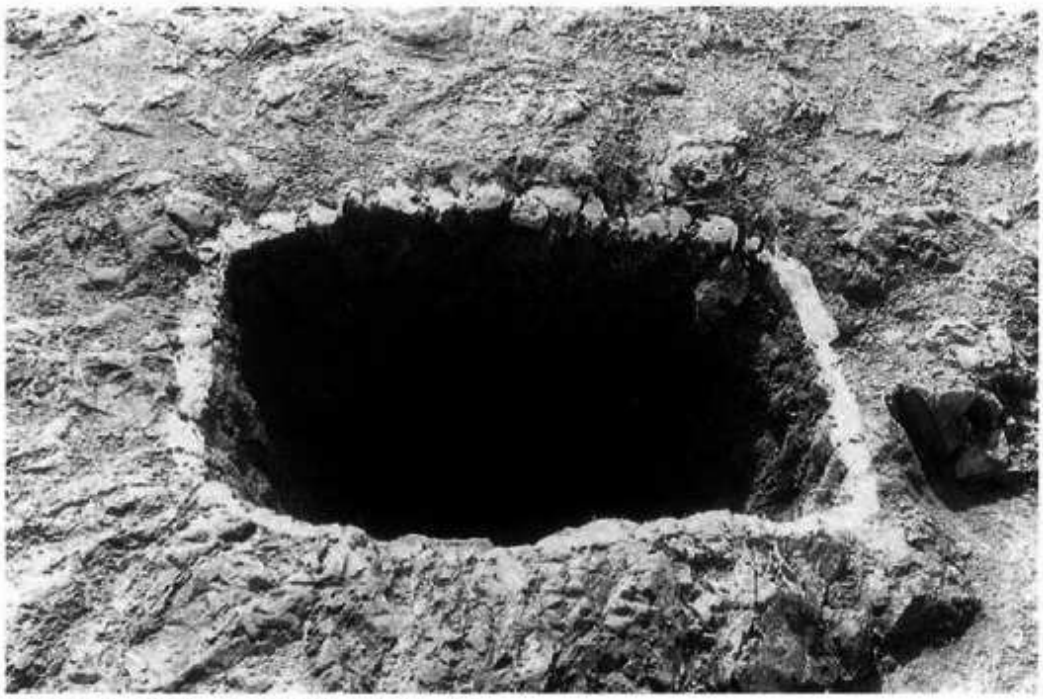
江ノ古城跡第３郭調査状況（東より）



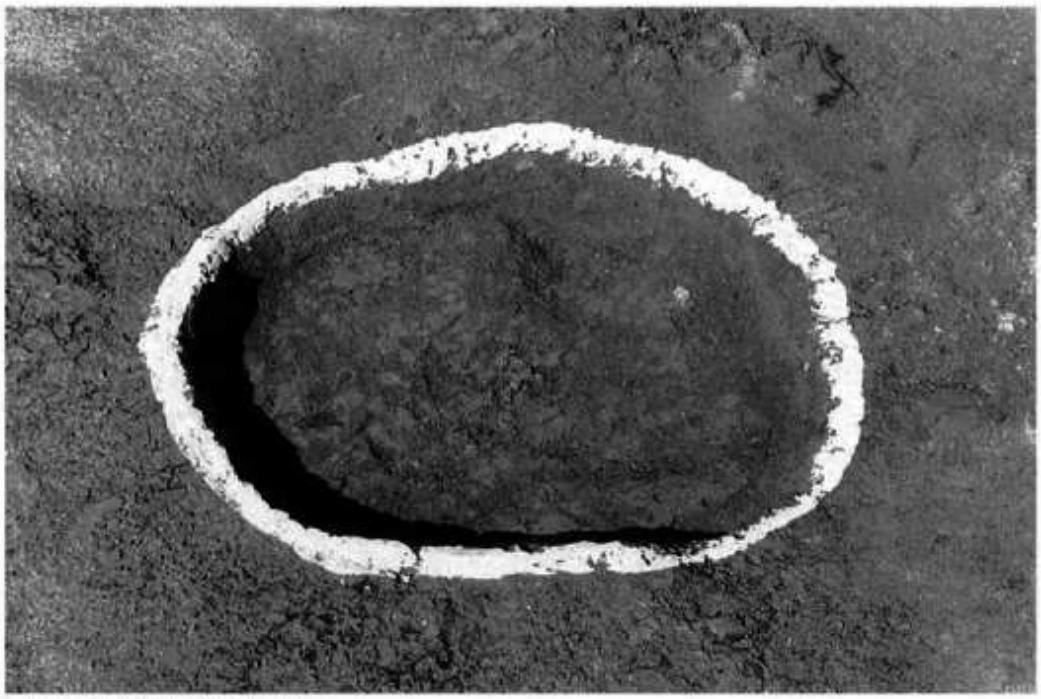
同 SK２堆積土層断面（北東より）

江ノ古城跡第3郭SK2完掘状況（南東より）

同床面近景（南東より）

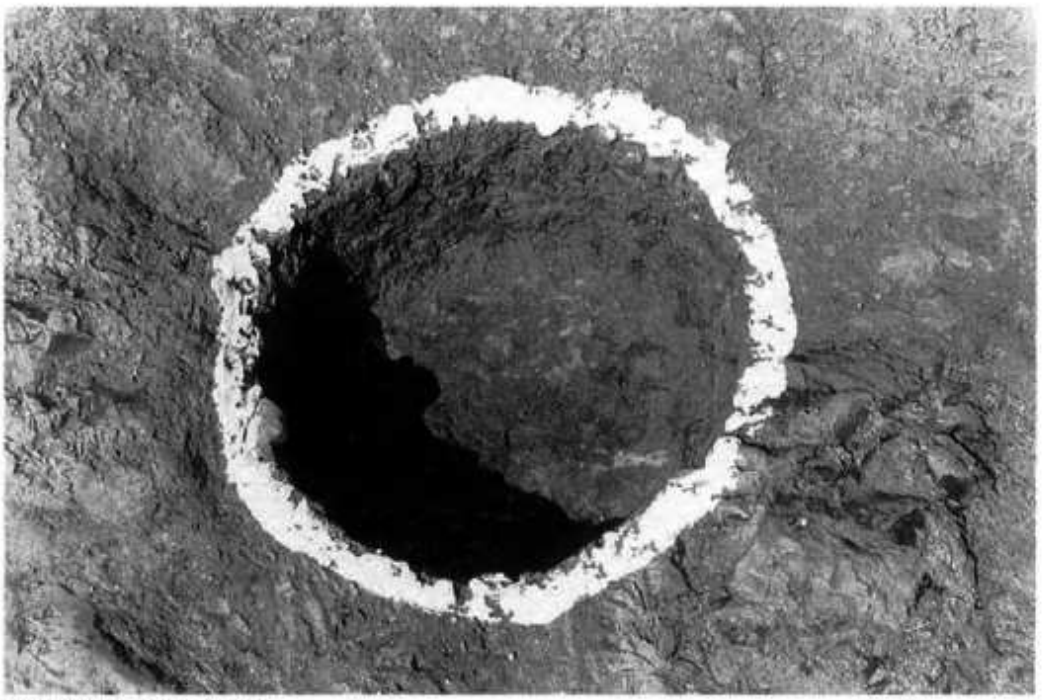


江ノ古城跡第３郭Ｐ１完掘状況（北東より）



同Ｐ３完掘状況（南東より）

江ノ古城跡第３郭Ｐ２堆積土層断面（南東より）



同完掘状況（南東より）

江ノ古城跡第３郭北東部分調査前状況（南東より）

同上（南より）

江ノ古城跡第3郭北東部分調査状況（西より）

同堆積土層断面（北西より）

江ノ古城跡第4郭調査状況（南東より）

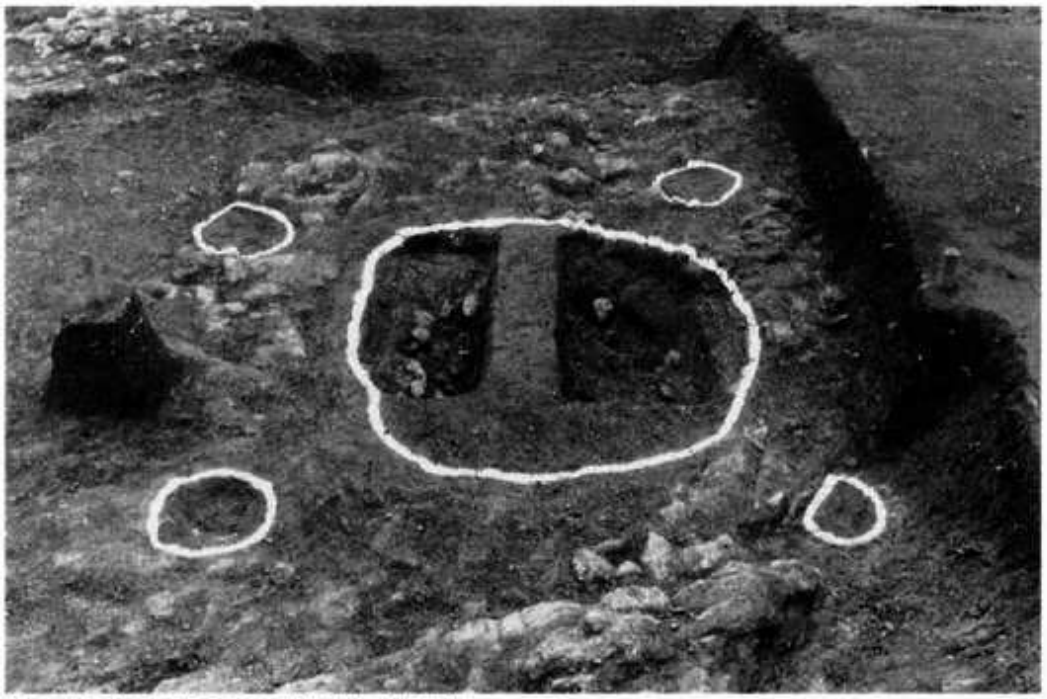
同上（東より）

江ノ古城跡第4郭遺構検出状況（東より）

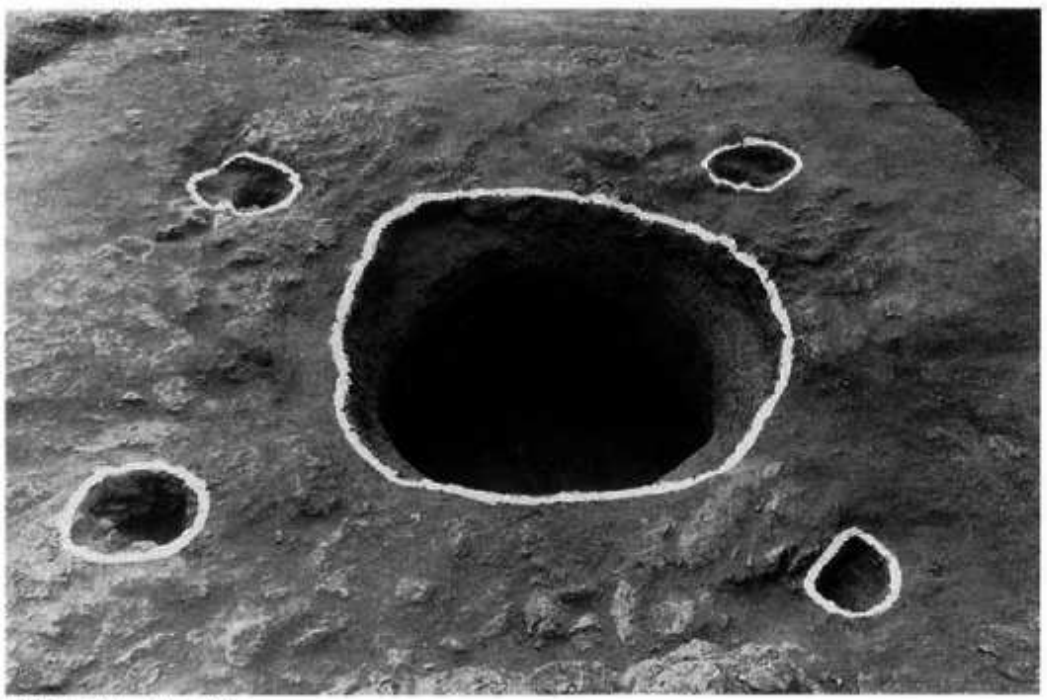
同完掘状況（東より）

江ノ古城跡第4郭A－A'ライン堆積土層断面（南より）

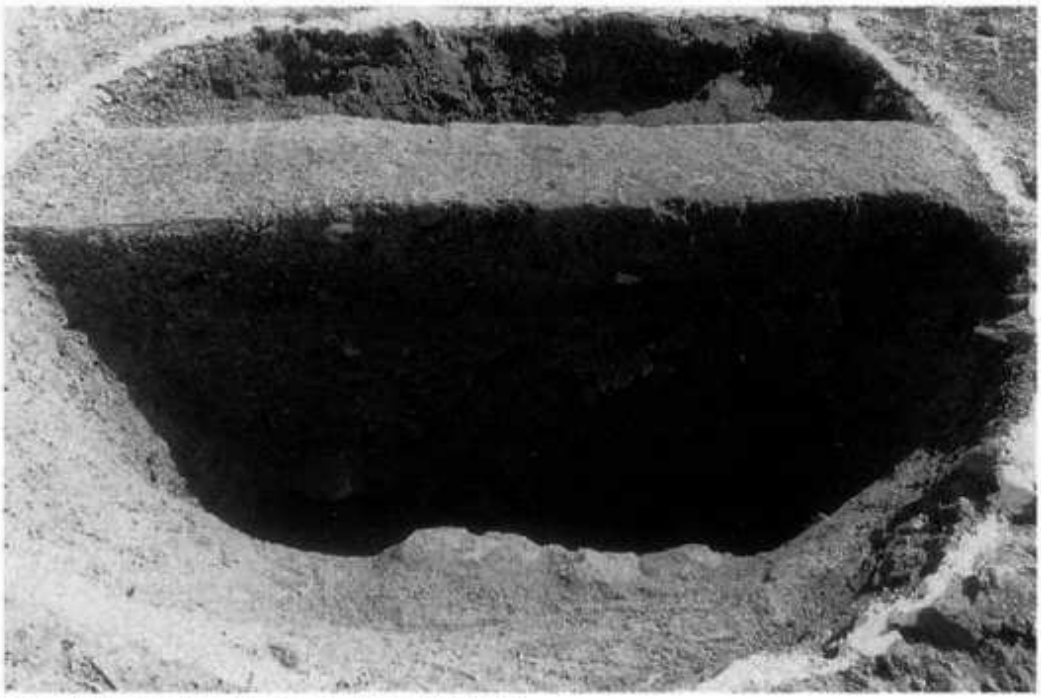
同C－C'ライン堆積土層断面（西より）



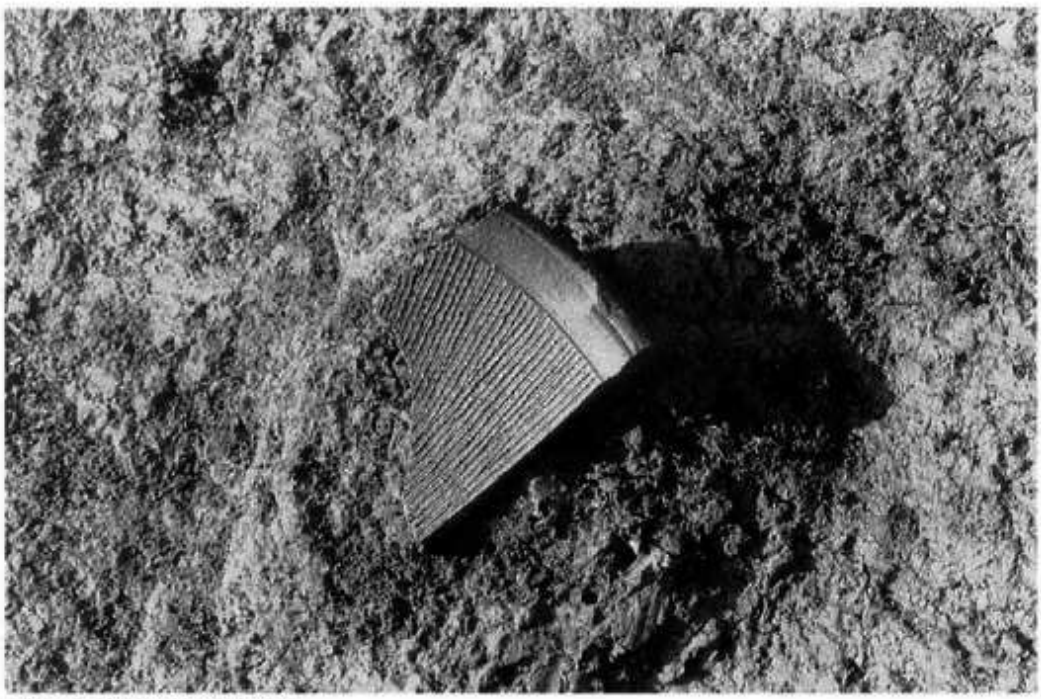
江ノ古城跡第4郭SK1検出状況（北より）



同完掘状況（北より）



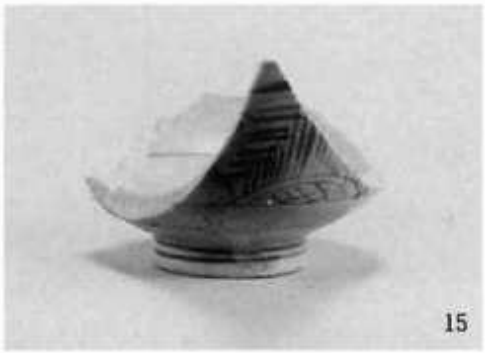
江ノ古城跡第4郭SK1堆積土層断面（西より）



同第4郭擂鉢(43)出土状況

5

8

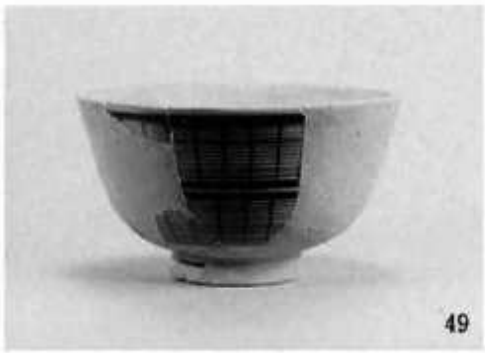

15

18

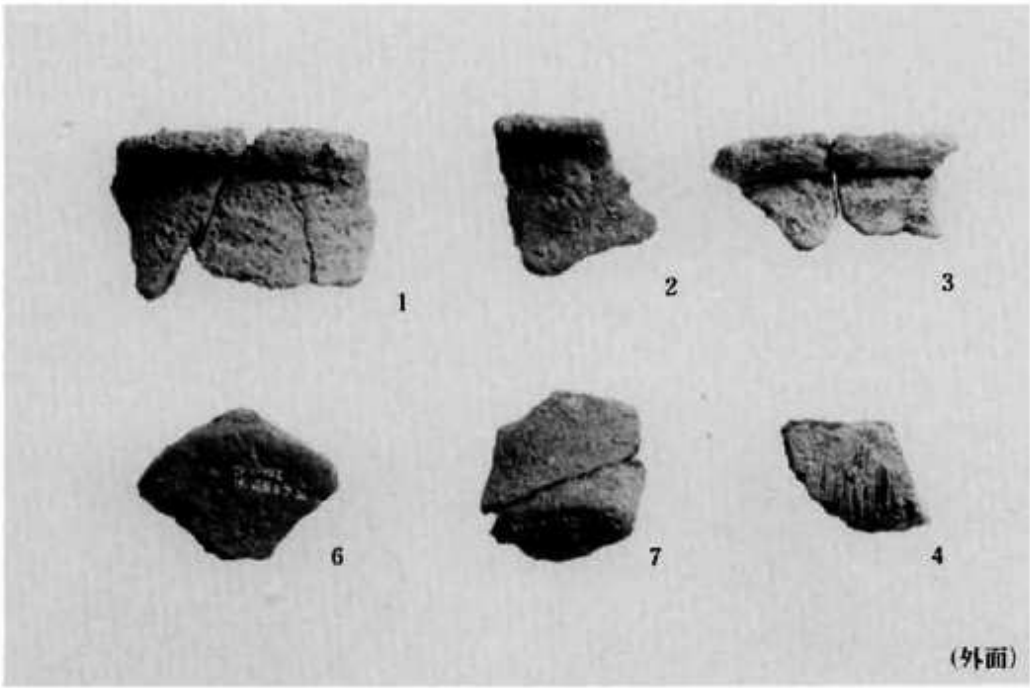
19

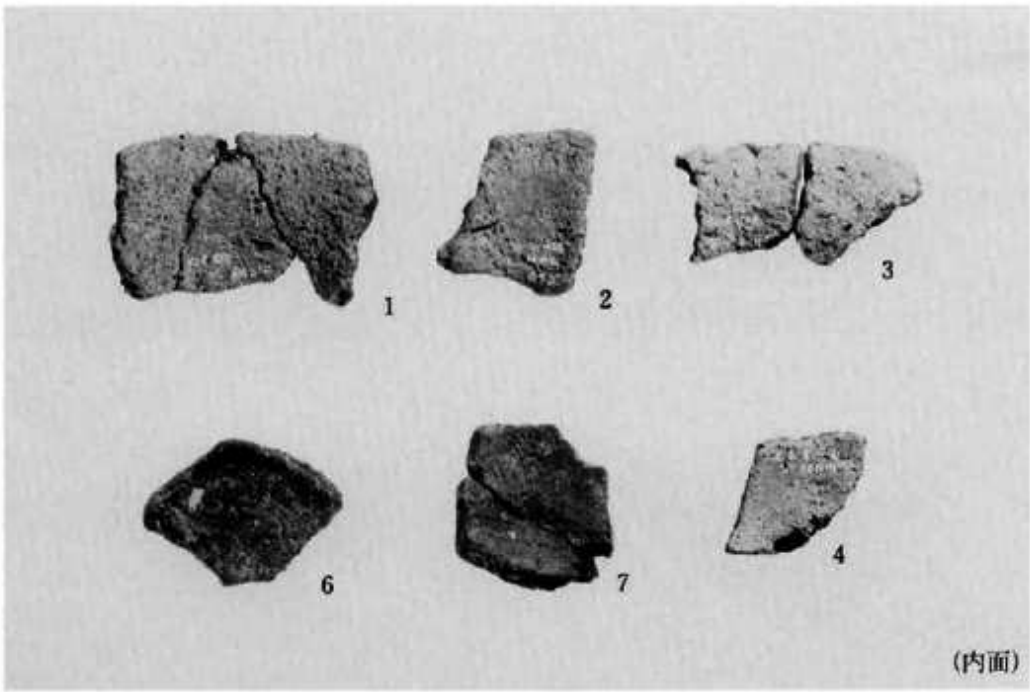
37

39

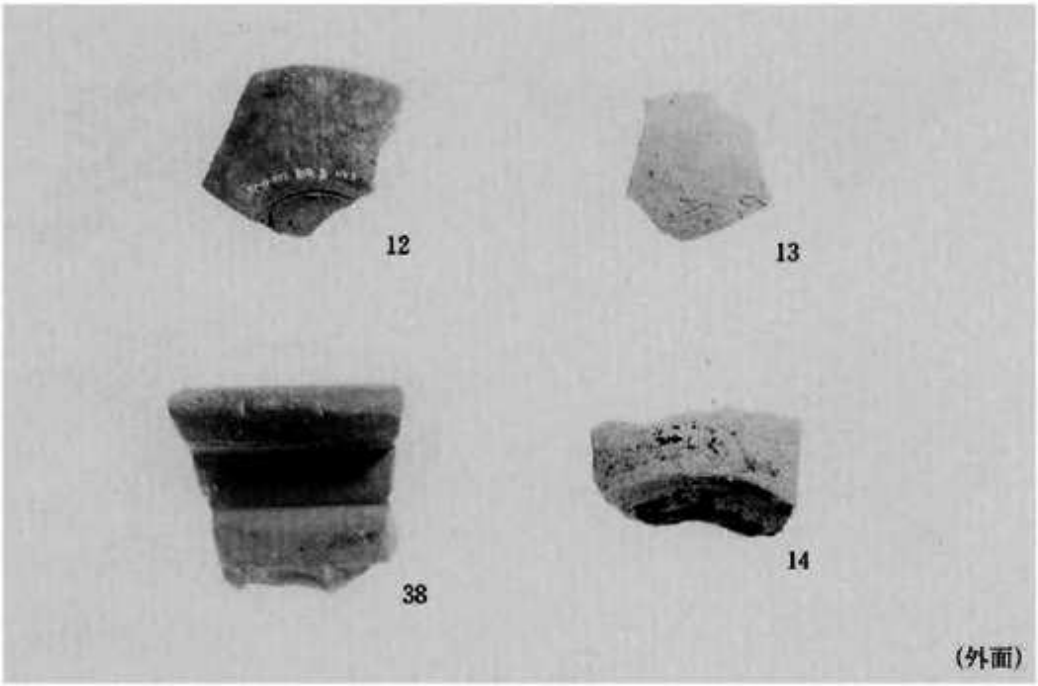

49

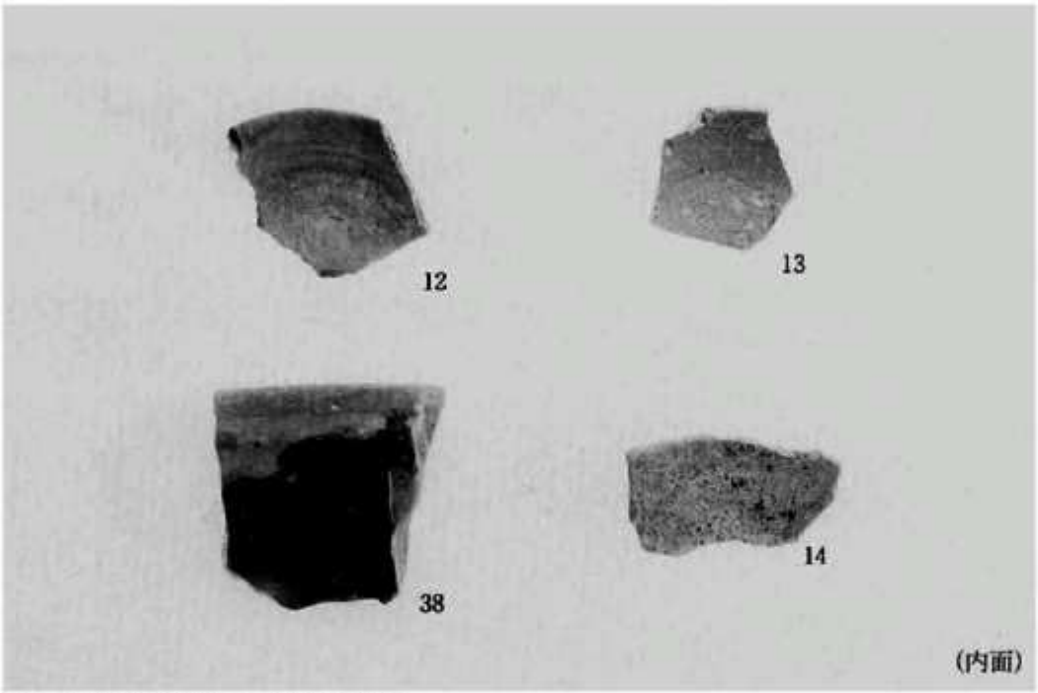
江ノ古城跡出土遺物 1



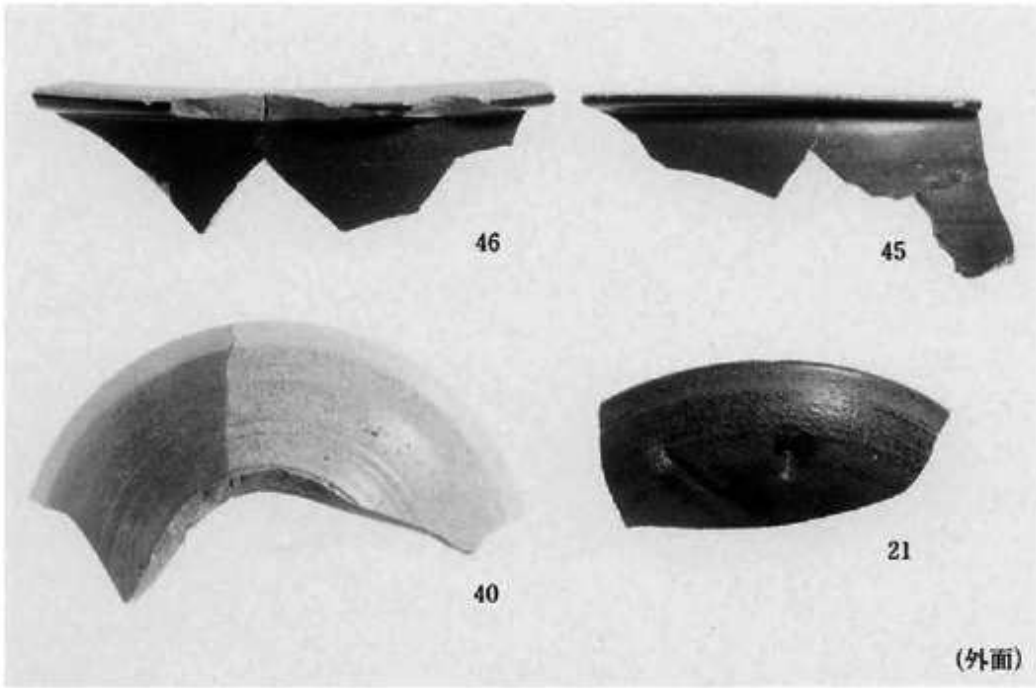


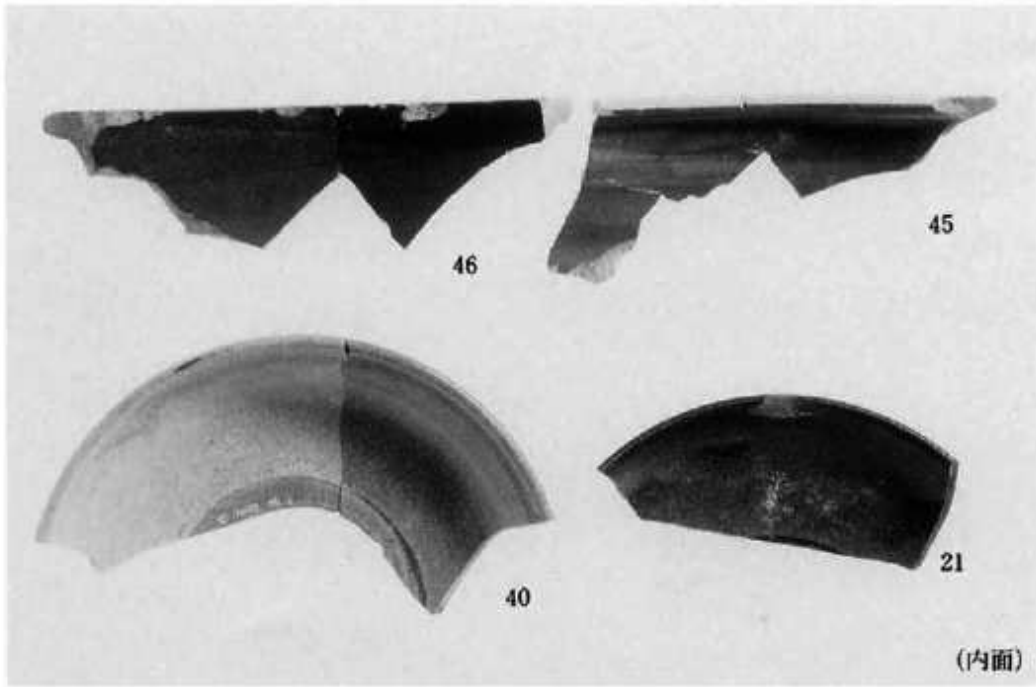
江ノ古城跡出土遺物２（弥生土器）



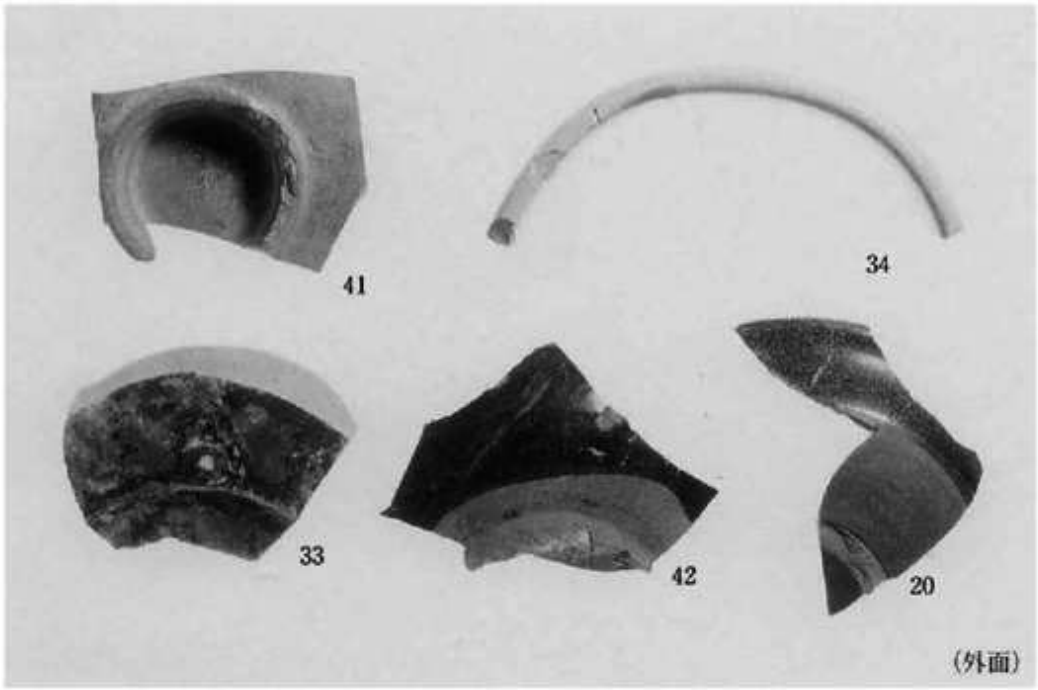


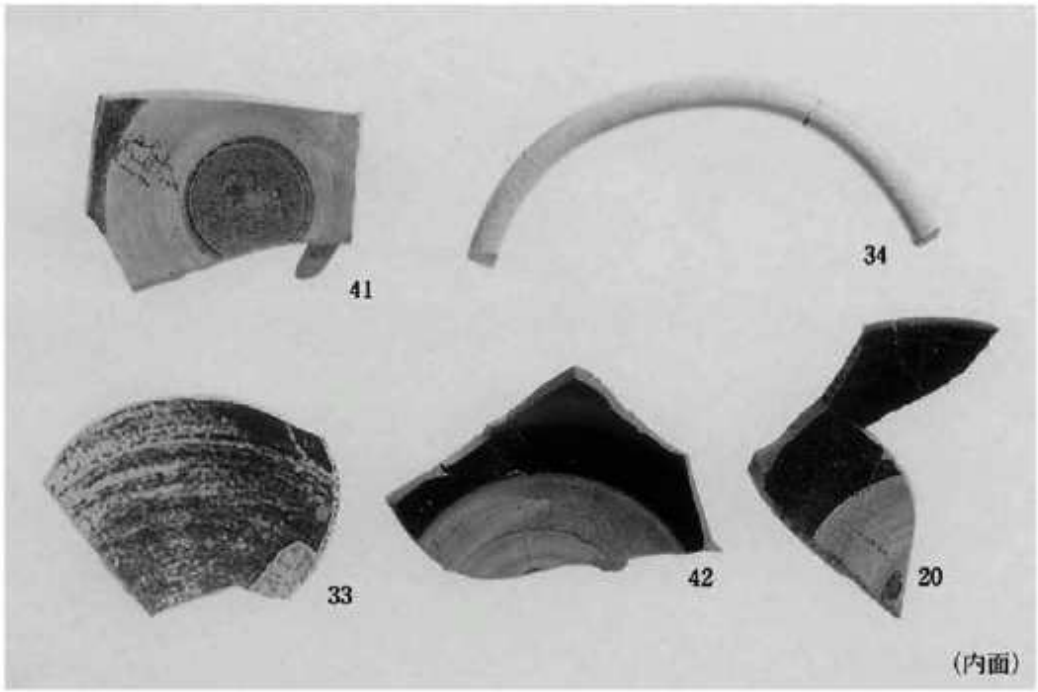
江ノ古城跡出土遺物３（土師質土器）



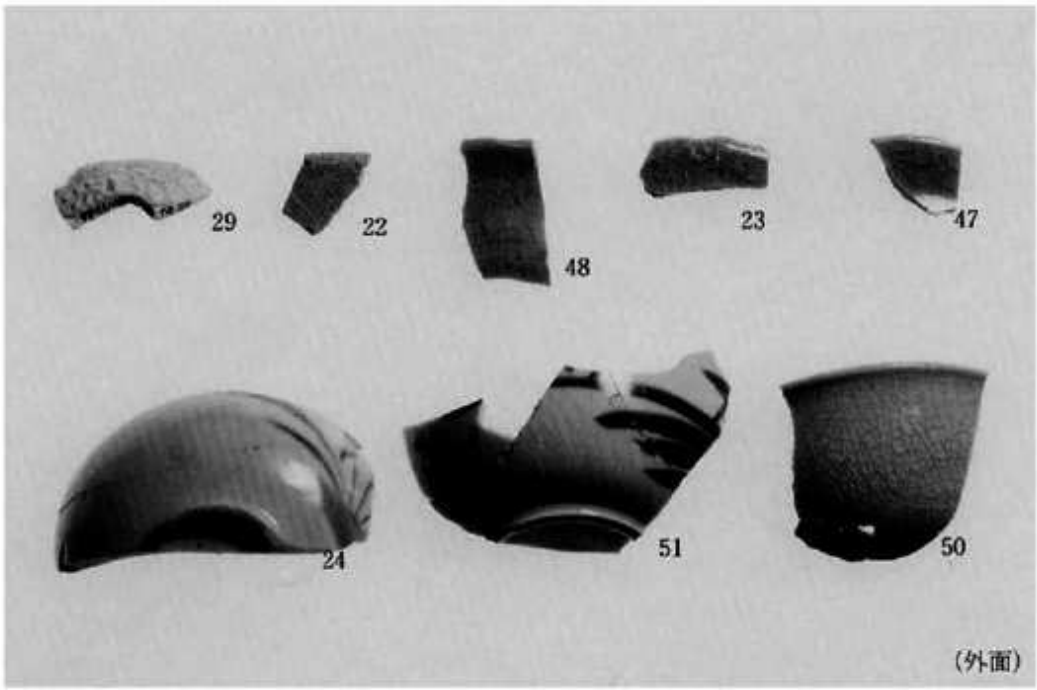


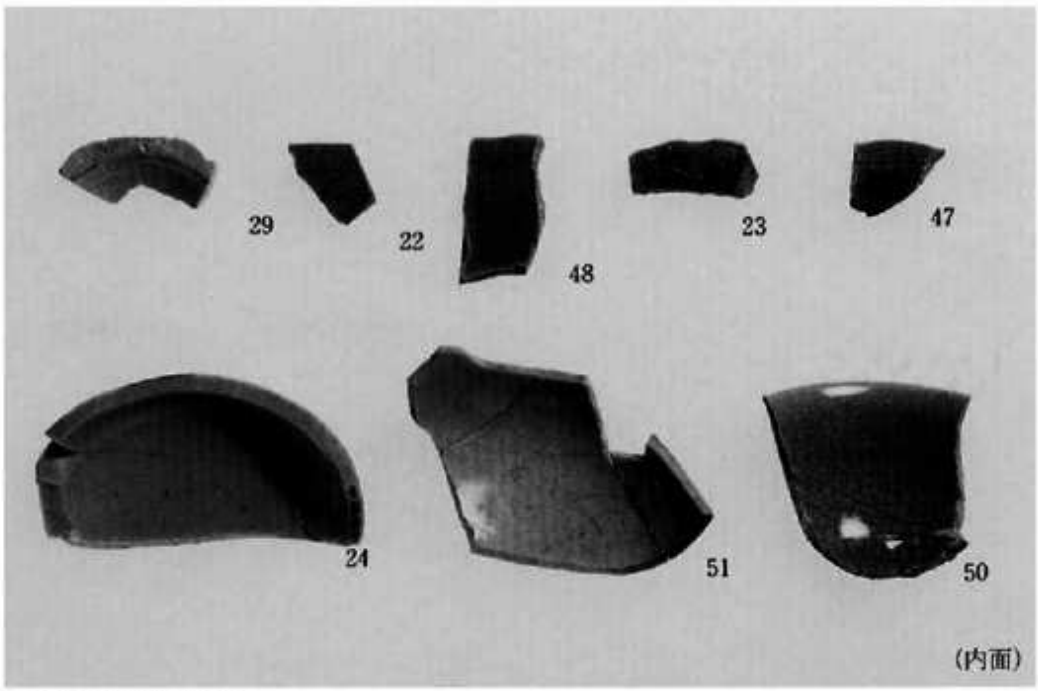
江ノ古城跡出土遺物4（陶器）



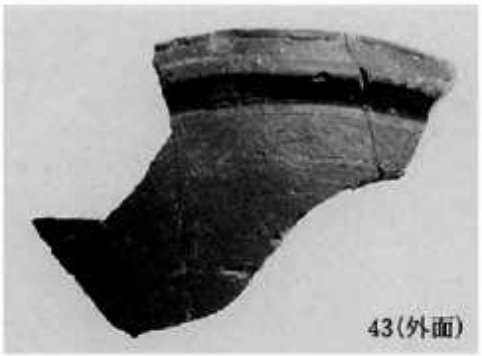


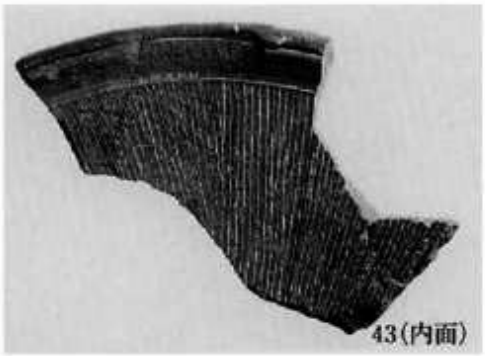
江ノ古城跡出土遺物５（陶器）

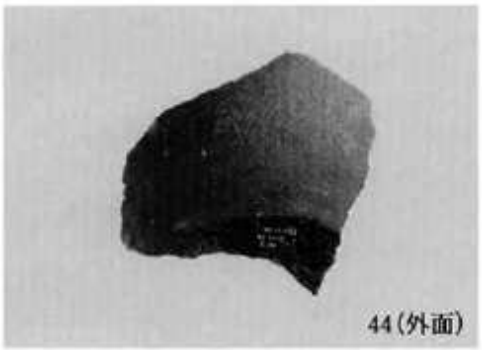


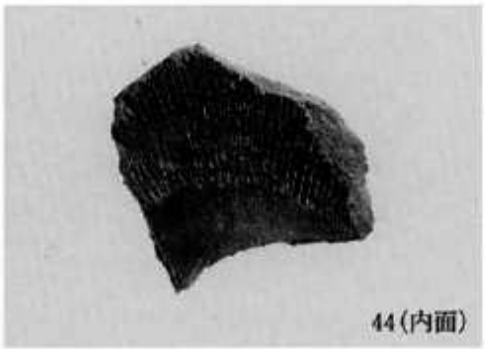


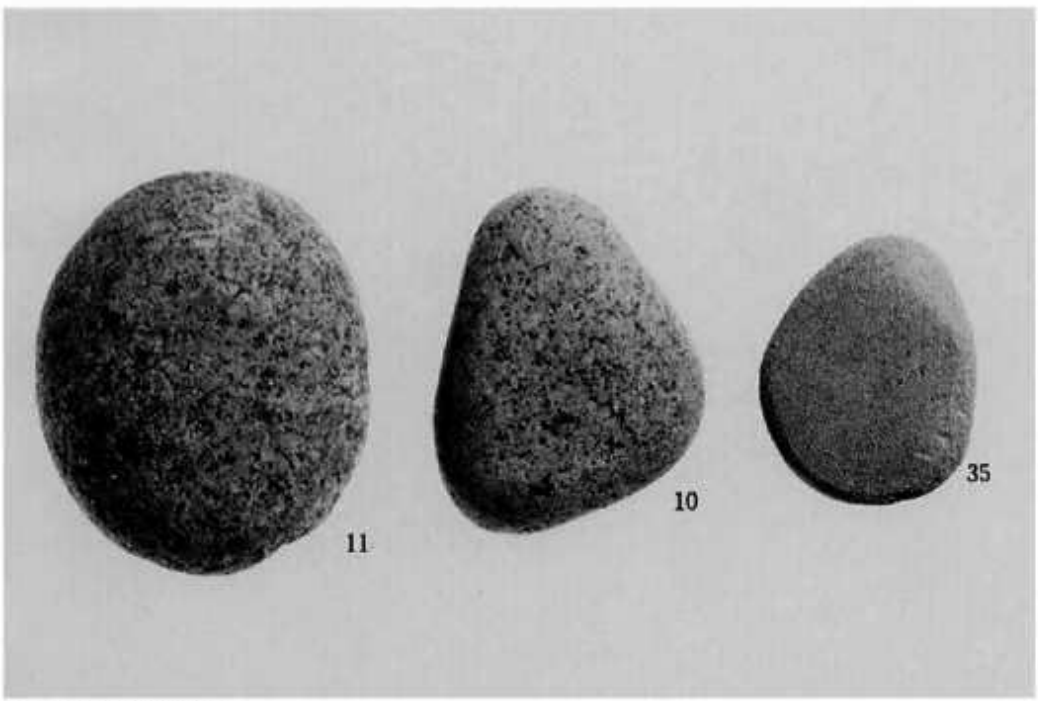
江ノ古城跡出土遺物 6



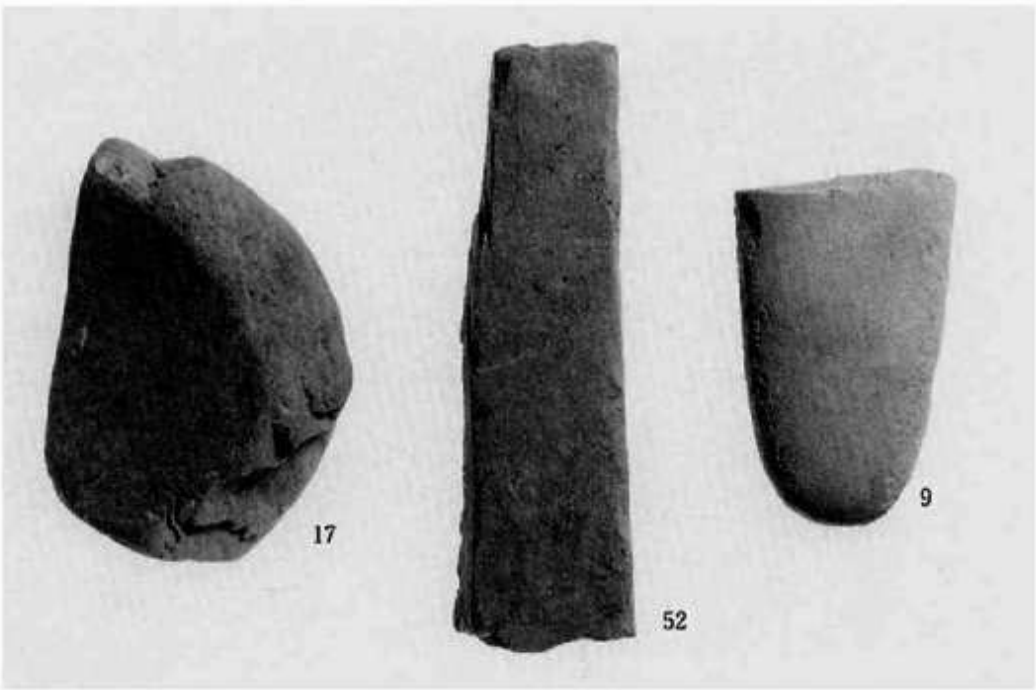


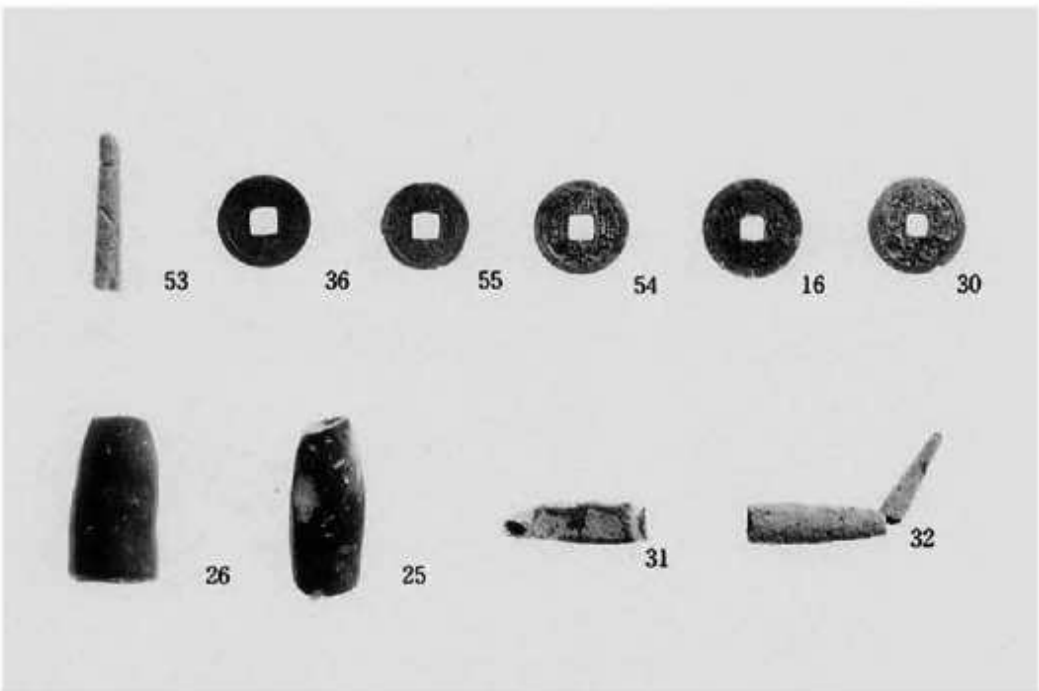






江ノ古城跡出土遺物7





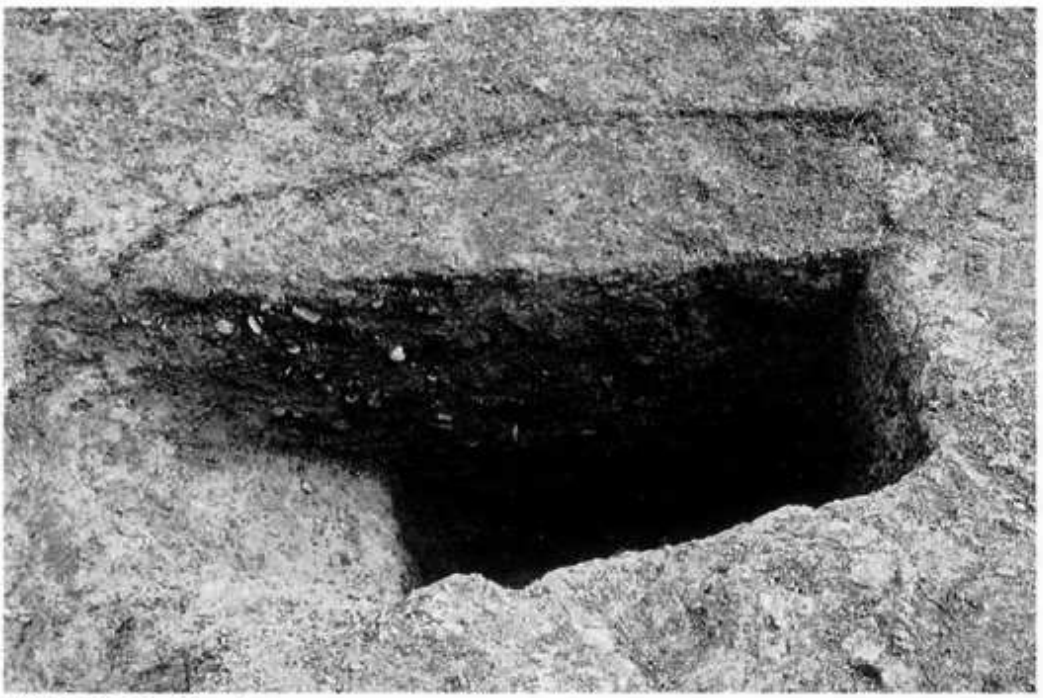
江ノ古城跡出土遺物 8

調査前近景

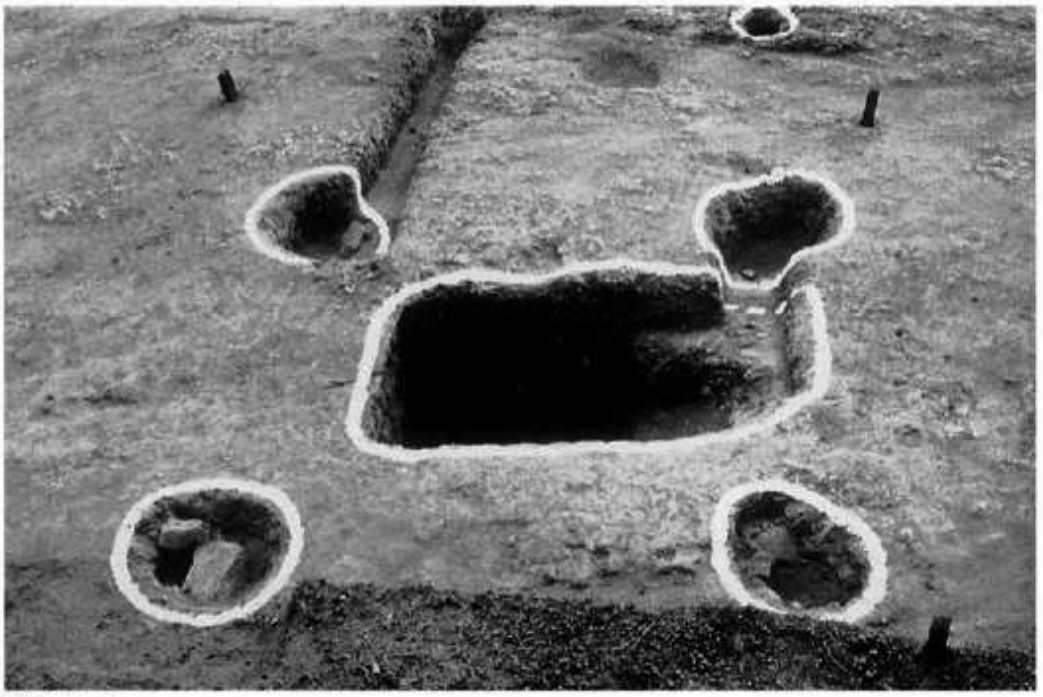
調査後近景

曲輪1調査前近景

曲輪1調査状況

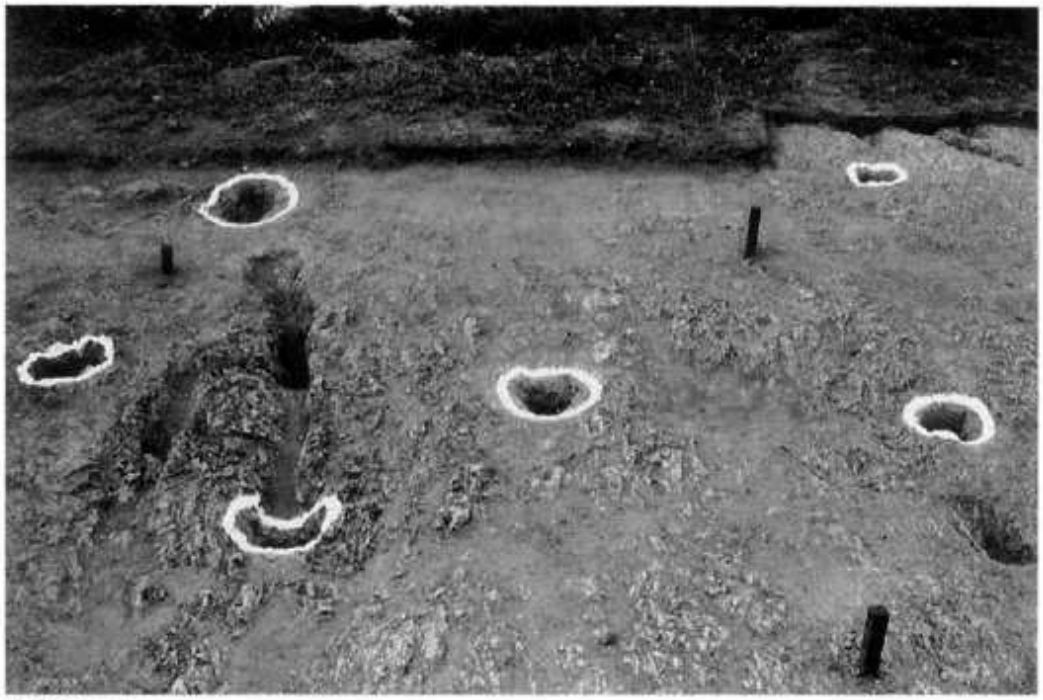


曲輪1 SK1セクション



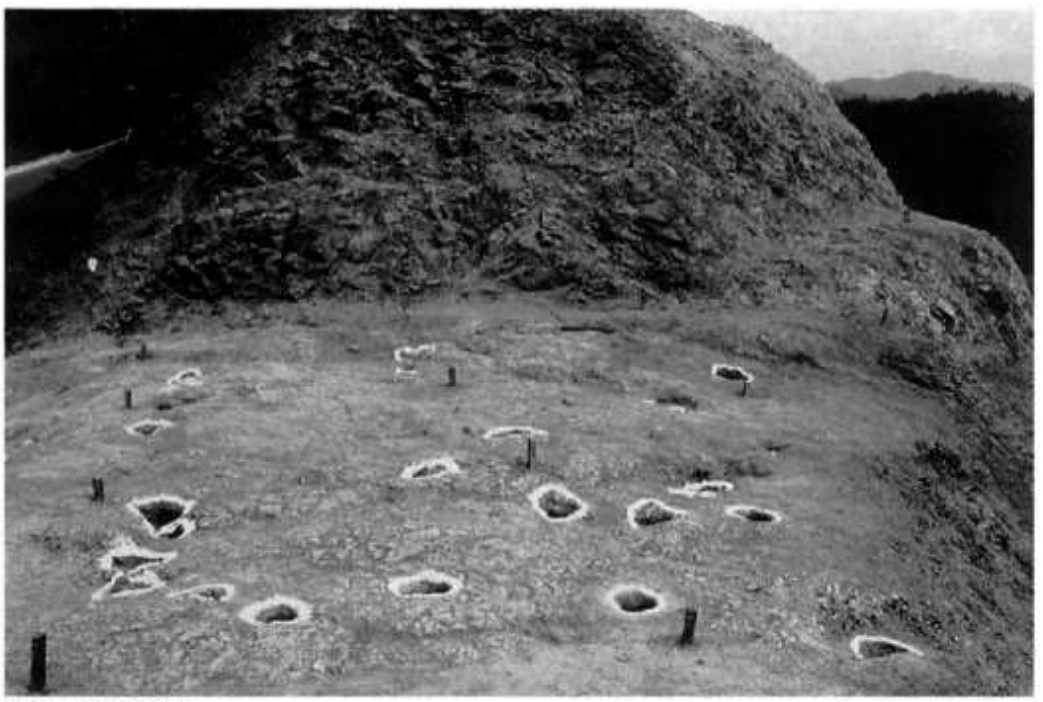
曲輪1SK1

曲輪1 完掘状況



曲輪1 SB1

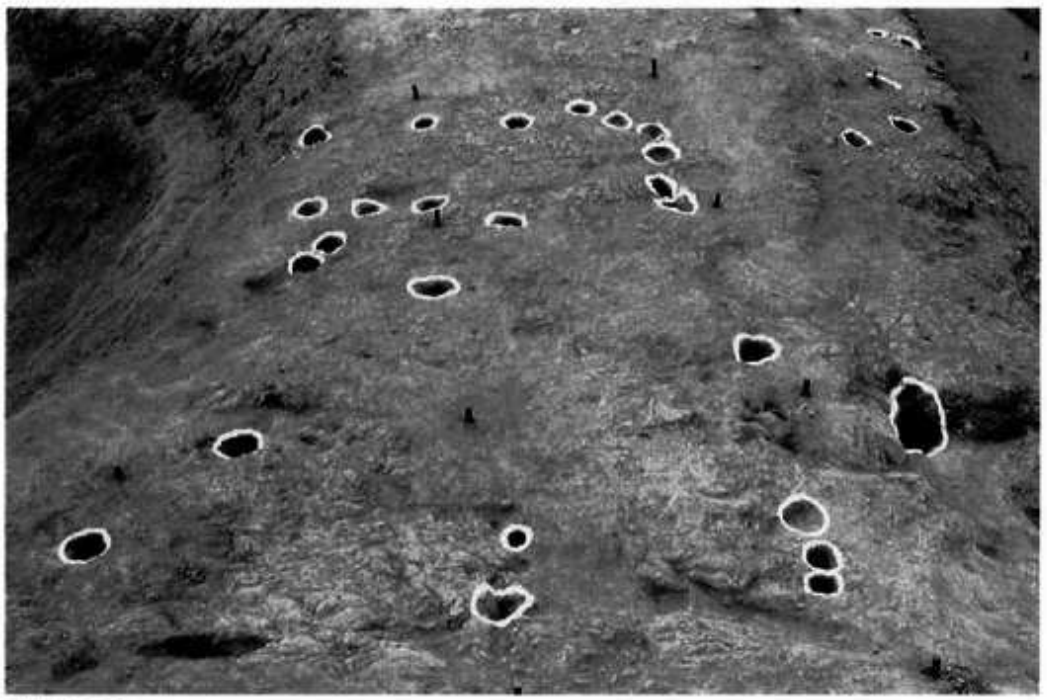
曲輪２調査前近景



曲輪２調査後近景

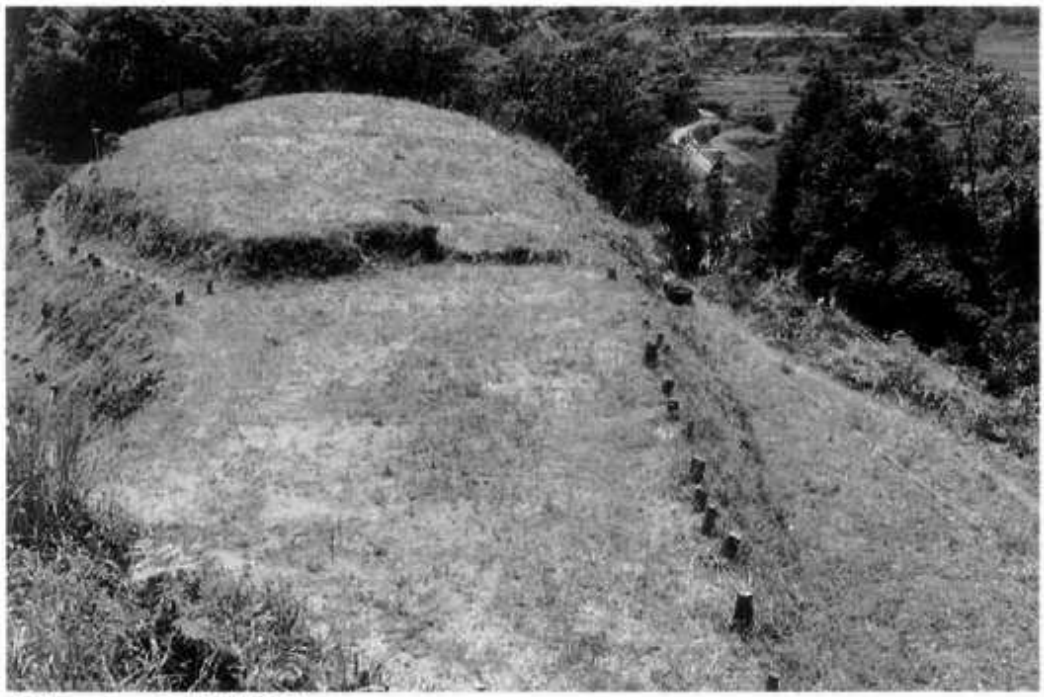
曲輪２セクション

曲輪２柱穴群

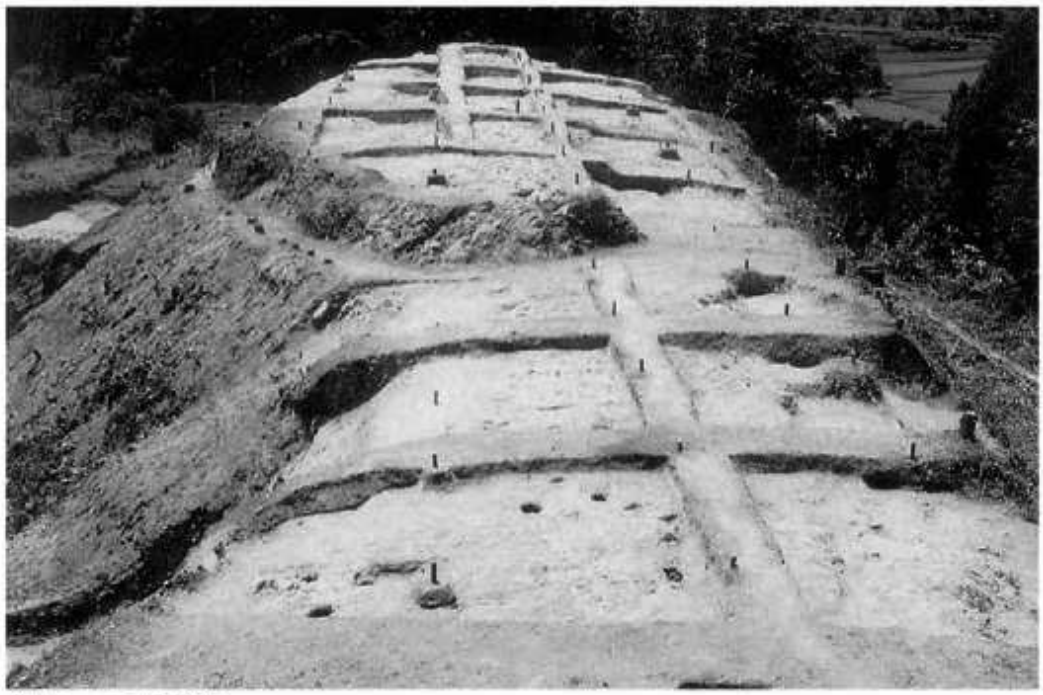


曲輪2 SB 2

曲輪2 虎口状遺構

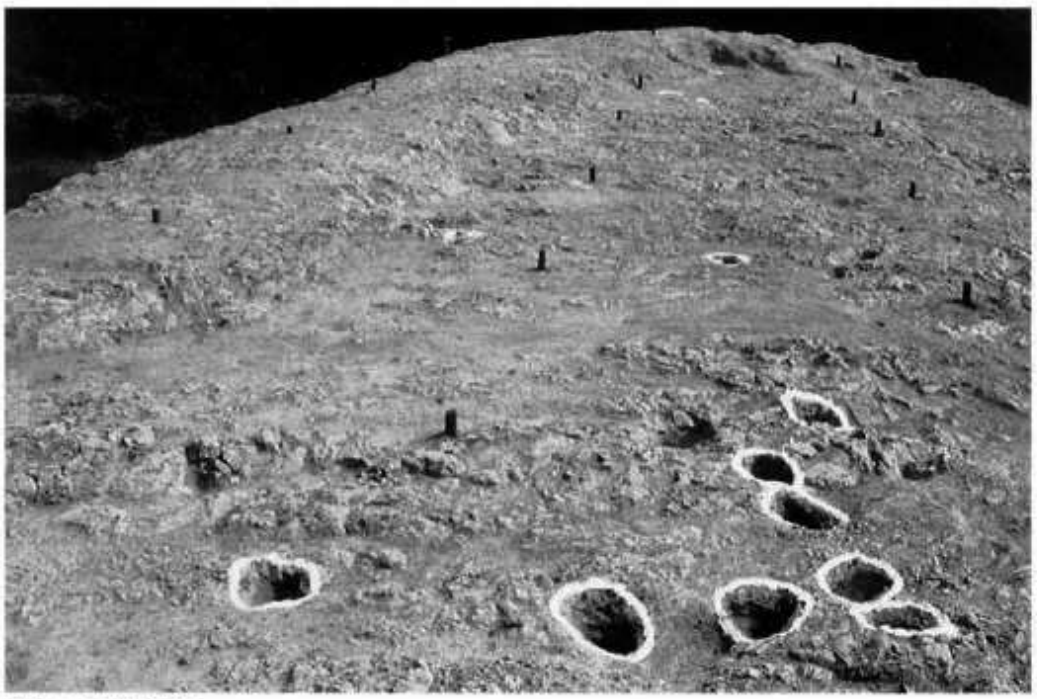


曲輪２・３・４調査前近景



曲輪２・３調査状況

曲輪３完掘状況



曲輪３土塁状遺構

曲輪3 SX1セクション

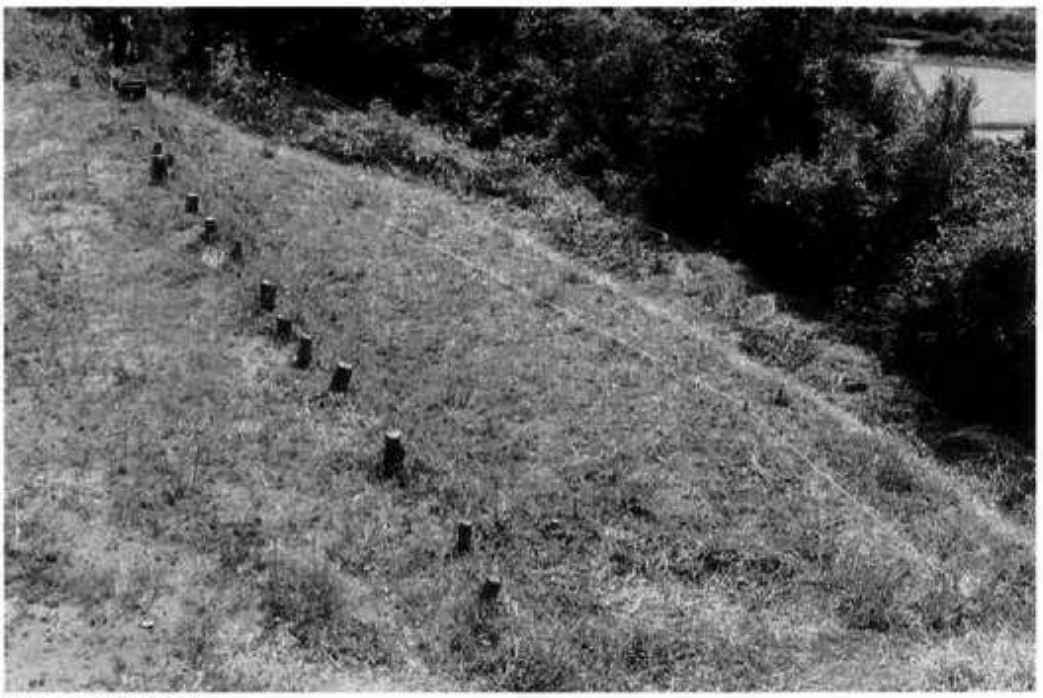
曲輪3 SX1

堅堀1セクション

堅堀1完掘状況

堅堀２完掘状況

堅堀１・２完掘状況

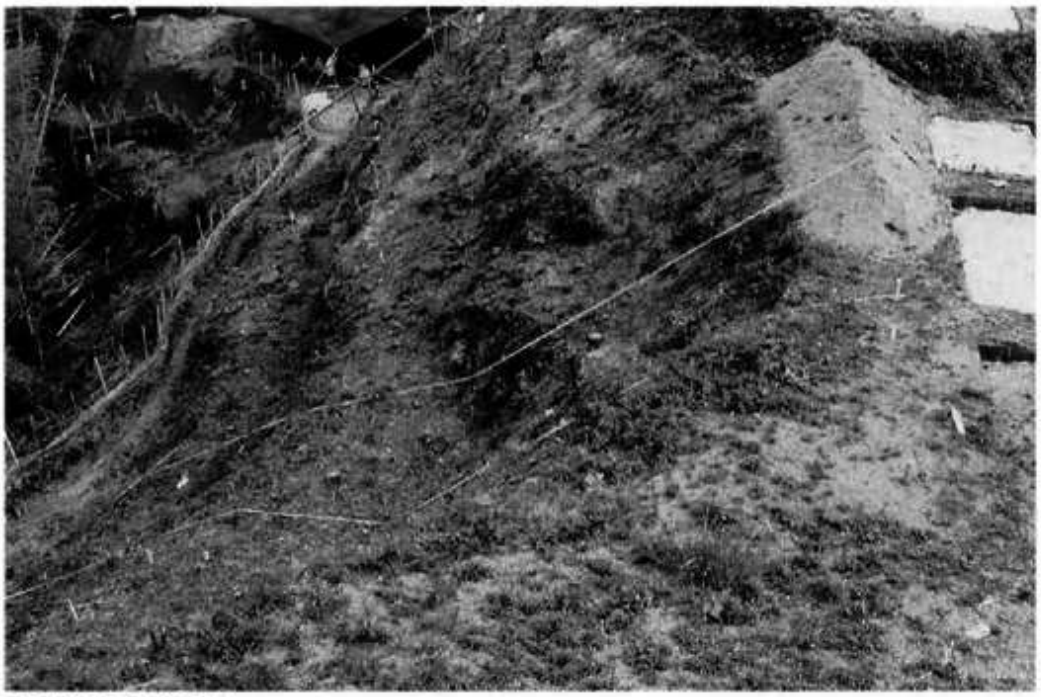


曲輪4調査前近景

曲輪4完掘状況

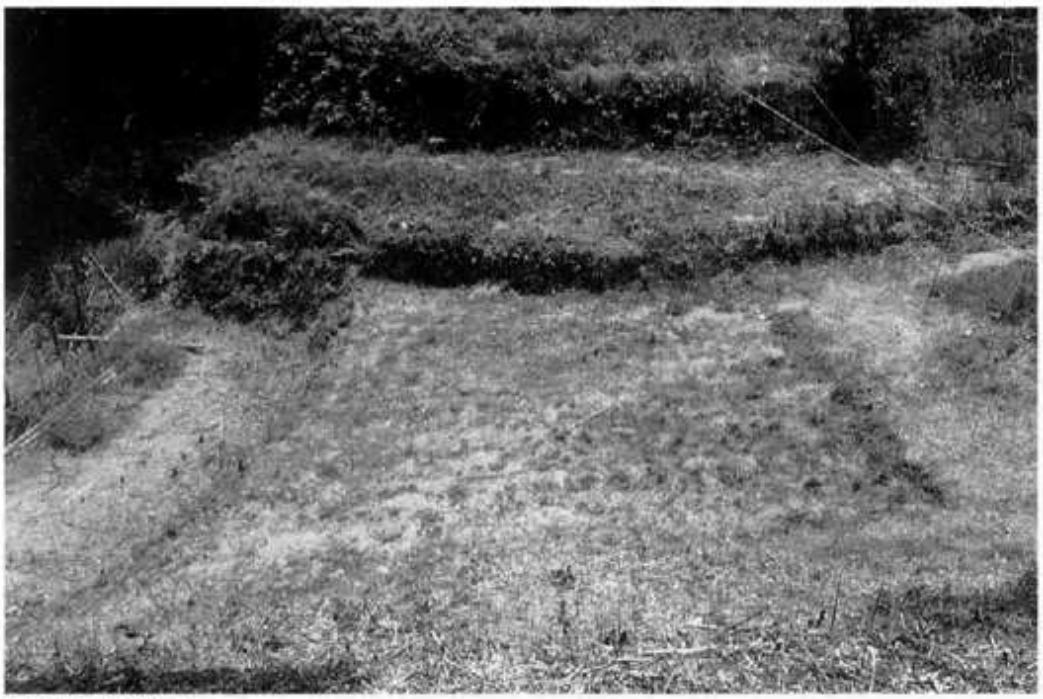
曲輪２・３東側斜面調査前近景

曲輪３東側斜面完掘状況



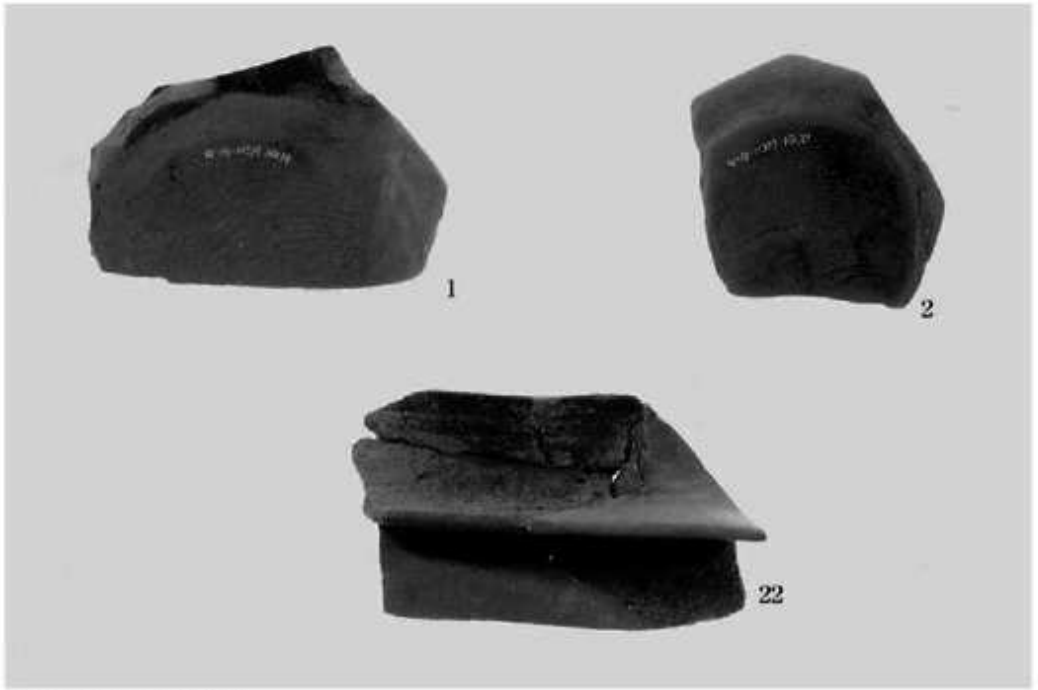
東側斜面調査前近景

東側斜面完掘状況

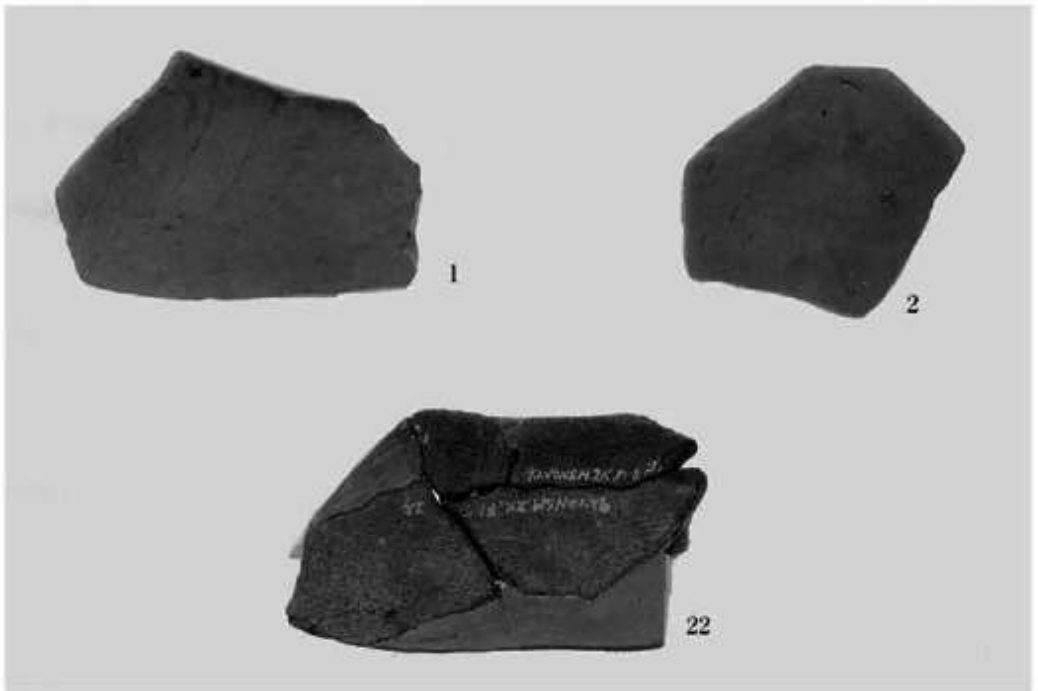


堀切部調査前近景

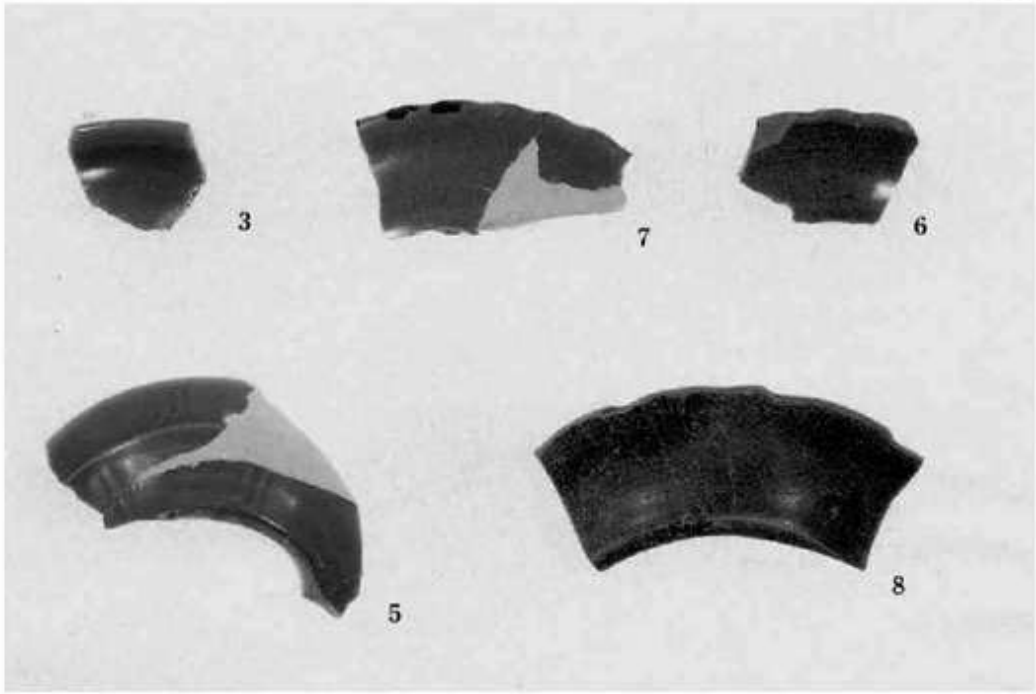
堀切状遺構完掘状況



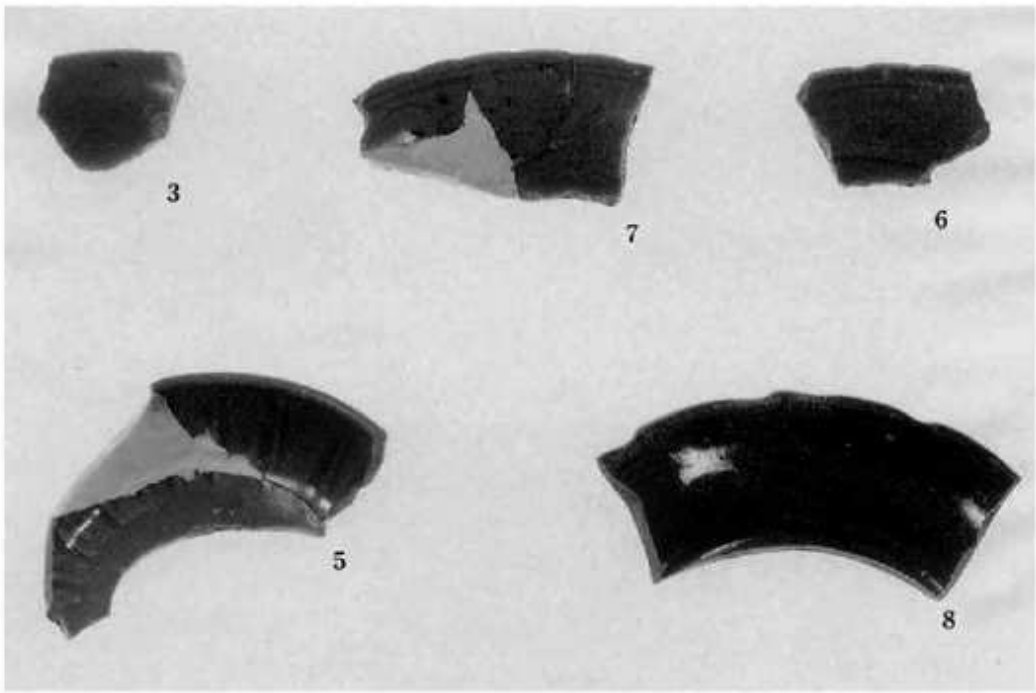
土師質土器・瓦質土器



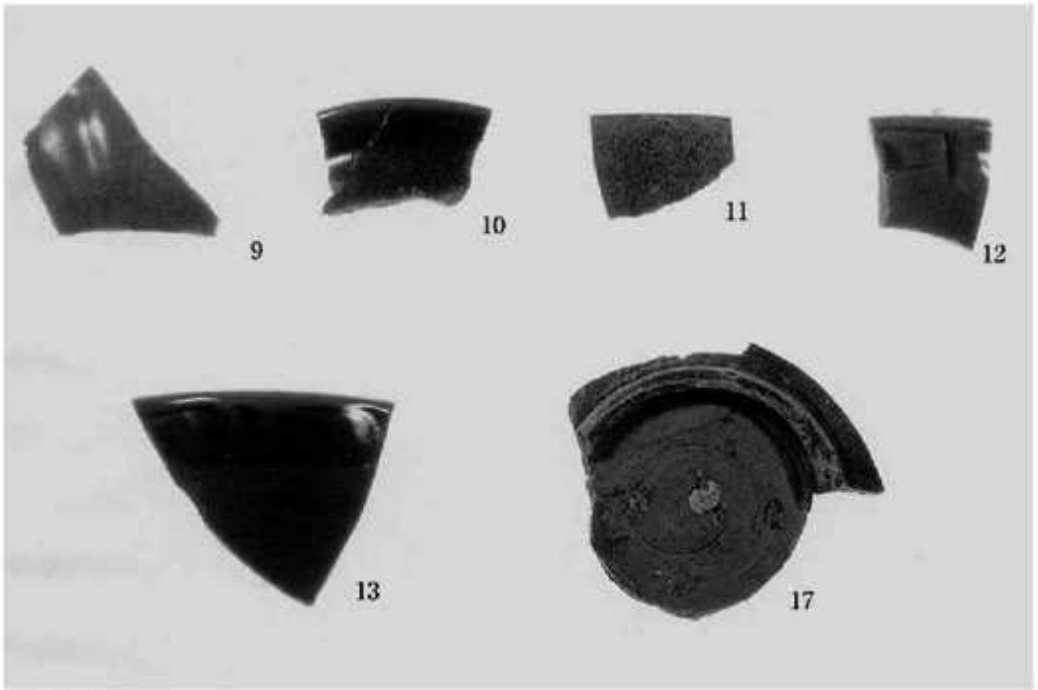
同上（内面）



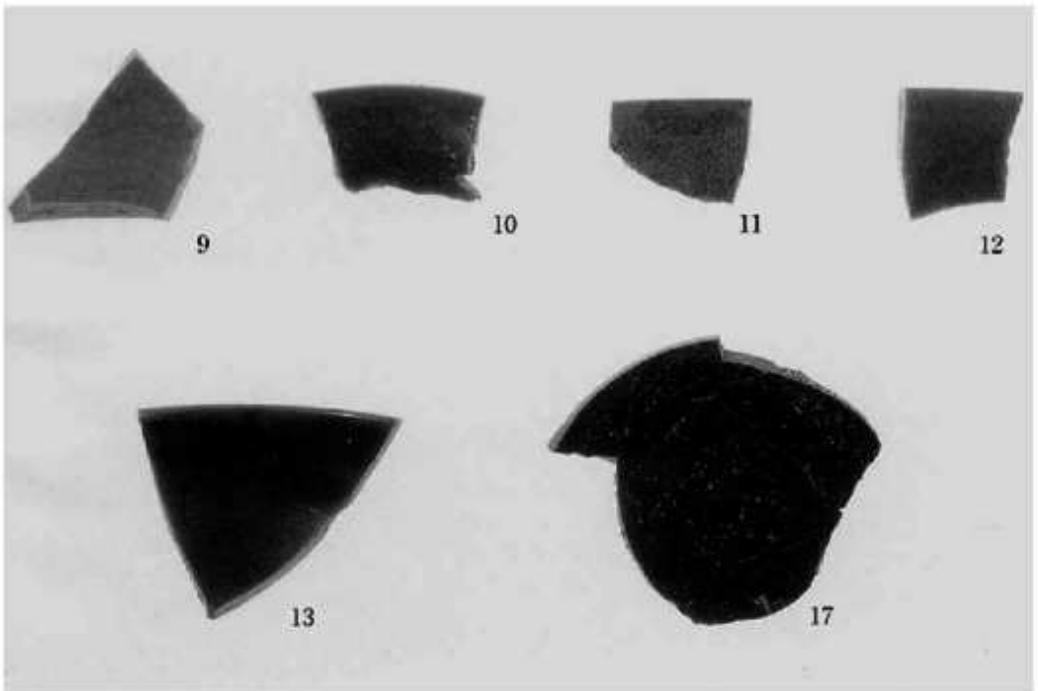
青磁皿



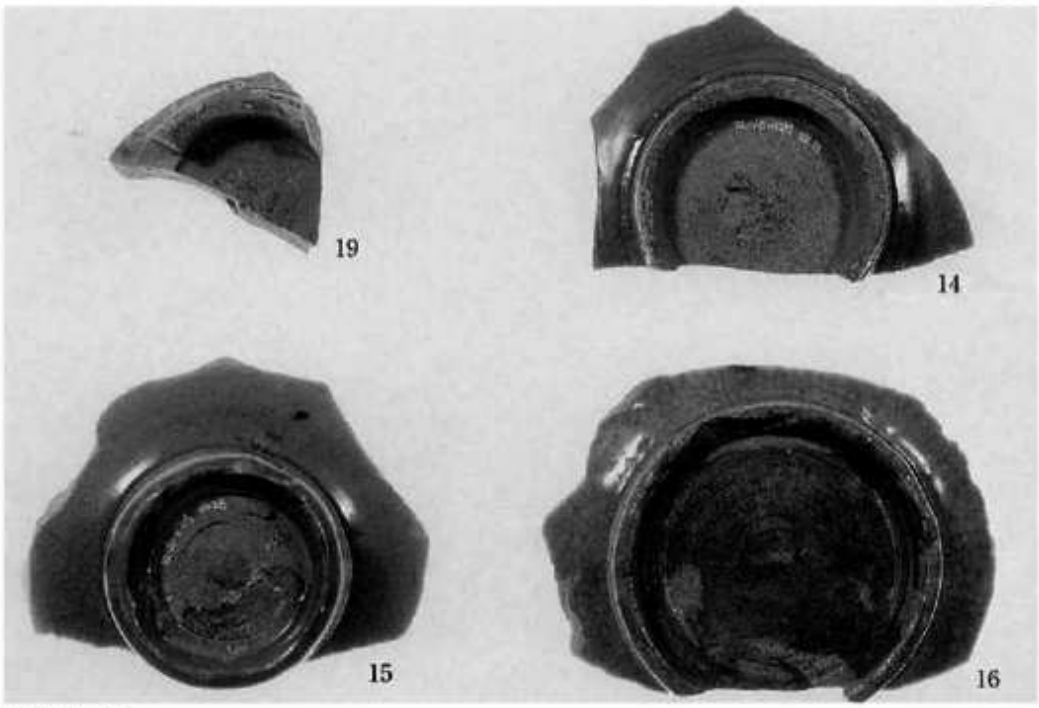
同上（内面）



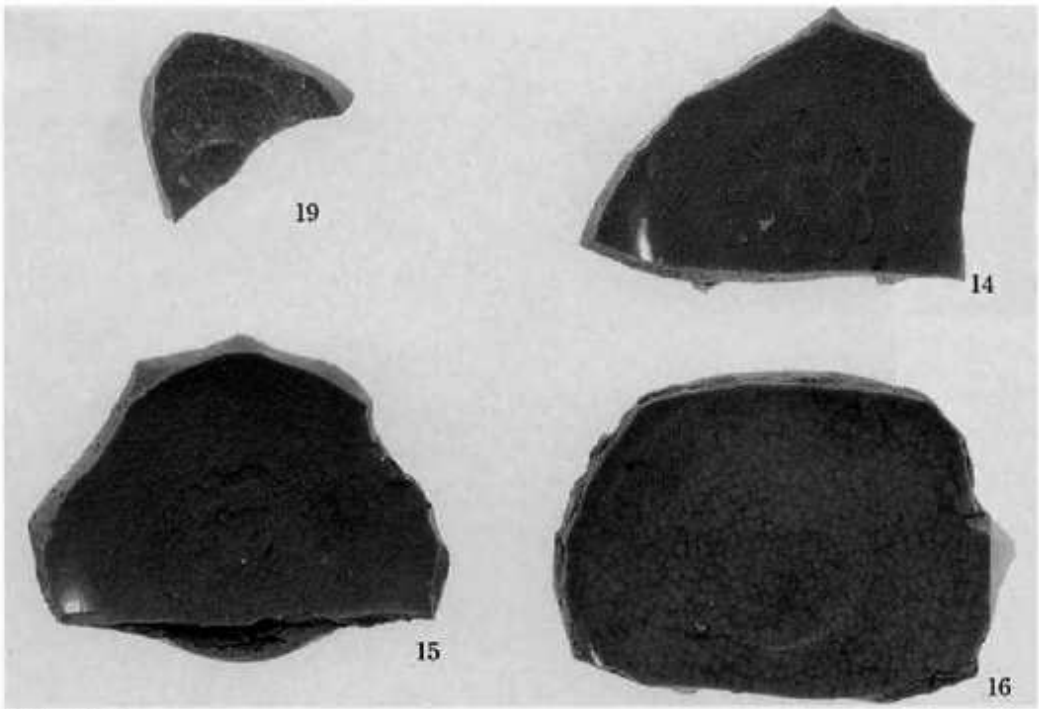
青磁碗・皿



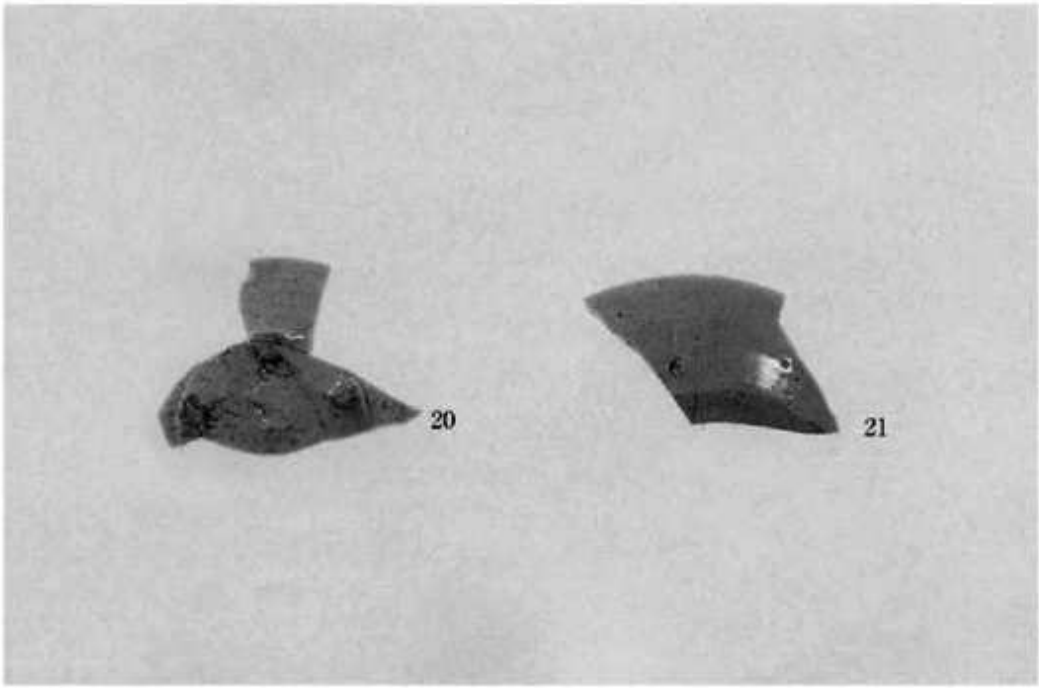
同上（内面）



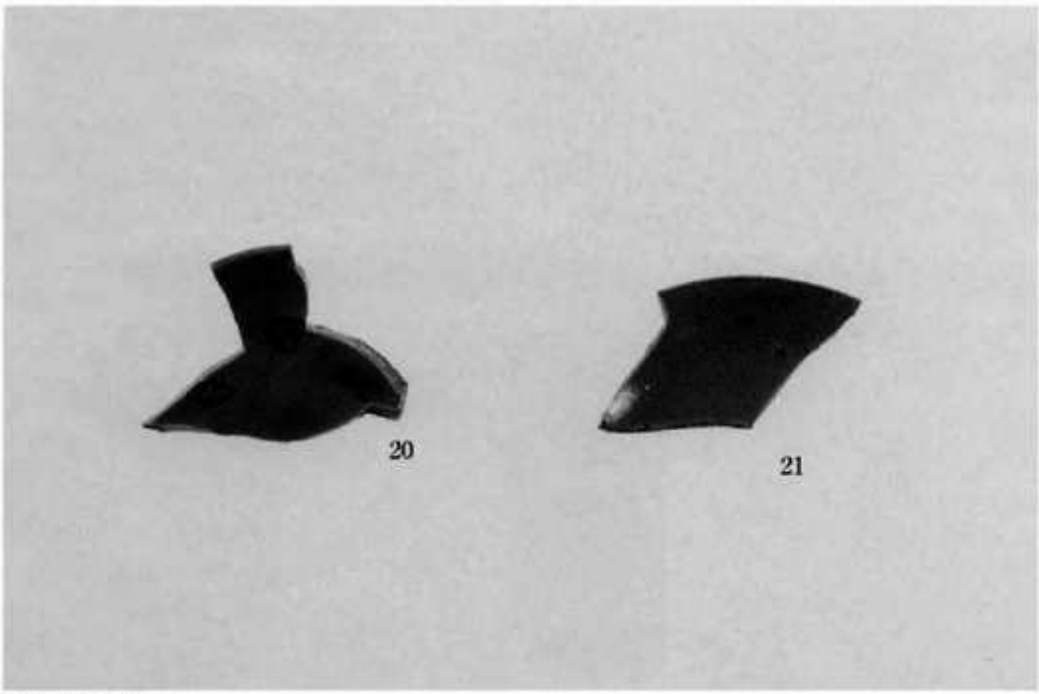
青磁碗・皿



同上（内面）

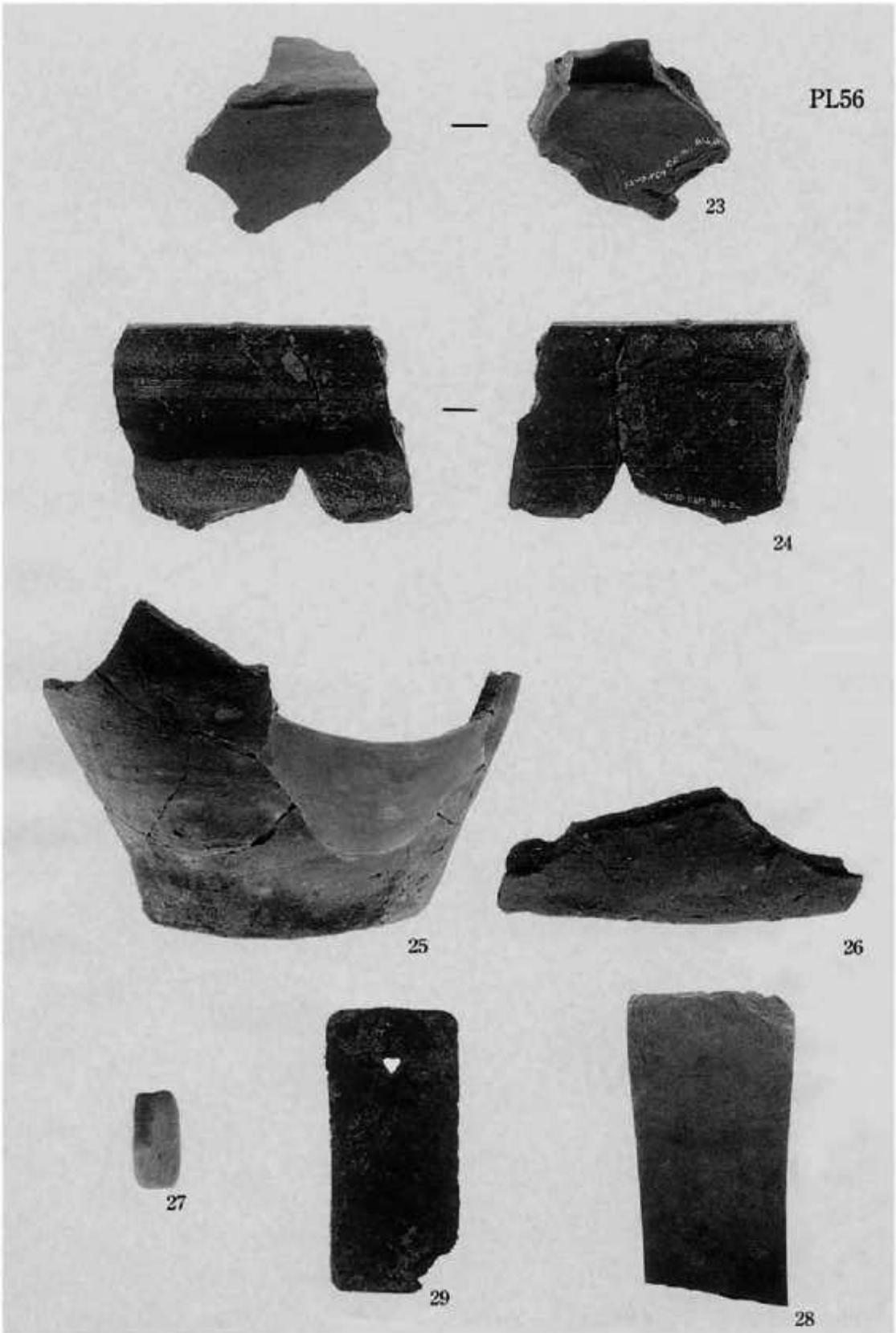


白磁皿

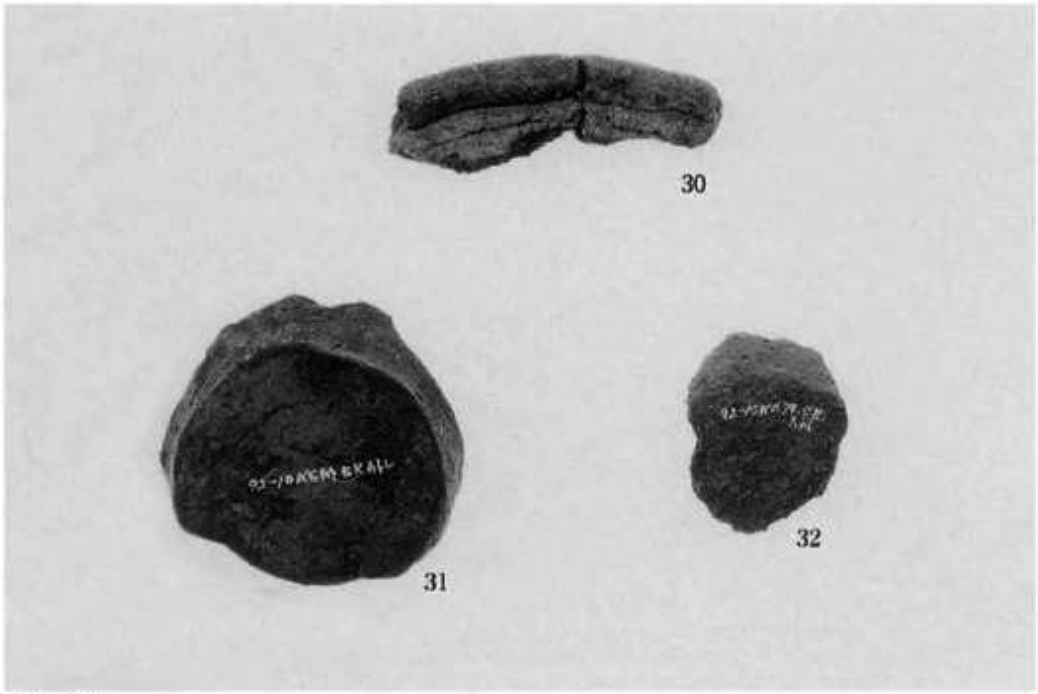


同上（内面）

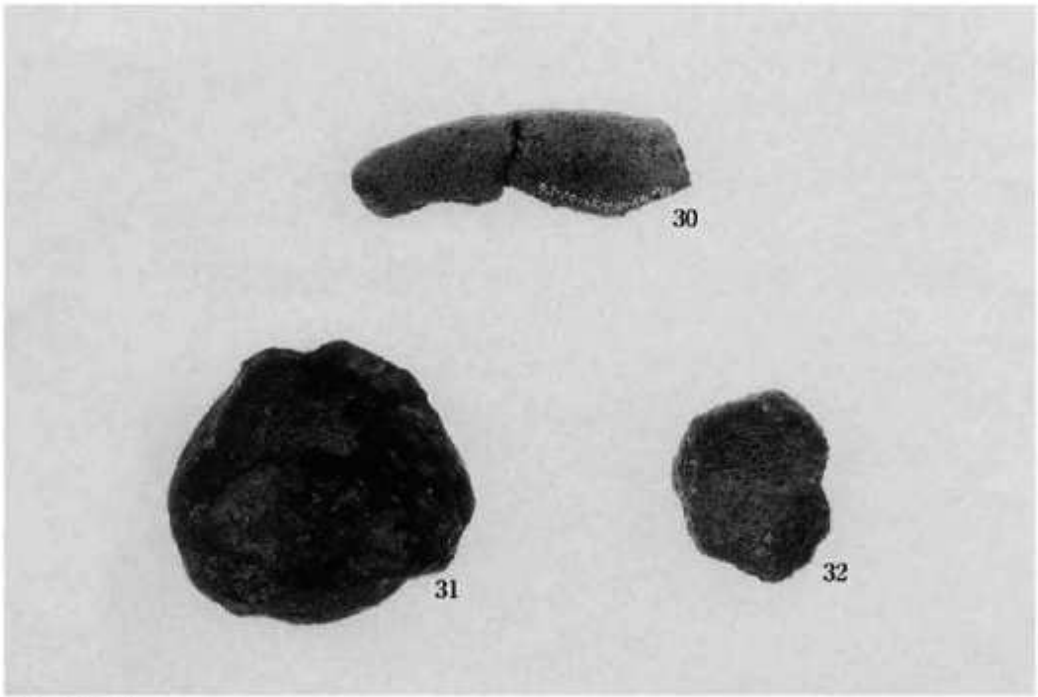
PL56



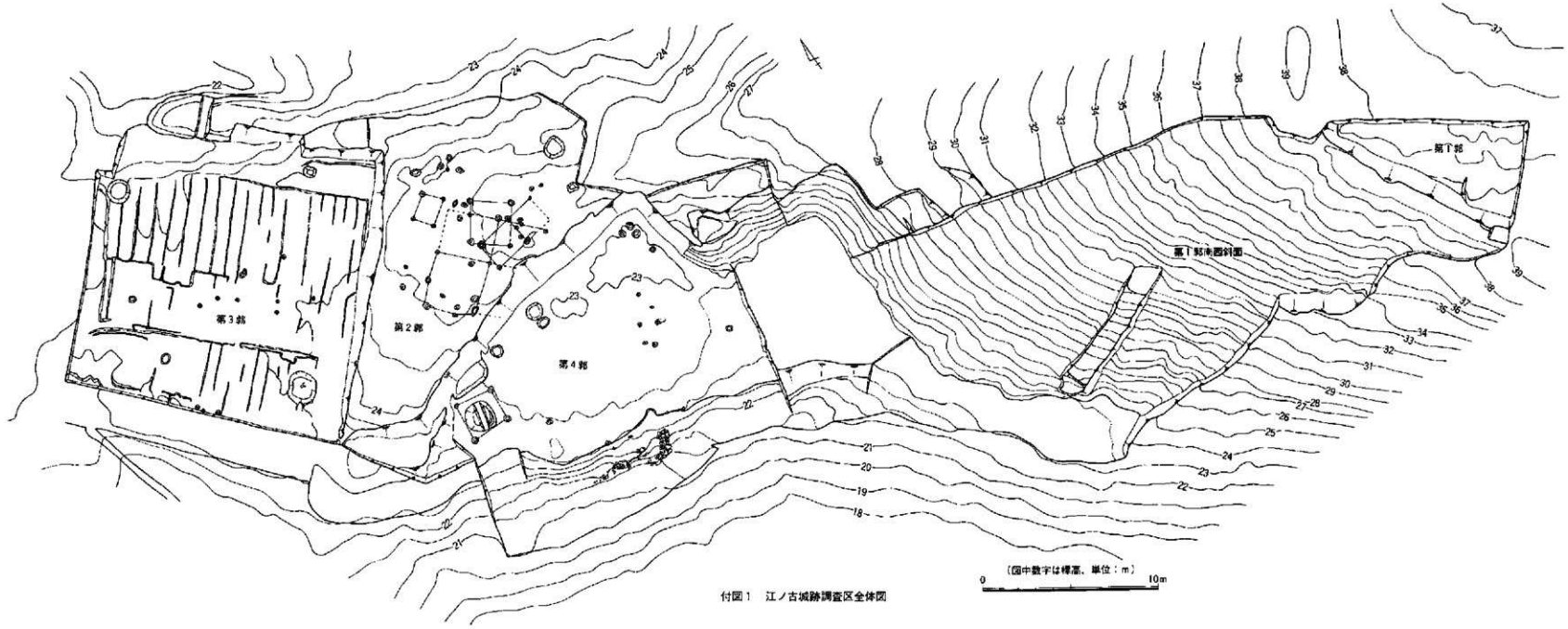
備前焼，土・石・金属製品



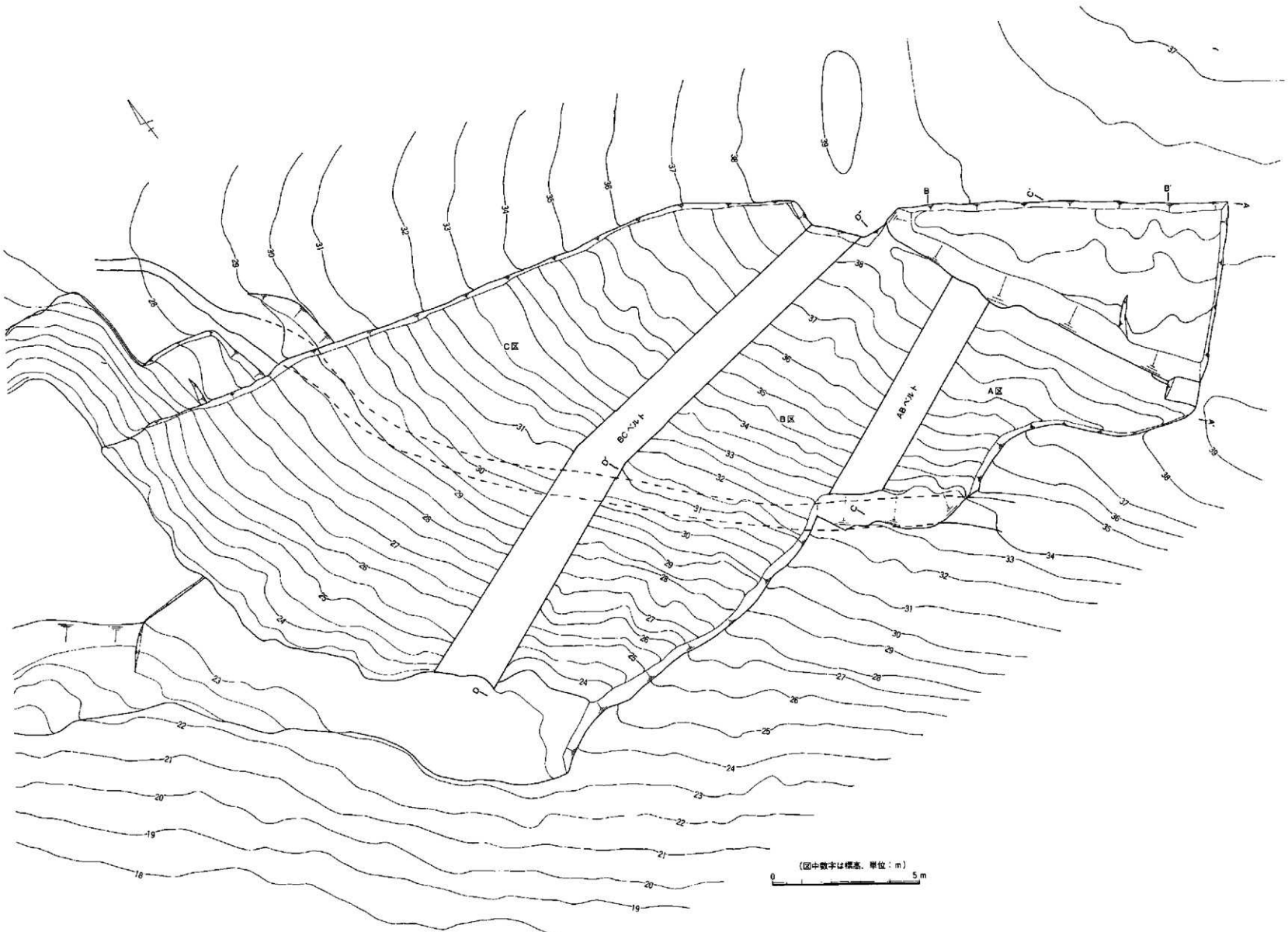
弥生土器



同上（内面）



付図1　江ノ古城跡調査区全体図



付図2　江ノ古城跡第1郭・同南西斜面全体図

中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

江ノ古・ハナノシロ城跡

第2分冊

発行日　1993年3月31日

編集・発行　高知県教育委員会
財高知県文化財団埋蔵文化財センター

印刷　㈲西村謄写堂